
神様の不良品

橘 明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の不良品

【Nコード】

N9729A

【作者名】

橘 明

【あらすじ】

2012年。

俺は成田空港のロビーにいた。

『負が負の連鎖を呼び、悲劇が次なる悲劇の幕を開ける。
その連鎖を止めるには、どこかで誰かが恨みを飲み込み、
断ち切らなくてはいけない』

神様の不良品 全100話。完結です。

追記：アルファポリス ドリーム小説大賞で、特別賞に選んでいた
だけました。ありがとうございました。

小さいころから出来がよく、中学、といわゆる進学校に進み、超有名国立大に入った華々しい人生だった……はずが、気付いたら薄汚れた工場の一角で安い弁当なんぞつついていた。

気付いたらってのはウソだな。怒り狂う親父を尻目に大学を辞め、画家を目指すとかいう非現実的な夢に人生捧げた挙げ句、計画的に事を進める事無く恥も臆面も無くここに戻って来たのは俺だ。つまり、半自動的にこの場所を選んだといえよう。

こんな俺に世間はフリーターだの負け組だの結構な称号を与えてくれた。ゴミ同然の俺にとって、この工場はまたおあつらえ向きの場所であった。

『三婆沙メタル株式会社』

主にスクラップの収集・加工処理を行い、金属リサイクルの新しい技術システムに貢献します。というのが謳い文句の、年季の入った埃だらけの工場である。何やってるかという事を分かりやすく説明すれば、要するに世間で不要とされるゴミくずを潰して、砕いて、溶かして、固めて、もう一度使えるようにして世間様に返してやろうという奇特な会社だ。

毎日トラックで運ばれて来る金属のゴミを使えるか使えないか選別し、使えると判断されたものは、プレス加工やギロチン加工を施される。普通は、そのあと製鋼工場へ販売され、そこで有用な金属に生まれ変わるのだが、この工場では金属が生まれ変わり、さらにガーデニング用品やキーホルダーやら、肩凝りを直すとかいう（うさんくさい）指輪に華麗に変身を遂げ、再び市場に還って行くまで一気にやっている。ゆえに敷地はバカでかい。でかいだけがとりえのような会社だ。

そして俺は第二工場の末端の出荷倉庫課という部署で、新たに商品となった元スクラップ達を、検査し、袋に入れ、箱に詰め、トラ

ツクに運ぶ仕事をしている。扱われているのは主にキーホルダーの
わっかの部分であった。その部署には10人ばかりの人間が居て、
主に商品の検査と機械の管理をするのが3人の社員。残りのバイト
とパートのおっちゃん3名、そして3人の女達が箱詰めと荷物はこ
びを担当する。パートのおっちゃんは定年退職後のじいさんばかり
で、バイトはやる気のないフリーターの俺、そして、残りの3人の
女達は、いずれも軽度の障害者だった。

一人は森真希子という40代後半のおばちゃん、ひどく耳が悪
い。気の短いおばちゃんだが、怒らせさえしなければ気の良い人で、
機嫌の良い時に何故かホラービデオを貸してくれたりする。

二人目は、重めの知的障害で、三宅有希という20代の女性だ。
時計をやっと読める程の智能だが、通称リングちゃんと呼ばれる真
っ赤な頬で、3才の子供のごとくいつもニコニコ笑っている。

三人目は相沢美咲という、推定年令38才の女性。通称みーさん。
軽い知的障害と難聴で、いつも補聴器を持っている。

実は、この相沢美咲：みーさんと初めて会った時、俺は物凄いシ
ョックを受けた。何故なら、彼女の右頬と、右手には火傷の後のよ
うなケロイドがあり、さらに右頬のケロイドの上にざっくりとした
大きな傷跡があったからである。

人道上大問題なのは承知の上で敢えてその時の心理を告白するの
であれば、年寄りと障害者ばかりがうごめく埃だらけのくそ暑い倉
庫内はまるで地獄の一丁目のようであった。情けない話だが『こん
な所に追いやられたのも親父達を裏切り、好き放題をした罰なのか
もしれない』とまで思いつめていた。

ところが、出荷倉庫課の10名の中で、もっとも面倒見が良いの
が、もっとも俺にショックを与えたみーさんであった。トイレ、食
堂の場所から、誰と誰が仲よくて、誰と誰が悪いかなどの工場
内のゴシップに至るまで、彼女は俺に詳細に説明してくれたものだ。
ただ、残念な事に彼女とはしばしば会話が噛み合わなかった。そ
れが、知的障害によるものなのか、難聴の為であるかはしばしば判

別がつき難いのであった。例えば、こんな具合である。

「あのさ、この荷物についてるカードの番号が間違ってるんだけど」

「うん、うん。今日は暑いね」

「あのさ、番号ミス是件、こないだも課長に注意されてるんだけどさ」

「そうだね、このお茶飲みなよ」

ってな具合である。彼女いわく、補聴器はノイズが多くて聞き取れない事が多いんだそう。それで、電話をする時なんかは外していた。

そんなこんなでいつのまにやら1年が滞りなく過ぎた。そして今日も俺は工場の片隅で無愛想に弁当をかつこむと、スケッチブック片手に表に出る。

大学を辞めて8年。東京で成功するという計画が頓挫し、こんなところでこんな仕事をしてはいたが、俺は画家への夢をあきらめてはいない。本音を言えば、自分がこうしてここにいる事に今でも納得していないのだ。こことはつまり、故郷である。

画家になろうがなるまいが、俺は東京で暮らしていたあの街を愛していた。「異土のかたいになるとても」帰るつもりはさらさらなかった。それが、1年程前、勘当した筈の俺におふくろが泣きながら「なんとかしてくれ」と電話をかけて来た。というのも、あの頑固なクソ親父が倒れ、弟が不登校から引きこもりという道をたどり、結果立派なニートとして成長し、そんな家族の状況がもともと気の強い方でないおふくろを軽いノイローゼにし、俺のおばに当たる母の姉の助言もあって、ついに長男の俺に助けを求めて来たというこいうわけだ。

ちょうどその時、絵の師匠にあたる人物と新事務所の設立の祝杯を上げていた俺的には実に迷惑千万な電話であった。しかも自分達

から勘当しておきながら今更助けを求めるとはなんと自分勝手な話かと腹も立ったが、せめて弟の正が社会復帰するまではと切々と訴える母親の言葉と、情にもろい師匠の説得もあって、やむをえず、細々とできかけていた絵のつながりを断ち、まさに身を割かれるような思いで東京を後にしてきたのだ。

以来1年というものの1日として心が晴れた事はない。ただ、こうして絵を書いている時だけ、常にどんよりと立ちこめている諸々の憂鬱から解き放たれる事ができた。その時の開放感を思うたびに俺は決心を新たにするのだ。自分はやはり絵筆を捨てる事はできないと。

なに、今少しの辛抱さ。ずっとここにいるわけじゃない。いつかまたあの街に戻れるさ。そうすれば、またあの頃のように自由に羽ばたく事もできるだろう。

そして、俺は目を細め、灰色の建物を模写していく。初夏。鮮やかな青空を背に萌え出ずる若葉。『故郷は遠きにありて思ふもの』などと昔は気取っていたもんが、こうして見ればナカナカどうしてこの風景は捨てたものじゃない。もっとも俺の画風にはさっぱり合わないけどな。

なんてモノローグしてた時だ、突然背後から声をかけられた。

「また描いてるね」

俺は振り向きもせずに答えた。

「ええ。描いてますよ」

すると、相沢美咲：みーさんは「上手だね」と言っ、俺の隣に腰をおろした。

『当然ですよ、これでもプロ目指してたんだから』と思ったが、俺は「ありがとう」と笑顔を浮かべた。この人もよくここに来ては珍し気に俺の絵を覗いていくんだ。お互い、暇だよな。

「優ちゃんの絵は、工場とかトラックとかばかりだね。たまには女の子でも描けば？」

「なんで、女の子なんですか？」

「優ちゃんの好きな女の子描いたら？」

「いませんよ、そんなの」

「え？ 何って？ 工場が好きなの？」

なんだか会話が噛み合っていない。俺は声を張り上げた。

「違いますって。好きな女の子はいないって言ってるんです」

「うっそだあ。優ちゃん嘘つき」

やっと思じたみたいだ。

「嘘じゃないですよ」

と、言いながら俺は東京で別れた彼女を思い出した。こちらに戻ってからしばらくは毎日メールのやり取りをしていたが、だんだんその回数も減り、1日中が1日おきになり、1日おきが一週間おきになり、一カ月も忘れ去り、ある日、久しぶりにメールしたら送信不能になっていた。色んな意味でさらば青春だな。あの日、ここに帰って来た時全て終わったのか？ いや、終わらせるものか。

「俺、人物は苦手なんですよ」

俺ぼそつと本音をつぶやく。でもみーさんには分からない。

「早く、彼女見つけないと。合コンでもやったら？」

「もう、いいですよ。やだなあ。俺は人物画は苦手なんですって」

苦手というより、むしろ人物画は嫌いである。しかし、それに
いてうだうだ語るより

先に昼休み終了のサイレンが鳴り、俺達は場内に戻った。

キッチンでおふくろが黙々と夕食の準備をしている。親父は居間の黒いソファに座り新聞を読んでいる。親父の目の前ではチカチカとニュースが流れていて、どこやらで、また奇怪な殺人事件があったとアナウンサーが告げている。仕事から戻った俺はダイニングから障子越しに親父に声をかけた。

「具合はどうだ？」

1年前、親父は突然の腹痛に襲われ近くの大学病院に運ばれた。結果、大腸にガンが発見された。ポリープがガンになってしまったらしい。しかし、発見が早かったのと、幸いガンが潰れていなかったのとで、切除するだけで事は済んだ。医者言葉によればこの類いのガンの再発は99%無いそうだ。しかし、『ガン』という単語が気の弱いおふくろや、俺にもたらしたショックは恐ろしく大きなものであった。

「そろそろ検診だろ？ 面倒くさがらずにちゃんと行けよ」

親父を思いやった言葉が空しく宙を舞う。親父の中での俺の地位は今だに勘当ムスコらしい。ここに戻って1年と言うものの、俺と口をきこうとしないどころか、まともに顔を見ようもしない。はっきり言ってムカツクが、すっかり痩せこけ、おんぼろになった親父に対して本気で怒る気にはとてもなれない。

それからしばらくすると、家族3人のこの上なく気まずい夕食が始まる。誰も何も喋らない。居間のテレビだけがやたらと陽気にはしゃいでいる。黙々と食事を済ませると、おふくろがもう一人分の食事を用意する。茶わんに白い飯をよそい、赤い椀に味噌汁を注ぎ、皿にその日のメインディッシュを盛り付け、それら全てを四角

い盆にのせる。それを2階に運ぶのは俺の役目だ。俺は盆を受け取り、黙って食堂を出る。

いよいよ、今日の最後の大仕事……俺の人生をかけた戦いがはじまる。勝負は毎晩繰り返されるが、残念ながら今の所全敗である。

階段を昇りきり白いドアの前に立ち、2回ノックして俺は弟の名前を呼んだ。

「正」

しかし返事はない。いつもの事だ。奴はもう7年もの長きに渡りこの部屋に引きこもっている。よく飽きないものだ。

「飯置いておくぞ。体調悪くないか？」

やはり返事はない。あきらめずにもう一度声をかける。

「親父の術後の経過は良好だ。おふくろのノイローゼもなんとか直ったようだ。俺も仕事大変だが頑張っている。家族はみな元気で頑張っている。お前をのぞけば」

「……」

敵は頑だ。しかし、ここであきらめるわけにはいかない。

「なあ、いい加減に出てこいよ。親父もおふくろも待っているぞ。俺も信じている。おふくろなぞ、お前の顔を見たら泣いて喜びその場でひっくり返る事だろう」

敵の良心に訴えかけてみる。が、こんなぐらいで屈服する相手なら、俺がここに帰って来る必要もなかっただろう。あきらめずに、俺は今度は思い出作戦を使う事にした。

「覚えているか？ お前が小学校の頃、クラスで優秀賞を取った習字が今でも玄関に飾ってあるぞ。ほら、あの『みんな仲良く』ってやつだよ」

「……」

全く反応がない。だんだん腹が立って来る。一体誰のために俺はこんなところでくそつまらん思いをしていると思っっているんだ？しかし、ここで怒っては負けだ。

「なあ、正。俺には分かっている。お前はそこの引きこもりとは違う。子供の頃のお前はとても明るくて元気で、兄ちゃんは常々うらやましく感じていたものだ」

「……」

「何。お前なら大丈夫だ。すぐに社会復帰できる。後はお前のやる気次第だ」

「……」

何を言っても返事はない。しまいに『嘆きの壁』に祈りを捧げてる気分になってくる。『嘆きの壁』なんて単語持ってきたが、それがなんなのか実はよく知らねえけどさ。けどこのドア見てたらそんな言葉が浮かんで来ちゃうわけだ。なにしろ、ここで東京に帰る望みをかけつつ沈黙を相手に喋ってるって本当に泣きたくなくなるからな。しまいには必ず空しくなり、こうして日ごとに連敗記録は更新されていくってわけだ。

自室に戻るといつもの日課でCDをかけ絵筆を握った。

キャンバスに向かってため息をつく。正の事を考えるからだ。

正直言って、出て来たくない奴に出て来いと強要したって無駄だと思っている。もし、俺が奴の立場なら出て来いと言われれば言われる程絶対出て行くものかと思うだろう。しかし、こっちにはあきらめきれない理由がある。奴さえ部屋から出て来てくれれば、おふくろとの約束も果たし俺は気持ちもさわやかに東京に戻れるのだ。

正は俺が大学を辞めた次の年、16才の時に不登校になった。あれから7年ということは今年23才か。

奴のひきこもった原因がさっぱり分からんとおふくろは嘆いていた。弟は優等生の俺と違い、子供の頃から明るく、やんちゃで、社交家で、元気なやつだった。だから、ますます原因が分からない。おふくろは「優がああなるなら、まだ分かるけどね」と失礼千万な事を言いやがったが、まあ、そうかもしれない。おとなしくて真面目で人間不信のケのあった俺ああなるのなら、原因は種々考えられも

しよう。

しかし、今時は色々複雑怪奇だからな。学校も、世の中のしくみも、人の心も、人のつながりもな。だから、みんなが心に爆弾をかかえとるんよ。いつ何がきっかけで爆発するか分からん爆弾をよ。俺だって、正直無性にドアを閉め切りにしたくなる事があるさ。ただそうしたところでどうしようもない事が分かっているから、外に出て行くだけだ。そんな風にモノローグし、俺は描きかけの工場に灰色を重ねて行った。

次の日の昼休み、いつものごとくスケッチをしていると背後から声がした。

「また絵を描いてるんだね」

みーさんとは声が違う。誰だ？ 不思議に思って振り返ると、真っ黒なセミロングの女性が立っていた。紺のベストにタイトスカートといういでたちだ。これは3階の事務フロアの女性の制服である。彼女は黒目がちの瞳でにこしながらこちらを見下ろしていた。

おや？ 俺は彼女を知っている。いや、確かに知っているはずだ……確かめるように左胸の名札に目を移す。白いプレートに『森崎』の二文字。やっぱり……俺は手を打ちかけたけれど、もちろん実際に打つわけもなく、彼女の次の言葉を待った。

「河井君。河井優君だよね？」

予想通りのセリフだ。

「私の事、覚えてる」

俺は頷いたが、照れくささもあり記憶があやふやなふりをした。

「森崎……だったよね」

「そう。森崎紀美香」

彼女は嬉しそうに頷くと「こんなところで河井君に会うなんて、すごい偶然！」と笑い、すんと隣に腰をおろした。俺はといえば、元クラスメートの無邪気さに、少しばかりの戸惑いを感じた。なぜなら、森崎紀美香は確かに記憶にこそ残っていたけれど、たいした付き合いがあったわけでもないからである。高校時代の森崎はどっちかといえど控えめで大人しい女生徒だった。故に、同じく大人しくて控えめだった俺には接点の持ちようもなかったのである。にもかかわらず彼女を記憶している理由は、その整った容姿がしょっちゅう男友達の噂の種になっていた事と、他でもない自分が彼女に淡い思いを抱いた事があったからである。

しかし、今の森崎はそれらもろもろの溝を微塵も感じさせる事なく、一足飛びにこちらに近付いて来た。

「東京の大学に行ったって聞いていたけど、ここに戻っていたんだね」

「見ての通り」

「いつ戻ったの？」

「1年ぐらい前」

「こっちで永住するの？」

「多分しないと思う」

「ふうん…」

「森崎…さんはこの社員？」

「さん付けじゃないよ。社員じゃなくてバイト。フリーターしてるの。ここには3日前に入ったばかり」

「その制服は、事務？ 3階にいるの？」

「そう。入力やってる」

「ずっとフリーターしてるの？」

「ここ半年ぐらいね。その前はデザイン事務所にいたけど……」

「デザイナーだったの？」

「うん。まあ。でも、事務所のやってる事と自分のやりたい事の方向性が違ってきたからやめちゃった」

「ふうん…」

森崎ってデザインなんかやるのか。意外だな。でも、そういえば、高校の時の文化祭で森崎の描いた絵を見た事あったっけ。青が基調の淡い絵だった。女らしい優しいタッチの……。

「河井君も絵なんか描くんだね。意外」

森崎が手元のスケッチブックを覗いて言った。

「それが、描くんだよなあ」

「高校の時も描いてたっけ？」

「全然」

「だよね。いつも難しい顔で参考書を睨んでたイメージがある。でも……うまいね。」

これ、工場でしょ？」

「分かる？」

「すごく細かい所まで描くね」

そう言っただけ彼女はスケッチブック上のトタンの影の一つ一つ、フエンスの一本一本まで詳細にかたどった線の集合体をまじまじと見つめた。

と、その時だ。

「ゆーちゃん」

聞きなれた声をして、思いきり背中を叩かれた。誰だか分かっていたが、俺は振り返り声の主を見上げ大袈裟に顔をしかめる。

「なんですか？」

すると、みーさんはニヤニヤ笑った。

「優ちゃんがナンパしてる」

「違いますよ。彼女は高校時代のクラスメート」

しかし、聞こえてるのか、聞こえてないのか、分かっているのか、分かってないのか、

「優ちゃんやーらしー」

と、人さし指をこっちにむけた。まったく。絵に書いたようなベタな反応だな。まあいいか。どうせいつもの到底ナイスといえないジョークだ。俺は適当なところで引き下がると、森崎をみーさんに、みーさんを森崎に紹介した。

「彼女は森崎紀美香。高校の時のクラスメートです。今はうちの会社の3階の事務所に

います。で、この人は相沢美咲さん。俺と同じ出荷倉庫課の…ヌシです」

「ヌシってなに？ 失礼ね」

そこは聞こえたようだ。みーさんが怒る。

「本当の事じゃないですか」

森崎との事を囁いた仕返しにからかってやる。そんな俺の声を無視して、みーさんは森崎ににこにこ会釈をした。森崎も何故かこわばった表情で会釈を返す。それを見届けるとみーさんは、

「じゃ、あたしは真希ちゃん達に呼ばれているから」

と、やけにあっさり退散した。

「元氣いいなあ」

その後ろ姿を見送りつぶやく。そして、同意を求めるように森崎を見ると、彼女は相変わらず顔をこわばらせていた。どうした？

まさか、みーさんの下らない冗談にマジに腹立ててるとか？ まさか。

「悪い人じゃないんだけどね」

微妙に焦点をずらして、森崎の気持ちを探ろうとする。すると、森崎が返事するでもなく口を開いた。

「あの人……あの傷は何？」

それで、あっと思う。そうだ、毎日接しているうちにすっかり忘れていたが、みーさんのあの傷は始めて見る人間には物凄くショックだろう。しかし、敢えて何でもないように、つとめてさり気なく答えた。

「あ、あの人障害者なんだ。あの傷の事は聞いた事ないけどいい人だよ。」

「障害者？」

「ああ。こういう工場では、必ず何人か雇わなきゃいけないって、法律で決まっているらしい。他にも2人いるよ」

「河井君の部署に？」

「うん」

「一緒に働いてるの？」

「そうだよ」

「そっか」

森崎は一旦深く頷き、そしてこんな事を言った。

「偉いよ、河井君。良い経験してるね」

「え？」

一瞬返事に困る。

「良い経験かな？ 別にそんなに意識した事ないけど。あ、始めは驚いたけど」

「ううん。良い体験だよ。貴重だよ」

「そうかな？」

と首をかしげる。なぜなら、俺はみーさん達に障害があるからといって、特別優れているとも劣っているとも思わないからだ。ましてや、そういう彼女らと仕事している自分が、素晴らしい経験しているなんぞとは天地がひっくり返っても思わない。敢えて言うなら、彼女らはあくまでも仕事場の同僚である。さらにいえば、なにかと面倒を見てくれるみーさんに対しては尊敬の念を抱いてはいるが、それはあくまで相沢美咲という個人に対してであり、そこに彼女が障害者だからという理由は微塵も存在しない。

とはいえ、森崎のごく女性らしい優しい反応は世間基準としてごくまっとうなものであり、それにとやかく物申す程俺は不粹でもなかった。

その日から、俺の昼休みはみーさんに加え、森崎と過ごすものになった。正直言って、工場内で唯一自分らしくあれる場所と時間を2人もの女性に侵入されるのはいかがなものかとも思ったが、予想していた程それは不快なものでもなく、そして俺の携帯には新たに森崎の名前が加わった。

新たなつながりは、新たな時間を与えてくれた。その春から俺は休日のイベント会場で、似顔絵を描く仕事を始めることになった。森崎の大学時代の友人や仲間が多く属するとある似顔絵のプロダクションに俺も加えてもらったのだ。つまり、森崎のついでで得た仕事であった。

といっても、似顔絵書きだけで食べていける程の稼ぎは期待できない。前にも書いた通り俺は人物画が苦手だからである。工場や、車などの人工物を病的に正確に写し取るのは得意でも、人の顔を当たり障りなく見栄え良く描く才能には欠けるのだ。いや、苦手というよりむしろ嫌いと言った方が正確かもしれない。なにしろ、じつと人の顔を見ているといやでもアラが見えて来る。どんな美女にも必ず崩れた線を発見する。その現実を眺めるのがどうにも辛い。それでもじつと見ていると、しわやしみや肌のキメがやけに目について来て、しまいにはピノキオのような木の人形が、半魚人を書いていくような気がして無気味な気持ちになる事がある。その苦痛は絵を描くという行為によってギリギリ相殺する事ができた。だから、俺はなんとかその仕事を続けられた。考えてみればわがままな悩みだよな。

俺の描いた絵を見て森崎が感心したように言う。

「河井君の描く線は本当に緻密で綺麗だね」

美咲さんも褒めてくれる。

「写真みたい」

しかし、ひねくれものの俺は彼女らの言葉を素直に受け取れない。写真みたいな絵を描くぐらいなら、写真をとれば済む話じゃないのか？

「でもこれだけ正確に模写できるのは持ち味だと思うけどな」

森崎がフォローしてくれるが、やっぱり釈然としない。

「河井君、設計図とか好きそうね。細かいし」

しかし、今どき設計図なんてCADかなんかで作るんじゃないのか？

「優ちゃんてA型でしょ？」

残念。O型である。

イベント会場には森崎と一緒にの事が多かった。彼女も同じバイトをしていたからだ。まれにみーさんも来た。工場付近の大型ショッピングモールで似顔絵を描いていると必ず現れた。みーさんが自分の顔を描いてくれとは言う事はなかったが、かわりに友達を連れて来てくれ、不人気な似顔絵描きとしては随分助かった。

大方は森崎と二人きりだった。賑やかなイベント会場で、行きかうカップルや家族連れなんかを暇にまかせて見ていると、自分達までデートしてる気分になって来る。森崎と俺か…と、彼女を盗み見る。彼女は一心に目の前の客の顔を描いている。

…それもいいかもな。森崎は嫌いじゃないし。と、一瞬幸せな想像をし、すぐに首を振った。…おいおい。妄想はよせよ。キモがられるぞ。っていうかそれ以前に、お前、東京に戻るつもりじゃなかったつけ？　こんなところで彼女作ってる場合じゃないだろう？

それにしても森崎は、快活に喋り、よく笑う。学生時代とは180度な印象だ。学生時代はニコニコと人の話を聞いているだけの奴だった気がするのに……。

「ちょっと、何描いてるの？」

森崎の声に俺は筆を止めた。

「いや、暇だからさ」

「だめじゃん。UFOキャッチャーなんか描いてたら」

「だって、客こないし」

ある、大雨の休日。俺と森崎は、ショッピングモールの一角にあるゲーセン前の広場でやる気なく座っていた。

「もしかして来るかもしれないじゃん」

「来ないって、こんな日。警報でてるんだよ。自分がここにいる事自体が不思議だって」

やる気のない俺の言葉に「まったく」とつぶやき、森崎がスケッチブックを覗き込んだ。

「にしても、河井君は機械物描かせると天才的よね」

「森崎程じゃないよ」

「また…茶化す」

「茶化してないって」

森崎と話しながら俺はUFOキャッチャーの中にぶら下がっている銀色のアームを丁寧に写し取って行く。

「ねえ。河井君てさ、ずっとあの工場にいるつもり？」

「なんで？」

「もつとその…絵に関する仕事したいんじゃないかと思って。例えば、デザイン会社とかさ」

「この才能を埋もれさすのはもったいない事だとは俺も思ってる…でもさ」

「でも、何？」

「それ系の会社に就職するつもりはない」

「どうして？」

「俺、自分の絵嫌いなんだよ」

「なんで？」

「なんか……。森崎はそんな風に感じる事ない？ 自分の絵が嫌いだって」

「スランプの時とか感じるかな？」

「俺は、半永久的にスランプかも」

「半永久的？」

「そう。何か足りないから自分の絵は大嫌い。でも、描かずにいられない」

「じゃあ、納得せずに描いてるって事？」

「そう」

「私はとりあえず描いたものはある程度納得してるよ」

「俺も前はそうだったよ。ずっと前は」

森崎がふーんと首を傾げた。よく分からないというように。そりゃそうだよな。自分の絵が嫌いなくせに描き続ける奴も珍しいよな。

「じゃあ、一生工場のバイト？」

「それはない」

「じゃあ、他の職種目指すわけ？」

「違う、東京に戻る」

「東京？」

「東京に絵の師匠がいるんだ。その人の元で修行して納得いけるような絵をかけた時に、プロの画家になりたいと思う」

「…」

顔をあげると森崎が目を丸くしていた。そのとぼけた顔に思わず吹き出す。

「何？ その顔」

「…東京に戻るつもりなんだ」

「そうだよ」

「そっか…」

結局、その日は誰も客が来ず、おかげで目の前の雑然としたゲーセンの風景を全て写し取る事ができた。森崎も時間を持て余したのかなんだか力の入らぬくまやひよこの絵を描いていた。どうやら目の前のぬいぐるみを描いていたらしい。

「東京に戻って画家になる」とか威張ってみたものの、帰りのチケットを得るためのネックである弟、正の状況は一向に改善の兆しが見えない。毎日ドアに向かい声をかけてみるのだが当たり前のように返事はなかった。その間にも時間はどんどん過ぎて行く。まったく嫌になる。よくそれだけ人を無視できるもんだな。お前には情ってもんがないのか？ ていうか、本当にお前はどの部屋にいるのか？ もしかして居ねえんじゃないか？ お前は本当は引きこもりになんかならずにちゃんと就職して、遠い街で一人暮らしていて、おふくろは俺をここに呼び戻すためだけにウソをついているだけじゃないのか？ じゃなきゃこのありえねえ気配の無さはなんだ？ 大体トイレはどうしてるんだ？ いくら引きこもりでも用ぐらい足

すだろう？

故郷に戻って2度目の夏が来る頃、半ばノイローゼ気味の妄想を抱き始めた俺の目の前に、7年と9ヵ月ぶりに弟が姿を現した。

それはいつものごとく盆の上に食事を乗せ奴の部屋の前にたった瞬間だった。どどんと音がし、ぐらぐらと家が揺れた。はじめはトラックでも通ったかと思ったが、それにしても揺れ方がくどい。で、俺は思った。こりゃ地震だよ地震。後に確認したニュース速報によれば、震源地は遠く離れた県庁所在地で、このあたりの震度は4。幸い津波の心配はなかったが、かわりに立て付けの悪いドアが開き、目の前に立ってた俺の額を強かに打った。揺れはしばらく続き、どう逃げるか思案した俺が、ふと目の前を見てぎよっとする。なぜなら半開きになったドアの向こうの薄やみの中に、水木しげるの漫画に出てきそうな、目のぎよろつとした、青白い顔の痩せた男があぐらをかいていたからである。ばさばさに伸びた髪と、無精髭のせいで極めて判別つきにくくはあったが、辛うじて面影がある。

「正？」

俺は、弟の名を呼んだ。しかし返事がない。聞こえなかったんだろう。なぜなら奴はくそ生意気にもヘッドホンなどしていたからである。奴の聞いている音楽のリズムがしゃしゃか聞こえて来る。ヘッドホン越しに聞こえるぐらいだから余程でかいボリュームで聞いているんだろう。っていうか、お前いつもそんな装備だったのか？ そりゃ俺の呼び掛けにも応答できないわな。

「おい！」

むかついたので、今度は壁を強く叩いてやった。すると、奴は返事のかわりに立ち上がり、ベッドホンを頭からむしり取って乱暴に床に投げ付けた。怒ってるのか？ その割に無表情だな。

やつは能面のような顔で、やる気なさそうにこっちに歩いて来ると、俺の鼻先でばしっとドアを閉めた。おかげで鼻先を擦りむいた。

次の日、いつものように工場に出かけた俺は、人手が足りんとい

う理由で第一工場の方に回された。そこで任されたのは、運ばれた鉄くず達を選別する仕事であつた。ここで、使えると判断されたものは、粉碎、切断、プレス加工され、最終的には溶鉱炉で溶かされて再び世間に有用な金属に生まれ変わる。

俺のすぐ側で黄色いプレス機が音を立てている。四角い穴の中で鉄くず達が箱型に潰されていく。その様子は俺の絵心を強烈に刺激したが、それ以上に夕べ見た貧乏神のごとき正の顔を思い出させました。

なぜだろう？ 狭い空間に息苦し気に収まつてる姿が似てるせいかな？ そういえば奴も人間としちゃスクラップだしな。そこも似てるかもな。違いといえば、この鉄屑達はここで生まれかわり社会に戻るチャンスを与えられるのだが、弟にはそのチャンスがあるのかどうか予想できない事ぐらいだ。

…で、俺は哲学者のごとく考えた。人間もあの鉄くずみたいなのに簡単に再生できればいいのになつて。そういえば、俺らがガキの頃、『学校で大量生産的に教育される子供達』なんて陳腐な物言いがあり、当時はいちいち大袈裟な大人を笑ったものだが、あの言葉は案外真実をついていたのかもしれない。確かにオレ達は大量生産された商品に似ている。しかも、自分で自分の商品価値を見定める目まです持ってやがる。だから、自分を粗悪品と判定した商品は、さっさと人生を廃棄しちまうんだ。それも別に能動的に選ぶわけじゃなくてさ、この消費社会の価値観に照らし合わせれば、そうせざるを得ないだけだ。いわば運命ってやつだな。って、なんだよ、俺も結構陳腐な物言いしかできてねえじゃん。

そこまで考えた時、サイレンが鳴り響いた。昼休みだ。

「私、免許とったから、今度みんなでドライブしようよ」

外れかけたスリガラスのこっち側でみーさんがフライをつつつき

ながら言う。

「嘘つけ」

作業着の、金定さんが答えた。60過ぎのこのじいさんも出荷倉庫課の仲間だ。

「お前なんかに免許がとれるか」

「嘘じゃないもん。とれたもん」

金定さん：通称金さんのきつめの冗談にみーさんがムキになる。

俺は、クソまずい工場の弁当を食いながら二人のやりとりを片耳で聞いていた。

今日は第一工場にいるんだから、向こうの食堂に行けばいいのに、ひねくれ者の俺は、あえていつもの現場で昼飯を食ってる。しかし今日は、絵を書くのは無理っぽいな。なにしろ、第一工場からここまでは、移動に10分はかかるからな。そこで、なぜか俺は森崎の顔を思い浮かべていた。

「もう。金ちゃんんは乗せてやらない。真希ちゃんと、ユキちゃんと、優ちゃんと、村さんと、いっちゃんんとでドライブするんだもん」

「そんなに乗ったらタイヤがパンクするぞ。真希はデブだし」

「デブじゃないわ!」

口の悪い金さんを、真希さんが思いきり叩いた。

いつもながらの平和な風景だ。しかし、みーさんも、真希さんも難聴なのにこういう会話は噛み合うんだよな。金さんが大きな声で喋るからかな。口は悪いけど結構気を使ってるよなこの人。

水槽の向こう側を眺めるようにしてそんな事考えてたら、いきなり10年程前に流行った失恋ソングが鳴りはじめた。携帯の着メロだ。センス悪いな。どいつんだ? って俺のだよ。彼女にメールが届かなくなった日に着メロ設定したのが悪かった。この曲はねえよな。いい加減かえねえとな。にしても、誰から? 森崎か? いつもの場所に俺がいないから「どうしたの?」ってかけて来た? まさか。

妄想まじりに携帯を取り出してみると、おふくろからの電話だっ

た。なんだよ、会社に電話してくんなよ。恥ずかしいな。ぼやきつつも、なぜか嫌な予感がする。なんだ？ この悪寒は？ 俺は同僚達から離れ、携帯に出た。「もしもし」言うかわねかのうちに、おふくろのテンパリ気味の声が聞こえて来る。

『ああ、優？　すぐに帰って来て、大変なの、正が、正が、自殺…自殺…自殺』

「はぁ？」

一瞬、事態がのみこめない。

『お父さんが止めてるけど、お母さんは歩けないの』

「おい、何がなんだかさっぱり分からないよ。正がどうしたって？
じさ…つって？」

最後の方は声をおとして言う。

『いいから、帰って来て。正が…、あ、お父さん！』

そこでガシャーんとガラスが割れるような音が聞こえた。

「おい、どうした？」

しかし、そこで電話が切れてしまう。これは、ただ事ではない。

俺はすぐに課長に許可をとり自宅へ向かった。

車に乗り込み、少ない情報から事態を推測していく。おふくろの言葉『正が自殺』『お父さんが止めている』『お母さん歩けない』そして、ガラスの割れる音…。そして、夕べ見た正の暗い怒りを秘めた瞳。…そうか！ あいつ、自殺未遂しやがったな。それを親父が止めてる違いはない。さらにおふくろは歩けない状況にいるようだ。怪我でもしたのか？ それにしても正が自殺未遂とは。部屋から出る度胸もないあいつが…。

帰宅してみると、大体推測した通りだった。

2階の奴の部屋の割れたガラスの前で、親父と正が揉み合っている。正は頭から血を流し、その手にはバットが握りしめられていて、殴られたんだろうか親父の顔には痣ができています。おふくろはいえ、ドアの側にうずくまって唸っていた。10メートル程先に子機が転がってツーツー音を立てている。なんだ？ この有り様は。

俺は、おふくろを飛び越え、親父と正の間に割って入った。弟は

俺を見て一瞬怯んだが、すぐにバットを振り上げ鬼のような形相で飛びかかって来た。辛うじてそれを避けると、後ろに回り奴の腕をつかんでひねり上げる。ずっと家に引きこもってた正に抵抗する力はない。俺は奴の手からバットを取り上げ、ぼさぼさの髪をひつつかみ、やせこけた顔を床に押し付けてやった。正が悲鳴をあげる。

「何やってるんだ？ お前は」

兄貴の威厳でもって叱りつけた。しかし正はひいひい悲鳴を上げるばかりで答えない。

「正ちゃん、自殺しようとしたのよ」

おふくろが顔をしかめながら言った。

「自殺？」

やっぱりそうか。

「この部屋の中から、おかしな音がするから、お母さん不思議に思ってた開けてみたんだよ。そしたら、正ちゃんがバットで自分の頭を叩いていたの。頭から血が出てたから慌てて止めに入ったんだけど、つきとばされちゃって」

「怪我でもしたのか？」

「足の骨が折れたかも。でも、お母さんは大丈夫。それより、正ちゃんはやんは？」

「こんな奴にちゃん付けするなよ」

「でも、正ちゃんの方がすごい怪我だもの」

「関係ないだろ」

「ごめんね、正ちゃん。部屋を覗いたりしてごめんね」

「なんでおふくろが謝るんだよ？ むしろ謝るのはこいつだろ？」

まったく、おふくろがそんなだから弟はこんな風に立派な馬鹿野郎になっちゃったんだろうが。腹を立てながら、床にうずくまって呻いている正を見下ろし、そして俺はぎょつとした。なぜなら正の頭を中心に、どくどくと流れる血液が床を赤く染め、俺の足にまで達していたからだ。慌てて足をずらす。なんじゃあこりゃあ？ あ、そうか、奴の割れた額から流れる血のせいか。はつきりいって引い

たぞ。いや、引いてる場合じゃないって。「おい、大丈夫か正？」と弟に声をかける。

「病院へ連れていこう」

親父が言った。俺に話しかけているのだろうか？

「母さんは、お父さんが支えて車まで連れていくから、お前は正を連れて来てくれ」

どうやら俺に話しかけているらしい。それは、俺がこのくそ親父に勘当されて以来、実に2954日ぶりの出来事であった。

「分かった。運転も頼めるか？ このバカ絶対に暴れるから俺が押さえておかないと」

「その怪我では、もうその元氣もなさそうだが、いいだろう。運転しよう」

こうして家族4人が車に乗り込み、川向こうの大病院に向かった。正はすっかり観念したのか大人しい。応急処置でまいてやった包帯の上から額を押さえている。「大丈夫か？」と時折声をかけながら、俺は小学6年生の時に行った長野旅行の事を思い出していた。ビーナスラインで俺が車酔いした時に、こいつ心配して背中さすってくれたよな。あれが最後の家族旅行だったな。

10分程で病院に辿り着いた。おふくろは本人が言った通り足を骨折しており、軽い手術が必要との事でしばらく入院する事になった。正の怪我は10針程ぬう事にはなったが、見かけ程の重傷でもなかったようでその日のうちに家に帰ってよしという事だった。痛がるおふくろには親父が付き添う事になった。正の治療は時間がかかることなので、俺はおふくろの着替えをとり一旦家に戻ることにした。戻りついでに正の部屋の割れたガラスの処理や、よごれた床の始末をする。デスクトップ型パソコンと山積みの漫画とテレビの置かれた小さな城。なる程、ここでも何年でも暮らせるかもしれない。

4時すぎに再び病院に戻る。会計のコーナーに正がうつむいて座っているのを見つけ、声をかける。

それにしても、久しぶりにこの世に戻った正の青白い姿は、清潔な病院のロビーにはあまりにも不釣り合いだった。襟の伸び切ったグレーのTシャツに、紺色のジャージ。治療の為に切ったのか、髪が短くなり多少はこざっぱりしたのが救いだ、が、初夏の陽光の中の生き生きとした景色にはとても溶け込むような代物でもなく、奴もそれを自覚してか逃げ込むように車に乗り込んだ。

帰る道すがら俺は弟に聞いた。

「なんで、自殺しようなんて思った？」

どうせ返事はないだろうと思っていたが、意外にも奴は答えた。

「お前のせいだ」

「俺の？　なんで？」

「お前が俺の部屋をのぞいからだ」

「のぞいた？　ああ、昨日の夜のことかよ。あれは地震で勝手に扉が開いたせいだろ？　俺のせいじゃないよ」

っていうか、お前は鶴か。

「こんな風に見られただけからには、今度こそ必ず死んでやる」

「おいおい…」

俺はため息をついた。

「一体、何に絶望してるんだ？　兄ちゃんに言ってみろ。できる限りの力になるから」

「絶望だって？」

と奴は鼻先で笑った。

「絶望だって？　元々なんの希望も持ってなかった僕が、絶望だって？」

「あのなあ」

腹が立って来る。

「何も知らないくせに、いつちよ前の哲学言うんじゃねえよ。お前のおかげで、周りがどれだけ迷惑してると思ってる？ お前がそんな風にならなけりゃな、俺だってこんな所に戻らずにすんだんだぞ」
個人的恨みであつた。

「結構な身分だな。大学中退して好き勝手やって」

「結構な身分で好き勝手やってるのはそっちだろう？ 働きもせず
に」

「偉そうに言うなよ。お前だって、たかだかフリーターだろ？」

「なんだと」

なんだか目くそ鼻くそみたいな言い争いである。だんだん空しく
なって来たころ、奴も同じ事を感じたのか黙りこくってしまった。
そして外界から身を守るがごとく体を丸める。バックミラー越しに
その姿を見て、俺はさすがに哀れみを覚えた。

「なんで、他人に姿を見られたくないんだ？」

「……」

「一体、何が面白くないんだ？」

「……」

「無視かよ」

「……」

「ああ、いいよ。勝手にしろよ」

「……」

「だが、兄貴としてひとことだけ言っておく。世の中確かにそんなに
楽しいもんじゃないが、悪い事ばかりでもないぞ」

「……」

家に帰ると、奴は再び自室にこもってしまった。それで俺は、奴
の部屋のドア越しに奴に宣言してやる。

「おふくろがいないから飯は自分で作れよ。俺は自分の分以外は作
る気ないし、あの親父が飯作るわけがないからな」

相変わらず返事はないが、この際放っておこう。人間、腹が減り

や嫌でも働くものさ。俺は甘やかさないぞ。ざまあみろ。スパルタだ、スパルタ。悦にいたりつつ階段の手すりを握った時、俺はふいに立ち止まった。一度自殺未遂を謀った弟が餓死を選ぶ危険性が頭をよぎったのである。

「おい！」

俺は再びドアの前に立ち怒鳴った。

「やっぱり飯ぐらいは用意してやる。それから、お前がまた変な気を起さないようにしよっちゅう見に来る。ドアをノックした時に返事が無ければ、容赦なくここを開ける。分かったな」

返事が無い。

「分かったかと聞いてるんだ」

無反応。

「開けるぞ」

ドアノブに手をかけ、力を入れる。すると中からうつとうしげにドンドンと床を鳴らす音がした。

おふくろに続き、親父が入院してしまった。夜中に付き添っていたおふくろの病室で心臓が痛いとうずくまり、そのまま別室に運ばれた。心臓は悪く無かったが胃に穴が開いていたらしい。正の自殺未遂は70近いじじいにとっては重すぎるストレスだったようだ。

知らせを受けた俺は、今度は親父の着替えを持って病院に行くはめになった。ベッドの脇にタオルや下着を片付ける俺を親父は無言で見っていたが、やがて低い声でぼそりとつぶやいた。

「正は、なんであなんだ？」

「俺が知るわけないだろう？」

「お前なら分かるだろう」

「なんでだよ？」

「お前も、私達を恨んでいるだろう？」

「……」

何を言い出すんだこの親父は。俺がこっちに帰って以来ひとことも喋らないと思ったら、心の中でそんな事考えてやがったのか。

鼻の中にチューブを入れられシューシュー音立てて、そんな事言ってる親父がちょっと哀れになり、今更どうとも思ってたねえよと答える。

いや、恨んでないといってしまえば嘘になる。俺は子供の頃から絵が好きだったが、不幸にも勉強ができてしまった。そのせいで、高校に入り真剣に将来を考え、某芸大の美術科を志望した俺に向かい、両親も、担任までもが猛反対をした。その時、反抗する根性でもあればよかったのだが、割かし素直で人がよかった俺はあっさりと大人達の言葉に従ったのである。そして、T大学工学部という何やら馴染みのうすい学科に入ってしまったから、強烈に後悔するはめになる。

もし、芸大に入っていればと何度も思った。そうすれば、同じ夢を持つ仲間を：つまり人脈を得る事ができたらうし、基礎から学ぶ事ができたろうから、今のような悪戦苦闘もしなくてすんだかもしれない。俺の絵には、何か肝心なものが欠けている。だから俺は自分の絵が好きではない。もし、芸大に行っていれば、その欠けた何かもやすやすと埋められたかもしれない。

しかし、そんな過去へのIfが何になるだろう？ 第一、両親に従いT大を目指したのは俺自身の選択である。

しかしそれ以上に俺が親父に対して抱いていた怒りは、弟、正をあんな風にしてしまい、俺をここに呼び戻さざるを得なかったふがいなさに対してであった。しかし、それも、この老いぼれぶりを見れば仕方ないかと思う。昔は怖い親父だったが、今や腕力も口でも俺の方が勝っているだろう。俺が何とかしなきゃしかたねえだろ。

「父ちゃん、余計な事考えると、胃の穴ふさがらねえぞ」

と言いつつ、病室を後にした。

その日から、両親の見舞いと、弟正の面倒を見る毎日はじまった。家族のために働くのは苦にならないが、弟の食事を運ぶための一步一步が、両親の為に車を走らせるその距離が、東京と自分の間をどんどんと引き離していく距離のように感じる。人生とは旅に似ていると思った。

6月の下旬。1階のソファで居眠りしていた俺は、庭先からのクラクションに起された。ベランダ越しに外を見ると低い垣根越しにシルバーの車が止まっていて、窓から森崎が顔を出している。

ベランダを開け、声をかけた。

「森崎？」

森崎は俺の声に気付くところらに向かって手を振った。

「元気？ お見舞いに来てあげたよ」

「一人で来たの？」

「みーちゃんと」

森崎が答えるのと同時に、彼女の後ろからみーさんが顔をのぞかせた。

「みーちゃんの運転よ」

「へえ」

俺は驚いて身を乗り出した。

「上がっていけよ」

「車、どこに停めたらいい？」

と、みーさんの声。俺はうちの前でいいよと言って、二人に上がってもらった。

「あの車、買ったんですか？」

キッチンで麦茶を入れつつみーさんに尋ねる。

「うん」

「凄いですね」

俺は感心した。よく、あの工場の稼ぎでと思ったが、そういえばみーさんは俺と違って正社員だったな。

「夕べ二人でドライブしたんだよねー」

森崎が楽しげに言う。

「ねー」

とみーさんが頷く。

「タワ―？ ああ、あの河原にできた新しいやつ？」

「そう。上まで登って来た。夜景が綺麗だったよね、みーちゃん」

「みーさんの運転で？」

「そうよ、綺麗だったよね、紀美ちゃん」

内心俺は驚いていた。金定さんじゃないが、まさかこの人に免許がとれると思ってなかったからだ。ガラスのテーブルに置いた麦茶を枯れ枝のように瘦せた手で持ち、みーさんはおいしそうに飲み干した。その指先にまで届く無惨なケロイドに思わず眼が行く。

「ああ。おいしい。今日も忙しかったから満足げなみーさん。その言葉に俺は恐縮する。」

「すいません。俺が休んでるせいで……人手足りないですよね」
実は正の自殺未遂から1週間、ずっと会社を休んでいた。みーさんは首を振った。

「気にしなくていいよ。お父さんと、お母さんが一緒に入院したんでしょう？ 優ちゃんも大変だよね」

「うん、まあ。昼間は病院に行かなくちゃダメだし、夜は弟の分まで飯を……」

しまった！ 口を塞ぐ。正の存在は知られなくなかったのに。

「弟さん、いるの？」

森崎が興味を持ったようだ。

「うん。居るよ……」

紹介はしたくないけどね。

「優ちゃん、御飯つくるの？」

しめた、みーさんが話を変えてくれた。

「作りますよ。大してうまくないけど」

笑顔で答える。

「あたしが作ってあげようか？」

何？

「そんな事みーさんに頼んじゃ、申し訳ないですよ」

「ねえ、河井君、会社辞めちゃうの？」

また話が変わった。

「辞める気ないけど、クビになっちゃうかもな。親父とおふくろが戻って来るまで家を留守にできないし……」

万が一俺が留守の時にまた自殺未遂なんぞされては叶わない。

「大丈夫よ、5年前あたしの兄ちゃんが入院した時も1カ月ぐらい休んだけど大丈夫だったもん」

「みーちゃん、お兄さんいるの？」

森崎が食い付く。

「居たよ。でも、死んじゃったの。5年前入院した時に死んじゃった」

「……」

思わぬ告白に俺と森崎は言葉を失ったが、みーさんは世間話でもするみたいに淡々と「ずっとベッドに付ききりだったんだけどダメだった」と話した。話し終わると「トイレはどこ？」と立ち上がった。

みーさんをトイレに案内して居間に戻ると、森崎が涙ぐんでいる。

「あの人は凄いね」

と感極まったように言った。

「あの人、あんな体で一人暮らししてるの。昨日アパートに招待してもらったの」

「御両親は居ないのかな？」

「居ないって」

と森崎はにじんだ涙を拭う。余程感激したようだ。

「それより、河井君……」

「うん？」

「あさっての似顔絵のバイトの方は来れそう？」

「ああ、そっちもしばらくは無理だな。行かなくても大丈夫かな？」

「かわりの人が来ると思うから大丈夫だけど……事務所に連絡は入れている？」

「まだ。今日中に連絡する」

「それがいいわ。いつ頃から働けるの？」

「今の所分らない。おふくろが全快しないと……」

「大変ね。なにか手伝える事ない？」

「そんな……悪いからいいよ」

「水臭いね」

「だって、やってももらう理由……ないし」

「2カ月か……」

「え？」

何が？ と尋ねようとしたその時、廊下から悲鳴が聞こえた。み

ーさんの声じゃない、あの野太い声は……。

森崎が驚いて俺を見る。

「誰？ もしかして弟さん？」

「……らしいな」

それ意外に居ないって。しかし、あのバカ、また何をやらかした？

「ちょっと待ってて」

森崎を残して二階の奴の部屋に向かう。が、奴の部屋に着くより先に奴を発見し心臓が止まりそうになる。弟は薄汚れたパジャマを着て洗面所で呆然と立ち尽くしていた。正面にみーさんがいる。どうやら、便所に行こうとして、ばったりあってしまったってところだろう。一方のみーさんも驚いている。俺は慌てて二人に駆け寄り、半ば強引に弟の紹介をした。

「あ、みーさん。驚いた？ こいつは弟の正。見ての通り怪我してるから、家で休ませている」

俺は弟が引きこもっている事を隠した。なぜって、こいつだって初対面の相手に引きこもってるなんて事知られたくないだろう。俺は奴の面子を守ってやったのだ。具合のいい事に奴は頭に包帯を巻いていたのでみーさんは俺の嘘をあっさりと信じた。それで安心して、今度は弟にみーさんを紹介する。

「この人は相沢美咲さん。俺の会社の先輩だよ。とても世話になってる」

弟はやる気のない顔で俺の話を聞いていたが、唐突にみーさんを指差し、

「その傷何？」

と尋ねた。彼女の眼の下の大きな傷が気になったらしい。しかし初対面の相手にいきなり指をさしそんな事聞く奴があるだろうか？ その上奴はこう言った。

「ぼろ人形みたいだね、あんた」

「おい！」

「なんだよ」

「もう、いいよ。さっさと上に行け！」

俺は弟を叱りつけた。

「なんだよ」

「人を指さすなよ。失礼だろ？」

「何で？ 別にいいじゃん。何が悪いの？」

あきれ返る。こいつは心の底から悪いと思っていないらしい。いや、思っていない振りをしているだけか？ いずれにしろ、これ以上ここに居て失礼な事を言われてはかなわない。

「もう、いいよ。さっさと上に行けよ！」

「小便させろ」

「じゃあ、さっさととして部屋に戻れ」

俺は弟をトイレに押し込むと、みーさんを連れて居間に戻った。俺らの姿を見ると森崎はソファから腰を浮かせ心配げに言った。

「大丈夫だった？ なんか怒鳴り声が聞こえたけど」

「うん。大丈夫。優ちゃんの弟さんに挨拶しただけよ」

みーさんは笑って答えた。弟のぶしつけな言葉は、幸いと言っていいのかどうか、耳の悪いみーさんに聞こえなかったみたいだ。奴はぼそぼそとしか喋れないからな。

「弟さん？」

「うん。優ちゃんに似て可愛いよ。でも、鬚が伸びてたね」

「可愛くないですよ、あんな奴」

「怪我してたの。可哀想」

「少しも可哀想じゃないですって」

「怪我してるんだ」

森崎が心配そうな顔する。

「してたよ。頭にぐるぐる包帯巻いてた」

「バッティング練習してて、頭をぶつけたんです。馬鹿でしょう？」
嘘である。バットを振り回してたのは事実だが。

「大丈夫なの？ 頭なんて…」

「優ちゃん、大変ね。お父さんと、お母さんと、弟さんまで怪我しちゃうなんて」

「ねえ、河井君。やっぱり何か手伝わせてよ」

「でも…」

「そうだ、優ちゃん。あたしと紀美ちゃんとで夕御飯作りに来てあげようか？」

「二人で？」

「みーちゃんと二人だったら手伝わせてくれる？」

「手伝わせてくれるなんて…。じゃあ手伝って下さい。お願いします」

俺はソファから降りて、みーさんと森崎に土下座した。本音を言うとお助かる。ただ一つのひっかかりは正だが…大丈夫。奴は部屋にこもって出て来やしないさ。

二人が帰った後、俺は夕飯を運びついでに正に声をかけた。

「明日から、友達が夕飯を作ってくれる事に決まった。工場が終わった後の夕方、5時過ぎから来てもらう。くれぐれも失礼な事をするな。二人とも仕事をして疲れているのにわざわざ夕飯を作って下さるというのだ。尊敬しろ。感謝しろ。それと、お前は怪我で療養中につき飯は2階に運ぶという事になってるから、別に降りて来なくていい。いつも通り生活しろ」

言うだけ言うときさっさと夕飯を置いて立ち去ろうとした。と、ドア越しにぼそぼそと声がする。

「あの美人も来るのか？」

驚いて立ち止まる。

「来るさ。それより、お前見てたのか？」

「見えたんだ。お前の彼女だろ？」

「違う。けど、おかしい事すんなよ。何かしたら容赦なく殺すからな。本気だぞ」

「もう一人の人は？」

「みーさんも来てくれる。お前。さっきみたいな事2度と聞くんじやないぞ」

「あいつ、変だよ」

「変じゃねえよ。あの人は障害を抱えても自活している立派な人だ。五体満足なのに働きもしないお前の方がよっぽど変だろ」

「皮膚が普通じゃないじゃん。なんであんな風なの？」

「あれはケロイドだろ？ あんな風になるには余程の事があったんだ。人の心の傷をえぐるのはよせよ」

「でもなんか笑ねえ？」

「お前……」

弟の常軌を逸した言葉に腹立ちよりもだんだん悲しみが込み上げて来た。お前、どうしてそんな奴になっちまったんだ？ そんな奴じゃなかっただろ？

次の日、遅めに病院から戻る。おふくろのリハビリに付き合っていたら遅くなってしまった。今日から森崎とみーさんが来てくれる事になっている。玄関の鍵閉めて来たし早く帰らねえと。

俺は慌てて車を走らせ家に戻った。6時を過ぎてしまった。もう、2人とも帰ったかもしれない。ところが、家に着くと玄関の鍵が開いていた。台所でみーさんが野菜を刻んでいる。

「よく、入れましたね？」

大きな声で言うのと、みーさんが振り返った。

「お帰り。ごくろうさま」

「玄関の鍵、開いてました？」

「正ちゃんが開けてくれたの」

「え？ 正が」

嘘だろ？ しかし嘘でない証拠にみーさんがここにいる。

一体、どういう事だ？ みーさんが身障者だから？ それにしては夕べの発言はなんだ？ あれは見せかけで実は奴にも弱者への思いやりが残っていたという事か？ それで、7年も引きこもった部屋から自発的に出て来た？ 「弱者への思いやり」をきっかけに？

いや、違う。はっきりとした根拠はないが、『思いやりで』とかそういうレベルの話でないのは確かだ。そんなぐらいで、奴が救われるなら始めから部屋に閉じこもったりしないだろうと思う。じゃあ、何だ？ 興味本位か？

「悪いけど、これ、テーブルに持っていてくれない？」

みーさんが、器に盛った煮物を差し出す。

「あ、分かった」

とそれを受け取り「森崎は？」と聞く。姿が見えないようだけど。「2人で来てもしようがないから、一日交代にしたの。紀美ちゃんじゃなくてごめんね」

「そういう意味じゃないですよ」

「優ちゃん、紀美ちゃんの事好きなんですよ？」

「また。そういうんじゃないって、言ったじゃないですか」

「別に恥ずかしくないでしょ？」

「恥ずかしいとか、恥ずかしくないとかじゃないですって」

「早く、結婚しないと」

みーさんは、結構しつこかった。ぐだぐだと色々語るのもめんどくさくなって来たので話をそらす。

「正、なんか言いました？」

「何って？」

「正、何か話しましたか？」

多分、なにも話しゃないだろうがな、あいつは……。

「うん、話したよ」

「え？」

「どうして、そんな変な皮膚なのって聞いて来た」

あいつ……！

「だから火事でこうなったのって教えてあげた。その後、顔の傷の事も聞いて来たから、それは聞かないでって答えた」

「すいません。あいつ、ちょっと頭が変なんです」

「いいよおー、別に。その後色々手伝ってくれたし。優ちゃんが帰

つて来るまでここにいたよ」

「嘘だ」

「嘘じゃないよ。本当だよ。正ちゃんて優しいね」

「嘘だ」

ありえない。

俺のくどい否定をみーさんは笑い、枯れ枝みたいな手で野菜を刻んだ。

みーさんとは機嫌良く話したらしい正だが、夕食に降りて来る気配はなかった。実はそれをちょっと期待していただけにがっかりする。まあそんなものかもな。世の中そんなに甘くないことだ。

で、いつものごとく奴の部屋に飯を運びドアの外から話しかけた。

「お前、みーさんと喋ったらしいな」

返事があるかとしばらく待つ。

「…」

何も無しか。何だよ昨日はベラベラ喋ったくせに。ムカついてくる。

「お前、また失礼な事聞いただろう。夕べあんだけ注意したのに…」
返事があるわけがないが「いいやと開き直り、沈黙相手に喋る。」

「人間として最低だな。みーさんは心が広いから許してくれたけど」

「…」

「おい、返事がないって事は死んでるのか？ 開けて確認するぞ」

すると、中からドカンと音がする。生きてるっていうよりむしろ、開けるなって事だろう。開けねえよ、そんな汚ねえ部屋誰がのぞくか。

「明日は森崎が来るからな。おかしな事するなよ」

俺はひとことだけ申し渡し、自室に戻った。

次の日、日課の両親見舞いを済ませて帰ってくると、門の前に森崎が座っていた。彼女は俺に気がつくのと立ち上がった。

「待ってたの。チャイム鳴らしても誰も出て来ないし。弟さん、お出かけ？」

「え？ あ…まあ、そうじゃないかな？ 怪我也大分よくなったみたいだし」

っていうか、あのバカ森崎の前には出て来れないらしいな。

鍵を出し玄関を開ける。森崎はスーパーの袋を片手に台所に入って行った。そして手際良く料理を始める。その後ろ姿を見てなんか良いなと俺は思った。結婚したら毎日こんな感じなんだろうか。小さな幸せってやつだよな。もともと、その小さな幸せすらつかめない奴も最近はいんだけど。だからって結婚イコール幸せでも無いらしい。全く、複雑だよ。複雑すぎる。

「みーちゃんは、何作ってくれたの？」

「うん、ああ。筑前煮に魚を焼いてくれた」

「おいしかった？」

「おいしかったよ」

「みーちゃんは一人暮らしだから強いよね。私は簡単なものしか作れないの。ごめんね」

「いいよ、作ってもらっただけでありがたいのに……」

森崎が料理してる間に、持って帰って来たおふくろと親父の下着を洗濯する。正のも混じっている。いつの間に入れやがったんだか。その後、風呂を洗い湯をためる。それから洗濯を取り込みたたむ。家事をこなす俺を見て森崎が言った。

「河井君で、良い旦那さんになりそうね」

「なんで？」

「家事、うまいもん」

「一人暮らししてたからね」

「東京で？」

「そう」

「やっぱり今でも東京に行きたいの？」

「まあね」

「そんなに अच्छा が好きなのに、どうしてここに戻って来たの」

「まあ、色々事情があってね」

「色々な事情の中身が聞きたいんだけど」

「うん、まあ色々」

「何それ？」

その日、森崎が作ってくれたのはオムライスとサラダだった。「弟さん、遅いね」と言いながら森崎は7時頃帰って行った。弟は待たなくていいからと無理矢理俺が帰らせたのだ。なにしろ奴ならずつと上に隠れてるんだから。

そして、今日も例のごとく奴のために食事を運ぶ。会話は無い。

それから半月というもの、みーさんと森崎は約束通り毎日のようにやって来て夕食を作ってくれた。正はみーさんが来た時は多少顔を出すらしい。俺はその事を森崎から聞いて知った。

「弟さん、みーちゃんと仲良いみたいね。私が来た時はいつも居ないのね」

「ああ、森崎が来る日がちょうど通院日になってるらしい」

「よく、病院に行くのね」

「おふくろ達の見舞いも兼ねているみたいだよ」

「ふうん……」

そうこうしてるうちに母親が退院し、その付録のように親父も退院して来た。おふくろはまだ杖を必要としたが、俺と親父の協力でなんとか家事一切は行われていった。みーさんと森崎の役目は終わり、俺は1ヵ月ぶりに社会復帰することができた。

長い間休んだにも関わらず、会社は俺を受け入れてくれたが、俺の居た場所には既にばあさんが補充されており、何となく自分があぶれもののような感じがして来る。さらに、そのばあさんと元からいるじいさん達が対立し、障害者3名を巻き込んでのくだらん争いがはじまっていた。

やれ、杉村さん（新しく入ったのはあさんの名前だ）は楽をしたがるだの、それは金ちゃんやり過ぎるからだの、両者に言い分があり、板挟みになった俺は「そろそろここも潮時だな」と漠然と思う。しかし、ここを辞めてどこに行くか。小遣い稼ぎだけの為に、また他の工場で働くのか？ 本当にそれでいいのか？ 刻々と時間は

過ぎて行く。気がつけば夏が終わり秋が近付いている。そして、きつとあつという間に冬が来て、正月に紅白なんぞ見ながら「またこの日が来ちまったか」とかぼやくんだらうか？ 冗談じゃねえ。そんな事は2回も繰り返せば十分だ。

しかし、どう考えても俺が東京に戻れる可能性は感じられなかった。正は、みーさんにこそ懐いたようだが、おふくろ達が戻って以来は相変わらずの引きこもりっぷりで改善の気配はみられないし、それ以上に、日に日に老いぼれて行く親父とおふくろを見るにつけ、家族を見捨てて勝手な事をする事はもはや出来ないような気になって来る。長男としての責任感が芽生えたのか？ 腹立たしい事である。そんな事ばかりぐるぐると考え眠れない夜が続く。

「なんか最近元気ないよ」

と、森崎が肩を叩いた。

「分かる？」

「やっぱりそうなんだ。何かあったの？」

「うん、そろそろここ辞めようかなって」

「東京に行くの？」

「違うけど」

「でも、行きたいんでしょ」

「行きたいけど、でも……」

それから俺は思わず本音を言った。

「もう無理なような気がする」

「なんで？ 行けばいいじゃない」

「そりゃ、究極に身勝手になれば行けるさ。でもなあ、もし、それをやったら、親父とおふくろ死んじまいそんな気がして無理」

「心配し過ぎじゃない？」

「そうかな？」

「そうだよ。行きたければ行けばいいじゃん。人生一度きりだよ。」

好きに生きないと」

なんだか、やけに援護してくれる。どうした？ 森崎。

「もういいよ、とりあえずは。それよりさ、前に森崎が言ってたようにイラストの仕事ちゃんとしてみようかなって」

「いいと思うよ。でも、甘くないよ」

「分かってるって」

「そう。それじゃ応援するよ。頑張れ！」

森崎の応援に励まされて力を得た俺は、ヒマを見つけては面接を受ける事にした。しかし、イラストレーターのみの求人などほとんどなく、たまにあっても年令制限と学歴にひっかかる。その上、俺程度の絵の描ける奴など星の数程いるのだ。せめてクリエイティブな仕事をとデザイン会社等も受けてみたが、今度はスキルがないと断られる。絵を描いていた旨を伝えてみれば「そうやってイラストを描く人が人脈を作るためにうちの会社に来たがるけど、実際の現場は君が思っている以上にハードなんだ。そういう考えで来られるのが一番困る」と冷たくあしらわれる。俺は初めて自分の立ち位置を知った。

「ねえ、今度の土曜日二人とも何か予定ある？」

10月の、ある晴れた昼休み。みーさんが言った。

「もし、ヒマなら、3人で遊びに行かない？」

「いいよ。私は大丈夫だよ」

森崎が答える。

「でも：どこに行く？」

「優ちゃんはどこ行きたい？」

みーさんが話を俺に振って来たから、「どこって？」と、スケッチブックから顔を上げ、俺、「そうだなあ」と考える。手元には精密な線で模写されたプレス機が、仕上がりかけていた。ここは、第一工場の敷地内。この間までテリトリーにしていた休憩場所から見えるものは、あらかた写し取ってしまったので、他に模写すべき対象物を探してここに移動してきたのだ。みーさんと森崎には黙っていたはずなのに、なぜか探し当てられてしまった。

「紅葉にはまだ早いよね」

と森崎。

「早すぎるだろう」

と、俺。

「別に紅葉がなくなたって、この辺りを走るだけで十分楽しいよ。あたしが車出すしさ。行こうよ。きつとスカツとするよ」

と、みーさん。その言葉に俺は慌てる。

「それは、悪いよ。車なら俺が出しますよ」

「あ、あたしの運転の腕を信用してないな」

「そうじゃないですけど…」

「いいじゃん。みーちゃんにお願いしようよ。腕前見せたいんだっ

て。みーちゃんが疲れたら、私達で交代すればいいだけの話だしさ」
森崎が話に割って入って来てみーさんとなにやら目配せする。

「ねー！」

二人とも妙にテンションが高い。もしかして、俺の事励ましてくれてるつもりか？

そういえば、ここんところ、就職活動がうまくいかないせいで、我ながら暗くなってたからな。2人に気を遣わせて悪い事したかな。

「森崎の運転が一番コエーよ」

冗談のつもりで言ったら森崎がマジメにふくれる。

「何だよ？ 失礼ね」

「だって、お前、免許とった次の日にぶつけたって言ってたじゃん」
「そんなの昔の話でしょ？」

二人で言い合っていると、みーさんが口を挟んで来た。

「ねえねえ。アクアリウム・リバーズに行かない？」

「え？」

って同時に言って、ついでに同時に俺らはみーさんを見た。

「アクアリウム・リバーズって、何ですか？」

聞き覚えがない名前だ。

「今年の春にオープンした、淡水魚の水族館よ」

森崎がフォローする。

ふーん。淡水魚って事は、川の魚ばかり集めてるってことか。

しかし、そんな難しい事はこの際どうでもいいだろう。水族館、水族館ね。女2人と男1人の、微妙な組み合わせでいく先としちゃ悪くないかも。

「そうしよ、そうしよ。私も一度行ってみたかったの」

森崎のひとことでアクアリウム・リバーズ行きが決定した。

みーさんが、細い手で器用にハンドルを動かす。本音を言えば、はじめは、この人に運転を任せる事が怖かったのだが、あつという

間にそんな不安は解消してしまった。要するに、みーさんは普通レベルで運転がうまかった。

青空の下、快適に車を走らせ、1時間程でアクアリウムに着く。人込みをかき分け、イワナやら鱒やらカワウソ達が遊ぶ水槽をめぐり、敷地内の喫茶店で軽く昼食をとる。

「川の魚も結構面白いね」

と、サンドウィッチをほおぼり森崎が言う。

「意外にね」

みーさんが答える。

俺は、白い建物の上のイワシ雲をぼんやり見上げ、ついでに、本物のイワシが食いたいと思う。正直、ここの野菜サンドは、たいしておいしいくはなかった。とかいって、すっかり全部食ったけどさ。

「晴れてよかったねー」

と、みーさんが伸びをしながら言った。

『食べた後に伸びしちゃ行儀悪いのよ』とか言ってた、母親の顔を思い出すでもなく思い出してた俺に、みーさんが、ほぼ何の脈絡もなく、唐突に同意を求めて来た。

「やっぱり、正ちゃんもくればよかったのにねえ」

「はい？」

誰って？

「あれ？ 正ちゃんから。何も聞いてない？」

「聞いてない：あいつ、忙しいらしくてさ：しばらく顔を合わせてないんだ」

俺は死んだら地獄に落ちるだろう。

「そうなんだ。あたし、今日の事、正ちゃんも誘ったんだけど。断わられちゃったの」

「そりゃあ、そうだろうね…」

思わず本音が口に出る。あいつが来るはずがない。いや、そんな

事よりも…。

「みーさん、正と連絡とってるの？」

「とってるよ。あたし達、メル友なの」

「メル友？」

嘘だろう？ あいつ携帯なんて持ってねえよ。必要ねえもん。…あ、そうか。パソコンのメールか。しかし、あいつ、いつの間にアド交換なんて生意気な事してたんだ？ てな事思ってた俺は、さらに驚愕の真実を知る。

「正ちゃんからメル友しよって言うてくれたんだよ」

「うそだ…」

あいつからだって？ 天変地異が起きてもありえない。ってな、てな事思ってた俺は、さらに、さらなるおそろべき真実を知る。

「正しちゃんて、おもしろい子だよ。『みーさんの事を考えると、僕は勇気がわいて来るようです。そんな体なのにまじめに働くなんて、大変でしょう？ 今日お互いに仕事頑張りましょうね』って毎日メールしてくれるのよ」

「うそだ…」

俺は再びつぶやいた。あいつに、そんな人間みたいな心があるはずがない。あいつも死んだら地獄に落ちるに違いない。

「河井君の弟さんてみーちゃんとは仲いいんだ…」

森崎が不満げにつぶやいた。

「私とは、顔合わせようとしなかったのに…」

まずい、やつが避けてた事に気づいたか。

「私って、もしかして嫌われてたりするのかな…？」

「そんな事ないって。タイミングの問題だって」

とか、嘘の上塗りをして、「そろそろ、あっちの建物行こう。あつちはまだ、見てないだろ？」と、東の青い建物を指さした。

それから、熱帯の湖のカラフルな魚達や、でかいメコン大ナマズや、小型ワニ、ピラニアなんぞを見て、こいつら、ナカナカ絵心を

そそるなと思いがら、その後は隣接するオアシス・ランドなる公園で、子供連れの家族に混じり観覧車を見つめながら、精一杯秋の一日を満喫する。そうこうしているうちに、夕方になった。俺達は、ライトアップされた『オアシス・キャンドル』や噴水を後にし、車に乗り込んだ。

帰りの運転は、頑として俺が引き受けた。行きは結局全部みーさんにまかせてしまっただけに、今度こそ、男としても引き下がるわけには行かない。

バイパスを走る道すがら、森崎が聞いて来る。

「就職活動、どう？」

「うん。ぼちぼちやってるよ。でも、全然ダメ。しばらくは、あの工場に厄介になるかな。：へたすると、一生：」

「何？ 優ちゃん工場やめるの？」

みーさんがちょっと驚いたみたいな顔する。

：なんだ、なんだ。何も知らねーのか？ この人。：って、俺も、なんにも話してねーんだけどさあ。けど、森崎から少しぐらいは事情を聞いてるものと思ってた。だから、今日の、コレ、誘ってくれたのかと：俺が転職うまく行ってないの知ってて元気づけてくれようとしたのかと：もしかして、単にへこんでたから誘ったってだけ？
っーか、遊ぶのに理由なんかいらねーか。

「俺ね、転職しようかと思ってるんだ」

俺はみーさんに告白した。

「は？ 何って？」

しかし、何言ってるか分かんねえらしい。

「工場辞めようと思ってるんです」

「え？ 辞めちゃうの？」

：通じたようだ。

「そう。でも、次に働く所がナカナカ見つからなくてね：困ってるんです」

「そうかー。優ちゃん辞めちゃうのかー。あたしも辞めたいなあ。杉村のババア大嫌いだし」

と、彼女は自分と敵対している、例の新入りのおばちゃんの名前を憎々しげにつぶやいた。…やれやれ、と思う。

それきり、しばらく話題が途切れ、カーラジオから音楽ばかりが流れる。音の途切れ目で、ふと気がつくと、みーさんが、すーすーと寝息を立てていた。それで、俺は森崎と二人きり、薄闇の中にとり残される。

「無邪気でうらやましいな。みーさんは」

「疲れてたのよ。行き、ずっと運転してたし」

「結局、行きの道全部ね。すげえよな」

「あたし、障害者の人が免許とれるって知らなかった」

「俺も」

「ガッツのある人だよな」

「確かに」

「ねえ、ところでさ」

「何？」

「この間、デザイン学校時代の先輩が独立して事務所持ったんだって」

「ふうん。すごいね」

「それで、今、イラスト描ける人を探してるんだって」

「そう」

「よかったら、河井君、やってみない？」

「え？」

俺は驚いてミラー越しに森崎を見た。

「…いや？」

「いやじゃないよ。そりゃ、嬉しいけど…なんで、俺を…」

「河井君の絵が好きだから、このまま埋もれさせたくないの…」

なんだそんな理由かよ、と少しがっかりする。

…って何を期待してたんだ？　こんなところで、レンアイしてるヒマはないって決めてたじゃないか。いや、まてよ？　俺は東京はあきらめたんだっけ…

とか、何とかうじゃうじゃ考え込んでると「あのさ」とやけに真剣な声で森崎が言った。

「私、前に勤めてた会社でつきあってた人がいたんだ」

「ふうん…そう…で、今でも付き合ってるの？」

「ううん…」

森崎の否定に、なぜかホツとする自分がいる。

「妻子持ちだったし、このままずるずる続けてちゃダメだと思って…それで、前の会社辞めたの」

「そうなんだ」

確か『デザインの方向性が合わなくてやめた』とか言っていたが、嘘だったか。しかし、俺はあえて深くはつつこまなかった。

「会社辞めてからしばらくは、立ち直れなくて、働く気が起きなくて、引きこもっていたんだけど…」

森崎が何気なく口にした『ひきこもる』という言葉にドキツとする。

「でもさ、生きてると不思議なことが起きるもんだね」

「不思議な事？」

「そうよ。奇跡よ」

「奇跡？」

「変？」

「別に変じゃないよ。でも、何が奇跡だったの？」

「そうね、今、こうして、河井君やみーちゃんと3人でドライブしてる事かな？」

「何それ？」

思わず吹き出したら、みーさんが目をさましてしまった。それで、俺は森崎のその言葉の真意を知ることとはできなかった。

けれど、確かに、生きていると、時々奇跡みたいな出来事が起きる時がある。だから、生きようと思えるのだ。その先に会おうかもしれない、奇跡を信じて…。

続く

しかし、人生とはしばしば希望よりも絶望の色合いが濃いものなのか。

俺は森崎に紹介してもらったデザイン会社に1ヵ月ほど勤めたものの、あっさりと辞めてしまった。辞めたといえど聞こえがいいが、実は首になったのである。

理由は色々ある。

自分の名譽のために格好良く理由をつけるなら、事務所の求めるものと、自分の目ざすものが違ったということだ。

主に広告用のチラシ製作をしているこの会社において芸術性などというものは無視される。大切なのはクライアントに気に入ってもらえるものを、いかに短時間で、要領よく、そつなく仕上げるかである。それだけの事である。それだけであるのにもかかわらず『それだけの事』が俺にはこなせなかった。なぜなら、ひたすら自分のこだわりを追究してしまうからである。

こだわりを追究すれば時間がかかる。いいものを創るには絶対的に時間がかかると俺は信じている。しかし、クライアントは「いいもの」など求めない。自分の満足できる範囲内ですばやく見栄えのいいものを仕上げて来る事だけが重要なのだ。

そして、さらに、これが致命的ふあったのだが（致命的であることは目に見えていたのだが）俺はソフトの扱いに慣れていなかった。

「せっかくの紀美香の紹介だけど…」

森崎の先輩にあたる俺の上司は申し訳なさに言った。

「うちが欲しいのは即戦力だから…」

「俺は絵の仕事がもらえると思ってたんですけど…」

「残念だけど、うちにはそんなにイラストの仕事はないし…。紀美香にちゃんと説明しておかなかった私も悪かったの。ごめんね」

11月下旬。

そろそろ木枯らしの吹きかける街頭で、この世界から一人置き去りにされたような気になる。

どこをさがしても、袋小路から抜け出る術はない。いつそ正のよう
に自分の小世界に閉じこもってしまおうか。そうすれば、親父とお
ふくろは2人の大きな赤ん坊を抱え途方に暮れる事になるだろう。
しかし、それもすべて自分達の責任である。ざまあみろだ。いや、
それとも…。

と、俺は欄干越しに流れる川を見下ろした。川面は鈍色に白々し
く日の光を反射させながら流れつづけている。

…いつそ、ここで身を投げれば楽になるんだろうか？

不吉な考えにとりつかれた時プルプルと携帯がなった。森崎から
だった。

「ごめんね」

開口一番森崎が言った。

「なんで謝るの？」

川面を眺めたままぶっきらぼうに答える。

「私の考えが甘くて、河井君にも先輩にもいやな思いさせて…」

「別に、森崎のせいじゃないだろ？ いい年こいて何もできないの
は、今まで怠けてた自分のせいだ。因果応報ってやつだ」

「でも…」

「もういいって」

多少きつい口調で言うと、森崎は黙ってしまった。

川沿いに町並みは続いて行く。既に夕暮れが迫り、気の早いクリスマス仕様のイルミネーションが光が川面に映っている。その美しさがやけに空々しく感じる。

「ねえ」

森崎が俺の真横に立った。

「少し歩いて話そう」

それで俺達もきらきら光るイルミネーションの中を歩くはめになった。居心地の悪さばかり感じる。

「あのね」

と、森崎が光の中で言った。

「もし良かったら、私ソフトの使い方教えてあげるよ。そうすれば、きつと…」

「もういいよ」

俺は怒った。同じ年の、多少の恋心を抱いた事もある相手に、ここまで気をもませなければならぬ自分が、たまらなく情けなくなったからだ。

「俺にはやっぱり向いてないんだよ。会社勤めなんて…」

「…じゃあ、どうするの？　これから」

「どうにかするさ」

「どうにかって、どう？　どの世界もそうだと思うけど…いい加減にやってうまくいく程世の中そんなに甘くないよ」

分かりきってるよそんな事は…と、食い下がる森崎が少々煩わしくなる。

「いいんだよ。別に俺は東京に戻る気だし。ここで定職をみつける気もないし」

「いつ？　いつ戻るのよ」

「森崎には関係ないだろ？」

「そうやって、目の前のことから逃げてるだけじゃないの？」
「もういいから、俺の事は放っておいてくれよ」

どこからかクリスマスソングが流れて来る。11月に何がクリスマスだ、嘘くさいと思う。

森崎は泣きそうな顔をした。しかし、泣き崩れる事はしなかった。かわりにこう言った。

「分かった。もう、よけいなおせっかいしない」

「それが賢明だな」

「キズつけてごめんね。さよなら」

「ああ、さようなら」

「…」

「…」

「…だとおもったんだけどな」

「は？」

「あの工場の前で偶然河井君見かけた時…」

「何？」

「もういいわ。私がバカだったのよ。子供みたいに…」

「何言ってるんだ」

「さようなら」

「おい！」

呼びかける俺に目もくれず森崎は足早に去って行く。それを追いかける気力もなく俺は脱力する。とはいえ、いつまでもそうしてられないから金と銀の光りの中を俺はよろよろ歩き出した。袋小路に迷う哀れな仔羊の頭上に、聖なる歌は降り注ぐ。

その日から俺は一週間ほど部屋に閉じこもった。

閉じこもって何をしてたかったというと、ひたすら絵を描いていた。

モチーフは思いつく限りの人の顔だった。

うろこ人間や、木造人間、メタル人間、プレス機に押し潰された人。溶鉱炉でどろどろにされ再生される人、人、人…。

一度、母親がふいにドアを開け、足の踏み場もなく散乱した画用紙を見て悲鳴をあげた。

「あんたは気がふれたの？」

「大丈夫だよ」

俺は笑顔で答えた。

「俺の絵を完成させようとしてるんだ。いつか完成するさ」

しかし、描けども描けども思う通りの絵は描けない。そして一週間後。ついに俺は散らばった画用紙の上に昏倒した。薄れる意識の中に一枚の絵が浮かんで来る。

…つぎはぎのマリア。

あれは、俺の人生を狂わせた絵だ。

師匠の描いた…あの絵。

…どうしたら、あんなふうに…。

目を覚ますと昼だった。

深夜、昏倒してそのまま寝てしまったようだ。色々な夢を見たが何一つ思えていない。ただ、やたらと癒される夢だったような気がする。

起き上がり、ボリボリと頭をかき、一週間ぶりに部屋から出る。階下の洗面所で顔を洗う。

何やってるんだ、お前は？

って、差し向いの無精髭の男に話しかける。

みっともねえ顔しやがって。これじゃ、正と同じじゃねえか。

まったく、こういうのをミイラとりがミイラになったって言うんだろうか？　ちょっと違うかな？　などと自問自答し、まあ、どうでもいいやと速効で結論付けると、鬚を剃り、洗濯済みの服に着替えた。

なにしろ、いいかげんに職探しにでも行かないとやばいだろう。

とりあえず、まだ引きこもりになる気はないからな。

家の中はシーンとしている。両親は出かけているようだ。最近二人ともよく外に出かけている。家にいたってノイローゼになるのが関の山だからと俺が進めたのだ。

そしているはずの弟の気配は相変わらずまったく感じられない。

p m 4..30

職安を後にし、車を走らせる。

激しい徒労感にさいなまれていた。望むような職が見つからなかったからである。果たして、この町に俺の居場所なんかあるんだろうか？ 家族のために犠牲になるという行為、それ自体は美しくはあるけれども、『俺にとって』それが本当に正しいといえるのか？ なんだか子供のころに読んだ杜子春で物語を思い出す。正直、昔読んだ時はよく意味が分からなかったが、もしかしてこういう事なんだろうか？

などなごらちもない事を考えていた時だ。ふと窓の外を見た俺の目に異様なものが飛び込んで来た。

それは、ひとことで言えばみの虫だ。いや、みの虫みたいな男だ。多分、何枚も重ね着をしているんだろう。しかし、いくら冬とはいえ着込み過ぎだ。だるまのように膨れ上がっているじゃないか。一番上に羽織ったどてらは、おそらく元は別の色だったのだろう。Ch褪せた茶色で、その上に灰色のマフラーをして、頭には煎茶色のニット帽をかぶり、そこからはボサボサの髪がのぞいていた。顔がよく見えなかったのは、薄暗いからというよりもむしろ奴が後ろ向きにどぶ川を眺めていたからである。

「なんだありゃ？」

思わず口をついて出る。

世の中には妙な奴がいたもんだ。その風体のあまりの馬鹿馬鹿しさに少しだけ憂さが晴れた気がした。

結局望むような職にはつけそうにもないとあきらめ、数日後、隣の工場にバイトで入る。手っ取り早く稼ぐにはそれしかなかったのだ。

そこは大手企業の工場で、俺は荷物運びをまかされた。

しかし、そこではもう絵を描く事はなかった。無機質な工場内はモチーフに事欠かなかったが、それらを描く事に自分自身が倦んで来たからである。しかし、さて、それでどうする？ お前は何を描く？ 何が描きたい？ という（あの日以来提示された）問いかけの答えは、行く先見えぬ未来以上に曖昧模糊としている。それがはっきりと見えない限りどうしても描く気にはなれない。

そんな具合に一週間ばかりたったころ、みーさんからメールが入った。

『次の土曜日にクリスマスパーティーやるけど優ちゃんも来る？』

みーさんか、懐かしいな。

と、休憩時間、人気のない倉庫裏のフェンスにもたれて思う。なにしろ、前の工場を辞めてからわずか二ヵ月しかたっていないのにもう何年もたった気がしていた。

クリスマスか……。たいして興味もなかったがとりあえず返信した。

『誰が来るんですか？』

メンバーは重要である。（しかし、みーさんには会いたいと思う）

しばらくすると返事が来た。

『まだ、ちゃんと決めてないけど、とりあえずキミちゃんには声をかけたよ』

キミカ：その名前にドキッとしたところ、続けざまにメールが入って来た。

『優ちゃん、キミちゃんとケンカしたってね。どうして？』

『別に色々あって…』

と返信すると、またすぐに返事が来た。

『許してあげなよ。キミちゃんさびしそうだよ』

許すも、許さないもないが、みーさんの言葉で俺はあの夜の事を痛烈に思い出した。別に今まで忘れていたわけではない。あえて心の外に置いておいたただけだ。しかし、今、落ち着いて考えてみれば、何もあんな態度を取らなくてもよかったと思う。

『どうする？　くるでしょ？』

みーさんから半ば強制的なメールが来た。
俺は随分迷いいつも返信した。

『分かりました。行きます』

まだ、やり直しはきくだろう。

何をやり直したいのか、そしてそれを本当にやり直したいのかどうかも定かではないくせに、俺はそんな事を考えていた。

13

12月24日 土曜日

俺はミーさんのアパートに向かった。

三婆沙メタル工場から東に徒歩2分というヒントと住所をたよりにたどりつけば、そこはアパートとは名ばかりの：むしろ長家といった方がふさわしい：トタン屋根の今にも崩れそうな平家一階建てのボロ家であった。

かろうじて設置された配線むき出しのインタホンを鳴らすと、ミーさんがドアを開けて「いらっしやい」と招き入れてくれる。外見の割に中はこざっぱりと整っており、入ってすぐの台所を通り抜けた奥の和室には、大きな鏡台が置かれていた。

「優ちゃん1番のりね」

子供相手みたいにミーさんが褒めてくれる。別に嬉しくもなんともないが、とりあえず出された座ぶとんにあぐらをかいて、じつくりと部屋の中を見回せば、壁に金や銀のモールが飾られクリスマスらしい雰囲気になっている。あの枯れ枝のような手で一生懸命部屋を飾り付けるミーさんの姿など思い浮かべていると、当のミーさんがケーキを持って来てこちらにやって来た。

「小さくてごめんね。でも、3人ならこれぐらいで十分よね」

3人？ てことは俺とミーさんと森崎ってことか：。思ったより人数が少なかったが、俺にはそのほうがかえって良かった。

みーさんはパタパと部屋の中を走り回り皿や料理を並べている。
一人でやらせるわけにもいかず、

「俺もやるよ」

と立ち上がり台所に入る。

「ありがとう。じゃあ、お皿並べてくれる？」

「うん。買い出しとかあったらやるけど？」

「買い出しは昨日手伝ってもらってすませた」

「え？ 森崎に？」

「違うよ。キミちゃん今日はやっぱり無理だって」

「え？」

みーさんを見た。

「だって、今日来るの3人って…」

森崎以外に、他に誰が来るっていうんだ？ 真希さん？ 金さん

？ 色々候補を考えていると、俺の言葉などまるで聞こえていない
かのようにみーさんが言った。

「あたし思うの。仲直りするなら、ちゃんと優ちゃんから連絡した
方がいいって…優ちゃん、キミちゃんのこと好きなんでしょ？」

「それは…」

…そう真正面から問いたただされると答えに困る。しかし、みーさ
んときたら俺が森崎を好きだとやみくもに思い込んでいるようで。

「隠さなくてもいいよ。見てれば分かるよ」

そうだろうか？ 確かに森崎の事は好きだ。あんな別れ方したま
まで終わりたいかとは思う。だが…

「ねえ。いつもいつもキミちゃんの方が優ちゃんのこと必死
だったけどさ、今度は優ちゃんの方からなんとかしてあげなよ。こ
れじゃあかわいそうだよ。キミちゃんが」

それも分かっている。こんないい加減な事を続けていたら結局森
崎は離れて行ってしまいうだろう。しかし…しかしだ。なのに、この
すっきりしない気持ちはなんだろう？

いや、本当は分かっている。俺が彼女に真剣に向き合えないわけはただ一つ…。

「ねえ、もし仲直りしたいならさ、今、メールしてあげなよ。ここにおいでって…」

みーさんがそう言った時だ。ガチャッと玄関のドアが開いて誰かが入って来た。

「森崎？」

などと声をだし振り返り、正直俺はぎょっとした。
なぜなら、そこに見知らぬ男が、いや、正確には一度だけ会った事のある男が立っていたからである。

「ミノ虫男！」

俺は思わず指さし叫んだ。

そう、それは数週間前、職安帰りにドブ川のほとりで見たあの不思議な男であった。奴はあの時と同じく、何重にも着込んだ小汚い服の上にすすけた茶色のどてらをはおり、灰色のマフラーをして、手に汚ねえ買い物袋をさげていた。袋の中からは赤色の髪がみえていた。人形でも入れているんだろうか？

どんな顔か確かめようとそだが、サングラスとマスクのためにさっぱり分かりやしねえ。こいつ、みーさんの知り合いだったのか？
みーさんも随分変な奴と付き合ってるもんだなあ、…と思った時、後ろからパタパタとみーさんの足音がして、そして、意外な…この上なく意外な名を口にした。

「あら。正ちゃん遅かったのね。待ってたのよ」

「はあ？」

俺はまたもや、思わず声をあげていた。

「誰って？」

随分聞きなれないような、聞きなれたような名前だぞ？

「何してるの？ 早く上がって。お兄さんも待っていたのよ」

みーさんの声が響く。それはとても無邪気で、この上なく屈託のない物言いではあったけど…

って、おい。お兄さんて誰の事？ まさか俺の事？

ってことは、つまり、このミノ虫男は、まさか…

「正なのか？」

俺は言葉の通じぬ人に言うように、ゆっくりと一音ずつ区切って聞いた。

違う…というようにミノ虫男は首を振ったが、

「そうよー。正ちゃん最近よく遊びに来てくれるのよ。でも随分寒がりだと思わない？ あの格好」

罪のないみーさんの言葉が奴の逃げ道を完璧に奪った。

その時の気持ちをどうい言葉で表わせばいいのか分からない。
驚天動地とでも言えはいいのか？

俺は、人慣れぬ子猫にでも近付くように、用心深く弟の距離を縮めていった。

「正」

逃げるなよ。

「お前…」

たのむから…。

「ひきこもるの」

後少しだ。

「やめてたんだな？」

…兄ちゃんは嬉しいよ。

そう言いかけた時だった。

それまででくの棒のごとくそこにつっ立っていたミノ虫男は、く
るりと背を向けて脱兎のごとく…いや正確には脱ミノ虫のごとく駆け出した。

俺は奴が落としていった汚ねえ買物袋を跳び越し、スニーカーに無理矢理足をつまむと、奴の後を追いかけてようとした。しかし、靴ひもと格闘している間に随分距離を離れてしまったらしく、路地から表通りにとび出した時には、奴の姿ははるか橋を越えた向こう：視覚的に説明すればタバコのケースほどの大きさとなっていた。とはいえ、8年も引きこもっていたあげくの重装備の男に追い付くのはそれほど難しい事では無く、幸いそこから先が一本道だったせいもあり、あっという間に俺は奴を追いかけていた。：って、追いかけてどーすんだよって振り向くと、

「なぜ逃げる？」

と、鬼のような形相でたずねた。

すると、弟は俺の形相に怖れをなしたか、なんとこっちにケツを向けて逆方向に走り出した。

「おい！ どこに行く！」

もちろん俺はすぐに奴を追いかけてようとしたが、靴ひもを踏んですっ転んでしまった。ちくしょう、靴ひものばかやろう！ と悪態つきつつ靴ひもを結び直し立ち上がって前を見て俺は悲鳴を上げた。

「何してんだ！ バカヤロウ！」

：なんと、あのミノ虫男は：弟は、橋の欄干に足をかけ飛び降りようとしていたのだ。

『また』死ぬつもりか。あのバカ！

俺が駆け出した時、ちょうどみーさんが追い付いて来て弟の腕をつかんで引っばった。

「正ちゃん。ダメ！」

力まかせに引っ張ったからか、それとも奴の態勢がアンバランスだったためか、正の体は欄干から離れ、みーさんと重なったままアスファルトの上に転がった。

ギリギリセーフだ！

俺は走りながら安堵の息をついた。ところがだ、せっかく命を助けてもらったにも関わらず、あの弟はみーさんに向かってであろうことかこう叫びやがった。

「邪魔すんな」

そして、自分に折り重なるように倒れていたみーさんを突き飛ばした。

「おい！」

俺は驚いてみーさんに駆け寄った。そしてみーさんを抱き起こすと弟を怒鳴り付けた。

「何するんだ？ お前、彼女がどういう体か知ってるだろう？」

「…」

正はなにも答えない。しかもグラスンとマスクで顔を隠しているから表情からそのその思いを推し量る事もできやしない。

「おい、顔ぐらい見せたらどうだよ」

しかし、奴が俺の言葉に答えるはずもなく、すべての受付は終了しましたとでもいうようにあっちを向くと、再び欄干に足をかけた。

「おい！」

俺は慌てて弟に駆け寄り、後ろから羽交い締めにした。

「やめろよ」

すると弟はやっと俺の声に答えた。

「離せよ」

「何で死ななくちゃいけないんだよ？」

「あのゴミが裏切るからだろ？」

「ゴミって誰だよ」

「あのボロ女だろ？」

「お前、サイテーだな」

「裏切るから悪いんだろ？ 兄貴呼ぶなんてサイテー？ じゃないか」

もやし男の分際で、弟は異様に力が強かった。それで、揉み合ってるうちに、俺の手が奴の顔を隠したグラサンにひっかかり外れてしまった。月明かりの下、ギョロギョロした目が現れる。空洞みたいな目だ。その暗さに思わず身震いが走る。

「そこまで、俺達に見られたくないか？」

「いいから、離せよ」

「なのに、なんでみーさんならいいんだ？」

「うるせえ、離せ」

「みーさんのことを好きだからじゃないのか？」

「違うよ。あいつは『オレ以下』だから、俺が付き合ってやってるだけだよ」

その言葉に俺は少なからずショックをうけた。

「お前：何でそんな風にしか考えられないんだ？」

あんなに優しくかったこいつをこんなにしたのは一体なんなんだ？ などと、気を取られていたせいで弟をつかんでいた手の力が弱まったためだろうか？ とにかく、弟は一瞬の隙を見のがさなかった。欄干からぐっと身を乗り出し、いよいよ飛び下りようとする。

「おい！」

我に返った俺は、弟を助けようと欄干をつかみ思いきり前に身を乗り出した。そして、寸でのところ奴の体をとらえ、力まかせに

地上に押し戻した。

ところが、あまりにも勢いをつけ過ぎたせいだろうか？
弟を地上に押し戻した瞬間、妙に体が軽くなったのを感じた。

気がつくとい何の事はない、俺の体は仰向けのままで宙に浮いていたのだ。

30センチほどさきに欄干が見える。俺は手を伸ばしそれを掴もうとしたが、あっという間に欄干は見えなくなっていた。

仰向けのまま俺は落下していく。

頭上にぼう然と俺を見下ろす弟の顔が見える。

…なんでだ？

俺は虚空に向かって呼びかけた。

…なんで俺が死ななきゃいけないんだ？　こんな所で…！

何でこんなところで俺が死ななきゃいけないんだ？

落下しつつ俺は叫んだ：叫んだはずだった。

しかし、その声は激しい水しぶきとともにかき消されてしまう。そして、しばしの静寂の後、こんな言葉が水底から水泡とともに浮かんできた。

「別にいいんじゃないのか？ 死んだって。どうせどこにも辿り着けないなら、ここで全て終わらたところで構やしないんじゃないのか？」

「何をいうんだ」と俺は叫ぶ。

「死んでたまるか！ 絶対に」

すると水底の声は嘲るように答えた。

「じゃあたずねるが、お前この上生きて一体何をする気なんだ？ この世界でお前にできる事があるとでも思ってるのか？ いたずらに年だけ重ねて醜く老いさばらえていくだけが関の山じゃないのか？」

「黙れ！」

俺はその不吉な声にあらがうがごとく手足をばたつかせた。しかし思いのほか激しい想念の渦は、俺をからめとり容赦なく水の底へ

と引きずり込もうとする。

「いい加減、手を離しやがれこの死に神め！」

俺はもがいた。

「俺はまだ生きるんだ。俺にはまだ生きる理由がある！ 俺には絵がある。俺の絵を描くまでは絶対に死ねない」

「ふん」

再び声がする。

「絵があるって？ 笑わせるな。誰がお前の絵を評価してくれたよ。お前一人が勝手にすがりついてるだけだろう？ さっさと気付けよ。お前には何もないんだ。親を裏切り、自分勝手な事をしたあげく結局何も手に入れられなかった中途半端な人間のくせに、芸術だの何のご大層な理由をつけて現実から目を背けてるただの哀れな能無しだよ。この先生きてたって何もいい事なんかないさ。さあ、さっさと死んじまえ。楽になるぞ」

「いやだ、俺は死なない。まだ、死にたくない。俺は絵を描きたいんだ」

そう叫んだ時、後頭部に強い衝撃が走り、体中の力が抜けていくのを感じた。薄れ行く意識の中思う。：俺はこのまま本当に死んでしまうのだろうか？

目覚めると、俺は薄汚れた部屋のまん中で寝転がっていた。

…どこだろう？　ここは？

見覚えがあるような無いような奇妙な空間だ。じっと天井を見ていると、妙に懐かしいのと、妙ににがいのをごちゃまぜにしたような不思議な気分になって来る。

この『にがさ』は何だ？　大体俺は今までどこにいたんだ？　…何も思い出せない。

いつまでも寝転がっていても仕方がないので、立ち上がりカーテンを開けてみる。すると、目の前に見覚えのある風景が広がった。それは、懐かしい東京の、ごみごみとした下町の風景だった。…しかし、何でこんなところにいるんだろう？　何も思い出せずにいると、突然背後から明るいメロディーが流れ出した。

振り返るとテレビがついていて、顔なじみのアナウンサーが『今日の運勢』を告げている。テレビの右端に表示されている時刻はすでに8時過ぎだ。それを見たたん、突然焦りを感じた。今日は大学の前期試験の日だった事を思い出したのだ。俺はカバンに筆記用具とノートを詰め込むと、靴ひもを結ぶのもそこそこに部屋を飛び出した。

そう、俺はT大学の1回生だ。この春上京し一人暮らしを始めたばかりだった。正直、大学にも学部の中にもなんの魅力も感じていなかった。しかし、親の手前通いつづけている。大して面白い毎日でもないが、人生そんなもんだろう。

角を曲がると、坂の下に駅が見えてきた。既に電車が来ている。しめたぞ、あれに乗れば試験に間に合うだろう。俺は歩調を速めた。速めようとした。しかし、何かに足をとられて思うように進めない。

：なんでだ？ どうしてこう足が重いんだ？ 焦りながら下を見ると、驚いた事にアスファルトが割れてぬかるみになっている。そこへ足がめり込み、なかなか思うように進めないのだ。早く：早くと焦りながらずぶずぶと音を立てて前に進み、やっと駅にたどり着く。そこには長い行列ができていた。

：なんだこれは？ 何の行列だ？

イライラしながら前にいる若い男にたずねる。

「これはなんの行列ですか？」

すると、男は振り向いて答えた。

「切符を買うための行列だよ」

：おや？ ：と、俺はそいつの顔を見て驚く。

「お前、棚橋じゃないか？」

そう、そいつは大学でできた数少ない友人の一人棚橋だ。しかし、奴は俺の質問には答えず、かわりにこう言った。

「ずっと待ってたって切符は買えないと思うぞ」

「はあ？」

奇妙な事を言う奴だ。

「じゃあ、何でお前は並んでるんだよ？」

聞いてみるが返事がない。それどころか、鼻歌など歌いながら携帯をいじりはじめた。こんな奴相手にしてられるかと列を離れ、そういえば定期を持っていた事を思い出し、それで改札をくぐり、ようやく電車に飛び乗った。ところが、ホッとしたのも束の間。走り出した電車が何と反対方向に向かっていている事に気がつく。驚いた俺は車掌室に飛び込んだ。

「おい、進行方向を変えてくれ。逆だ、逆だよ」

ところが車掌は何食わぬ顔で電車を走り続けさせる。そのふてぶてしい態度に腹が立ち一発殴ってやろうとしたところ、後ろから親父の声が聞こえてきた。

「これでいいんだ。このまま行けば、お前の将来も安泰なんだ」
振り返ると電車の中のはずなのに、なぜかそこは実家の和室にな
っていて、親戚一同が集まって宴会をやっている。

「なんだよみんな？」
俺は面喰らって叫んだ。

「電車を私物化しちゃダメだろう？」

「良いのよ、優ちゃん」
おふくろが嬉しそうに言う。

「あなたの大学合格のお祝いのために特別貸し切りにしてもらった
の」

「なんだ？ そんな事できるのか？ 随分金がかかったろうなと思
ってたなら、母方のおばさんに話しかけられた。」

「T大合格おめでとう、優ちゃん。あなたなら、やると思ってたわ。
昔からうちの一族
の血をひいてると思えないほど優秀だったもんね」

その言葉に少々戸惑いながら、俺は本音をもらした。

「でも、俺、本当は絵の勉強をしたいんだ。本当は美大に行きたい
んだ…」

「何を言ってるんだ河井」

なぜかそこに居る高校時代の担任がビールを片手に首をふった。

「世の中に画家になりたいと思ってる人間が何人いると思ってるんだ？　その中で成功するのはほんの一握りの人間だぞ。それこそT大に受かるよりも倍率が高いんだぞ。バカな夢は持つな。さっさとあきらめるんだ」

「そうよ、優ちゃん」

おふくろがあいづちをうつ。

「芸大なんてものすごくお金がかかるの。国公立に行ってくれないと困るのよ」

「そうだぞ、優。お前は恵まれてるんだぞ。T大なんて入りたいからって入れるって所じゃないんだぞ」

父方のおじが言う。そして、

「うちの息子なんかバカだから大学なんか行かせずにとっと就職させたんだ」

と、ゲラゲラ笑った。すると、遠い親戚のおばさんが嫌みか皮肉かしらないセリフをぬかした。

「それでいいのよ。うちの子だって専門学校よ。でもいいの。大学なんて行かなくなっただけいいの。人間、学歴が全てじゃないんだから」かなりムカつく。

うるせえよ。俺だって別に行きたくてT大に行くわけじゃねえよ。それでも、これでも、皆様の期待に応えるために一応努力はしたんだよ。遊んでばかりいて権利放棄した奴に嫌みいわれる筋合いはねえんだよ。

とかなんとか思いながら大人達の馬鹿騒ぎを見ているうち、正の姿に気がついた。弟は、部屋の隅っこでつまらなさそうにぼつんと座ってる。そりゃつまらないだろうな。奴には関係のない馬鹿騒ぎだもの。それにしても、久しぶりにあいつの顔を見た気がする。こしばらく進路の事で手一杯でまともに話した事もない…というか、避けられてる気がする。中学校に入って以来、あいつ、なんかおかしいぞ。妙にきつい目をするようになった…。何か悩みでもあるの

か？

「おい、正」

俺は、弟に呼びかけた。奴に話さなくちゃいけない事を思い出したからだ。

ところが奴は俺に気がつくど、ふいっと立ち上がり部屋からでていってしまう。

それを見て、俺はなぜか非常な焦りを感じた。

：今、止めなくてはいけない。今、止めなくては…。今なら、まだ間に合うんだ。

何が間に合うんだ？　　と思いながら俺は弟の後を追った。

「正！　おい、正」

しかし、弟は耳のない人のようにどんどん先に進んで行ってしまふ。行く先は闇だ。そっちに行っちゃいけない！

俺は手を伸ばし、弟の肩をつかもうとした。しかし、もう少しで手が届くと思ったその時、キキーっと音を立てて電車が停止した。

扉が開く。

目の前にはT大の校舎がそびえていた。

俺は高校時代の担任と親戚一同に体をつかまれ、開いた扉から無理矢理大学へと放り投げられた。

見覚えのあるキャンパスは、雑多な人でごったがえしていた。試験の日だというのにまるで文化祭でもやっているようだ。

その人込みをかき分けて、俺は試験会場になる教室を探した。ところが、いくら階段を昇っても、どれだけ廊下の角を曲がっても、一向に目的の教室はみつからない。やばい。このままでは、試験がはじまってしまう。あせりながら、時計を見ると、既に試験開始時間は過ぎていた。

なんてことだ！ いや、まだ間に合う。少しぐらいの遅刻なら、試験官も大目に見てくれるはず……。とにかく急がないと……と、俺は走り出した。

息をきらして角を曲がったところで、窓の外を見て笑っている2人の女生徒を見かけた。俺は彼女らに駆け寄り、道を尋ねた。

「すみません。試験会場はどこですか？」

俺の言葉に彼女達が振り返る。その顔を見て、俺はかなり驚いた。なぜなら、それはみーさんと森崎だったからである。

「あれ？ 2人ともこの学校の生徒だったんだ？」

あっけにとられる俺に向かい、

「そうよ」

と二人は同時にうなずいた。

「でも、河井君試験なんか受けてる場合なの？」

森崎が言う。

「あたりまえだろ？　なんでそんなおかしな事聞くんのだ？」

「だって、画家になるなら試験なんか受けてるヒマはないはずでしょう？」

「画家にはなるさ」

俺は自信たっぷりに答えた。

で、答えてから、あれ？　と思う。

…何言ってるんだ、俺は。画家になるなんて夢は、あきらめたはずなのに。

そう、あきらめたはずだ。両親や担任に説得されて。

…大体、そんなものになれっこないんだよ。そうさ、夢なんて持つだけ無駄なんだ。

現代の若い奴よろしくシニカルに自嘲すると、みーさんが「そんなことないわよ」と首をふった。

「夢を持つのが無駄だなんて思っちゃだめよ。思った瞬間に何もかも終わるのよ」

「みーちゃんの言う通りよ」

と森崎がうなづく。

「人間はね、自分の持っている力を斉一杯に発揮して生きていかなくちゃいけないのよ。だから、河井君も自分の才能を斉一杯引き出す事を考えなくちゃいけないわ」

不思議だ。この二人は、なぜ心の中で思っただけの事に返事がで

きるんだろう？ それはそれとして、彼女らの言葉は、非常に説得力があったし、なにより力強く感じた。それで、俺も「そうだな」と、うなずき、うなずいてから始めて俺はみーさんの異変に気がついた。

「あれ？ みーさん、腕のケロイドは？ 顔の傷も消えてる…」

そう。今、俺の目の前にいるみーさんは、…おそらくこれが彼女の元の姿なんだろう…全ての傷が消え、とても美しかった。

みーさんは答えた。

「ああ。あれなら、外したの。でも、すぐにまたつけるつもりよ」「どうして？ 今の方が綺麗だから、今のままでいれば？」

「あら？ 私はあのままの姿が気に入ってるのよ。もしかして、優ちゃんはあの姿がみつともないと思っているの？」

「別に…そんなことはないけど」

と、いいつつ目をふせる俺をからかうようにみーさんが言った。

「優ちゃん、嘘をついているのね」

「嘘なんか…」

俺はごまかそうとして、その努力が無駄な事に気付く。だって彼女らには心が読めるのだから…。案の定、みーさんには俺の心などお見通しだった。

「別にいいのよ。優ちゃんのように感じて普通なんだもの。問題は私がどう思うかだわ。そして、私は恥ずかしいと思ってないからいいのよ。だって、私は私なりに斉一杯に頑張って、胸をはれる生き方をしてるもの。それで十分じゃない？」

その言葉を聞いて、自分が恥ずかしくなる。

俺は、五体満足のかせに、そして、人より少しばかりいい大学に

行く頭を持っているくせに、何もかも中途半端な生き方をしている。そのおかげで、こんな迷路に迷い込み、何年も出られずにもがくはめになっているんだ。

俺は、2人にたずねた。

「ねえ、どうしたら、この迷路から抜けだせるのかな？」

「出口は自分で見つけなくちゃ」と森崎が言う。

「優ちゃんの好きな道に行くのが一番よ」とみーさんが答える。

「いくら探しても出口は見つからないし、自分の好きなようにやったら、両親を裏切る事になる」

俺は二人に言った。

二人は何も答えなかった。

そのかわりに、みーさんが

「そろそろ着替えなくちゃ」

と、ケロイドと傷を身に纏った。

「あれ？」

俺は驚いて声をあげた。

なぜなら、傷を身に纏ったみーさんが、目の前でみるみるうちに一枚の絵になったからだ。

しかも、その絵を俺は知っていた。

「おい、見ろよ」

隣の森崎に言う。

「あれだよ、あれ。俺の言ってたあの絵。師匠の描いた傑作『つぎ

はぎのマリア』だ！ 俺の運命を変えた絵だ」

けど、既に俺の隣には森崎はおらず、あたりは真っ暗やみになっていた。その闇の中、みーさんが姿を変えたマリアの絵が映画のスクリーンにうつる映像みたいに光っている。その美しさと大きさに圧倒されていると、どこからか声が聞こえて来た。

…兄ちゃん、ごめんな兄ちゃん…

誰だ？ と思った途端にマリアの姿がぼやけて、体が宙に浮かんだ。そのまま仰向けに宙を漂っていると、手にあったかい感触がある。誰かが手を握っているらしい。

…誰だ？

閉じていた目をうつすら開けてみると、天井が見えた。そしてさっきの声が、さっきよりもはっきりと聞こえて来た。

「兄ちゃん、ごめんな兄ちゃん」

相変わらず、宙に浮かんだようなぼやけた気分なのに、俺のもう一つの意識はその声の主が誰か分かっているらしく、

「正か…」

と、うめくような声を出した。

すると、弟が俺の顔をのぞき込んで叫んだ。

「兄ちゃん！ 目を覚ましたか？ 兄ちゃん！」

「お前…いつ東京に来たんだ？…」

「は？」

弟が訝しげな顔をする。

…そりゃそうだ、何おかしな事聞いてるんだ、俺は…。

混濁した意識の中で、しかし弟にどうしても伝えなくちゃいけない事があった事だけを明確に思い出す。そうだ、言わないと。今、言わないと…。

俺は、必死で口を動かした。なぜか、言葉がスムーズに出ない。それでも、ようやく言いたい事を言い切ると、全ての仕事を終えた人みたいに俺はゆっくりとまぶたを閉じた。

気がつくと再び俺はあの絵の前に立っていた。

その女は、胸に十字架を抱いて花の上に横たわっていた。

栗色の長い髪が色とりどりの花の上を川のように四方に流れ出している。

美しい女だが、その体には、まるで陶器に入ったひび割れのような、細かな線が無数に入れられている。

『つぎはぎのマリア』

というタイトルから、この女性が聖母である事が分かる。しかし、それはいわゆる聖母には少しも似ておらず、むしろ、今風のどこにでもいる日本人の女のように思われた。

それにしても、不思議な絵だ。

技巧的には、とりたてて優れているとは思えない。線の引き方は大雑把だし、デッサンも正確とはいいがたい。適当に走り描いたような線の上に、これまた無造作に色がのせられている。にもかかわらず、なぜか、背景の花々は光り輝くように見えた。何よりも俺を圧倒したのは、その女の姿だった。それは、今にも：そう今にも声を立て起き上がりそうな、そんな命の息吹を感じさせたのである。

：なんだろう？ このリアルさは？

俺は、無造作に重ねられた線と色の集合体に見入った。

しかし、どう眺めても、やはりとりたてて何が優れているとも思えない。正直、技術だけなら俺の方が上とすら思われる。なのに、

なぜ、こう胸に迫って来るのか？ その謎を解くために俺は一本一本の線を指でなぞってみた。しかし、謎は解けそうにもない。結局、最後にこう思いついた。

…そうだ。実際に描いてみればいいんだ。

思いつくや否や、俺は傍らの画用紙と鉛筆を手にとり、目の前の絵を丹念に模写し始めた。それは、さほど難しい作業ではなかった。その証拠に、俺はあっという間に、色も線も、キャンバスの大きさまで正確にその絵を写し終えたのである。そして、それをオリジナルの絵と並べてじっくりと眺めてみた。何の遜色もない。寸分の違いもない。優れたコピーである。ただ一つを除いては。

「ダメだ…」

俺はため息をついた。

俺の絵は生きていない。魂がこもっていない。

俺は、自分の絵をカッターで引き裂くと、もう一度模写をはじめた。しかし、やはりうまく描けない。何枚描いても結果は同じだった。俺の絵は断じて魂を持つ事はなかった。

ついに断念し、俺は別なモチーフを求めてその場を離れた。その頃には忘れていた絵への情熱をすっかり思い出していたのだ。

街はモチーフで溢れていた。

捨てられた空き缶の屑、薄汚れた標識、ガード下に停められた車…すべてが俺の絵心をそそる。しかしとりあえずは、でかい墓石のようなビルの数々を写し取っていく。決して命のやどりようなない無機質な物体ではあったが、それらを正確に写し取る事は自分の性

にひどくあっており、出来上がりにも十分満足できた。いつしかその作業に俺は没頭しつづけ、そして、何度も月は昇り、日は沈み、描き散らした絵が100枚を越える頃、俺は試しに自分の絵を売ってみる事にした。

駅前の人通りの多い路上。

そこは、夢の吹きだまりだった。

明日のスターを夢見るストリートミュージシャンが、あちこちで声を張り上げている。自分の絵を並べて売っている奴もいるし、インチキくさいアクセサリーの販売をしてる外人の姿も見える。

俺も仲間に加わり、その一角に自分の絵を並べてみた。時おり、足を止めて眺めてくれる人も居たが、大方は一瞥もせずに通り過ぎていく。しかし、それでも稀に買ってくれる奇特定の客も居た。

時間を持て余した時は、画用紙に絵を描いていた。そんな時は、いつもあのマリアを描くのが習慣になっていた。

売っている絵は無機質な物が多かったが、あの、生き生きとしたマリアを自分の手で再現する事を、俺はまだあきらめてはいなかった。しかし、最近ではすっかりあの絵の記憶がおぼろになっており、消えかかった思い出の線を辿っていても一向にうまく描けない。…なぜだろう？ あの展覧会の間中、あの絵を見るために、毎日のようにあの画廊に通ったのに。心の奥底。深層心理には、しっかりと焼き付いているはずなのに…。

朧げな記憶を、さらにかき乱すように、北風が頬をうつ。その冷たさに、雑念が戻る。…集中力が途切れると、ケツが痛くなってくる。おまけに寒い。手も冷えて来た。無理もない。もう、11月も半ばだもんな。そう、もう11月だ。早いもんだ。そういえば、俺いつから大学に行ってなかったっけ。8月に退学届けを出したんだっけ。お袋、泣いていたなあ。親父は怒っていたなあ。正の奴はあの場に居なかったが、元気なんだろうか？ それにしても、本当に

これで良かったのかな。いや、これでいいんだ。思ったんだ。俺にはやっぱり絵しかないって。それを思い出させてくれたのは、あのマリアだ。彼女が俺に絵を描く事を思い出させてくれた。そう。あの時、あの絵に出会ったのが運命なんだ。あれは、啓示だ。言いかえるなら奇跡だ。そう、奇跡は時おり起きる。例えば、こんな風に…。

それは、12月の寒い夜の事だった。

俺はいつものように駅前で絵を売っていた。

人通りも少ない日で、時間を持て余した俺はかじかむ手で例のマリアの絵を描いていた。

その時、目の前で人が立ち止まる気配がした。

無頓着に落書きを続ける俺の手元を覗き込み、その客は言った。

「ちょっといいかな？」

「はい？」

俺は無愛想に顔を上げて返事をした。返事をしてから驚きのあまり目をぱちくりとさせた（と思う）。なぜなら、そこに立っていたのは、あの『つぎはぎのマリア』の作者であり、そして後に俺が師匠と呼ぶ事になる、菊池大成だったからである。

彼は屈託のない笑顔で俺の描いた東京タワーの絵を指さして俺に尋ねた。

「この絵、いくらかな？」

∴生きていると、時おりこんな奇跡に出会う事がある。だから生きていこうと思えるのだ。たとえそれが果てのない迷路だとしても。

そのアトリエは十字路のまん中にあった。

8畳ぐらいの日あたりの良い部屋で、真冬でも暖房がいらぬほど暖かく、平凡な会社員のアトリエとしては上出来だった。

壁には大小の絵が飾られていて、花や、和服の女、ピンクのドレスの童女、陽光を受ける海原、なぜか懐かしい田園風景等々が描かれていた。空中にも絵が浮いていて、その中からは、風のそよぐ音や、潮騒が聞こえていた。驚いた事に、絵はその世界の入り口になっていたのだ。もし、それらが頭より低い位置にあれば、くぐって行ったかもしれないが、残念ながらから全て高い所にあるために、それはできなかった。アトリエの左の壁には、菊地大成の住む郊外の平凡な風景が描かれていた。それはまだ描きかけだ。

右側には例の『つぎはぎのマリア』が飾られているが、他の絵のごとく世界の入り口にはなっていないかった。にもかかわらず、師匠は「この絵は『右のアトリエ』に続く扉なんだ」と言った。それがどういう意味かは分からない。

正面はアーチ型の出口になっていてその先は霧で隠れている。「この道はどこに続くのか」と尋ねたら、「知らない」と師匠は首を振った。そして、俺の後ろにも道があって、それは駅の路上やら、大学のキャンバスやら、もっと向こうには俺の家まで続いていた。

それにしても、奇妙な風景だ。

「師匠のアトリエって、こんなだったけ？」

俺は思わず口に出してしまった。

あの、路上での出会いから半年、もうすっかりここはおなじみの場所のはずなのに、どうにも違和感を覚えて仕方が無い。ところが、師匠は返事もせずに、真剣そのものでキャンバスに向かっているから、仕方なく俺も持って来たスケッチブックになんやかやと描いて

みた。しかし、相変わらず思うように描けないので、すぐに飽いて目の前の大成の横顔を眺めた。

40過ぎの師匠の横顔は、どこことなく高校時代の美術の教師を思い出させた。画家ってのはみんなこんな感じなのかと自分の顔を鏡に映してその差にがっかりする。

それにしても、相変わらず師匠の描く絵は美しかった。人も、町並みも、路傍の花でさえ、なんでそんなつまらないモチーフがそんなに綺麗になるんだって感じに写し取られていく。つまり、この人には世界がこんな風に見えるのかと、その事自体が俺には不思議だった。

そして、もう一つ特筆すべきは、彼が左手で絵を描く事だ。別に左利きだというわけでは無い。右手が不自由なわけでも無い。それである日、なんでそんな妙な事をするのかと聞いてみると「この方が、いい絵が描けるから」との答えがかえって来た。

そういうもののかなと首をひねりつつ、俺も試しにやってみたが、にわか仕込みの左利きでうまくかけるわけも無い。どうやら、俺にとっては右手とか左手とかいう事と、絵の良し悪しとは関係なさそうなので左で描くのはあきらめた。それでも師匠の絵の秘密をどうしても知りたい俺は、とりあえず師匠の筆遣いを見て学ぶ事にした。

「パパ」

突然可愛い声がして、小学2年生になる師匠の娘さんが入って来た。

「おやつだよ」

少女はそういうと、可愛い手でお茶とロールケーキを置いて行く。

それを機に、師匠は筆を止め、「少し休もうか」と屈託のない笑顔を浮かべた。その表情を見た時、もしかしてこの笑顔こそが、師匠の絵の秘密かもしれないと思う。もしそうだとするのなら、俺にはひどく遠い世界だ。

それでも、師匠と過ごす日々は、ひどく楽しかった。

師匠を通じて知り合った人々、同じく絵を描く人、そうでない人、みな気さくで優しかった。

いつしか、俺と同じく師匠の絵に魂を奪われた彼女：彩香と付き合うようになった。バイト三昧の貧しい生活だったが、かかつてない充実感を覚えていた。後から続く道、今いる場所、そして霧のかかるはるか向こうを眺めながら「これでいい、このまま行けばいい」と、心のどこかで思っていた。そうこうしているうちに、師匠の絵が認められるようになり、とうとうそれだけで食べていけるまでになった。それが実力の差である事を思い知らされたものの、俺達は素直に師匠の出世を喜んだ。事務所を立ち上げたあの日は、彼女と俺と師匠の3人、徹夜で祝杯を上げた。2月の寒い夜の事だった。ビルとビルの間に浮かんでいた月の姿を今でも覚えている：

「優？…優？」

どこからか声が聞こえる。

聞き覚えのある声だ。

あれは、おふくろの声じゃないか？

俺はゆっくりと目をあけた。
やけに白い。霧がかかっているようだ。

…どこだ？　ここは？

しばらくぼんやりとしているうちに、ピッピッと規則正しい音がしているのに気が付く。音がする方を見たら、武骨な機材のてっぺんのモニターの黒い画面の上に緑色の光が波打っているのが見えた。

だんだん記憶がはっきりして来る。…そうだ。俺は正を助けようとして、橋から川に落ちたんだ：

おふくろが泣いている。よく見ると背後にオヤジも立っている。
…正は…？

「正は家にいる」
と、おふくろが言った。相変わらず部屋にこもっているらしい。
が、しかし、あの夜俺を川から助け出し、救急車を呼んでくれたのは正なんだとおふくろが説明する。

「そうか」
と俺はうなずいた。あいつがなあ…と思う。

そうだ、これが俺の今いる場所だった。俺は戻って来たんだ。あの、十字路の霧のかかった道のはるか彼方に。

俺は再び目を閉じた。しかし、もうあの夢は見ないだろう。なにしろ、もうすっかりここに戻って来たのだから。

別にだからといって残念とも思わない。

ただ一つ後悔があるとすれば、あの十字路の上のアトリエで『右侧のアトリエ』を覗かなかったことぐらいだ。

意識が戻ってからしばらくして、俺が入れられているのがICU（集中治療室）である事を知った。

たかが溺れたぐらいで大袈裟だ。水さえ吐き出させればそれでOKじゃないのかと看護師に尋ねたところ、肺に水が入っていた場合、肺水腫や感染症などで死ぬ事もある。一見元気に見えても、時間がたってから感染症で死ぬケースもあるから、これは決して大袈裟な処置でもなんでもないんですよとの返事だった。なるほど。納得する。

幸い、俺は肺水腫にもならず、感染症にもかからず、2週間ほどで退院できる事になった。しかし、入院した時期が年末だったため、病院から出た時にはすっかり年が改まっていた。

「去年は大変な1年だったわね」

車に荷物を運び入れながら、おふくろが言う。

「もう、こんな事はこりごり。今年は、何ごととも無く過ごしたいものだわ」

まったく、おふくろの言うとおりだ。去年は大殺界かというぐらい、次から次に大事件が起きて心が休まるヒマも無かった。今年は平穩無事に過ぎて欲しいものだが…。

しかし、願いも空しく、次なる事件が退院早々の俺を直撃した。

なんと、正の奴が失踪したのだ。

『お父さん、お母さん、お兄ちゃん
少し出かけて来ます。

いつ帰るか分かりませんが、
ちゃんと帰るので心配しないでください

お兄ちゃんへ

お兄ちゃんの言うとおりにやってみようと思います』

という書き置きをテーブルの上に残して、ある朝、家族が目覚
ました時には、既に姿をくらましていた。

はじめは、冗談だと思った。

なにしろ、鶴のごとく他人に姿を見せるのを拒否っていた弟だ。
それが、よりによって家出などという大冒険に踏み出すとは到底
信じ難い。

しかし、弟の部屋を覗けば誰も居ないし、おふくろの10年来の
友である赤色のママチャリも消えている。それだけではない。おふ
くろが通販で買った黄色の風水財布も無くなっていた。その中には
生活費3千円と、残高10万円のキャッシュカードが入っていたら
しい。それだけの装備で奴は世間という大海原へ漕ぎ出したわけだ。

大丈夫。あいつにそんなに遠くへ行く根性があるわけがない。す
ぐに戻ってくるさ、…という俺の見解も空しく、弟は戻って来なか
った。5日、6日たっても、1週間たっても戻って来なかった。

日が経つにつれ、おふくろは無口になり、ひたすらテレビの画面
ばかり追うようになっていった。もしかして、何かのニュースで弟
の消息が分かるんじゃないかと思っっているようだ。時おり、テレビ

から目を離れた時には、俺に恨みがましい視線を向けて「あんた、一体あの子に何をそそのかしたんだ？」と詰問する。それは、奴の書き置きの最後のフレーズによるものだろうが、残念ながら、まことに遺憾ながら、何ひとつ記憶にない。「そんなはず無いでしょう？　ちゃんと思ひ出しなさい！」

おふくろはガキを叱りつけるように言った。その迫力に寝小便をたれていた頃のトラウマが疼いたりもしたが、そんな事言われたって、思ひ出せないものは思ひ出せない。大体、引きこもりきりだったあいつと、働き通しの俺が、口をきくヒマなどほとんど無かったのだ。その数少ない記憶を何度掘り返しても思ひ出せないのだから、俺、やっぱり何も言っていないんじゃないかな？　そう言ったら、おふくろはますます恨みがましい目で俺を睨み、最後には「そう、思ひ出せないなら仕方がないわね」と悲しげにため息をつく。良心が痛む。俺のせいなのか？　いいや。絶対に違う！　弟よ、よくも兄に冤罪を着せて、のうのとママチャリなんぞに乗って明日の風に吹かれていられるな。お前に人の心があるなら、今すぐ連絡して来い！

無口の時期を過ぎ、おふくろはどうとう寝込んでしまった。

警察に届けて欲しい、という願いをオヤジはなぜか却下する。

「大丈夫だ。あいつも男だ。何とかするだろう。お父さんも若い頃、自転車で随分遠くまで行ったもんだ。男には冒険が必要だ！」

遠い目をして語るオヤジを、おふくろが叱りつけた。

「何が冒険よ！　あなたとあの子じゃ、条件が違い過ぎるでしょう！」

確かに、大学時代に柔道部の副主将まで勤める体力と根性の持ち主だったオヤジと、モヤシ男の弟では条件が違い過ぎる。しかし、この件については、俺もオヤジの肩を持ちたかった。

「ああ見えて、あいつも子供の頃はスポーツが好きだったじゃないか。大丈夫だよ。あいつは、オヤジに似てる」

すると、またおふくろが恨みがましい目を俺に向ける。その目が『あんたのせいで正ちゃんはいなくなっただんでしょう?』と訴えかけている。おそれをなした俺は慌ててフォローを入れた。

「どっちみち、金がつきたら帰ってくるさ」

「あの子はキャッシュカードを持ってる」

と、おふくろ。

「大丈夫だよ。暗証番号が分からないだろう?」

「すぐに分かるわよ」

そういつて、おふくろは背中を向ける。

「分かったなら、分かったで:」

そこまで言って、俺は膝を叩いた。

「そうだ。通帳があるだろう。通強記入すれば、いつ、どこでおろしたか分かるぞ」

その言葉でおふくろが目を輝かせた。

「そうね。通帳は和室のからくりダンスの中にあるわ。頼める?」

「分かった、すぐに調べて来る!」

善は急げとばかりに、通帳を持って駅前の郵便局に駆け込む。その結果判明したのは、弟が家出した翌朝、隣町の駅前郵便局で残高全てをおろしてしまっていた事だった。

この結果を両親に知らせたところ「だから、お父さんの誕生日を暗証番号にするなんてやめようって言ったのに」と、おふくろがオヤジを責めはじめた。すると、オヤジはオヤジで「何年前の話だ。今はキャッシュコーナーでも手軽に番号の変更ができるのに、そのままにしておくお前が悪い」と言い出す始末。

阿呆らしくなって、弟の部屋に行く。

部屋の中は見違えるように綺麗になっていた。おふくろが掃除をしたらしい。

乱雑に散らばっていた雑誌類は壁際にきちんと積み上げられ、布団もたたまれて部屋の隅に置かれている。奴が中学の頃買い入れた

勉強机はそのまま、その上に寡黙なパソコンが暗い画面をこちらに向けていた。壁にはカレンダーが貼られていて、なぜか1999年の7月になっている。いまさら、ノストラダムスかよと失笑するが、ふと素に帰って思う。あいつはこの日付けを…世界最後と言われた日付けを…どんな思いで見えていたんだろう？

失踪の手がかりになるものでもないかと、机の引き出しをあけてみる。すると、雑然とした中に1葉の写真を見つけた。修学旅行の時のものらしい。数人の女子高生が写ってるものが1点。なんだこりゃ？ さてはこの中に好きな娘がいるのか？ しかし、どの娘だろう？ 右端は…ちがうな。派手すぎる。まん中右も…違うな、右端と大して違わない。左端は、絶対じゃないな。じゃあ、まん中左の彼女か？ そうだ。違いない。あいつにも、こんな頃があったんじゃないか…なのになんで、引きこもったんだろう？

写真を片付けると、俺はパソコンに目を向けた。正直、俺はインターネットと言いうものに全く興味がない。というか、興味を持っているヒマがなかった。何しろ、東京時代は金がなくてパソコンを買うどころではなかったし、こちらに戻ってから、特に必要とする事がなかったから、敢えて近付こうとも思わなかった。

しかし、ひきこもる人間にとっては、これが全世界の事もあるらしい。弟もそうだったんだろうか？ …そういえば…と、そこまで考えて甦る記憶があった。弟は、パソコンのメルアドから、みーさんと連絡をとっていたと聞く。もしかして、彼女なら何か知っているんじゃないだろうか？

思いつくや否や、俺は携帯を取り出し、みーさんにメールをうった。

『正から、何か連絡来ていませんか？』

打ち終わるとすぐに、着信があった。

みーさんから！？　　と思い画面を見る俺。

しかし、それは、みーさんからの着信ではなかった。

そこに表示されたのは、もっと、思いもよらぬ人の名前だった…！

「もしもし」

俺は電話に出た。

そして、出てしまってから後悔した。

別に相手が嫌いなわけじゃない。一生着信拒否したいという訳でもない。

ただ、この状況下で話せる相手ではないというだけだ。

といって、放っておくわけにもいかない相手だというのも確かだった。いずれは何かの形で決着をつけないといけないと思っていた。正直もう、電話はこないと思っていた。もしかして、自然消滅もあり得ると思っていた。しかしやはり何かの形で決着はつけようと思っていた。弟の事が片付いたらそうするつもりでいた。

それだけ俺にとって大切な事だった。少なくとも弟の行方を案じながら考えられる事ではなかった。

だから無理に頭の片隅に追いやっていたのだ森崎の事はノ。

そう。電話の相手は森崎だった。彼女は最後に別れた11月のあの日の続きみたいなさつけないさで『お久しぶり』でも『元気だった?』でもなく『昨日東京から戻って来たの』と言った。

あまりの脈絡のなさに面喰らいながらも、一応「そうなんだ」と返事して、そしてこう付け加えた。

「で、俺、森崎が旅行に行くって事聞いてたっけ?」

『言っていないわ』

と彼女の返事。

俺は気まずさを忘れて思わず吹き出した。…まいった、森崎って天然だっけ…? とは口に出さなかったが…。しかし、そんな俺の思いとは裏腹に、森崎の声は真面目だった。

『今日、みーちゃんに聞いたけど、河井君、溺れて入院したんだってね』

「ああ。知らなかったの?」

『旅行先に、携帯持っていかなかったから…』

「どうして? 携帯ないと不便だろ?」

『別に…たいした理由ないけど…それより、重態だったって聞いたけど…大丈夫なの? 後遺症とかないの?』

「ああ。…今はぴんぴんしてるよ」

『そう…良かった…』

耳もとに安堵のため息が聞こえて来る。

それから、しばらくの沈黙が流れ、忘れていた気まずさが戻って来る。そして、今の俺には森崎に言うべき言葉が何もない事に気付く。なぜなら弟の事で頭が一杯だからだ。だから、俺は改めて電話するといって電話を切ろうとした。ところが、一言も何も発しないうちに森崎が口を開いた。

『私ね、年末からずっと東京に行ってたんだ』

「え?」

驚く。

「年末からっていうと、ひと月も? …ずっと?」

『そう。ずっと』

「会社は?」

『辞めた。元の…デザイナーの仕事に戻ろうと思って』

「でも、ひと月も…どこに泊まってたの?」

『親戚が居るし。それに、友達も何人かいるし』

「そう…楽しかった?」

『楽しかったよ。年末はデイスニーシーに居たの』

「そう。良かったね」

『友達に色々案内してもらったのよ。カオスにも行ったわ』

「カオスに行ったの?」

カオスとは、俺が師匠の絵に出会った地下の画廊だ。

『うん。ちょうど、好きな画家が個展やってたからだけど』

「けっこう風情あるだろう？」

『あるね…それで…そこでね、河井君にそっくりな人見たのよ。河井君かと思った』

「それは無いよ」

『でも、そっくりだったわよ。見たのは一瞬ですぐ消えちゃったけど』

「じゃあ、生き霊とばしたかな…？」

俺の下らない冗談に『飛ばしたのかも』と彼女は少し笑った。

『でも、それで、私思ったの…こんなところで河井君の幻見るなんて…重症だなんて』

「え？」

『それで私ね…』

そこまで彼女が言った時、耳もとで携帯が震えた。メールが来たようだ。…多分、みーさんからだ。

「森崎、ちょっと待ってくれ」

俺は森崎の言葉を強く遮った。

『え？』

森崎の戸惑った声が聞こえた。

『どうして？』

「どうしてって…それは…」

それは、メールがついたから…という理由ばかりでもなかった。

『河井君…また逃げるの？』

「違う。そういう事じゃ無くて…」

今は答える言葉が無いからだとも言えず

「弟が…」

あまり、言いたくなかったが…

「弟が行方不明なんだ…」

『え？』

再び森崎の驚く声が聞こえた。

『弟さんが?』

「そうだよ。あいつ、半月前に家出して、それきり戻って来ないんだ。それで、みーさんに何か知らないかさっきメールして…今、返信があったんだ。だから…」

『本当に? 本当に弟さん行方不明なの?』

「本当だよ」

『…でも、今日みーさんの携帯に、弟さんからメール来てたよ?』
「え?」

こんどは俺が驚く番だった。

『弟さん、毎日メールくれるって言ってたよ、みーちゃん』

「そんなバカな…あいつ、確かに家出して…それで、おふくろは寝込むし家の中はめっちゃめっちゃなんだ。それに、あいつ携帯なんて持っていないし。なんでメールができるんだ?」

『それが本当なら…』

森崎は少し間を明けて、こう言った。

『ネットカフェからじゃないかな? フリーメールのアドレス持ってたば、どこからでもメールできるよ』

「そうか…!」

そういえば、あいつはパソコンからみーさんにメールしていると
言っていた…。

「でも、どこのネットカフェだろう?」

『それは…ネットカフェはどこにでもあるから…あ、でも…ねえ、それなら弟さんパソコン持ってるよね』

「ああ。持ってるよ」

と、俺は後ろを振り返り、奴の机の上にあるパソコンを見た。

「多分…一日中こればかりやってたんじゃないかな?」

『だったらさ…ブログとか、サイトとか持っていたんじゃないかな?』

「…どうだろう? やってても不思議じゃないけどな」

『調べてみたら? もし、弟さんがネットカフェから書き込みして』

れば、行方を知らせる手がかりを残してるかもしれないよ』
「なるほど…！」

俺は森崎に礼を言うと、携帯を切り、さっそくパソコンを立ち上げてみた。

半端な知識であるが、サイトを探すぐらいの事はできる…はずだ。

心配するまでもなく、すぐに弟のサイトは見つかった。

デスクトップの『お気に入り』と書かれたフォルダの中に『僕のサイト』というファイルがあったからだ。

俺は「eマーク」のついたそのファイルをクリックした。

すると、どくろ模様のなにやら禍々しい画面が現われた。

そのまん中には、趣味の悪い赤色で「土ン中」という文字がでかでかと掲げられ、その下にはこれまた趣味の悪い薄もも色で、こんな文が書かれていた。

『世界は広いと言うけれど

僕の世界は土の中の穴ぐらだ。

世界には色んな色が有るというが

僕の世界は真っ暗やみだ。

なぜなら、僕はもぐらだからだ。

もぐらには、遠くまで旅する足もないし、
色を見るための目だってない。

でも、ああよかった

僕にたくましい足がなくてよかった。

そんなものがあったら、

僕は世界の果てまで行きたがっただろう。

ああよかった

僕に目がなくてよかった。

そんなものがあったら、

きっと僕はいろんな色を見たくて仕方なかっただろう。

はじめから足も目もなければ、

この世界で安心していられる

僕は土の中にすむもぐらだ

「土の中」作／土中 喪黒う』

…なるほどな…。

たいしてうまい詩とも思わないが、気持ち伝わって来る。

…けどお前には足も目もあつたんだよな…。

俺はため息をつくとき、もっと下の画面を見るために、マウスのボタンをスクロールして行った。

20 (後書き)

ここまで読んでもらってありがとうございます。

これからはちよつとペースをあげて更新していく予定なので、どうぞよろしくお願いします

『土中喪黒う（つちなか もぐろう） 2?才 高校中退 無職
ヒッキー暦8年 未来の大詩人にして大作家』

それは、どくろ模様が縦横に連なる、はっきりいってセンスねえ背景の上に、まがましい血文字で書かれた一文だ。もっと詳しく言うなら、弟が自分のサイトに載せた自己紹介文だった。

「なにが未来の大詩人だばかやろう」

俺は軽く毒づく、ブラウザバックしトップページに戻った。そして、目を皿のようにしてそこに書かれた全文章を読んで分かった事は、どうやら弟が生意気にもこのサイトに詩や小説を発表しているらしいことだった。しかも、さらに生意気な事に、奴はブログとやらまでやっている。マイブログと書かれた文字をクリックすると、アホの一つ覚えのごとき黒いトーン一色のダークなページが現われた。そして、右上にはやっぱどくろがいる。他にやりようはないものか……と思ったが、とにかくにも、それが奴のブログだった。

何が書いてあるかと読んで行けば、俺の知らないアニメやライトノベルへの、偉そうな批評批判が延々と書かれている。そして、これらの記事に紛れ込むようにして、時々「死ねればいいのに」という独白があったり、または明らかに俺と思われる男に対する罵詈雑言が書かれていた。それを要約すると、大体こんな感じだ。

『大学中退のへボ絵書きにもなれない負け組フリーターのくせに、上から物言ってるんじゃないやねえ』

さらにそういった文章の後には、必ずといっていいほど、どこの

どいつかも分からない連中からのコメントが山のように寄せられていた。それらを極端に短く要約すると、大体こんな感じになる。

『バカ兄貴逝ってよし。首吊って、氏んでこい』

「なんだとこのやろう」

と、書き返してやろうと思ったが、同レベルに落ちるのが嫌なのでやめておいた。

さらに、奴の書いた小説なるものを読んでみる事にした。

が、しかし、自称『未来の大家作家』にしては、お粗末すぎるものばかりで、いずれも10行と読めない。唯一読めたのは、ひきこもりの男が回想する『青春☆ひきこもらー』という小説だけであった。それは大体こんな内容だった。

できのいい兄貴をもった高校1年生、山田亜矢松という男がいた。元来、小心で内気な男だったが、非社交家な兄、勉に対抗するために、必死で社交家を演じていた。

亜矢松はクラスメイトに好かれるために、道化を演じた。それでかえってなめられて、パシリ扱いになる。それでも、亜矢松はクラス内の居場所も見つけ、辛うじて平穏な日々を送っていた。

そんな亜矢松に親友ができる。そいつは他のクラスの因幡という男だ。

二人が出会ったのは学校の図書館だった。亜矢松は元々本など読む奴でもなかったが、好きな女が図書委員だったのではしばしば通っていた。そこに毎日因幡も来ていたというわけだ。二人はしょっちゅう顔を合わせているうちに、話すようになっていった。

因幡はいじめられていて、しょっちゅうアザを作っていた。しかし、因幡はいつでも全く平気な顔をしていた。それどころか、イジ

メでしか自己の劣等感を晴らせない連中を哀れんでいるような風さえあった。そんな因幡の態度に亜矢松はいつしか尊敬の念を抱くようになっていった。

それだけではない。相手が孤立しているという安心もあって、普段、つるんでいる仲間には言えない愚痴や本音も因幡には語る事ができた。因幡は、亜矢松の話に熱心に耳を傾け、そして、冷静に分析し、助言をくれた。読書家の因幡は博学だった。自分の持っている知識を惜しみなく亜矢松に与えてくれた。

次の年、2人は同じクラスになった。しかし不幸にして、昨年来因幡をいじめていた連中も同じクラスになったため、因幡はまたしてもいじめられる事になった。それを見た亜矢松は…。

亜矢松は見えて見ぬふりをした。

無理もない事だ。

因幡を虐めるグループは体格もよく、あまりにも凶悪すぎて、ひよわな亜矢松が到底戦いうる相手では無かった。亜矢松が逃げたといっって誰が彼を責められるだろう？

誰だって一番大切なのは、自分の身の安全なのだ。そう。いつだって『誤りし彼』を責めるは他人ではない。『彼』を責めたてるのは他ならぬ彼自身なのだ。哀れな亜矢松も己の心に責め立てられた。責められ、責め立られ、ついに耐えられなくなった。そして、ある日ついに彼は爆発した。因幡を虐める連中の前に果敢にも挑みかかり、友人を守ったのだ……おろかでお人好しの亜矢松。その結末も知らずに…！

ここまで読んで俺は思った。…これは実話じゃないのか？ そして、さらに文字を追って行く。

身の安全よりも友情をとった亜矢松の勇氣に、その日、因幡は心から感謝してくれた。

彼は『ずっと虚勢をはっていたが、本当は辛かったのだ』と告白して泣いた。

友の嬉しそうな様子を見て亜矢松は満足した。そして思った。これで良かったのだと。例えばクラスで孤立しても何も恥じる事は無いのだと。代償は大きかったが、かけがえのない友情を得る事ができたのだと…。

ところが。

翌日学校に行くと、世界の全てが変わっていた。

今まで優しかった友達が、視線を逸らすようになった。

放課ごとに暴力を受けた。

今までの亜矢松のクラスでの地位がさほど高く無かっただけに、思いもしない反抗がボスクラスの奴の怒りを倍増させたのだろう。報復は執拗を極めた。

が、しかし、暴力には耐えられた。覚悟をしていたからだ。

それよりも、彼の心を打ち碎いたのは因幡の変心であった。

そう。因幡は亜矢松を裏切り、虐める側に回ったのである。

しかも、今までのうつぶんを晴らすごとく、誰よりも率先して亜矢松を虐めた。

それでも、亜矢松はしばらくは耐えていた。なぜなら、クラスメイトの中に彼が好きだった女生徒…例の図書委員の彼女が居たからである。彼女の存在だけが、この地獄にわずかの聖域を設けてくれた。

彼女はイジメに加わったりしなかった。かといって、とりたてて

亜矢松に優しかったわけでも無いが「こんな僕をいじめない事」を亜矢松は勘違いしてしまった。彼女も少しは自分に好意を持ってくれていると思い込んでしまったのである。

修学旅行の後、亜矢松は誰にも分からないように彼女の写真を買った。ところが、この事がクラス中に知れ渡ってしまった。なぜなら、因幡が亜矢松の行動を知ってばらしたからだ。なぜ、因幡が亜矢松の気持ちを知っていたかといえば、その昔亜矢松自身が因幡に打ち明けていたからだ。亜矢松はクラス中の人間に笑われた。情けなかった。彼女にすまないと思った。クラスメイトがはやしたてる中、そっと彼女の方を見ると彼女と目があつた。こんな目に合わせてごめんという意味をこめて、そっと頭を下げると、彼女が泣きそうな顔でいった。

「最悪！　なんで、あたしがあんなキモイのに好かれなくちゃいけないの？」

とたんに彼女の友人が彼女を取り囲み、彼女をなぐさめはじめた。

亜矢松にはわけが分からなかった。

彼女の言葉の意味が理解できなかった。

ともあれ、その事で彼の心の砦は崩壊した。

物語はそこで終わっていた。

『続く』という文字を見つめながら白日夢のごとく俺の頭に浮かぶのは、あの日、やけにきつい目をしていた弟の姿だった…。

この国では 毎日内戦が起きている
教室内の内戦だ

理由は重大だ

クライダサイクウキヨメナイ

地雷を踏んだらさよならだ

大人なんてあてにならない

奴らは言った

「イジメなんかない」

奴らは言った

「彼らは、ただ、からかっていただけだ」

奴らは言った

「お前、被害妄想じゃないのか？」

そして、最後にはこう言った

「いじめられる方が悪いんだ」

何が悪いんだろう？

誰にだって悪いとこなんてあるはずなのに。

人生を台なしにされるぐらい、

僕の個性が罪深いというんだろうか？

そんなわけあるはずないだろう？

どこからどう見ても、何のとりえもない

どこにでもいる普通の人間でしかないこの僕が。

そんなある日、僕は啓示を受けた

そして悟った

悪いのが悪いんじゃない。
弱いのが悪いんだ。

そうだろう？

キリストだって罪人にされたんだ。

でもみんな知ってるだろう？

悪いから罪人にされたんじゃない。

彼が存在していると都合の悪い連中相手に
戦おうとしなかったから罪人にされたんだ。

強いやつは、弱いやつを責める。

責める理由は、どれだけだってつくりだせる。

弱い奴は永久に責め続けられる。

そして、いつか醜悪な化け物に仕立て上げられる。

気付かぬうちに悪者にされるんだ。

それもしかたのない事だ。

誰だって自分は正しいと信じたいから

大義名分は必要だもんな

けど、見てみろよ

どっかの大国だって

正義の名の元に、戦争しているけど

みんな知ってるだろう？

正義なんてどこにあるんだ？

なのに大人達は言うんだ。

戦争反対

平和を大事に

それを聞いて僕は思った
コイツライミワカッテルノカナ？

『内戦』と名付けられたその文字の羅列を、俺は食い入るように眺めていた。それは、弟の詩だ。

弟は、自分のサイトにこんなトーンの詩ばかり、数え切れないほど載せていた。

黒い画面に灰色で書かれたそれらの文字から受け取るイメージは、どことなく俺の描く人物画に似ているように思えた。絶望的な孤独と、怒りと、恨みを抱きながらも、見えない誰かに届く事をひたすら願って書かれたであろうその叫びは、誰かの心に届いたのだろうか？

届かねえよ。

と、俺は吐き捨てる。

今どき、これっぽっちの苦しみ、笑いのネタにもなりやしねえよ。

何しろ、皆がみな自己嫌悪に陥っている世の中だ。ありもしない粹や、下らない縛りをかけてに作り、自縄自縛になって身動き取れなくなった哀れな魂が、他の奴も地獄の渦へ巻き込もうと足を引っ張りあう世の中さ。やっかいな事に、それらは笑いの裏に巧妙に隠されている。陽気な顔をして、いつまでも着地点を見出せぬまま、みんなでどんどん崖っぷちに追いつめられて行くんだろう。そして、いつかみんなで崖から飛び下りればいい。そう。まるでレミングの群れように。

それから、俺は手元の携帯に目を落とした。そして、ディスプレイに表示されっぱなしの文章を読むともなしに読む。

『おはようございます。今日もお仕事頑張ってください。』

僕も一日頑張ります！ 正』

おととい、みーさんから転送されて来た、弟のメールである。

妙に前向きなその文章もタチの悪い冗談のようにしか思えない。

一体奴は、どこから、どんな気持ちで、こんなメールを送ったのだろう？

ちなみに、みーさんへの連絡は3日前に途絶えたらしい。おそらくは、事情を知ったみーさんが弟に居所を知らせるようメールで説得したため、奴に警戒心を抱かせたためと思われる。

しかし、自サイトの掲示板への書き込みはしているようだ。どうやら、こちらはばれていないと思っているのだろう。が、しかし毎日チェックしているぞ。ここ数日、会社から帰って、夕食をとって、この部屋でパソコンを見るのが日課になっているんだ。

今日も、弟は書き込みをしていた。

それは、奴の小説に感想をくれたFAN（！）への丁寧な返事だった。意外な事だが奴の小説は意外に人気があるのだ。しかし、人気があるのは、ネガティブな詩や、ひきこもり小説ではなくて、巨乳魔法使いが主人公の学園ファンタジーに対してだが…。

本日の弟の書き込みは、この一月あまりのそれと同じく、居所を一切悟らせぬ事務的な返礼でしかなかったが、とりあえず奴が無事な事を確認できるものではあった。それで、ホッと胸をなでおろしたその時、携帯がメールの着信を知らせた。送信者は森崎だ。

何の用かと開いてみれば、

『弟さんの行方分かった？』

と書いてある。

『今調べているが、ページが多すぎて読み切れない』

と書いて送信すると、すぐに返事が帰ってきた。

『良かったら、サイトのアドレスを教えてください。私も調べてみるから』

渡りに船とはこの事である。それで『それはとても助かる』とメールで打ち込み、ついでに奴のホームページのアドレスを携帯に一字一字丁寧に打ち込んで行く。そして、打ち込んでしまってから、しかし、まてよと首をかしげた。なぜなら、こんな心の声が聞こえて来たからだ。

『俺はそこまで森崎に甘えて良いのだろうか？ 彼女も俺に対してそこまでする義理もないだろうに。しかも、このアドレスを知らせるという事は、あいつの恥部を晒すようなもんだぞ。なにしろ、ここにはあまりにも奴の全てがさらけだされすぎてる。もし、俺が奴の立場なら、これを多少でも面識のある人間に知られる事をどう思うだろう？ しかも相手は、奴にとっては年上美人の森崎だ。かなり抵抗あるんじゃないのかなあ？ いや、抵抗あるに決まっている』

そう考えると、俺はせっかく打ち込んだメールを送らずに削除しようとした。ところが、削除しようとした時、今度はこんな心の声が聞こえて来た。

『いや。この際、そんな事を言っている場合じゃないだろう。なにしろ事はインターネット上での話だ。パソコンに関してはドシロウトの俺なんかより、森崎に頼った方が効率がいいに決まっている』

さんざん迷ったあげく、俺はついに決心した。

そして、奴のサイトのアドレスを打ち込んだメールを、森崎にあてて送ったのである。ただし、こう付け加えて。

『何を見ても驚かないでくれ。あいつの名誉のために黙っていたが、

あいつは8年間もひきこもっていたんだ』

「東京にいるらしいよ、弟さん」と、森崎が言った。

昼間のカフェの明るい風景によく馴染む、実にあっさりとした口ぶりだ。

「東京？」

その意外な言葉に、手にとったサンドウィッチを落としそうになる。

「マジで？」

たずねる俺に「うん」とうなずき、

「嘘は言っていないと思う」

と森崎は断言した。

「言っていないと思うって…直接、話したの？」

「そうよ」

「そうよ…って…どうやって？」

「インターネット上で話したのよ」

「ああ」

納得する。

「チャットかなんかで？」

「掲示板よ」

「でも、いつの間にそんなに仲良くなったの？」

「簡単よ。弟さんのサイトの掲示板に小説の感想を書いて、そのついでに私のサイトへのリンクを貼っておいたの。そうしたら弟さん、私のサイトに来てくれたのよ」

「そういえば…」

思い当たる事がある。

「少し前からあいつのサイトに『リリカ』って女の人がよく書き込みしてたけど…」

その人物は、奴の引きこもり小説に対して、やけに丁寧な感想を書いていた。珍しい女も居たもんだと思っていたが、それがまさか…

「それが、私よ」

と森崎がうなずく。

「なるほどね」

俺は感心した。

インターネットの事をよく知らないだけに、感動も大きい。

「けど、森崎、サイトなんてやってるんだ」

「まあね。今まで書きためた絵をのせてるだけなんだけど…」

「ふうん…」

俺は森崎の描く繊細なタッチの少女達の絵を思い出した。

「それで…リンクを貼ったら、弟さんも私のサイトに来てくれて、私の絵にも感想くれたの。それをきっかけに色々話したのよ」

「あいつと話すなんか事あるの？」

森崎と弟に、共通の話題があるとは思えない。

「いくらでもあるわよ。だって、私も中学の頃ひどいイジメにあったから」

「え？」

初耳だった。

「森崎が？」

「そうよ。登校拒否にはならなかったけど」

「信じられない。でも、なんで？」

「中学生の頃、太っていてね…あ、でもそれが原因じゃ無いのよ。やせようと思ってダイエットのために毎日マラソンしたら、足が早くなっちゃってね…その年のマラソン大会で、何と優勝しちゃったの」

「凄いじゃん。でも、それとイジメとなんの関係があるの？」

「うん。それが、ストリートに優勝したわけじゃなくて、元々一位で走っていた子がゴール前で転んじゃってね。それで、ちょうどその後ろにいた私が優勝できたってわけ。タナボタ式の優勝だったの。」

そんなことがあったものだから、元々一位だった子が納得できなかったらしくてね」

「もしかして、それでイジメになったとか？」

「そ。色んな事されたわよ。『森崎紀美香がわざと転ばせた』なんていう噂たてられて、どんなに『違う』って言っても聞いてもらえなくて、おかげで悪者にされちゃった。クラスの大半の女子から無視されたり、上ぐつ捨てられたり、教科書隠されたり…」

「ムカツク奴だな」

「今、考えるとかわいそうな子だと思う。だって、負けたぐらいで普通そこまでする？　そこまで『勝ち』にこだわるって、自分が苦しいだけだと思う。それに、理由がなんであれ、人を傷つけなきゃ済まないなんて、よほど『他の何か』で自分が傷付いている証拠よ。……当時はそこまで考えられなかったけど」

「そういうもんかな？　でもよく、登校拒否にならなかったな？」

「辛かっただろう？」

「辛かったわ。毎日泣いてた。先生に相談したって、『いじめられる方にも原因あるんじゃないの？』で終わっちゃうし。でも、とことん追いつめられたら、私最後にキレちゃって…」

「キレた？」

「うん。それで、そっくり同じ事を相手にしてやった」

「へ？」

「幸い、私は孤立まではしてなくて、味方になってくれる子もいたから。その子達と組んで、上履き隠したり、通りがかる度に皮肉言っってやったり、とにかく私がされた事をそっくり仕返してやった」

「…そう…なんだ」

軽く引いた。

「なんか…信じられない。森崎って、優等生でおとなしいイメージしかなかったから…」

「そう見える？　でも、やられたらやり返すわよ。そうしなきゃ、多分、私が壊されてたわ」

「：で、その彼女はどうしたの？」

「ああ。彼女なら、最終的には私のごきげんうかがって来たわ。謝ったんじゃないくて、ごきげんをうかがって来たの。なんか、阿呆らしくなっちゃった。『偉そうになんだかんだ語ったって、弱いものには強気で出るのに、相手が強いと分かったら手の平返すんだ』って思った。下らない。でも、人間てそんなものかなって、その時は思った。それきりでお終い。彼女との関わりはそこまでよ」

「その話、弟にもしたの？」

「したわよ。そしたら、『リリカさんは強いですね』って感心されちゃった。だから『こういうのは、強さとはいわないと思う』と答えたおいた。そしたら弟さん、言ったわ。『いいや、あなたは強い。それに比べて僕は弱い。弱いからいじめられる。いじめられるのは弱い僕が悪いんだ』って。だから私こう言っておいた『何が本当の強さかなんて、誰にも分からないと思う。何が本当に正しいかも、誰にも断言できないと思う。もし、人を傷つけられる事が強くて正しい事なら、私は弱くても、間違っていないともいいと思う』って。それから、まあ色々な話を話合ったんだけど、最後には『ありがとう』って：なぜかお礼を言われちゃった。お礼なんていらぬのに」

そう言って、森崎は少し笑った。

「いや。俺には、弟の気持ち分かる気がするよ」

「そう？」

「ああ。分かるさ」

だって、いじめられるような奴をここまで相手にしてくれる女が、今、この日本にどれだけいる？ あいつには森崎が女神のように見えたんじゃないだろうか：。少なくとも今の俺にはそう見える。

「俺からも礼を言わせてくれ。ありがとう」

頭を下げると、

「やめてってば」

と、森崎は笑いながら首を振った。

「私もつい熱くなって語っちゃっただけ。インターネットって、人をそんな風にさせるところがあるの。でも、そんな話をしたのは一度きりよ。その後は絵の話ばかりで…」

「絵の？」

「うん。弟さん、絵に興味があるらしいわよ」

「へえ？ あいつが絵なんか？ 意外だな」

「兄貴の影響って言ってたわよ」

「俺の？ まさか！ あいつとそんな話したこともない」

「でも、彼はあなたの影響って思ってるみたいよ。それに…ああ、一番大事な事伝えるの忘れてたけど」

「何？」

「弟さんが東京に出た最初の理由は、あなたの師匠にあたる人に会いに行くためだったって…」

「え？」

がく然とする。

「嘘だろ？」

「嘘じゃないわよ。あなたにそうしろって言われたから東京に来たんだって」

その言葉で俺は弟の置き手紙のフレーズを思い出した。

『お兄ちゃんへ』

お兄ちゃんの言うとおりにやってみようと思います』

って、あれだ。つまり、そういう事か、だが、しかし…。

「でも、言ったおぼえがない」

「それは…もしかして…河井君が意識不明の時に言ったからじゃないかな？」

「意識不明？」

「うん。弟さんの話によると、あなたが病院に運ばれて生死の境を

さまよってる時に言われたって」

「ああ！」

…なるほど！

やっと納得がいく。つまり、うわごとだったってわけだ。それなら覚えてなくても不思議じゃない。

しかし、それならそれで、分からない事がある。なぜ俺はあいつに師匠の元へ行けなどと進めたのだろう？

そんな事を思った時、森崎が席を立った。

「そろそろ行かないと…」

「もう、時間？」

「うん。もう、40分過ぎちゃった。もう行かないと、お客さんとの約束の時間に間に合わない」

「仕事、大変そうだね」

「うん、まあね。でも、やっぱり私にはこっちのがあってるわ」

彼女は、今、デザイナーの仕事に戻っている。

「そっか。よかったな。充実してるみたいで」

「まあね。それより、今度はこんな昼休み中じゃなくて、日曜にでもゆっくり会おうね」

そう言うと、彼女はA3の封筒を抱えて店から出て行った。

後に残された俺は、残りわずかな休憩時間と競争するようにサンドウィッチを平らげ、早々に工場へと戻って行った。

「すまなかったな」

日あたりの良いアトリエのまん中で、師匠が頭を下げた。

「まさかあいつがお前の弟とは思わなかったんだ。なにしろ、髪はぼうぼうだし、鬚はのびてるし…」

「謝らないで下さいよ。しょうがないですよ。それにしても…あいつ、名乗らなかったんですか？」

「ああ。だから、どこかからの家出人とは思ったが、お前の弟とは想像もしなかった…」

ここは、東京。

俺の師匠、菊池大成のアトリエだ。

説明するまでもないが、弟を探して上京してきているのである。

(1週間の休みをもらうのは、正直いって辛かった)

弟は、確かにここに来たらしい。

ある晩、師匠が買い物から帰って来ると、門の前で自転車と一緒に寝ているホームレスがいた。それが、弟、正だ。驚いた師匠が声をかけると、奴は腹が減ったので何か食わせてくれという。その際、奴は、河井正とは名乗らず、『田中太郎』とかいうふざけた偽名を使ったそうだ。

気のいい師匠は、弟を家に上げ、飯を食わせてやった。それだけでなく、数日泊めてやったそうだ。この人には昔からそういうところがある。よく、道ばたで寝ている人とか拾ってくる事があった。

(俺も拾われたクチかもな)

それが、なんで俺の弟かって分かったといえば、例のママチャリさ。

ブレーキが壊れちゃって、もう使えないからと、奴が置き捨てていったそれは、今だに師匠の庭に置かれている。ボロくなっている

が、確かにあれはおふくろ愛用のママチャリだ。あの、真っ赤さ加減といい、あのどピンクのハンドルカバーといい見間違えるはずがない。

「で、弟はここにいる間何をしてたんです？」

「何も」

「何も？」

「ああ。ただ、黙ってばーっと俺の絵を眺めていた。そして、3日後ぐらいに出ていった」

「行き先は？」

「何も聞いてない。しかし、自転車を置いていったっていう事は、都内にいるんじゃないか？」

「そうですか…」

結局、たいした手がかりはつかめなかった。軽くへこむ。

「まあ、何日でも泊まっていけよ。俺もなるべく協力するし…」

という、師匠の好意に甘える事にする。

奥さんには、某駅で買った超レアなあんころ餅を渡す。とても、喜んでくれた。

次の日からさっそく俺は都内を駆けずり回った。

弟の行きそうな所：秋葉原、池袋のネットカフェ。それから：渋谷、新宿駅構内のホームレスの中まで捜しまわった。

しかし、世の中そんなに甘くない。言うまでもないが、東京は広い。ネットカフェに限定したって、何件あるのか見当もつかない。奴の姿は見当たらない。

こんなんで、本当に見つかるんだろうか？　すぐに絶望的な気分になってくる。

3日目の夜、何の収穫もないまま師匠宅に戻る。

母屋から少し離れたアトリエのソファに座り、師匠が描く絵をぼーっと眺める。

昔も、よくここに座ってこうしていたもんだ（あの頃は、横に彩香がいたけど）。

その時、俺は「あれ？」と思った。

部屋の奥の方の乱雑に置かれたキャンバスの横に、見なれぬ扉を見つけたからだ。

「あんな扉、ありましたっけ？」

と、尋ねると、

「今ごろ気付いたのか？」

と、師匠はあきれ顔する。

「去年、建て増しをしたんだ。『倉庫』替わりの和室だよ」

「へえ…」

興味はあるが、見に行こうという気力がない。なにしろ、連日歩き回って、心も体もへとへとなのだ。それで、見るともなしに、薄茶色の扉を見ているうちに何だか寂しい気持ちになってくる。何が寂しいって、俺の知らないものがそこにある事が寂しかった。それで、つい、こんな事を言ってしまう。

「なんか…俺のいない間に、色々変わってますね。駅も、改装しちゃったし…」

「ああ。●●駅な。地下行きのエスカレーターについて、便利になっただろう？」

「むしろ、ややこしくなりましたよ」

と、俺はこぼす。

何だか、悔しい。その思い出を共有できない事がだ。だんだん俺がここにいた形跡がかき消されていく。そして、いつかここには俺の記憶など跡形も残さぬよそよそしい場所になってしまいうndらるか？ 俺はもう、ここには戻れないんだろうか？

いや、そんな筈はない。だって、あの頃と変わらず師匠のアトリエは居心地がいいし、立ちこめる匂いも懐かしいし、何より俺の無くしてた魂の片割れが戻って来るような気がする。

ああ。そうだ。これだ。この感じだよ。

これが、生きるという感じだ。

そうだ。俺はやっぱり、ここに戻らなくちゃいけない。きっと、戻らなくちゃいけない。

そんな風に思いながら、眠りに落ちていった…。

目的は何であれ、上京は俺に生きる気力を取り戻させてくれた。しかし、肝心の弟は見つからぬまま、あっという間に日は過ぎてしまう。そして、ついに最後の日が来てしまった。

色んな意味でがっかりだった。

弟が見つからなかった事もがっかりだが、せっかく上京したにも関わらず、弟探しなんぞしていたせいで、行きたい場所、会いたい人の元にさっぱり行けなかった事がなおさらがっかりだ。

俺の落胆ぶりに師匠が深い同情を示す。

「残念だったけど、大丈夫だよ。あいつだって、いい年こいた男だ。その気になりゃあ、なんとしてでも生きていけるさ」

「…生存の確認はしてるので大丈夫です」

あいつが生きている事は、森崎からのメールで知っていた。あいつは、相変らず毎日のように森崎のサイトに入入りしているらしい。

「あいつが行きそうなネットカフェには、ビラを配っておいたし…」
例のミノ虫男のイメージイラストを森崎に描いてもらって、ビラを作ったのだ。

「警察には？」

「警察には言ってます、…あいつの『必ず帰る』っていう言葉を

信じて、届けるのはもう少し待とうと思います」

「そうか。俺も気をつけておくよ。何か分かったら連絡する」

それから、俺は師匠の家を後にして、新幹線に乗るギリギリの間まで弟の姿を探素事にした。しかし、午後6時。とうとう断念。暗たんたる気持ちで山手線に乗り込む。

椅子に座り、目を閉じてこの度の上京について思いめぐらす。この顛末を、両親にどう説明するか考える。そしておふくろの失望するのを想像し、げんなりする。何で、俺がこんなに気をもまなくちゃいけないんだと腹が立って来る。その時、ズボンの中で携帯がふるえた。メールが来たようだ。誰からだ？ ああ、森崎か。それにしちゃ、中途半端な時間だな。あいつは夜しかメールして来ないのに。：とかなんとか思いながら画面を見る。そして、そこに書かれた文字を見て、思わず椅子から立ち上がった。

『お疲れ。今日、帰って来るんだよね。弟さん見つかった？ 見つかってないかな？ もし見つかってなければ、参考にして欲しいんだけど…。実は、私も今思い出したんだけど…。前に、上京した時に、カオスって画廊で河井君にそっくりな人の幻を見たっていったでしょう？ あれ、もしかして、幻じゃなくて、河井君の弟だったんじゃないのかな？』

あんな奴と似ているなんて、断じて認めたくない。

しかし、他人から見ると、俺達は双児のようにそっくりらしい…。と、昔はよく言われたものだ。

俺は、携帯をカバンに放り込むと、次の駅で山手線を降り、懐かしい町へ向かった…。

午後7時過ぎの双葉町駅のホームに降り立つ。

改札を抜けると、昔と変わらない風景が目飛び込んで来る。

そこは夢の吹きだまりだ。

明日のスターを夢見るストリートミュージシャンが、あちこちで声を張り上げている。自分の絵を並べて売っている奴もいるし、インチキくさいアクセサリーの販売をしてる外人の姿も見える。

かつては俺もその仲間に加わり、その一角で自分での絵を並べていた。大学を辞めた後、20才になるかならないかの頃だ。

あの頃、俺は師匠の絵を再現させる事に熱中していた。師匠の数有る傑作の中でも、究極の傑作『つぎはぎのマリア』の絵だ。

その絵の中では、一人の女が胸に十字架を抱いて横たわっていた。栗色の長い髪が色とりどりの花の上を川のように四方に流れ出していた。

美しい女だが、その体には、まるで陶器に入ったひび割れのような、細かな線が無数に入れられていた。

そして、その女を包む無数の花々はなぜか光り輝いていた。

今でも、頭の中では忠実に再現できる。けれど、紙の上に再現させる事はできない。

しかし、その絵に出会って、俺の人生は変わった。他人が聞けば転落したの間違いだろうと言うかもしれない。けれど、俺はあの絵と出会った時に初めて己の中に宿る魂を自覚する事ができた。言い換えれば、あの時から、俺は『生きる』という事を学びはじめたのかもしれない。

そして、初めてあの絵を見たのが、この双葉町駅前の地下にある小さな画廊だった。それは、CHAOSカオスという名の、普通なら見過ごしてしまうような小さな画廊だ。森崎はそこで弟らしき人物を見たという。もし、それが本当に弟だとするのなら、よく辿り着けたもんだ。いや、よく知っていたもんだ。ここが俺の運命を変えた第一の場所だって事を。

今、俺はその画廊の前に立ち、入り口の上に飾られた『CHAOS』って文字を眺めている。CHAOS（渾沌）とは言ったもんだな。まさに、今の俺の状況そのものじゃないか？

画廊は、昔にくらべると綺麗になっていた。改装したらしい。まだ電気がついてるから中に入れるみたいだ。入ろうかな？

ためしに入ってみると、中ではどこかの芸大生達の作品が展示されていた。めばしい作品もなく、弟の姿を見つけるわけでもなく、失望とともに外に出る。

ギャラリー脇の階段を昇ると、先きほどの広場の前に出る。ギターをかき鳴らす二人組を横目に、一輪車に乗る若い奴らにぶつからぬよう広場を横切っていく。そして、車道を横切り、向側のカフェに入り、ホットドックとコーヒーで簡単な夕食をとる。昔はよくここに彩香と一緒に来たもんだ。

俺は2階のカウンター席に座った。ここからは広場の様子がよく見える。こんな風にぼーっと過去を懐かしむのも悪くない。

しばらくそんな風に景色を見てると、メールが入った。森崎からだ。それで、今現在、現実引き戻される。

『今、どこにいる？ もう、新幹線？』

画面に表示された文字を見て、俺は先きほど、電車の中で受け取ったメールに返事を送るのを忘れていた事に気が付く。それで、こんな風に返信した。

『いや。まだ東京にいるよ。さっきの森崎のメールをヒントに双葉町に来たんだ。それで、例の画廊：カオス：に行ってみたよ。でも、残念ながいなかった。けど、もしかしてこの辺りのネットカフェにいるかもしれないから、夕食とった後、この辺りをじっくり探すつもり：』

送信を済ませ、携帯を閉じ、コーヒークップに手をやる。そして、再び窓の外を見て、過ぎ去った時間へと思いを巡らす。

と、その時、ガラス越しに妙なものが見えた。

男だ。

白いダウンジャケットを着た男が、広場のまん中をふらふらと歩いている。

ずいぶんおぼつかない足取りだ。一輪車の男にぶつかりそうになってる。

けれど、何で、俺はそんなものに心をとめたんだろう？

不可思議に思いつつコーヒーを一すり、そして、思う。

そうだ。あの雰囲気。あの歩き方。どこかで見たような気がするんだ。だから、心をとめたんだ。

そこまで思ったところでピンとくるものがある。けれど、俺はすぐにその直感を否定した。

…あれは、違う。…あれは『あいつ』じゃない。…あいつは、もつと、ミノ虫っぽいはずだもん。

しかし、どうにも気になって仕方がない。俺はコーヒーを一気に胃の中に流し込むと、広場に行くために店を出た。

車道を横断しようとするが、あいにく信号は赤だ。しばらく待たなくちゃいけない。幸いな事に、道路をはさんでいても広場の様子はよく見える。例の男は、立ち止まり、電柱にもたれて空を見てる。服の白さがやたらと目だつ。

遠目にその横顔を見て、俺は思った。

…絶対に違う。あれは、どこにでもいる普通の奴だ。俺の知っている弟は、あんなに清潔じゃない。長髪だったし、無精髭も生えていたはじだし…師匠の前に現われたあいつもそんな姿をしていたというし。

しかし、そこで俺は思い直す。

…けど待てよ？ 森崎が見たのは、俺そっくりの男の姿だったっていうな…だとすれば、ミノ虫でもないし、ロン毛でも鬚ヅラでもない。どこにでもいる、普通の奴のはずじゃないか？ …と、いうことは…

そこまで考えた時、タイミング良く信号が青になった。俺は走って広場に向かった。だんだんと男の顔がはつきり見えて来る。

…間違いない。

認めざるを得なかった。

「正！」

その名を叫ぶと、聞こえたのか聞こえなかったのか、奴は電柱にもたれたまま脱力し、しりもちをついた。そして、駆け寄った俺の目の前でがくりと気を失った。

「ただの風邪ですよ。2、3日も寝てれば治りますよ」

白髪の医師がもそもそと言う。

「そうですか」

俺は安堵して、布団の中で寝息をたてている弟の顔を見下ろした。
「でも、少し栄養失調気味ですから、熱が下がったらたっぷりと栄養をつけさせてあげてください」

そう言うと、猫背気味の医師は、薬を置いて静かに部屋から去っていった。師匠の奥さんがそれを追って出ていく。

「よかったな。おおごとでなくて」

と、師匠が言った。

「はい。いや十分大騒ぎでしたけどね」

俺は答えた。

本当に大騒ぎだったのだ。やっと見つけた弟に目の前で倒れられて、救急車を呼ぶか、タクシーを手配するか途方にくれていた時に、タイミングよく師匠から電話が入った。「これこれこういうわけで、今大変なんです」と訴える俺を落ち着かせ、師匠は車を飛ばして来てくれた。幸い、あの駅から師匠の家は近かったもので、そのまま弟をここまで運び、夜明けを待たずに医者を呼んだ。

「本当にすみません。また、お世話かけるはめになっちゃって」

と、恐縮すると、

「気にすんな。それより弟見つかって良かったな」

と、師匠は言ってくれた。

とりあえず、奴が完治するまでは俺も東京にとどまる事にする。奴をここに置いていたら、また何をしでかすか分からないからだ。けど、何もせずに世話になるのも悪いので、家の事を手伝う事にした。一応一人暮らししてた身でもあるし、家事全般なんでもこなせるわけだし。そして、次の日、朝食の後始末をして弟の部屋に戻

ると、奴は目をぱちちりと開けてガラス越しの庭の風景を見ていた。

「目、さめたかよ」

と近寄ってくと、

「ここは、どこ？」

と、鼻声で尋ねる。

「ここは、菊地大成：つまり俺の師匠の家の母屋の一室だ。お前はただの風邪だから、安心して寝てろ」

と、説明しててやると、

「…そう」

と、だけ答えて、弟は眠ってしまった。しかし、その日の昼過ぎには、起き上がって粥を食べるまでになる。そして薬を飲むと、またひたすら眠る。そんな調子で2日も眠っていたら熱も下がり、咳もおさまってきた。この調子なら明後日ぐらいには家に戻るだろうなんて思いつつ、昼飯を終えて離れのアトリエに向かう。師匠と話そうと思って行ったのに、アトリエの中はがらんと静まりかえっていた。師匠は出かけているようだ。

それで、勝手に上がり込み、師匠の帰りを待つ事にする。初めはソファに座って待っていたのだが、そのうち退屈になってきて、ヒマつぶしに師匠の絵でも見ようと思いつく。そして、アトリエのあちこちに雑然と立て掛けられているキャンバスを一つ一つ手に取って、つくづくと眺めた。見なれた絵もあったし、初めて見る絵もありあった。そのいずれもが光り輝くように美しい世界を、四角いキャンバスの向こうに果てしなく広げている。

そうしてキャンバスを物色しているうちに、例の増築したという倉庫の扉の前にたどり着いていた。扉の横には、際立って大きなキャンバスが3点立て掛けられていた。それらを見た時、胸の中にある予感がよぎる。それで、俺は不可思議にも高鳴る鼓動をおさえ切れぬまま、それらに手を伸ばした。

最初のキャンバスには何も描かれていなかった。

次のキャンバスには、この家と、家族の姿が描きかけになっていた。

そして、最後のキャンバスには…

「ああ…！」

思わず声を上げる。

「これだったか」

そこには…そう、あの『つぎはぎのマリア』が…あの十字架を抱いて眠る女が居たのだ。それは、上京後初めての邂逅であり、約3年ぶりの再会であった。

ほとぼしる命の息吹と、その背徳的な美しさが、初めて出会った時そのままの衝撃を俺に与える。それで、俺はこの絵に向かう時常にそうであったように、今もまた忘我の境に入り眺め続けた。

どれぐらい、そうしていただろう？

背後に気配を感じ、俺は我に返った。

師匠かなと思ったが、ゴホゴホ咳をするから弟と分かる。

「何だ？ もう起きれるのか？」

と、たずねるが返事がない。

仕方ないから放っておくと、しばらくして弟が言った。

「なんでここに来てって言ったの？」

「うん？」

「何で、ここに来てって言ったの？」

「ああ…」

俺はうなずいた。奴が言ってるのは、つまりは俺が言ったという

『うわごと』の事だろう。うわごとだから理由なんて知らない。けど、まさかそんなこと言えない。だから、とりあえず、思いつきで答えておいた。

「ここにある絵をお前に見て欲しかったんだろう…」

そして、心の中でこう付け加えた『多分、おそらく、きっと』。

「絵を？」

弟は首をかしげた。

「なんで？」

「なんでって…」

知るかよ。今、適当に言っただけだもん。けど、何か答えなければ治まりそうがない。それで、俺はありとあらゆる知恵を総動員してこう答えた。

「…だって、綺麗だろう？　心が洗われるようじゃないか？」

「ふーん…」

『ふーん』て…『ふーん』で終わりかよ。なんとなくムカツク。だからというわけでもないが、なんとなく説教口調になってしまう。「…お前、今までどこで、何をしてたんだよ？　さんざんみんなに心配かけて。迷惑かけるのも大概にしろよ」

すると、奴は臆面もなく言った。

「仕事を探してたんだ」

「仕事！？」

「うん。まだ、見つかってないけど…」

驚いたなんてものじゃない。

仕事だって？　ここで？　何を考えてるんだ？　マジで訳わかん

ねえよこいつ。

「まさか…東京に住みたいとか？」

「別に…」

別に住む気ないのに、何でここで探す？　内心のうるささに反比例して、俺達の周りを気まずい沈黙が包む。次の言葉が見つからないまま固まっていると、弟が口を開いた。

「でも、俺はこういう絵は嫌いだな」

「何？」

「俺はこういう絵は嫌いだって」

なんだよ、今度は絵の話しかよ。脈絡がないんだよ、お前は。

「嫌いって…どうしてさ？」

「だって、なんか綺麗すぎる。綺麗なばかりで…なんていったらいいんだろう？ 真実味がないよ」

まともに長いセンテンスを喋ったと思ったらこれだ。まったく頭にくる。

俺としちゃ言いたい事が山のようにある。それを要約すればこんな感じだ。

『アホか、お前は。これがただの綺麗なだけの絵に見えるのか？』

それは、お前の目が節穴だからだろう？ ちゃんと学んだ人間には分かるんだよ。これは、ただの綺麗なだけの絵とは違う。どう違うと言えばだなあ、あゝ、うゝ…』

最後の方がまとまらずにいと、天上から声がした。

「綺麗なだけとは言ってくれたな」

神の声か？ と見上げたら、残念ながら神ではなくて師匠だった。師匠は例の倉庫の扉を半開きにしてにゅつと顔を出している。

「うわ！ どっから出て来るんですか？」

って、わりにベタに驚くと、

「休憩してたんだ」

と師匠は言う。

「倉庫で？」

ってきくと、

「この部屋は倉庫件休憩室なんだ」

って、奥を指さす。

そこは、6畳の和室になっていてドミノ状に置かれたキャンバスと、こたつとテレビが置いてあるのが見えた。なるほど、なんかくつろげそうな感じだ。

「それにしても、綺麗なばっかとは言ってくれたな」

と、師匠は弟をじっと見た。で、弟はといえば、師匠の視線に耐え切れずにぷいっとそっぽを向く。

「まずい…」と、俺は思った。弟の無遠慮な言葉が師匠を怒らせたらしい…しかし、普段はこんなことで怒る人じゃないんだが…いや、とにかく、仲裁しなきゃと俺は二人の間に割って入った。

「すいません。何しろこいつは8年も社会と断絶していたんで、口のきき方を忘れたんだと思います。どうか許してやってください」しかし、師匠はそんな俺の言葉の1文字もきいちゃいない。

「俺は、こいつと話をしているんだ」

って、俺を押し退ける。

「ゴホゴホ」と、弟が咳込んだ。動揺しているようだ。しかし、師匠はおかまいなしだ。

「俺の絵に真実味がないってどういう事だよ？」

「それは、つまり…ゴホゴホ」

弟が再び咳き込む。

「おい、大丈夫か？」

俺は、思わず弟に手を差し伸べた。

「それは、つまり…なんだよ？」

師匠は割としつこい。

「それは、つまり…ゴホゴホ…ゴホゴホ…ゴホゴホ…」

「つまり…なんだよ？」

「つまり、この世がこんなに綺麗なわけがないからだ」

「この世がこんなに綺麗なわけがない？」

師匠は首をかしげた。

「何を根拠にそう思うんだ？」

「根拠？」

弟はそう言うのと、また咳き込んだ。それでも、考え考え、はつきりところ答えた。

「根拠は…、根拠は…：…そうだ、この僕が…僕の存在が…」

「お前が？」

師匠はますます首をかしげた。

「なんで？」

その答えは、俺もぜひききたいと思った。

「なんで、この世が綺麗じゃない事の証明がお前の存在なんだ？」
師匠の問いかけに、既に解答を用意していたらしく、弟は間髪なく答えた。

「それは、僕がもぐらだからだ」

「もぐらあ？」

師匠は妙な顔をする。無理もない、あまりにも突拍子もない答えだもん。しかし、俺にはすぐにその意味が分かった。奴のホームページに載っていた『土人中』って詩を思い出したからだ。その途端、芋づる式に他の詩や小説の数々も浮かんで来た。特にあの『青春☆ひきこもらー』って小説を強烈に思い出し、気付いたら「やっぱり…」と口に出していた。

「やっぱり…お前、イジメ受けてたんだな」

すると、弟が驚いたように俺を見た。その顔は、驚きからみるみる怒りに変わっていく。それで、俺は自分があまりにも軽率な事を言ってしまった事に気付く。こいつにとっては触れられたくないところだったのかもしれない。

「いや…悪いとは思ったけど、お前のホームページ読ませてもらったんだ。不愉快だったなら謝るけど…でも、何も、お前の秘密を暴くつもりじゃなかったんだ。純粹にお前の居所をつかむためだったんだ。けど…あのイジメが題材の『青春☆ひきこもらー』って小説…読んだよ。あれ、本当の事なんだろう？」

弟は何も答えない。何も答えられないのが『答え』だろう。俺は自分の勘の正しさを確信する。

「なんで、話してくれなかったんだ？」

「…」

「話してくれれば、お前がこんな風になる前になんとかできたかもしれないのに」

「…」

「兄ちゃん悔しいよ。心無い奴の為に、大事な家族をこんな風にされて」

正直言って、こいつを虐めた奴全員を殺してやりたいぐらいだ。

だんだんヒートアップしているくる俺とは対照的に、弟はクールに黙り込んでいたが、やがてぽつりと口を開いた。

「いじめられてたなんて言えるわけないだろう？」

「…なんでだよ？」

「みつともないからだよ」

「なにがみつともないんだよ」

「だってさ、いじめられるって事は『お前は醜くて生きる価値のない不良品だ』って宣告されてるようなもんなんだよ。そんな事家族に言えるもんか」

「そんな事、誰も思わないよ」

「兄貴になんか、分らないよ。いつも、ソツなく、なんでもこなしてた優等生の兄貴になんてさ。大体、あの頃あんたが俺に関心持った事あったかよ？」

その言葉に胸をえぐられるような気がする。確かに俺は…。

…確かに、俺は、学生時代はなんでもソツなくこなして来た。自慢ではないが、勉強はもちろん、スポーツもそこそこできた。成績がよくてもイジメに合わなかったのは、他人と適度に距離を置いて付き合う器用さも持っていたからさ。けれど、あの頃は自分が自分だと思えた事もなかった。画家の夢をあっさりT大志望に転向させられるぐらい自分の思い（願望）に対する執着もなかった。そして、それと同じぐらい他人にも執着がなかった。言葉を変えれば無関心。それは、弟に対してもそうだったかもしれない。

その時、ふいに師匠が口をはさんで来た。

「おい。お前、俺の質問に答えてないぞ。なんで、お前がこの世界

が綺麗でない事の証明なんだ？ 今の話だと、単にお前自身が汚いつていう証明にしかないんじゃないか？」

弟が驚いて師匠を見た。不意打ちだもんな。つていうか、師匠：この上食い下がらなくてもいいのに……。弟が哀れになってくる。それで、俺は『もうやめましょう』と、師匠に目で合図を送った。しかし、師匠は気付かない。

弟が、また咳をはじめた。どうやら、奴は咳をすると考えがまとまるらしい。「げほげほごほん」と3度程くり返した後、奴は答えた。

「それは：僕がニートで引きこもりだからだ」
すると、師匠がまた首をかしげた。

「なんでお前が『ニート』で『引きこもり』だとこの世が綺麗でない証拠になるんだ？」

「だって：世の中の基準からすれば、人間失格だろ？」

「ああ、そういう事か。お前は人間失格なんだ。そう思ってるわけだ」

師匠が妙な肯定のしかたをする。すると、弟は：否定の言葉でも期待していたんだろうか？ ：微妙に声を荒げた。

「俺が思いたくなくなつて、世間がそう思うじゃないか！」

「思うかもな」

「ああ、思うさ。けど、俺だって別に好きでこうなつたわけじゃない。俺は不幸な巡り合わせでいじめられる立場に立たされただけだ。けど、その途端、クラスの奴らは、俺にさんざんひどい言葉を浴びせられるようになった。今なら分かる。それは、奴ら自身が誰かに浴びせられて、心の中にため込んで腐敗させた『呪いの言葉』さ。本来別の誰かにぶつけるべき言葉を、それができないもんだから、奴らは弱い僕に浴びせかけた。僕は言葉のゴミ箱にされたんだ。そして、さんざん呪いの言葉を浴びせられ続けた僕は、ついにもぐらになってしまった。土の中でしか生きられない、醜い化け者さ。：どうだよ？ これが、僕が存在がこの世の醜さである証明だよ！」

弟は、まるでため込んだ恨みを吐き出すかのごとく滔々と語る。

「分かったよ！」

俺は辛くなって叫んだ。

「お前は何も悪くないよ。お前はただの被害者だ。いじめは、いじめられる方が悪いなんて言う奴もいるが、それはあまりにも強者の奢り高ぶった意見だ。いや、虐める奴は強者なんかじゃないな。本当に強い奴は、弱い奴を思いやる余裕を持てるはずだ。100歩譲っていじめられる方が悪いとしても、個人に対して余りある程の制裁を加え過ぎだ。けどさ、お前、そんな奴らのために人生台なしにされて悔しくないのか？ 見返してやれよ。人生その気になって頑張れば、いつからでも開ける。まして、お前は、まだ若いんだし……」

思わず激昂してしまう一方で、弟は、例のクールな顔を俺に向ける。

それで……やっぱり、俺の気持ちなんか伝わらないか……と落胆すると、意外にも弟の口から出て来たのは「そうだよな」という言葉だった。

「そうだよな。兄貴の言うとおりだよな。僕は何も間違っていないんだから、過去の事なんか気にせず頑張ります。そうすれば、いつかみんなも分かってくれるよな」

「そうだよ」

俺はうなずいた。

「いつかきつと、世の中悪いもんじゃないと思えるさ」
あてもないのに希望を持たせる。

「うふふ」

弟が笑った。

「なるほどね」

「なんだよ」

「そりゃ、こんな絵にハマるわけだと思って」

「どういう意味だよ？」

「理屈じゃないんだよ」

と、弟は言う。

「綺麗事じゃ、何も解決しないの」

「綺麗事だよ？」

「そうさ、兄貴も、その人も何も分かってない。世の中光だけじゃないんだよ。あんた達は苦労知らずだ」

「誰が苦労知らずだよ」

っていういか、お前に言われたくない。

「苦労知らずでなきゃ、世の中の醜さから顔を背けていただけの妄想野郎だ」

「なんだと？」

キレかけた俺を師匠が制する。

「妄想野郎か。そりゃ、悪かったな。でも、それだけ文句言えりゃ結構な事さ」

師匠の言葉に弟はそっぽを向く。

それから、師匠はゆっくりと視線を『つぎはぎのマリア』の方にうつした。そして言った。

「優は、これ気に入ってくれたんだよなあ」

「あ、はい。俺もこんな風に描ければって思ってたけど、どうしても無理です」

「別に、同じように描く必要無いさ。それより、この絵、なんで描いたか教えた事あったっけ？」

「うん？ ……そういえば聞いた事ないなあ」

「じゃ、教えてやろうか？」

「え？」

そりゃ、興味ある。誰だって好きなものの事は知りたいもんだ。

で「それは、ぜひ」ってうなずくと、師匠は
「じゃあ、こっちに來いよ。弟も」
と言って、俺らを倉庫の中へと導いていった。

部屋の中に一歩足を踏み入れると、畳の青い匂いに包まれる。

師匠は奥の壁にドミノ状に置かれた大小のキャンバスを指さして

「あれは、俺の昔の作品だ」

と言った。

「ここを建てる前は、母屋に置いておいたんだ」

「へえ…」

この状況下でこんな事言うのもなんだが、俺は少しワクワクした。
「見せてもらってもいいですか？」

なにしろ、俺はこの人の弟子である以前に熱烈なファンなのだ。

そんな人の作品なら見たくないわけないだろう。

「もちろんいいさ」

と、師匠はうなずいた。そして俺の後ろにぼーっと突っ立っている弟に向かって言った。

「お前も見てみろよ。そのためにここに入ってもらったんだから」

『そのために？』：なんだか意味ありげだ。けどまあ、そんなことどうでもいいや。俺はうきうきとキャンバスを手にとる。どのように美しい世界が展開されるんだろうと。

ところが、そこに描かれていたのは、俺の予想もしない世界だった。

1枚目のキャンバスには、制服を着た骸骨の群れが居た。それは今にも襲いかかりそうにこちらを見ていた。

2枚目のキャンバスには、全身を蜘蛛の巣で覆われた男が苦悩する様が描かれていた。

3枚目のキャンバスには、刃を持つ父の下で嘆く母子が居た。

俺は啞然としてそれらを見つめた。…なんだ？ この異様な世界

は…！　しかし、予想を裏切られたと感じる一方で、奇妙な事に俺はそれらを見た事があると思った。

と、突然。背後から幽鬼のごとき声がした。

「なんだ。まともな絵も描けるんじゃない」

振り返ると、弟が青白い顔で俺を見下ろしている。奴は俺の横に正座すると、他のキャンバスも次々に開けていった。

そこに、展開されるのは、今の師匠の作風とは似ても似つかぬ、暗くて救いのない世界ばかりだった。世界観だけではない。色使いはもちろん、タッチも今とは真逆である。神経質にすら思えるほど繊細かつエキセントリックなそれらの作品は、同時に作者のおそろしい非凡さも感じさせた。それにしても、やっぱり、これらの作品をどこかで見たおぼえがある。気のせいではない。はっきりと覚えている。しかし、どこで見たんだろう？　それが思い出せない。俺は必死で記憶の糸を辿った。やがてたどり着いたのは、騒ぎ立てるリポーターと、青ざめた若い男の姿だった。そして、俺は思い出した。

「松坂牙城…！　これは、松坂牙城の絵だ！」

俺の叫び声に弟が…それ以上に師匠が驚いた顔をする。

「お前、知ってるのか？」

「知ってますよ。俺だって絵書きの端くれだもん。これ、松坂牙城の絵でしょう？　確か20年ぐらい前に心中事件起した…」

「心中？」

弟が俺を見た。

「そうさ。その事件をきっかけに画壇から消えちゃった天才画家だよ…」

と、そこまで喋くって、俺は「あれ？」と首をかしげる。

「でも、これが師匠の昔の作品ってことは…」

と、師匠の顔を見ると、師匠はこの上なくバツの悪そうな顔をして…

「そうだよ。松坂牙城は昔の俺の雅号だよ」

と、うなずいた。

「嘘でしょ？」

感動のあまり、体が震える。なにしろ、牙城の名はいまや若い画家の間じゃ、ちょっとした伝説になっているんだ。しかし、師匠にとっちゃそんな俺の感慨など有り難迷惑らしい。

「そんな顔するなよ。俺にとっちゃ不名誉な過去なんだから」と、渋い顔する。

「師匠にそうでも、俺にとっては…。それにしても、本当に今と全然作風違うな。今の師匠の作風ってもっとのびのびとしたタッチじゃないですか」

「そりゃ、お前…そこにあるのは俺が右手で描いた絵だもん」

「右手で!？」

ちよつと驚く。確かに、師匠はいつだって左手で絵を描いているが…。

「それだけで、こうも違うもんですか？　っていうか…この細かさは、俺の作風に近い気がする…ああ、もちろん、全然レベルは違うけど」

「だから、お前が売ってた絵に目を止めたんだよ」

「なるほど」

世の中、何がどう繋がっているか分からないもんだ。しきりと感心していると、師匠は俺の隣の弟に声をかけた。

「どうだ。弟君よ。それが、俺の昔見てた世界さ。表の絵と全然違うだろう？」

弟は「うん」とうなずいた。そして、

「これ、あんた？」

と、キャンバスの中で母子に刃を向けている男を指さす。

「違う」

師匠は首を振り、

「それは俺のオヤジだよ」

と答えた。

「え？」

俺と弟は同時に師匠を見た。

「父親？」

弟が不思議そうな顔をする。

「父親が刃を持ってるの？」

「そうさ」

師匠はうなづく。すると弟はその絵を手にしたまま尋ねた。

「：この中に、あんたはいるの？」

「ああ。いるとも」

師匠はそう言うのと、母親の手の中の少年を指さした。

弟がぎよっとする。驚いたようだ。もちろん、俺だって。

それから、師匠はさらに別のキャンバスを指さして言った。

「そして、この蜘蛛の巣に覆われて苦しんでいるのも、俺。こっちの骸骨の群れは級友だ。いつかみんなして『俺に』襲いかかってくる」

「意外ですね。師匠にもこんなネガティブな面があったなんて」

「そりゃ：誰にだってあるだろう？」

「いや、なんとなく師匠にはない気がした」

「気がしてるだけさ。人間なんて色んな面を持ってて当たり前だろう」

「そっか」

分かっているのに、ついつい相手を何かの型にカテゴライズしたがるのは悪しき現代病だな。

と、弟が言う。

「あんた、実の父親に殺されかけたって事？」

「いや」

師匠は首を振った。

「俺は実の父親を知らない。それは義理の父親だ」

「殺されかけたの？」

「いや、それはただの比喻だよ。けどまあ、精神的にはまさにその絵のままだった」

「それって、まさか…」

言いかけて言いよどむ俺の言葉を後を弟が引き受ける。

「虐待されてたの？」

師匠はうなずいた。

俺も弟も、返す言葉を失った。

言葉を失った俺達に向かい、師匠は淡々と話を続けた。

「俺は実の父親の顔を知らない。母親は今で言うバツイチの再婚だった。」

：しかし、つくづく下らない男をつかんだもんだ。ロクに働きもしないで家でゴロゴロして酒ばかり飲んでいる。俺は物心つく頃から義父に毎日殴られて育った。当時は離婚する家庭自体が珍しかったから、俺の家の事情はすぐに噂の的になった。おかげで教師にも同級生にもバカにされ、いじめられ、孤独で世の中を恨んでいた。そんな中で唯一の楽しみは絵を描く事だった」

それは、初めて聞く話だった。なぜなら、師匠は昔の話をあんまりしたがらなかったからだ。

「俺は怒りや恨みを全て絵にぶつけていた。そうやって、心のバランスを取っていたんだ。聞いた話では俺の実の父親も売れない絵描きだったという。血は争えない。絵だけは教師も目をみはるほどに上手かった。それで俺はいつも思っていた。『いつか、有名な画家になって、この不幸な世界から抜け出してやる。俺ぐらいの才能があれば絶対にできるはずだ』と。」

その願いは案外早く叶えられた。俺は十代にして画壇にデビューする事ができた。そして俺は一躍有名人になった。すると、俺を虐めてた連中が手の平を返して御機嫌をうかがってくるようになった。絵は描くだけ売れ、金も有り余るほど入ってくる。その頃ようやく母親も義父に見切りをつけ、やっと母子二人の家族らしい生活ができるようになった。世界は一変した！俺は有頂天になった。これで、望み通り不幸な世界から抜けられた…！　と思っただ。　

ところが、喜びは長く続かなかった。

どんな素晴らしい生活も、いつまでも続けばあたりまえの日常に

なっていく。日常に戻れば夢も醒める。そして、ある朝突然気付いてしまったんだ。『何も変わっていない……!』と。

何が変わっていないかって？ それは心の空虚さだ。

なぜ空虚かって？ それは信じられる人間が周りに居なかったからさ。

なにしろ、俺の名前に引かれて近付いてくる奴らは下品な金の亡者ばかりだったし、俺のファンと称する奴らは、自分達の理想像を押し付ける偶像崇拝者ばかりだった。

画家になっても、相変わらず世界は狭くて、息苦しいばかりだ。俺は次第に苛立って来る。こんなはずがない。なんで何も変わらないんだ？

そんな時、義父と離婚したばかりの母親が、早々と次の男を見つけて出て行ってしまった。

その頃は毎晩ほとんど眠れたことがない。群集が俺を殺しにくる夢ばかり見るからだ。それは、仕事関係の奴だったり、ファンだったりしたが、最後は必ず学生時代オレを虐めてた連中と、義父の姿に変わった。

おいつめられて、どこにも逃げ場はない……! そんな思いで目がさめる。そんな夜がずっと続いた。そして、寝不足と疲労で俺は次第にノイローゼになっていった。

その頃の俺の唯一の安らぎは、中学から付き合い合っていた女という時だけだった。彼女も複雑な家庭の娘で、同じように孤独だった。

彼女は音楽をやっていて、創作を通じてお互いに引かれあっていた。ある日俺は彼女に言った。『もう疲れた、2人で死のう』。半分冗談のつもりだったが、彼女が嬉しそうに『いいよ』と答えたから、それで全てが決まってしまった。その日の夜中には二人で車で山に向かった。

あの時の奇妙な高揚感は今だに忘れられない。俺達はワクワクし

ていた。音楽を鳴らしながら猛スピードで走って行く。世界がどんどん闇の中を過ぎ去って行く。うねる道を山頂へと向かい、急カーブでアクセルを踏む。

そして、俺達は、崖から車ごと落ちた。

どれぐらいの高さだったのかな？ 気がつく、俺は花の中にいた。すぐ側に彼女が仰向きに横たわっていて、足元で車が炎上しているのが分かった。その炎のおかげで、夜だというのに辺りがはっきり見える。そこは、一面の花畑だった。それで、てっきり、もう死んだのかなと思ったが、まだ生きている証拠に体のあちこちが痛い。俺は彼女に聞いた『生きているか？』そしたら『生きてるよ』と返事があった。それから『でも、もうダメだと思う』とも聞こえた。俺は、まだ元気が残っていたから、上半身だけ起して、彼女の側に這い寄って行った。見ると、ガラスの破片で彼女は体中が傷だらけになっていた。俺は彼女の手をとった。『大丈夫か？』って聞いたら、彼女は『痛い』と涙をこぼした。俺は『しっかりしろ』と彼女を励ました。すると彼女は『バカだね、死にに来たんでしょ？』と笑った。『ごめんな。こんな目にあわせてごめんな』と謝ると、彼女は首を振った。『何言ってるの？ 私嬉しかったんだよ。あんたが有名になっちゃって、私、世界に一人ぼっちで取り残されたいな気分になってたのに、最後は一緒に行こうって言うてくれた。だから、すごく嬉しかったんだよ』そう言って笑いながら泣く。

なんて事をしてしまったんだろう？ と、その時初めて思った。俺も彼女も不幸だった。でも、2人で生きれば幸せになれたかもしれないのに…。

しかし、後悔先にたたずだ。足元で車が爆発し、勢いよく炎が燃

え上がった。俺は、突然『死にたくない』と思った。『彼女と一緒に幸せになりたい』と。そう思った途端、世界中が光った。大袈裟でもなんでもなく、本当に光ったんだ。そして、花も、彼女も、木々までもがやけに鮮やかに美しく見えた。それは、不思議な光景だった。けど、長くは続かなかった。すぐに意識を失ってしまったからだ。

気がつくと、病室にいた。

彼女の死についてはしばらく隠されたが、動けるようになるにつれ、耳に入ってきた。

初めは、言い様のない虚脱感に襲われた。

次に、深い悲しみに包まれた。

最後に、恐ろしくなった。

彼女を失った俺の目の前に、果てしなく人生が広がっている。

これから、どう生きようか？

2度と死ぬ勇気はもてない。

絵も、描きたくない。

絵は、長い事俺にとっての逃げ場所だったが、少しも自分や周りの人間を幸せにしないのなら、描かない方がいい。

それから俺は、絵を捨てた。松坂牙城の名も捨て、普通に就職した。人生をやり直すつもりだった。

しかし、誰にでもできるはずの会社勤めは、俺にとっては拷問以外の何ものでもなかった。時間に縛られる事も苦痛だったし、少しも尊敬できない奴に頭を下げるのも腹立たしかった。人とぶつかる事を避け、上手くやる事ばかりやる同僚達を見ては、何がおもしろくて生きているのかと内心軽蔑の眼差しを送っていたもんだ。

人を軽蔑していた俺は、人に軽蔑し返された。そのせいか、噛み違えた歯車みたいに、何もかもが上手く行かなかった。そこでも俺は孤独だった。疲労もあり、精神的にも肉体的にも追いつめられて

いった。単調で重苦しい日々が果てしなく続いた。こんな日が続くぐらいなら死んだ方がマシだと思った事もある。

それでも、死ななかったのは、贖罪のためさ。罪を犯した俺は、存分に苦しまなきゃいけない。しかし、生きるためには自分を殺さなければいけないかった。俺は若い頃に培った主張もこだわりもポリシーも抑え、ひたすら相手を受け入れる事に徹し、一日一日積み重ねるようにして生きていった。

ところが、そうしているうちに、思いもかけない景色が見えて来た。

くだらないと思っていた事にも理由があるし、理不尽だと思って居た相手にも理不尽なりの理由があると気付きはじめたんだ。

たいした発見じゃないが、たったそれだけの事に気付くために膨大な時間を費やしてしまった。

そんな頃、今のかみさんに出会った。

きっかけは、絵さ。あいつの趣味は絵画鑑賞だったんだ。といっても、見るだけで描かない。

幸せな家庭に育った平凡な奴だが、明るくてこだわりがなくて一緒にいると妙に居心地がいい。それで、気付いたら結婚する事になっていた。

一緒になる時、俺はあいつに、過去に起きた事の全てを打ち明けた。重い過去にも関わらず、あいつは理解してくれたようだ。

長女が産まれた時「絵を描いてくれない？」とあいつが言った。

娘の絵を描いて欲しいというんだ。俺は了解した。もちろん本気で描くつもりはなかった。ほんのお遊び程度に描くつもりだった。

ところが、絵筆を取り白い紙に向かうとほとぼしるように暗いイメージが湧いてくる。忘れたつもりでも、俺の右手は何もかも覚えているんだ。あの、『陰鬱な世界』を。

悩んだ末、俺は左手で描く事にした。左手では、右手で描く程早くも上手くも描けない。それで俺は初心に返り、モチーフを無心で観察して、できるだけ正確に線や光を写し取ろうとした。しかしど

れだけ丁寧に描いても、右手でやるような正確な線は描けない。にもかかわらず、仕上がった絵を見て驚いた。それは、今までの俺にはとても描く事ができないような美しい世界だったからだ。

いつしか俺は描く事の面白さを思い出していた。子供の頃そうしていたように、仕事の合間にスケッチブックを持ち写生に出かける。あの頃と違うのは、今度は自分のためでなくて家族のために描くことだ。だから、モチーフもなるべく家族が喜びそうなものを選んだ。例えば、道ばたの花や、田舎の風景、夏の海に、川辺に咲くすすき……。探せばどこにでも描けるものはある。

そんな風に何枚も描いて行くうち、ふとこんな疑問を持った。

『どうして昔の俺は、あんなに汚い世界に生きていたんだろう？
春に咲く花も、夏の木陰も、秋の夜の月も、澄み切った冬の空も……この世界には、こんなに美しいものがあふれているというのに……』

その答えはすぐにみつかった。

『簡単な話さ。不幸な人間には、美しいものを美しいと感じる余裕がないからだ』

……じゃあ、どうして俺は不幸だったんだ？

『孤独だったからだ』

……彼女が居たのに？

『そういえば、そうだな』

それで分からなくなる。

『どうしてあの頃と今じゃこんなに生きている世界が違うんだろ
う?』

そんなある日、一人の画商が訪ねて来た。なんでも、どこやらで俺の絵を見かけてえらく気に入ったから、個展を開いてみませんかという話だった。

もちろん断わった。

理由は？

決まっている。俺は、二度と本気で絵は描かないと誓ったんだ。

しかし、彼はしつこかった。何度でも訪ねて来た。あまりにもしつこいから、ついに俺は自分が松坂牙城だった事や、心中の一件を打ち明けて、二度と本気で絵は描かないつもりなんだと告げた。

ところが全て聞き終えた彼は『それなら、なおさらあなたは描くべきだ』と言う。それでも拒否すると、ついに彼は怒りはじめた。

『あんたは、何十万もの人間がのどから手が出るほど欲しくても与えられない才能を持っているくせに、それを放棄するのか。だったら、本当にそれを必要としている人にくれてやりなさい。誰にもくれてやれないなら、あんたは描くべきだ』と。

俺は言い返した。

『才能があるって？　そういつてくれるのは嬉しいよ。自分ではそれほどでもないがね。第一、才能があるからなんだっていうんだ？　人より偉いんでも？　冗談じゃない。俺は絵を捨ててから色んなものを見たよ。絵なんか描けなくなつて立派な人間はいくらでもいる。一日一日を幸せに過ごせる才能がどれだけ貴重なものか知ってるのか？　それが無いのがどんなに辛いかわかってるか？　俺はそれがないがために、血を吐くような思いをしなくちゃならなかったんだ』

『誰も、絵が描けるから偉いとは言っていない。誰にだって与えられた天分と言うものがある。それは良いものでもある反面、悪いもの

でもある。時には自分を苦しめもする。しかし、結局はそれと共存しなくちゃならない。あんたは、たまたまそれが絵を描く才能だったってことだ。それは変えようのない事実だ。にもかかわらず、描かないっていうのなら、あんたは自分から逃げるって事だよ。この先、画家としても、一人の人間としても、中途半端な生き方しかできないだろう』

その言葉は、俺の中に眠っていた何かを呼び覚まさせた。しかし、それが何なのかは言葉にできない。それで俺は反駁した。

『確かにあんたのいう通りかもしれない。絵は俺にとって生きる事そのものだった。絵を捨てた後も、俺の手は目の前にある風景を無意識に描写したがついていたさ。俺の頭の中はいつもキャンバスと画材で一杯だと言ってもいい。けど、絵が俺を導いたのはどんな世界だった？』

子供の頃は単に描く事が好きで描いていた。少し成長すると、それは不幸な現実から逃げるための手段に変わっていった。現実から逃げられた後は、俺を苦しめるものになった。なぜなら『現実からは逃げられない事』が証明されたからだ。あぐくの果てにどうなった？ 一人の人間を殺してしまっただけじゃないか？』

俺の言葉に、彼はしばし沈痛な面持ちをみせた。それでも言葉は止めない。

『あんたを破滅に導かせたのは絵じゃない。あんた自身だ。絵はあんた自身を表現するだけさ。世界を作るのはあんただ。現実からは逃げられないが、現実を変える事ができる。現にあんたは既に変えただろう？』

『俺が世界を変えただって？』

結局その日、彼には帰ってもらったが、その言葉はずっと心の中にひっきり続けた。：俺が現実を変えた？ そうなんだろうか？ 確かに今の俺を取りまく世界は、あの頃のように悲愴ではないが。そして謎めいた彼の言葉は、俺の心に希望の灯をともした。：もしかして俺は許されたんだろうか？ ：それは僅かな風にも消え入りそうになすかな光ではあった。がしかし、もし許されたのなら、もう一度絵を描きたい。ここに至り、やっと自分にとってどれ程絵が大切であったかを痛感する。

ある日、俺はついに決心した。

そうだ、過去と向かい合おう。長年俺を苦しめ続けた悪夢、俺に絵を捨てさせたあの夜の出来事と向かい合おう。そうすれば、答えが分かるかもしれない…。そして俺は左手に筆を握りキャンバスに向かった」

そこまで語ると、師匠は入り口の方を振り返った。ここからは見えないが、そこには、あの『つぎはぎのマリア』が置いてある筈だ。

「あの夜の出来事は、ずっと俺を苦しめ続けていた。日中は、まだましだ。他事に忙殺されて考えるヒマもないのだから。けれど、夜ごと俺を苦しめる。その悪夢を、俺は白日の元に晒す事にした。キャンバスに向かい、日の光の中であの日の事をゆっくりと思い出す。それは気の狂いそうな作業だった。けれど、正確に思い出さなければ絵にはできない。俺はあの日車に乗った時から気を失うまでの状況を、映画の一コマ一コマを追うように思い出していった。

車に乗り込む二人。ハンドルを握る俺。やたらと楽しげな彼女。音楽をかける。アクセルを踏み込む。景色が飛んでいく。

あの時、二人はワクワクしていた。この世界から消えられる事に興奮していた。この最悪な世界。醜くて、暗くて、歪んだ世界。誰も信じられない世界。それら全てが窓の外を過ぎ去り、やがて闇の

中に消えていく。

そこまで思い出した俺の頭の中に例の画商の声が響いてきた。

（あんたを破滅に導かせたのは絵じゃない。あんた自身だ。絵はあんた自身を表現するだけさ。世界を作るのはあんただ）

一瞬のフェイドアウトの後、車は崖から落ちる。

キャンバスの前の俺は、その後の出来事を丹念にキャンバスに写しとっていく。

一面の花畑、その中に眠る彼女。

その姿を描きながら、俺は彼女に語りかけた。

…どうか俺を許してくれ、あんな目に合わせた俺を許してくれ。
一人のうのうと生きのびてしまった俺を許してくれ。

すると、記憶の彼方から彼女の声が聞こえて来る。

…気にする事ないよ。これは、あたしも望んだ事だもん。これで良かったんだよ。逃げてでも逃げてでもつきまとう苦しみを振り払うためには、死ぬより他に仕方なかったんだよ。

…そうだよな。

俺は彼女に答える。

…あの頃、俺達を取りまく世界は、それほどに醜くて汚なく思えたんだ。

なにしろ、俺の名前に引かれて近付いてくる奴らは下品な金の亡者ばかりだったし、俺のファンと称する奴らは、自分達の理想像を押し付ける偶像崇拝者ばかりだったし、その上、義父と離婚したばかりの母親が、早々と次の男を見つけて出て行ってしまった。画家になっても、相変わらず世界は狭くて、息苦しいばかりだった。

『でも、本当にそうか？』

俺は彼女の体に肌色をのせながら思った。

『本当にあの頃世界は醜かったのか？』

そして彼女の唇を赤く染めながら思った。

『本当に世界は汚かったんだろうか？』

彼女の体に傷を入れながら思った。

『本当に誰も信じられるものがいなかったんだろうか？』

俺の目の前でどんどん彼女が出来上がっていく。記憶のままの美しい彼女だ。青白い顔で目を閉じて笑ってる。そして俺は、もう一度彼女に問いかけた。

『なあ、あの時の俺には本当に誰も信じられるものがいなかったのかな？』

すると、どこから誰かの答える声が聞こえた。

『仕方ないわよ、人間は弱いものだから…』

彼女の声じゃない。しかし、その声、そして言葉には聞き覚えがあった。どこで？

記憶の糸を辿りながらふと見たキャンバスの彼女の顔に、カミさんの顔が重なって見えた。それで『ああ、そうか』と思う。

そうだ、あれは結婚する前、俺が過去の事を告白した時に、カミ

さんが俺に言ったセリフだ。あの頃の俺は誰とも結婚する気はなかった。それは全てあの夜に犯した罪のせいだ。俺を赦してくれる人間がいるとは思えなかった。だから、あの時俺はあいつに全てを打ち明け『俺は最低な男だから…』と…暗に軽蔑しただろ？ だったらさっさと早く見切りをつけてくれって気持ちを含めて言った。したらあいつは答えた。

『仕方ないわよ、人間は弱いものだから…』

そう言われた瞬間、体が軽くなるのを感じた。まるで長年背負い続けた重い荷物を降ろしたようだった。あの時、俺は救われたんだ。そして世界は一変した。

考えてみれば、あの頃俺は人を赦す事を学んでいたんだ。それは同時に自分を赦す事でもあった。ずっと自分に向けていた刃を降ろした時、少しづつ他人の弱さを受け入れる事ができるようになって来た。

そうだ、人間は弱いものだ。だから、狡くも醜くももなる。けれど、それだけじゃない。強くて優しく素晴らしいものも同時に持っている。どちらを引き出すかは己自身だ。醜さには醜さが返ってくる、優しさには優しさが返ってくる。今すぐに返らなくても、いずれは返ってくる。今ここにいるのは、過去の自分が造り上げた自分なのだ。

『そうか』

それで俺は気付いた。

『牙城だったころも今も、世の中自体は何もかわっちゃいない』

ただ、あの頃の俺は他人の罪を許せず、他人の醜いところばかり

に目を向けていた。この世の人間の全ての醜いところしか見出せなければ、人間で構成されたこの世界は醜く染まらざるを得ないだろう。そして、他人に潔癖さばかりを求める俺は、実は誰よりも自分に対する理解を求めていることにも気付く。自分も他人に赦されてこの世に存在しているちっぽけな点でしかないというのに、俺は誰も赦そうとしていなかった。

それは一つの発見だった。しかし、同時に激しい悔恨の波が押し寄せてくる。そんな事のために、俺は彼女を殺してしまった。しかし、今さら悔やんでも、何も返りはしない。俺は祈りを込めて彼女に十字架を抱かせた。

…神よ、彼女に永遠の安息をあたえたまえ、絶えざる光もて照らしたまえ…」

31 (前書き)

先ほどアップした際、同じ文章を2まわりコピーした物をあげてしまったので修正いたしました。
失礼しました；

「世界を創るのは自分自身だ。絵を描いていたから破滅したんじゃない。俺の持つ世界観そのものが俺を破滅に導いたんだ。」

そう悟った俺はあらためて画家として生きる事を決意した。

しかし、過去の俺とは違う世界を描きたいと思った。その決意もこめて、雅号を菊地大成と改めた。

それからは堰を切ったように描いたさ。

それは、まるで欠けたパズルのピースをはめ込んだようなしっくりとした気分だった。そして気付いた。俺にとって絵は欠くべからざる物だったってことを。恨みのためでも、逃げのためでもない。俺はただ描きたいから描いているだけということにな……」

そこで、師匠は言葉を終わらせた。

正直ショックだった。色んな意味でショックだった。

第一にショックだったのは、師匠にそんな重い過去があったって事だ。この人は、かつてそんな暗さを微塵も感じさせたことがない。第二にショックだったのは、俺自身についてだ。師匠が絵に対して持つ程の情熱を果たして俺が持っているのだろうか？ それ以前にもっと根本的な問題として、俺にそれほどの才能があるんだろうか？

一方、弟はといえば醒めたもんだった。

「あんたの苦労話は分かったよ。でもそれが何だっていうの？」

と、こうだ。

すると、師匠は言った。

「つまり、俺の絵はただの綺麗事じゃなくて、本当に綺麗なんだと言いたかったわけさ」

なんだそりゃ、師匠……って思わず突っ込みたくなるが、よく見れば弟はやけに神妙な顔をしていた。あれでも何か感じる場所があったのかもしれない。

その晩はとりあえず泊めてもらい、次の日帰る事にした。

夜、寝室に行くと、弟が布団の上であぐらをかいて天井を見ている。

「まだ、寝ないのか？」

と、尋ねると、返事のかわりに咳をする。

「先に寝るぞ」

って布団に潜り込むと、弟が言った。

「なあ、兄ちゃん。昼間のあいつのあの話は、一体何が言いたかったんだろう？」

そんなの本人に聞けよと思うが、一応親切に答えておく。

「そうだな。ようするに、この世は自分の意識の持ちようでもうにでも変えられるっ事じゃないかな」

「でもさ。俺みたいに人から裏切られて踏み付けられた奴が世界を変えるなんてできるのかな？」

「……そうかな。やってみなきゃ分からないけど……できるんじゃないのか？ 師匠がいいお手本だ」

「けど、俺を苦しめた連中を許すなんてできそうもない」

「……できなくても、生きていきたいなら、恨みも何もかも忘れて自

分が白紙になるしかないんじゃないのかな？」

「無理だよ」

「でも、そうしなければお前に未来はないと思うぞ」

「でも、無理なんだ。許すとかそういう事以前に、怖くて仕方がないんだ。俺ね、こっち来てから練習を兼ねて何社も面接に行ったんだよ」

「え？」

俺は布団の上に起き上がると、弟の方を見てあぐらをかいた。

「職探ししてたって、そういう意味だったのか」

「そうさ。俺、兄ちゃんが川に落ちて死にそうになった時、つくづく自分に嫌気がさしたんだ。それで、どうしても立ち直りたくてここまで来た。でもダメなんだ。面接会場に行っても、どうしても扉が開けられないんだ。怖くて仕方ないんだよ。兄ちゃん、俺どうすればいいんだろう？」

「そうだったのか」

俺は泣きそうになった。何とかしてやりたいと思う。しかし、どうすれば良いんだろう？ 分からない。分からないなりに考え、答えを出す。

「きつとさ、お前の場合、人を許す前に自分を許す方が大事なんだと思う」

「自分を？」

「そうさ。お前は心無い連中に投げかけられた言葉のせいで、きつい負の暗示にかかってしまっている。その暗示を解いていくんだ」

「…どうすれば解ける？」

「そうだな。とりあえず…否定的な言葉が浮かんだら打ち消す事だ。いいか、俺はお前のクラスメートなんかより、よほどお前の事を知っているが、お前はどこにだっている普通の奴さ。誰に恥じる事もない人間だ。俺の言葉を信じろ」

口からでまかせだ。けど、今の俺にはそれより言うべき言葉が見つかからない。それでも、弟にとってはなぐさめになったのだろうか。

ようやく布団にもぐり眠る気になったようだ。奴は、向こうむきに寝転がるとボソリと言った。

「なあ、兄ちゃん。神様っているのかな」

「え？ うーん、どうかな？ いるような気もするし、居ないような気もするなあ」

「もしいるならさ、なんで俺みたいな不良品つくったかな？」

「不良品？」

「そうさ。何の役にも立たない不良品さ」

「馬鹿やろう。言ったら？ お前は不良品なんかじゃない。どこにでもいる普通の奴だよ」

「そうかな…」

「そうさ」

「ありがとう」

そう言うときそれきり弟は黙ってしまった。しばらくすると寝息が聞こえてくる。どうやら眠ったらしい。しかし俺は眠れず、散歩がてらアトリエに向かう。最後にもう一度、あのマリアを見ておこうと思ったからだ。

アトリエに行くと、なんと師匠が居た。

ちょうど、あのマリアの絵を壁に立て掛け、その前で黙然と座っている。

「師匠」

と声をかけると、驚いて俺を見た。

「ああ。優か。弟の様子はどうか？」

「なんとか、眠ったようです」

そう答えると、俺は師匠の隣に腰を降ろした。

それからしばらく師匠と二人でぼけっとマリアを眺める。やがて師匠がぼそつと言った。

「弟、立ち直れるといいな」

「そうですね」

俺はうなずく。

「どうなる事か……。でも師匠の話しには感じるどころがあったみたいですよ」

「そうか？ 醒めてなかったか？」

「上辺はね。でも今さっき真剣に尋ねて来ましたよ。あの話はこういう意味だったのかって」

「そうか」

「あいつの事もだけど、俺こそ……」

「うん？」

「俺、絵を続ける事迷っちゃうな」

「何で？」

「俺、師匠みたく才能ない事が分かっちゃったし」

「そんな事ないと思うぞ」

「お世辞はいいです」

「世辞じゃねえよ」

「いいですってば。自分の事は自分で一番良く分かってるから。でもね、だからって今の生活続ける事には耐えられないんです。何だか、自分が自分でないような気が日に日に強まって、もうたまらないんです」

「人間究極自分の好きなように生きるしかねえよ」

「……そうですかね？」

「そうさ。それが自分の人生を生きるって事じゃないかと思うぞ」

「そうなのかな……」

師匠と話しても迷いは深まるばかりだった。

次の朝、俺は弟とともに東京を離れた。夕べ眠れなかったせいか、新幹線の中でついうとうとと目を閉じてしまう。

すると、闇の中にマリアの絵を眺めてる師匠の姿が見えて来た。一体、何を思っただけで眺めているんだろう？ 苦々しい過去の傷は、本当に癒えてるんだろうか？ 果たして人生に、本当に『解決しま

した』なんて言い切れる事があるんだろうか？　その謎は今の俺には解けそうもないが、

ただ一つだけはっきりと分かった事がある。あのマリアの絵は、師匠が生と死のはざまで見えた光の記憶だったんだ。だからあれ程美しいんだろう。：そんな事を思いながら、俺は眠りに落ちていった。

光の中にいる時、人はその明るさに気付かぬものだ。けれど、闇の中にいると、人はわずか一条の光にさえ満幅の輝きを見ようとす。にもかかわらず人は闇にとらわれる。それは、彼が彼自身に課する罰である。罰は、罪を呼び寄せる。そして、罪は新たな罰を彼自身に課す。その連鎖は永久に続いて行く。それを断ち切りたければ、自分が罪人であるという意識を捨てるよりない。自分だけでなく、本来誰にも罪などないのだ。目を背けているのはいつも彼自身である。光の世界はいつもすぐ側で扉を開き、彼が来るのを待ち詫びているというのに。

32

目覚ましが鳴った。

6…30だ。もう起きなくなてはならない。今日は大切な日のだから。

布団から身を起す。3月下旬。まだ寒い。ひやりとした空気に包まれ、思わず身震いする。そして、…

…大丈夫だろうか？

一抹の不安がよぎる。

…どうか大丈夫であって欲しい。

と願いつつ、服に着替え階下へ向かう。

テーブルの上には朝食が用意されていた。

目玉焼きにサラダが二人分。

オヤジが起きるのは、いつも8時過ぎだから、これは俺と、弟の分だ。おふくろはオヤジを待って食べる。

「正は、起きて来たか？」

おフクロに尋ねると

「まだ」

との返事。

「果たしてちゃんと起きてくるのかなあ？」という言葉を読みこみ、俺はリモコンのスイッチを入れた。顔なじみのキャスターがニュースを語っている。6..40の表示を見ながら、俺は朝食をかきこんだ。

と、その時、トントン…と、背後から足音が聞こえてきた。心臓が1度だけ大きく鼓動を打つ。飯を飲み込み振り返ると、弟が立っている。

「…オス」

箸を持ったまま右手を上げると、弟は黙って向い側に座った。

それから、俺達は無言で朝食を済ませ、顔を洗うため、順番に洗面所へ向かう。

7..30

チャイムが鳴った。

おフクロが玄関に駆けていく。

「おはようございます!」

元気な声が聞こえる。

みーさんの声だ。

どうやら、約束通り来てくれたらしい。

俺は大きく息を吸い込むと、ソファに埋もれていた弟の肩を力強く叩いた。

「ほら! 行くぞ!」

「ああ…」

弟はうなずくと、ソファからゆっくり立ち上がった。

家から三婆沙メタル株式会社までは、歩いて20分ほどの距離である。

今日から俺達はそので働くのだ。

そう。俺達はそので働くのである。

つまり、俺は元いた工場に出戻ると言うわけだ。

そうになった理由はいくつかある。

まず、俺がつい先日まで働いていた工場だが、年末に入院して1カ月も休んだ上、弟さがしで半月も休んだために、すっかり信用をなくして結局クビになってしまった。

そんなわけで困り果てていた時、弟が『働きたい』と相談を持ちかけて来た。それは、あの東京への旅から1週間後の事だった。あれ以来、弟はすっかり心を入れ替え、部屋から出るようになった：：わけでもなく、相変わらずほとんど一日部屋に閉じこもっていた。それで、相変わらず3食俺が運んでいたわけだが、その日に限り、自分からドアを開けて「相談があるから、入って来い」と俺に言う。驚きつつも、言われるまま部屋に入って「なんだ？」と尋ねると「俺、やっぱり働こうと思う」と言う。

「そうか」

と、俺はうなずいた。同時に嬉しくなった。あの旅行も無駄じゃなかったってことだ。

「じゃあ、早速明日から職安へ行くか」

身を乗り出した俺に向かい、弟は人さし指をたてこう言った。

「でも、一つ条件がある」

「条件？」

：：なんだ？

「面接を受けなくても入れる会社はないか？」

：：そんな会社、あるわけがない。

しかし、奴の働きたいという願いはどうしても叶えてやりたかった。せつかく芽吹きかけた希望の芽である。なんとか大きく育ててやりたい。それで、俺は3日3晩考えた。しかし、なかなか良い知恵が浮かばない。

そんなおり、みーさんから電話がかかって来た。それで、俺がまた仕事を辞めてぶらぶらしている事を告げると、

『じゃあ、うちの会社に戻って来ないか』

と言ってくれる。なんでも、とある部署のパートさんの間でもめ事がおこり、大量に人が辞め、人手不足で大変な事になっているそうなのだ。

気持ちがありがたかったが、少々迷惑な申し出でもあった。なぜなら、次の転職はちゃんとした会社に入ろうと思っていたからだ。しかも、ここではない場所で…。

ところが、断わろうとした俺の頭に、突然閃くものがあった。「そうだ!」。俺は叫んだ。そして早口で尋ねた。

「人手が足りないって事は、2人同時に勤める事はできるのかな? もし、いいなら、俺ともう一人セットで勤めたい奴がいるんだけど!」

『え? 何って?』

みーさんの返事。どうやら、聞き取れなかったらしい。それで、今度はゆっくりと言った。

「あのね。もし、人手が足りないのなら、俺と、もう一人、一緒に働きたい奴がいるんだけど」

『ああ』

今度は伝わったようだ。

『多分良いと思うよ。明日課長に聞いてみるよ』

聞くまでもなくOKだろう。何しろ、俺はあの会社では信用があった。案の定、次の日みーさんから連絡が来る。

『優ちゃんの知り合いなら大歓迎だって』

「よっしゃ!」と俺は手を打った。

その日の夜、俺は、早速弟に聞いてみた。

「お前、俺が前にいた会社で働いてみる気はないか？」
すると、弟は意表をつかれた顔をした。

「兄貴が前に努めていた会社って…例の、リサイクル会社？」

「そうさ。あそこなら俺もよく知ってる人がたくさんいるし、仕事もそれほど難しくないし…」

「でも、面接あるんだろう？」

「そりゃ、あるさ。面接の無いところなんてないぞ」

「じゃあ、無理だ」

「そう言うなよ。あそこなら、みーさんもいるし…」

「みーさんも？」

その名前に弟は心を動かされたようだ。いい感じだ。

「そうさ」

ここぞとばかり、言葉を励ます。

「それだけじゃない。俺も、働かせてもらうつもりだ」

「あ、そう」

こちらはそっけない反応。ちよつとムカツク。が、しかし、ここで挫けてなるものか。

「それに、面接だったって形だけだよ。なにしろ、俺の弟というだけで信用があるからな」

半ばハツタリをかますと、弟はしばらく考え込んだ後、

「分かった。やってみる」

と答えた。

次の日会社に電話すると、早速面接に来てくれという。面接は思ったほど手こずることなく、俺の言通り形式だけのものに終わった。そして、1週間後に来てくれと言われ、そして今に到ったわけだが…。

正直、俺も緊張していた。
うまくいくだろうか？

今日が弟の人生の分岐点。立ち直れるか、立ち直れないかの瀬戸際なのだ。

しかし、弟はもっと緊張しているだろう。横を行く弟の顔を見る。うつむき加減。表情もみえない。

と、その時

「桜、綺麗だね」

と、みーさんが言った。

顔をあげれば川沿いに満開の桜並木が続いている。

「ああ。もう、そんな季節か」

思わず口にする俺。少しでも緊張がほぐれる。やはり、みーさんに迎えに来てもらって良かった。

「おい、見ろよ、桜が咲いてる」

俺は弟に話しかけた。しかし、奴は心ここにあらずって具合で返事もない。

そんな弟の姿を見て、
…頑張れ、弟よ…と、俺は心の中でそっ
と励ました。

そうこうしているうちに、工場に着き、鉄製の門をくぐる。

サイレンが鳴り響く。

さあ、仕事の第一日目だ。

33 (前書き)

ここより38話あたり（正確には39話前半）まで書き換えましたが、構成を少しいじっただけで、ほとんど内容に変わりはないです；以前、読んで下さった方には申し訳ありません。お時間があれば、どの辺りをどう変えたか読んで比べてみるのも一興かとおもいます。

m (| |) m ペコリ…では。 08・09・23 橘明

続「青春☆ひきこもらー」

【前回までのあらすじ】

できのいい兄貴を持った山田亜矢松…もとい、河井正は、いじめられていた親友をかばってしまった罪で、自分がいじめられるという罰を受けることになった。さらに、好きだった女子に「きもい」と言われたショックで、自らに自室監禁の刑を課したのある。そして、8年の時が過ぎ、やっと自分の罪を赦し、社会復帰する決心をしたのであった。

できのいい(?)兄としては、この物語の続きを是非とも見届けなければなるまい。

「おい、河井弟！」

フロア長のイライラした声が聞こえる。

また、弟が何かやらかしたかと、俺は電子ドライバー片手に少々うんざりする。

「お前、また日報出してないだろう？」

「すいません」

弟が答えた。

「後で出そうと思っていたんです」

「後じゃなくて、今、出してくれないかな？」

「でも、ロッカーに入れてあるんで…」

「じゃあ、今すぐ取って来い」

「でも、今手が放せなくて…」

「ちっ」

小金井さんの舌打ちが聞こえた。

「おい！ 河井兄！」

なぜ、俺にふる？

などという思いはおくびにも出さず振り返ると、小金井さんが苦々しい顔でこっちを見ていた。そして、言った。

「弟のかわりに、カゴ車を運んでやれ！」

『っえー。なんで俺があ？ 俺だって、今、手が放させないんですけどお…』

などと言えるわけないので、しぶしぶ「はい」と答えて、作業台から離れ、工場奥のカゴ車置き場へと向かった。

弟がぼやとした顔で俺の事見てる。なんだその人事な感じは。むかつくので、すれ違いざまその頭をどついてやった。

「なんで日報ぐらいまともに提出できないかな？」

昼飯時、俺は弟に説教をした。

「帰る前に、二階事務所にぼいっと置いてくるだけの事だろう？」

「だって、事務所の女ムカツクもん」

「はあ？」

「あいつら、俺を見て笑うんだ」

「笑う？」

「そうだよ。事務所中の女がぐるになっている」

「まさか。気のせいだろ」

「気のせいじゃないよ。ほら。今も笑ってるだろ？ あそこ」

そう言うと、弟はハシで食堂の中央をさした。

そこには、確かに事務所勤務の女子社員達がかたまってメシを食っている。話に熱中しているらしく、時々わっと笑い声を上げてはいるが…。

「別に、お前の事なんか笑ってないと思うぞ」

「でも、目が合ったし」

「被害妄想だよ。被害妄想。っていうか、自意識過剰だ」

「違うよ。絶対気のせいなんかじゃない」

「…大丈夫かよ？お前」

あまりの弟の強固な物言いに、俺は、少々不安を感じる。

久しぶりに穴蔵から出た弟は、人が怖くて仕方ないようだ。今だに、俺とみーさん以外の人間には馴染もうとしない。ちなみに、工場勤務開始より、そろそろ一カ月が過ぎようとしている。

「河井弟さーん」

午後の勤務。また、弟が呼ばれている。

あれは、正社員の前田君の声だ。

前田君は、24才。弟とほぼ同じ年だが、あちらはしっかりしてる上に、気が短い。

「弟さん、昨日分別の方手伝いましたよねー」

嫌みったらしい言い方だ。

「ホラ1階でのゴミの分別の作業」

「…はい。しましたけど…」

弟がぼそそと答えた。

「その時、ボンベ抜くの忘れてるでしょう？」

「…そうでしたっけ？」

「忘れてます。あのー前にも言ったと思うんですけど、ボンベを間違えて圧縮機にかけると爆発して危険なので必ず分けて下さいね」

「あ、スイマセンでした。でも、あの作業って、他の人もやってるはずですよね」

「河井弟さんの担当した所が一番異物混入多かったってクレームきたんですよ。二度手間になるから、きちんとやてくださいって」

「…スイマセンでした」

「いいです。今度から気をつけて下さい」

そのやりとりの一部始終を聞きながら俺はため息をついた。

いまだかつて、弟がどならなかった日はない。こんなに簡単な仕事なのに、どうして怒られずにできないんだろう？ そっちの方が不思議だ。大体、俺の記憶では、弟は結構器用な奴だったはずなのに。長い事穴蔵にいと、脳の回路も故障してしまうとでもいうんだろうか？

そんな事を思いながら、俺は目の前のコイルを外していく。

俺は、今、テレビの解体作業をしている。

バラされた部品は、同じ素材どうしで集められ、砕かれ、溶かされ、新しい製品として甦る。

閑話休題。2011年のデジタル放送開始にともない、ブラウン管テレビの製造は既に中止されているという。

用無しになったブラウン管テレビの運命は、うちみたいなリサイクル工場で解体されるか、もしくは発展途上国に身売りさせられるのどっちか：らしい。

そんな事情で、この先我が社に来るブラウン管テレビの数も増えていくだろうとの事。もったいないな。まだ使えるのにな。哀れな奴らだ。あれだけ人間様を楽しませてやったのに、技術革新の波に押されて、いらなくなったらポイでおしまい。諸行無常を感じる。けど、この作業は嫌いじゃない、機械の構造を見るのは俺の性分にもあっている：同じ事ばかり繰り返し替えてると、時々眠くなるけどな。

しかし、どんな仕事もそうであるように、この仕事もただやれば良いというものではない。少しでも速くやらなければならぬ。一日何台ばらせたか、毎日日報を書かされる。

企業っていうのは利益優先だからな。効率を求められるのはごく当然の事で、毎日提出させられる日報を集計し、ラインごとに成績を競わされる。

そして、うちのラインはこの一月程成績が落ち込んでいるらしく、正社員はかりかりしていた。当然である。社員にとっては、自分の出世にも関わる重要な競争なのだから。ラインスタッフ一同馬車馬のようにケツをたたかれ、ひっしで頑張っているのだが、一向に成績が伸びない。その原因は誰もが知っていた。河井正…つまり、弟の作業が遅いからだ。

「悪いね。今日は、道具類はみんな貸し出しちゃってて…」
痩せた眼鏡のおばちゃんと言う。

「え？ でもいつもたくさん置いてあるじゃないですか」
俺はおばさんに言い返した。

「それがさ」
とおばちゃんと言う。

「こないだから、学生バイトがたくさん来ているでしょう？ あの子達にみんな貸し出しちゃって…」

「それぐらいで無くなるかなあ？」

納得行かずに俺が食い下がると、後ろから弟が言った。

「もう、いいよ兄ちゃん」

「でも」

「フロア長に言えば、何とかしてくれるよ」

「そりゃ、スペアぐらいあるかもしれないけど…またどやされるぞ」
「仕方ないよ」

そう言うと、弟は、肩を落として元来た道を歩き始めた。仕方な

いので俺はおばちゃんに礼を言い、その場を去った。そして、しばらく歩くと、後ろから笑い声をする。

「？」

俺は後ろを振り返ったが、何も見えなかった。

「まったく。何でドライバー無くしたりするんだ？」

「知らないよ。いつもと同じ所に置いておいたつもりなんだよ」

「その『つもり』が良くないって、いつも言っているだろう？」

俺達は、一応各々に道具を与えられている。無くしたり忘れたりしたら、さっきの庶務課に借りに行くのだが…。

「タイミング悪かったな。無いなんて。こんな事めったに無いんだけどな…」

すると、弟がぼそつとつぶやいた。

「本当に、タイミングが悪かったただけなのかどうか…！」

作業場に着くと、既に朝礼が始まっていた。俺らは慌てて整列している同僚達の中に混じる。すると、フロア長の小金井さんがギロリと俺達を見たので「すいません」と小さな声で謝りペコリと頭を下げた。

前田君が社員代表で言う。

「昨日のうちのラインの解体台数は300台。目標の330台には全然足りていない。目標台数に達するためには、一人一日最低でも33台はバラしてもらわないと困ります。それで、うちのラインは成績が4週連続最下位なので、今日からは目標台数に達するまでサービス残業してやってもらいます」

「ええっ？」

という雰囲気フロア中に漂う。

「サービス残業がいやなら、少しでも速く作業するように。以上。今日も一日頑張ってください」

その日の作業場は、異様な緊張感が漂っていた。そりゃそうだ。

できれば、誰だってサービス残業なんかやりたくない…。俺も死にものぐるいで作業した。眠いとか言っている場合じゃない。と、その時

「河井さん！」

いきなり名前を呼ばれて驚く。

「それ順番ちがーう！」

「え？」

どこが？ 聞こうとして気がつく。俺じゃない。今のは弟が言われた言葉だ。

「ほら、まずは偏向ヨークから外さない。コイルばかり触ってもダメだって…」

見ると、正しの作業台に前田君が張りついていた。

「すいません」

弟が謝る。

「あのーマニュアルどこにやったんですか？ マニュアル見てやればいいと思うんですけど」

「あ、あれ。ここには無いです」

「ここには無い。じゃあ、どこに有るんですか？ ロッカーですか？ それなら、取って来てもらっていいですよ」

「いいえ、そうじゃ無くて…」

「どこですか？」

「家に持って帰って無くしました」

「まじですか？」

「すいません」

「そういえば、河井さん、ドライバーもなくなりましたよねえ。別に良いんですけどお、会社から渡したものにも、それなりに経費がかかってるんでえ…」

「すいません」

「ていうか、マニュアルも無しで今までどうやって作業してたんですか？」

「記憶とカンで…」

「それで、よく作業できてなしたねえ。ある意味スゴイですけど…。メモとかとってなかったんですか？」

「マニュアル有るからいいと思ってとってませんでした」

「…」

「すいません」

「いいです。マニュアル貸しますから。でも、これ僕のですから、無くさないで下さいね」

「はい。ありがとうございます」

その日、結局俺達は7時まで残るはめになった。一時間半の残業である。

すっかり暗くなった屋外に出る。川沿いの道をとぼとぼと2人で歩く。

「そう、落ち込むなよ」

俺は弟を励ました。

今日一日の出来事で、弟と来たらすっかり憔悴しきっている。正直、こっちだって疲れ切っているのだが…。

「そのうち、仕事にも前田君にもなれるって…」

弟の心理的ショックのが辛かろうと必死で元氣付けていた時、どこからか、また「わっ」と笑い声が聞こえて来た。何かと思って声の方を見ると、川べりに女子社員が固まって笑っている。

「何だよ？　こんな所で」

つぶやいた時、右手に弟がもたれかかって来た。

「どうした？　貧血か？」

尋ねる俺に弟が答えた。

「兄ちゃん。俺、ダメかもしれない。ダメかも…」
弟はぶるぶるふるえていた。

もし、神という名の作家がいるのなら、そいつはそうとうのひねくれ者に違いない。容易にハッピーエンドは見せたがらないようだ。

「おい、正、正」

午前7時15分。弟の部屋のドアをノックする。

「そろそろ起きないと遅刻するぞ」

しかし、返事が返って来ない。

「おい、正」

俺はしつこくノックした。それでも弟は出て来ない。仕方がないので、扉を開けて中に入ると、弟は、まだ布団の中にもぐっていた。

「おい、起きろよ。遅刻するぞ。それとも体調でも悪いのか？」

すると、弟が答えた。

「うん。腹が痛い」

「カゼか？」

「多分、そうだと思う」

「大丈夫か？」

俺は、昨日の弟の様子を思い出し不安になった。

「本当にただのカゼか？」

「そうだよ。多分一日寝れば治ると思うから、大丈夫だよ」

「そうか…」

弟の言葉を信じて、俺は仕事に向かった。

『弟さん、大丈夫？』

その日の夜、久しぶりに森崎から電話があった。そのタイミング

の良さに少々驚く。

「弟なら、今日は体調を崩して仕事を休んだけど…なんで知ってるの？」

『うん。うちのサイトに、弟さんがおかしな書き込みしてるから』
なんでも弟は、今でも森崎のサイトにちよいちよい顔を出しているらしい。

「おかしな書き込みって？」

『なんか、会社に行くのが怖いみたいな事言ってるよ』

「怖い？」

『うん。みんなが自分の事を見て笑ってるって』

「…」

それで、また俺は昨日の弟の様子を思い出した。

「確かに昨日の帰り少し様子がおかしかったけど…別に誰も笑ってないと思うし…久しぶりに外に出たからそんな風に思えるだけで、あいつの気のせいだよ。一時的なもんじゃないかな？」

『それなら、いいけど…気をつけてあげてね』

「分かった。ありがとう」

そこで、電話を切った。

ちなみに、森崎との付き合いは、弟の失踪事件以来なんとなく復活していた。しかし、微妙な関係だ。よくこれで続いているなど正直不思議に思う。森崎は待っていてくれるのかもしれないが、今はまだ何も決められない。その卑怯さを知りながら、ずるずると日を過ごしている自分がいる。

翌日、俺はまた弟の部屋の扉をノックした。

「おい、正。どうだ？ 具合は」

しかし、弟の返事はない。

昨日も奴は一日部屋にこもっていた。一抹の不安がよぎる。

俺は、ドアを開け、奴の部屋に入って行った。弟は布団にもぐったままだ。俺は布団ごと奴を揺さぶった。

「おい、正、正！」

すると、弟が布団から顔をのぞかせた。その顔色の悪さにぎよとする。

「大丈夫か？ お前……」

弟は力なく首をふった。

「どうした？ どこが悪いんだ？」

しかし、弟は首をふったきり何も答えない。しばらく待ってやっと出て来たのは「無理」という言葉だけだった。

結局その日も弟は仕事を休んだ。

小金井さんに休む旨を伝えると「そうか」と言っただけで息をつく。なんだか申し訳ない気持ちになってくる。弟一人のためにライン中、ひいては会社中の人に迷惑をかけるはめになるのだから……。

しかし、次の日も、また次の日も、そのまた次の日も、弟は会社に行く事ができなかった。

毎朝それを告げるたび、小金井さんの顔つきは渋くなってくる。ある朝とうとういたたまれなくなつて、「すいません」と頭を下げると、

「別に謝る事はない。補充はいつでもきくから」

と、言われた。その言葉に胃が痛くなる。このままではヤバイ。復帰するより先に、奴はクビにされるかもれない。そんなことになったら、また、あの地獄のような穴蔵生活に戻ってしまう。そう考えると、気が気ではない。親父とおふくろの顔にも焦燥感が漂い出した。

その夜、俺は森崎に電話し「その後、弟は書き込みをしているかどうか？」尋ねた。森崎は『してるよ』と答える。

『大分、調子悪いみたい。私では、どうしてもあげられないぐらい

…』

「なんて書いてるの？」

『色々ありすぎて、口で説明するのはちょっと…。そこにパソコン有る？』

「うちには、無いんだ。有るけど…弟の部屋にしかない」

『そう。困ったな。見て、読んでもらうのが一番と思ったんだけど。私の家に来てもらうにも、いつも帰るの8時過ぎだし…』

「いいよ。近所にネットカフェがあるから。そこで見てみる。森崎のサイトに行けばいいんだね？ でも、アドレスを知らないな（俺は、めったにパソコンを触らないので、検索をすると言う事を知らなかった）」

『そうね。今からメールでサイトのアドレス送るわ』

「分かった」

電話を切ってしばらくすると、森崎のメールが届いた。確かにサイトのアドレスが書いてあるのを確認すると、俺は自転車で近所のネットカフェに向かった。

森崎こと、『リリカ』のサイトは、とても少女趣味に出来上がっている。言葉を替えれば乙女チックってやつだ。まず、出入り口では花と小鳥に囲まれた横顔の少女が迎えてくれる。Garallyと書かれた文字をクリックすると、繊細な輪郭をもった少女達が現れる。その、泣いたり、微笑んだりしている少女達は全て森崎の描いたものだ。それらは森崎にどこことなく似ているようにも見える。どのみち、俺には到底描けない世界だ。

そのサイトの掲示板も、その雰囲気になさわしく、白い背景に淡

いパステルカラーの小さな文字が並んでいた。その数々の書き込みの中には、確かに弟の書いたものもある。

『リリカさんこんばんは。僕は、やっぱりダメかもしれません』

4月16日、火曜日に投稿されたものである。何がダメなんだと思いつつ、過去の書き込みを追っていくと、森崎が返信をしていた。

2008年4月16日 (火) 21時08分 [名前] ..

リリカ

「コメント」 .. どうしちゃったの？ 会社で何かあったの？
話してみて。

すると、弟の返信。

2008年4月16日 (火) 21時24分 [名前] ..

土中喪黒う (注 弟のインターネットでの名前である)

「コメント」 .. 実は、僕孤立しているんです。みんな僕を笑う者にするのです。上司も僕だけには厳しいんです。

ああ…なるほど。このことか、森崎が言っていたのは…と納得しつつどんどん過去ログを追って行くと、30分ほど後にリリカが返信していた。

2008年4月16日 (火) 21時58分 [名前] ..

リリカ

「コメント」 .. 本当に笑う者にされているのかな？ 気のせいじゃないかな？

孤立するのは、モグちゃん (弟の事らしい) の事をみんなが知ら

ないからだと思うよ。

上司が厳しいのも仕事場なら、ある程度仕方ない事だよ。

モグちゃんは、働く事になれていないから、よけいにそう感じるんじゃないかな？

悪く考えると、ますます悪くなるよ。

まずは、笑顔で挨拶してみたら？

モグちゃんの良い所が分かれれば、みんなの態度も変わると思うよ。

：なるほどな。良い事言うな、森崎は：などと感心しながら、さらにログを追って行く。

2008年4月16日 (火) 22時10分 [名前] ..

土中喪黒う (注 弟のインターネットでの名前である)

「コメント」 .. そんな事で、解決しないと思います。

あいつらは、根本的に僕を馬鹿にしているんです。

2008年4月16日 (火) 22時30分 [名前] ..

土中喪黒う (注 弟のインターネットでの名前である)

「コメント」 .. じゃあ、また引きこもっちゃうの？

辛いと思うけど今が頑張り時だよ。

御両親もお兄さんも、モグちゃんの事心配してると思うよ。

誰も人の事を馬鹿にしたりなんかしないと思うな。

明日からは、頑張って会社に行こうよ。

リリカは必死で励ましてくれていた。けれど、一部は真実、一部

は気休めだなと俺は思った。多少の被害妄想が入っているとはいえ、あいつが会社で馬鹿にされ、孤立しているのは事実である。その原因は、あいつの勤務態度にある。それを自覚しない限り、あいつの辛さは無くならないだろう。

2008年4月17日 (水) 00時05分 [名前] ..
土中喪黒う

「コメント」 ..分かりました。頑張ってみます。

との書き込みがある。

しかし、俺はその先の展開を知っている。奴は説得されなかった。仕事には行けなかった。そして、その日の朝にはこんな、失礼極まる書き込みをしていた。

2008年4月17日 (水) 08時55分 [名前] ..
土中喪黒う

「コメント」 ..やっぱり今日も行けませんでした。

家族の考えなんてどうでも良いです。兄貴なんてあてにしてないし。仕事で俺が叱られても、あいつは無関心だし。

あいつにとって、俺は居なくてもいい存在なんです。

なんて言いぐさだ。腹を立てながらも森崎の返信を見る。

2008年4月17日 (水) 21時43分 [名前] ..
リリカ

「コメント」 ..そっか。今日も休んだんだ。しょうがないね。でも、お兄さんが無関心だなんて思わないで。仕事場で馴れ合った

ら反感を買うから、あえて距離をおいてるんだと思うよ。
本当は、歯がゆい思いしてるんじゃないかな？

思い出してよ。お兄さん家出したモグちゃんを探してわざわざ東京まで来てくれたでしょ？

無関心なら、放っておくと思うよ。

お兄さんも、御両親もモグちゃんが幸せになる事を望んでると思うよ。

森崎は分かってくれている。俺が、工場であえてあいつのフォロ―に入らないわけをだ。この先、俺が居なくなってもやっていけるようであれば困るんだ。

弟は、これを読んでどう感じたのか。その日はそれきり書き込みをしていなかった。次の日も沈黙を守っている。その間見知らぬ奴のメッセージが続く。そして、やっと今日の午前9時35分。奴は書き込みをしていた。

2008年4月19日

(木)

09時28分

「名前」

..

土中喪黒う

「コメント」 ..リリカさん。今日も休みました。

ついに一週間休み続けてしまいました。

リリカさんの言っている事は分かっているつもりです。

でも、怖くて仕方がないんです。

仕事に行くと頭がぐちゃぐちゃになってしまってます。

上司に怒られると、さらにパニックになります。

どう動けばいいのか分からないんです。

リリカさん、どうして僕はこうなんでしょうか？

頑張りたいのに、体が言う事を聞きません。

両親にも兄にも、本当に申し訳ないです。

僕は、変わりたい。でも変わりません。
どうしても変わらないなら、死んだ方がましです。

そこで、2人のやりとりは終わっていた。

34 (後書き)

今回、もぐろの相談に対するリリカの回答は、某お悩み掲示板の相談と回答を参考にして書きました。

自分にとっても参考になりました（＾＾；。生かしたいです…；

「河井兄貴。ちょっと時間とれるか？」

月曜の午前中、仕事をしている俺に、小金井さんが話しかけて来た。

俺は作業の手を止め、顔を上げた。

「え？ 別に良いですけど…」

「じゃあ、キリがついたらでいいから、2階の応接室まで来てくれるかな？」

「はい…」

うなずくと、俺は適当なところで作業を切り上げ、2階の応接室へと向かった。

…小金井さんが、俺を呼び出すなんて…何の用だろう？ 珍しい…

思いつつ、ひんやりとした廊下を歩く。そんな俺を待ち受けていたのは、最悪の事態だった。

「実はなあ、お前の弟の事なんだけどなあ…」

応接室のソファに座り、小金井さんが言う。

「そこら中が迷惑してるんだよな」

…そうか、その件だったか…。

俺の胸が早鐘のように鼓動を打ち始める。

…しかし、考えてみれば、他に話なんてないよな。

「お前は、どう思う？」

「え？」

「兄貴として、弟の事をどう思う？」

「あ…はい」

俺はしどろもどろ答えた。

「そう…ですね。正直言って、ものすごく迷惑をかけているとは思いますが…」

「そうだな。あいつ一人のために、みんな凄く迷惑しているよな」
「でも…兄としてフォローするなら、あいつなりに凄く頑張っているとは思いますが」

「あいつなりにねえ…」

そこで、小金井さんは言葉を止めた。

「けど、会社っていうのは、成果が上がらないと仕方ないっていうのは、分かっているよな」

「え…まあ、…はい」

「会社っていうのは、利益をあげる事が全てなんだ。利益を上げるには、効率を良くしなければならない。そのためには、チーム全員の足並みをそろえなくちゃいけない事も、分かるよな？」

「ええ。だから、僕も足をひっぱらないように頑張ってます」

「お前の事じゃない。弟のことだ」

「ああ。そうですよね」

「正直言って困るんだよな」

「はあ、…でも、あいつなりに…」

「だから。『あいつなり』に何なんだ？ 今日で欠勤何日目だと思ってるんだ？」

「それは…体調が悪くて…」

「だったら、この際ゆっくり休んだらどうだ？」

「え？ それって」

…遠回しのクビ勧告じゃないか？
声なき言葉に小金井さんが答えた。

「これ以上休むようなら、そういう事もあり得る」

「でも…」

「あいつにも伝えておいてくれ。ヤル気があるのか、無いのか。もし、無いのなら、申し訳ないが、うちでは面倒をみきれない」

「……」

返す言葉も無かった。が、仕方が無い。全て悪いのはアイツなのだから。それにしても、

…どう、弟に伝えよう？ どう弟に切り出そう。

そんな思いばかりが、目まぐるしく渦巻く。しかし、どう伝えようが、どう切り出そうが、伝える事実はひとつだ。弟の絶望する顔が浮かんでくる。暗澹とした気持ちで一日が終わり、外に出ると既にもう暗かった。足取りも重く歩いて行く。

…ええい。いい加減に、吹っ切れよ！

俺は自分で自分を叱りつけた。

…まだ、別にクビと決まったわけじゃ無い。明日からでも出勤して、今まで以上に頑張れば、きっと小金井さんの気持ちも動くはずだ。そうだ。明日は無理にでも弟を引きずり出そう。首に縄をつけてでも、会社に連れてくるんだ。そこまで、樂觀的な妄想をして、それからすぐにため息をつく。そんな事は無理なのだ。

…仕方ないんだよ。

俺は自分に言い聞かせた。

…これも、あいつが招いた事だ。因果応報。やった事は、自分に返ってくるって事さ。それが、この世の法則なんだ

そうさ。全部あいつが悪いんだ。まともに働けないあいつが悪いんだ。

けれど、因果応報と言うのなら、あいつが引きこもらなければいけないかったのは、一体何の報いなんだろう？　そもそも元々器用だったあいつが、たかだか、テレビの解体や、ゴミの分別なんて簡単な仕事さえこなせなくなったのは、8年も引きこもっていたせいだろう？　そして、引きこもらなければいけなくなったのは、イジメのせいだ。しかも、そのイジメの発端は、あいつの正義感だった。親友を守ったがために、あいつは級友によってたかって廃人にされた。これは、一体何の罪で、何の罰だ？　考えれば、考える程分かんなくなる。しかし、何の因果でか分からないが、あいつは、暗闇の中に生きる事を余儀無くされた。それなら、それで、受け入れるより仕方ないのかと観念しようか。そして、これで、俺の東京に帰る夢も絶たれた事になる。それも、俺の運命か。

自嘲気味に空を見上げると、ぽっかりと月が浮かんでいた。

月は、その、わずかな輝きで闇を照らしている。

それは、まるであてのない希望のように、頼りのない光ではあるが、それでも人は先に進まねばならぬ。そうだ、人は進まねばならぬ。ならば、どうすれば良いのだろうか？　俺に何ができるんだろう？　あいつだって、もう全てを投げているかもしれない。今さら人の言葉を聞く耳もないかもしれない。

いや、違う。

あいつは、リリカに助けを求めた。そうだ、言っていたじゃない

か。

「僕は、変わりたい。でも、変わりません。どうしても、変われないのなら、死んだ方がましです」

その、悲鳴のような言葉を思い出すと、俺はやみくもに走り出していた。

行く先は、家ではなく、ネットカフェだ。

『リリカさん、はじめまして。マリアといいます。』

リリカさんの描かれる、少女達にひかれてやって来ました。織細ではかなげなタッチが印象的です。

私も絵を描きますが、

このようなガラス細工のような少女達は描けません。

無い物ねだりでうらやましく思います』

入力した文字が、画面上に表示されていく。そう。これは、俺の書いた文章だ。リリカ：森崎の掲示板に書き込む為に考えた。言うまでもなく嘘八百、でっちあげの文章だ。念には念を入れて、マリアという女性名を使う。なぜ、こんな大嘘をつくのか？ それは、弟のためだ。さらに俺は文字を打ち込んでいく。

『そして、喪黒うさん、こんにちは。』

リリカさんと喪黒うさんのやり取りを

全部読ませてもらい、他人事とは思えず書き込みをさせてもらいます。

喪黒うさんはずっと引きこもり、そして社会復帰なさったとの事、大変、勇気がある事だっと思います。立派だと思います。

実は、私の弟も、引きこもっていました。

しかし、ついに立ち直る事のできないまま

1年前、病で亡くなりました。

どうか、喪黒うさんには、ここで挫けず、私の弟の分までも頑張っ
て欲しいと思います。

それでは、また参ります』

我ながら陳腐な文章だ。それに女の名を語るにも抵抗がある。

しかし、まさか、俺の名前は出せない。あいつは、リリカの正体が森崎であることも知らないんだ。まして家族に、こんな風に、覗き見されている事を知ったら、どんな気持ちがするだろう？ それを思うと、とても自分の名前を出す気にはなれなかった。

だから、あくまでもあいつの知らないどこかの女性：しかも、あいつと似た境遇の弟を持った悲しい姉を演じる事にした。そうやって、あいつの心を揺さぶるつもりだ。マリアの名前には、暗にあの『つぎはぎのマリア』のイメージを込めている。

それから、しばらく他のサイトを覗いたりして時間をつぶし、20分程たったところで、リリカの掲示板に戻ると、なんと、すでに弟の返信が入っていた。

『マリアさん。コメントありがとうございます。』

弟さんは、僕と同じだったんですね。でも、亡くなられたんですね。

ご冥福をお祈りします。

弟さんの分まで頑張りたいと言いたいところですが、僕には無理そうです。

ごめんなさい』

軽く失望する。しかし、まあ、そうだな。これぐらいで気持ちが悪くぐらいなら、あいつだって苦労していないだろう。

だが、しかし：どうしても立ち直ってもらわなければ困る。自分のためだけになく、あいつ自身のためにも。それで、俺は少々ムキになった。キーボードに指を乗せ、考え考え打ち込む。

『もぐろうさん。

返信ありがとうございます。

あなたを見ていると、本当に弟を思い出します。

弟もそうでした。ずっと、自分は仕事なんかできないと信じ込んでいました。

しかし、入院して先が長くない事を知った時、やっと気付いたんです。

自分は働けないのではなくて、ただ、勇気がなかったただけだと言う事に…。

そう。ほんの少しの勇気がないために、

人生のほとんどの時間を無駄に過ごしてしまった事を、

あの子は最期の最期まで後悔していました。

死ぬまぎわ、あの子は言いました。

「姉さん、僕が馬鹿だったよ。もし、生まれかわれるなら、今度こそ働きたいよ」と。

彼は本当に後悔していました。

しかし、気付いた時には、すでに手後れだったのです。

喪黒うさんには、弟のような思いをしてもらいたくない。

どうか、生きている間にできる事を精一杯やって下さい』

書き込んでしばらく待つと、弟の返信が入って来た。弟の返信は、速い。どう答えて来たか、固唾をのみ、その文字を追う。

『マリアさん。

弟さんの事、本当に気の毒に思います。

けれど、やっぱり僕には期待に答えられそうありません。

僕は、病気にはなりませんでしたが、何度も死ぬ事を考えました。巻き添えで兄を殺しそうになって以来、自殺はしないと心に誓いました。

けれど、正直いって、今でもそんなに生きたいとは思っていないのです。

もし、今すぐこの世から消えられるなら、それはそれで本望です。そして、もし生まれ変わったなら、僕はこの国には生まれたくありません。

もっと貧しくてもいいから、自分らしく、自由にのびのびと生きられる国に生まれたいです』

正直いって、ショックだった。俺の考えたチープな設定がギャグに思えるぐらい、奴の悩みは深刻だ。あいつ、まだ死に神に取り付かれてたのか。どうしよう。どう返事しよう？ 考え考え文章を打つ。

『喪黒うさん。それは、あなたが本当の死に直面してないから言える事だと思います。』

もし、どうしても死ななければいけないと決まったらあなたはきっと生きたいと思うでしょう』

そこまで書いて俺は師匠の言葉を思い出した。そうだ、師匠も言っていたじゃないか。心中事件でいざ本当に死にかけた時、突然『死にたくない』と思ったって。俺は自分を励まして文章を続けていった。

『そして、その時、そして気付くでしょう。』

「自分は、あまりにも何もしていなかった」と

私の弟もそうでした。

あなたの言う通り、今のこの国は生きやすい国とはおもいません。それでも、あなたが望む自由な人生を、

今の人生で実現する事は不可能でしょうか？

私はそうは思いません。

しかし、何か行動しなければ夢は夢のままで終わります』

数分後、弟から返信がある。

『マリアさん。

確かに僕は、人並み以上に何もしていないと自覚しています。

僕だって何かしたいのです。でもできないんです。

怖くて無理なんです』

俺はすぐに返事をした。

『喪黒うさん。

あなたは今、生まれ変わろうとしてるのです。

子供が生まれる時、陣痛があるのはご存知ですね。

あなたが感じている辛さは、陣痛のようなものです。

そこを乗り越えれば、きっと未来が開けます』

その後返って来た言葉に、俺は再びショックを受けた。

『マリアさんの言う事は、頭では分かってるんです。

でも、ダメなんです。体がついて来ないんです。

会社に行くと、体が震えるんです。

抑えようとしてもダメなんです。

自分で自分がコントロールできないんです。

人がそばに来るだけで、震えが走ります。
上司に叱られるとますますひどくなります。
震える事が怖くて人前にでられません』

…震える？　なんだそれ？…

あまりにも意外な言葉ではあったが、俺の頭にフラッシュバックするシーンがあった。…そうだ、あの日の帰宅途中、あいつ、震えていたじゃないか。あの事を言っているのか？　間違いない。きっとそうだろう。しかし、それが分かったからと言って、どう返事すればいいのかが分からない。しばらく考えたあげく、更新ボタンを押すと、リリカの文章が投稿されていた。

『マリアさん。訪問ありがとうございます。』

大変な過去をお持ちなのですね。

弟さんのご冥福をお祈りします。

そして、マリアさんが一日も早く

悲しみを乗り越えられる事を祈っています。

仲間がふえるのはとても嬉しいです。

マリアさんはどんな画家が好きですか？

好きな絵のお話をたくさんしていつて下さいね☆
いつでも歓迎します。

そして、モグちゃんこんばんは。

私も、マリアさんの言われる通り

今、モグちゃんは新しく生まれようとしてるんだと思います。

これを楽しめれば、きっと本当の自由を手に入れる日が来ると
思うよ☆

さて、体が震えると言う事ですが

実は私の友人にも同じような事がありました。

精神科で見てもらったところ、社会不安障害と診断されました。

薬を飲みながら仕事を続けているうちに治りました。

意外と、同じような症状にかかる人多いらしいです。

モグちゃんも病院に行ってお薬をもらって下さい。

大丈夫です。薬を飲み続ければちゃんと治ります』

社会不安障害？ 初めて聞く名前だ。ネットで検索してみると、専用のサイトが見つかった。

なんでも、対人恐怖症のひどくなったものらしい。パニック障害なんかも含まれるようだ。弟はいやがらせばかり受け過ぎて人が怖くなったのかもしれない。サイトには症状に苦しむ人の書き込みもあった。いずれも孤立して苦しんでいたという過去を持つ。人と人のつながりは大事と言われるが、人を追い詰めるのも人である。それでも、つながらなければいけないというのなら、なくてはならぬい物あるんじゃないだろうか？ それは、例えば思いやりとか、優しさのような。

考え出すと、果てがないので森崎の掲示板に戻ってみる。すると、既に弟の投稿が入っていた。

『リリカさん。

本当に、病院に行けば治るのでしょうか？

治るものなら治したいです。

でも、精神科なんて…怖いし、恥ずかしいです』

その文章を読んでこっちが恥ずかしくなる。

いい年こいた男が、何を言ってるんだ。

俺はキーボードを叩いた。

『リリカさん。』

コメントありがとうございます。

私が好きなのは、ピカソにモネ、パウル・クレー：etcです。特にモネの光に満ちたみずみずしい世界が好きです。

けれど、私の絵は無機質で冷たいものばかりです。

いつか、ああいう世界を描ければと思います。

たくさんお話ししようね☆

そして、喪黒うさん。

リリカさんの言う通りです。

恥ずかしがっていないで、ちゃんと病院に行って治しましょう。

問題が起きたら、目の前の事を1つ1つ解決していけばいいのです。

逃げるから、怖くなるのです』

すると、すぐに弟から返信が入った。

『確かに、僕の心は恐怖で満ちあふれています。

それは、僕が逃げてばかりいるからでしょうか？』

『その通りです』

俺は入力した。

『でも、逃げたくなるのは、何もかも完璧にしようと思うからだと思えます。

仕事でもなんでも、最初から上手く行くわけないのです。

ゆっくり進めばいいのです…』

ここまで入力し、とりあえず送信する。

俺の言いたい事は、大体言った。後は奴の心次第だ。

しばらく待つと、リリカからの投稿が入っていた。

『モグちゃん。私もマリアさんの言う通り、ゆっくり進めばいいと思うよ。』

それとね、私思うの。世の中って、自分の見たいようにしか見えないんだって。

モグちゃんが、周りの人全てを悪いように思えば、みんな悪い人になるし、

良い人と思えば、良い人になるんじゃないかなって…。

全部自分の心次第じゃないのかな？』

あれ？ 森崎の奴、師匠と同じこと言っているな。と、思いつつ更新ボタンを押すと、弟からの返信が入っていた。

『分かりました。少し考えてみます』

それから、俺は、ネットカフェを後にして自宅に戻った。

そして、飯を食い終わると、さんざん迷ったあげく、弟の部屋に向かう。やはり、伝えなければならぬだろう。何をかって？ 昼間の小金井さんの言葉をである。

引きこもっていたからといえども、二十歳をすぎた大人である以上は、奴も一人の社会人と見なさなければならぬ。社会人である以上は、自分が直面している現実を受け止めなければならないだろう。

「おい、いいか？」

弟の部屋のドアを叩くと、

「いいよ」

という声が聞こえた。

遠慮なく中に入ると、弟がパソコンの前に座っている。なんだか俺の知らないアニメの絵が表示されていた。

「もう、起きられるのか？」

と、たずねたら、答えのかわりに

「今、帰ったのか？」

と質問された。

「ああ。残業でね」

「それにしても、やけに遅かったな」

「お前のせいだろう」

「…」

弟はしばらく黙り込んだ後、こう言った。

「で、何の用だ？」

「ああ、実はな…」

そして、俺は昼間の小金井さんの言葉を奴に伝えていく。はつきりと迷惑がられている事、明日出勤しなければ、クビにされるかも

しれないという事などをだ。弟は終始無言で聞いていたが、最後に「分かった」と答えた。

「じゃあ、じっくりと考えろ。後はお前の気持ちひとつだから」俺はそう言っていると、立ち上がった。そして、ドアに手をかけもう一度弟に向かって言う。

「この後の選択はお前に任せる。明日は起こしにこない。もし、会社に行く気があるのなら、自分で起きて来い」

それから、俺は風呂に入りベッドに入る。疲れもあり、ぐっすりと眠ってしまった。

そして、次の朝。

いつも通りに目がさめる。

服を着替え、階下におりる。

台所兼食堂では、いつもどおりテレビが騒がしく音をたてていて、ちょうど天気予報をやっていた。今日は一日快晴らしい。

しかし、弟の姿は見えない。

「正は？」

おふくろに尋ねると、

「まだ起きて来ないわよ」

との返事。

「今日も休むんじゃないの？」

心持ち、投げやりだ。

…そうか。そういう選択か。

失望とともに思う。

…そんなに簡単に人間変わらないとう事か…いや、嘆くまい。一番苦しいのはあいつのはずなんだ。

おふくろが、朝食を運んで来た。箸をつけるが、ロクにのどを通らない。まいった、思った以上に精神的にダメージを受けている。やがて、出なければいけない時間になった。それで、仕方がないと俺は観念する。これが現実だ。認めなければ。…なに、まだ時期が早かっただけだ。今回はダメだったが、またチャンスはあるはずだ。そうだ。嘆くヒマがあるなら次の事を考えよう。…きつと、同じような境遇の家族が一度は口にした事があるだろう言葉を、自身に言い聞かせる。

そして、俺は立ち上がった。

と、その時、

「おはよう」

なんと、弟が起きてきた。

驚いて、振り返ると、奴はちゃんと着替えていた。

「お…遅いじゃないか…」

俺はできる限り平静をよそおった。

「もう、飯を食っているヒマないぞ」

「ううん…」

弟が首をふる。

「今日は会社には行かない」

「何？」

「さんざん迷ったけど、まだ行けない。小金井さんに伝えておいて」
「まだ行けないって…じゃあ、いつから行くんだよ？」

「明日から」

「じゃあ、今日はどうするんだ？」

「病院に行ってくる」

「病院？」

「うん。精神科にかかって来る」

その言葉で、俺は全てを理解できた。昨日のやりとり、奴の心に届いていたんだな。

ところが、何も知らないおふくろが悲鳴を上げた。

「精神科ですって？　なんで？」

すると、弟が答えた。

「実は、俺…体が震えて、いう事をきかないんだ。このままじゃ働けないからどうしようって思ってたら、『精神病院で見てもらおうといい』ってある人が教えてくれた」

「誰よ？　そんなこと言ったの」

「インターネットの人」

「失礼な人ね。そんな人の言う事信用しないの！」

「おふくろ！」

俺はおふくろをとがめた。

「そんな言い方ないだろう？」

精神科が恥ずかしいっていうのかよ

？ あいつはあいつなりに、自分の事をなんとかしようと思つての決断だろ？ 下らない偏見で邪魔するなよ」

「でも、精神科なんて…」

「そう言い方が、どれだけ嫌な思いさせるか考えろよ。なあ、正」と、弟を見る。

「お前が行くべきと思うなら、行けよ」

「…分かった…」

弟は微妙な面持ちで頷いた。それで、俺の心が軽くなる。

「よし。じゃあ、小金井さんにはちゃんと伝えておくから」

「頼む」

そう言つて頭を下げた弟の肩を軽く叩き、俺はカバンを手に部屋を出ていく。背後からおふくろの声がする。

「分かったわ。あなたがそう決心したなら行きなさい。保険証だして置いてあげるから…」

それを聞きながら、『大丈夫、大丈夫』と俺は弟にエールを送る。『きっと、お前は勝てる』。

…いや、弟だけじゃない。俺にとつても今日は戦いだ。小金井さんはきっと、嫌な顔をするだろう。けど、あいつのためにもきつと切り抜けてみせる。

見上げれば、抜けるような空に綿雲がひとつ浮かんでいた。けれど、今日は快晴だ。天気予報はきつと外れないだろう。

「今日も弟は休みです」

そう伝えると、小金井さんは案の定嫌な顔をする：と思いきや、

「あ、そう」ただけ答えた。

その態度にかえって不安になる。見切りをつけられたのではないか？

「あ、でも今日は病院に行っているので、近いうちには出て来れるかと思っています」

「なるほどね」

と、小金井さんはそっけない。そして、それきり行ってしまおうとする。俺は、慌てて小金井さんの後を追いかけた。

「すいません。後で、お時間とっていただけませんか？」

すると、小金井さんは振りかえって答えた。

「時間？」

「はい。お話したい事があるんです」

「弟の事か？」

「はい」

「分かった。後で都合をつけて連絡する」

「よろしくお願いします」

小金井さんとの話し合いは、昼休みに、昨日と同じ応接室で行われる事になった。

緊張気味に部屋に入ると、小金井さんは既に来ていてソファに深々と座っている。

俺は一礼し、正面の椅子に腰かけた。なんだか、尋問を受ける被疑者と、刑事みたいである。小金井さんは言った。

「ちょうど、こちらからも話したい事があったんだ」

「話したい事？」

ドキッとすると。

「ああ。こちらも弟の事でな」

胃がずきずきと痛みだす。

「あの…それって」

唇も乾いて来る。

小金井さんはうなずいてみせた。

「悪いけど、前田とも相談した結果、お前の弟には辞めてもらう事にした」

…ああ、やっぱり。

がつくりとうなだれそうになる。だが、しかし、ここで怯むわけにはいかない。これも想定済みの事なのだから。なんとか、態勢を逆転させなくては…。

…けどなあ。

俺は巖のような小金井さんの姿を見て思った。

…この人の心を変えるなんて事ができるのか？

大体が、この人は存在事態が怖いのだ。四角い顔に、いかつい目と鼻と口が並んでいる。ガタイもいいし、いつもへの字口で俺らを見張っている様は、昔の仁侠映画に出て来るヤクザの親分のごとしである。

けど仕事ではものすごく頼りになるんだとみーさんが言っていた。だから、結構職場でも慕われている。仕事の上でも、人間的にも俺のはるかに及ばない相手である。しかも、今からかばおうというの

はあの弟である。

弱気の虫が顔を出し、俺の中で葛藤が始まった。

はつきり言っつて小金井さんや同僚達の怒る気持ちも分かるのだ。仕事はしないわ、ルールは守らないわ、休みっぱなしだわ、そんな奴を置いておけるような余裕は、きょうびどの企業にだってないだろう。俺だって、そんな奴弟じゃなければとっくに見切りをつけている。やる気がないのなら、さっさと辞めちまえてな。

ここは、素直に頭を下げた方がいいんじゃないのか？ 「はい、おっしゃる通りです。ご迷惑かけてすいません」と言ってしまうのが、楽なんじゃないのか？

…いいや。ダメだ。

お前も知っているだろう？ 弟が不器用ながらも立ち向かおうとしている事を。だから、自分に誓ったじゃないか。徹底的にあいつの味方をする。

いや、でも、俺は『この事』も知っている。『それは、甘えだ』と言う事をだ。みんながそんな事を言い出したら、世の中成り立たない。できない奴は切り捨てられても当然。全てはあいつが悪いんだ。自己責任だ。さあ、上のセリフを小金井さんに言うんだ。その方がお前にとっても得だぞ。企業に情を求めるな。下手に揉める奴は嫌われるだけだ。どうせ何を訴えたって聞いてくれやしないさ。

そう、俺は企業なんかにも何も期待してない。企業だけでなく、同僚にも何も期待してない。世の中自体にも何も期待してない。ここに戻って来てから、そんな風になってしまった。不幸な考え方なのは分かっている。別にそれで構わない。どうせ、今だけなもの。いずれはここを出ていくんだから。（ここにいて俺は本当の俺じゃない

い)だから、俺がクビになるという話しだったら、きっとあつさり引き下がったろう。：けど、これは、俺の事じゃない。弟の事だ。兄としても、ここはやはり引き下がれない。っていうか、どうせ長くここに居るつもりないんだから、揉めようが嫌われようがいいじゃないか。そうだよ、俺の方こそクビになったって構いやしないんだった！　じゃあ言いたい事を言ってやれ！

：最後に、天啓のごとくそう閃くと、ついに俺は言った。

「待って下さい。クビだけは勘弁してやってください！　俺からちやんとあいつに言い聞かせますので、もう少しだけ時間をやって下さい！」

「うゝん…」

小金井さんが渋い顔をした。

「無理だな。兄貴として、弟をかばいたい気持ちは分からないでもないが、世の中、そんなに甘くないぞ」

「おっしゃる事はよく分かります。でも、もう少しだけ時間をやって欲しいんです」

「ダメだ」

「そう言わずに、お願いします。あいつにとっては、今が人生の岐路なんです」

「くどい」

予想以上に敵は手強そうだ。てこでも動かないってやつだな。けど、それはこっちだって同じだ。むしろ、こっちのが必死なぐらいだ。なにしろ人生かかってるんだからな。こうなったら、とことん粘ってやる。今、流行のモンスター・ペアレンツならぬモンスター・ブラザーになってやる。いや、あんな連中と一緒にされては叶わな

い。俺の主張は理に叶っている。それに、主張しただけの責任は取る覚悟でいる。だから、この際ヒンシュクかってもいい。最悪クビになっても構わない。言うべき事は、言ってる。しかし、そんな決心した時に限って、タイミング良くサイレンが鳴り、昼休みが終わってしまった。これ幸いと、小金井さんが腰を上げる。

「さあ、時間だ。話はここまでだ」

ちくしょう。これも弟の運命なのか？　いいや、そうじゃない。

そうはさせない。

「まだ、話は終わってません！　っていうか、俺の言い分全然聞いてないじゃないですか！」

ぶしつけに言うと、小金井さんが不快感を露にした。

「無理なものは無理だって言ってるんだよ」

「無理を承知でお願いしているんです。どうか、俺の話を最後まで聞いて下さい」

「聞く事なんてない」

「いいえ。あります。聞いてもらわなくちゃいけません。実は、これはずっと誰にも話さないつもりでしたが…あいつは…弟は…」

そこで言葉をとめる。この先を話していいものかどうか迷ったからだ。幸いに…と云っていいのか、その態度が、かえって敵の興味をひいたらしい。

「何だよ？　言うべき事があるならちゃんとええよ」

なんと、小金井さんが再びソファに腰を降ろした。それで、俺は決心した。…弟よ。スマン。お前のプライドを傷つけるつもりはないが、全てをぶちまける兄を許してくれ…。そうするより他に、方法が見つからないんだ。

「実は、あいつは…弟は、対人恐怖症にかかっているんです」

その言葉に、小金井さんが驚いた。

「対人恐怖症？　風邪で休んでるんじゃないのか？」

そう。やつの欠勤理由は、表向き風邪という事になっていた。別に、嘘をついたつもりはない。初めは本当に風邪だと思っていたの

だから。けど、実際は違った。精神的なものだった。本来、分かった時点で正直に話すべきなのだが、奴が恥ずかしがるので黙っていた。しかし、こうなっては見栄をはっている場合ではない。

「風邪と言ったのは、あいつが精神的な病気だって事を知られるのを嫌がっていたからです。今でも、偏見持つ人がいるらしいから…」

「確かに、精神病と聞くと、嫌がる人間も年寄りにはいるかもな。しかし、事情は分かったが、そんな状態で仕事ができるのか？」

「はい。医師の診断では、それほど重い症状でもないのです、働кинаがらでも治せるという事です」

「ふーん…」

小金井さんは腕組みをした。

「しかし、対人恐怖症なるなんて、ここの環境がよほど合わなかったって事だよな。少なくとも、ここで働き続ける事は難しいんじゃないか？」

…ヤバイ。逆効果だ。

「いや、何もここの環境が悪いって事じゃないんです！確かに軽いイジメが合ったりして、それが引き金になったのかもしれないけれど、問題の根はもっと深いんです！」

あくまで、推測の域をでない事を、断定的に言ってやる。すると、小金井さんが引き込まれて来た。

「根が深いってのは、どういうことだ？」

「それは…実は…：これも言うつもりなかったんですけど…あいつずっと引きこもっていたんです！」

「引きこもってた？」

「ええ。そうです。8年も引きこもっていたんです。引きこもった原因は、イジメです。高校生の頃、いじめられっ子だった親友をかばって、かえって自分がいじめられるハメになったんです。つまり、あいつは、何も悪くないんです。むしろ、裏切られた被害者なんです。あいつが職場に馴染めない原因は、裏切られ、いじめられたトラウマです。対人恐怖症も、それが原因に間違いないです。哀れな

奴なんです。

あいつ、イジメの事も、病気の事も、ずっと誰にも言わずに一人で抱えこんでいたんです。それが、先日、やっと打ち明けてくれて、それで病院へ行く決心をしてくれたんです。それが、あいつにとつて、どんなに勇気のいる事だったか分かりますか？ あいつは、今、必死で立ち直ろうとしてるんです。生きようとしてるんです。どうか、ここで切り捨てないでっやって下さい。あいつに、生きるチャンスを与えてやって下さい」

なんだか、クサイドラマのワンシーンみたいだ。いくら、弟のためとはいえ、こんなに熱くなれた自分が信じられない。この町に戻って以来ずっと冷めきっていたのに……。でも、悪くない。こんな感じも。心の奥底から生きる氣力が戻ってくるようだ。

一方、俺の演説を聞いた小金井さんはしばらく黙り込んだ。迷っているんだろう。俺は、小金井さんの言葉を待った。しばらくして小金井さんが、口を開いた。

「……いや、うすうすそんな事じゃないかと思ってたんだ。結構、こういう所には多いんだよ。引きこもってたって奴」

「そうなんですか」

「ああ。けど、それは、何の言い訳にもならないって事は分かってるよな？」

「それは……分かってますけど……」

「お前が分かってたって仕方がないだろう？ あいつ自身が自覚しなくちゃ」

「だから、自覚するチャンスを与えてやって欲しいんです」

「チャンスを与える価値が、あいつにあるのか？」

「それは……あると思います」

「戦力になってくれると断言できるか？」

「大丈夫です。あいつ、もともととは器用な奴なんです。本気になれ

ば仕事ぐらいすぐに覚えられるはずです。それに、俺なんかより、ずっと人に好かれる奴だったんです。今は自分を見失ってるだけです。きつと、すぐに元の自分を思い出します。見守ってやる目さえあれば」

「うー…ん」

小金井さんは唸った。そして、また

「世の中そんなに甘くないがなあ…」

と繰り返す。ダメだ。まだ迷っている。

こうなったら、最後の手段とばかりに、俺は土下座して叫んだ。

「お願いします！ なんなら、俺の給料無しでもかまいません。あいつの更正料です。3ヵ月間でもいいです。どうか、お願いします」

ここまで言えば、どんな強情な相手も折れるだろう。…と、上目づかいで様子をうかがう。しかし、案に相違して、目に飛び込んできたのは小金井さんのあきれ顔だった。

「給料無しになんて、できるかよ」

その言葉に、俺の頭もさーっと冷えてくる。…そりゃ、そうだな。まともな企業なら、給料ゼロになんてできないよな。やっぱり、どうあってもこの人を動かすのは無理のようだ。これも、弟の運命なんだろう。

…仕方ない。自業自得だ。

ついに、あきらめる。

…反省して次の道を探させよう。何、大丈夫さ。失敗は成功の元だ。

無理矢理自分を納得させていると、小金井さんが俺の肩をポンと叩いた。

何かと思い、顔を上げると、驚いた事に彼はこう言った。

「分かったよ。そこまでお前が言うなら、もう少しだけチャンスをやろう」

「へ？」

「とりあえず、クビは取り消した」

にわかには信じられなかったが、どうやら交渉は成功したようだ。

「本当ですか!？」

と喜ぶ俺に「ただし」と、小金井さんが言う。

「試用期間として3カ月だけだぞ。それで使い物にならないけりや、辞めてもらうからな」

異存があろうはずもない。で、俺はもう一度勢いよく頭を下げた。

「それで十分です。ありがとうございます!」

不覚にも泣きそうになる。

38 (後書き)

33話よりここまで修正を入れました。なお、この物語はフィクションです。実在の人物、私の周りの方々等に、モデルにしている人
はおりません。ご了承くださいませ。

「長い間御迷惑をおかけしてすいませんでした」

ぼそぼそと弟が言う。それは、4月24日水曜日朝の事であった。

「これからは戦力になれるよう、全力で頑張ります」

しかし、職場一同シラーツとしている。聞いているのか、いないのか、無関心なだけなのか。それともハラワタが煮えくり返っているのか……。とりあえず、頭を下げ、弟の挨拶が終わると、前田君が今日の予定と人員配置、目標解体台数などを発表し、朝礼が終わった。

いつもと同じ一日が始まる。

俺の仕事は昨日やり残した解体作業の続きからだ。午前中は、何ごともなく過ぎた。時々、弟の様子をうかがうと、真面目にやっているようだが、あくびばかりしている。しかし、仕事はなかなかきちんとしてきているようだ。夕べ、一人でマニュアル（俺の貸してやったやつだ）を何度も読み返したらしい。感心な事だ。

「どうよ。調子は」

昼飯時、食堂で、弟に尋ねる。

「眠い」

と、奴は答えた。

「眠い？」

「うん。薬のせいだと思う」

「薬？ ああ、例の病気の……で、効いてるのか？ 震えは？」

「今のところ大丈夫。前は、後ろに人が来るだけでダメだったのに……」

「じゃあ効いてるんだな」

「うん」

食堂内を見回すと、あちらで女性社員達が固まって何か喋っている。そして、時々わっと笑う。いつもの風景だ。この間は、耐えられなかった弟も、今日は平気のようだ。ホッとする。

きよろきよろしていると、意外な人物と目があつた。みーさんだ。ちようど、食堂に入つて来るところだった。

「あれー？」

みーさんもこちらに気付き手を振る。

「正ちゃん。お久しぶりー」

その言葉に、弟が顔を上げた。そして、みーさんを見つけると、心もち頬が緩む。広い工場敷地内なので、めつたに顔を合わせる事もないだけに、嬉しかったらしい。みーさんは、連れの友達に何か耳打ちすると、無邪気にこちらにやって来た。そして、言った。

「病氣、もう大丈夫なの？」

ちなみに、みーさんにはこいつのメンタル的な病については何も話していない。弟も知られたくないのか、

「うん。風邪ならもう大丈夫だよ」

と、嘘をついてうなずいた。

「良かった」

と、みーさんが笑顔を見せる。

「悩みがあつたら何でも話してね。相談にのるから」

みーさんは相変わらず優しい。

「ありがとう」

弟も嬉しそうにうなずく。

その顔を見て思う。いっそ、みーさんと同じ部署に行かせた方が、こいつにとっては良いのかも…と。

と、その時どきりと音をたてて俺らのそばに座る人物がいた。驚いた事に、それは小金井さんだった。柔らかだった弟の表情が、み

るみる強ばっていく。俺も、正直びびりまくっていた。食っているうどんの味が分からなくなる。小金井さんはそんな俺らにおかまいなしで、みーさんに話しかけた。

「おい、美咲。お前、最近彼氏できたらしいな」

「何それ？ 誰よでたらめ言ってるの」

「この間『さくら』でお前が超イケメンと飲んでるのを、金達が見かけたってよ」

「『さくら』？ あー、それ優香ちゃんの彼氏よ。3人で飲んでたの」

「なんだー。残念だな。モテないなあ」

「うるさい！」

俺達は啞然として二人のやり取りを見守っていた。みーさんはともかく、小金井さんはついぞ俺達に見せた事のない笑顔を見せている。この人でもこんな顔するのかと感心していると、みーさんが俺らを見て言った。

「あー。コガちゃん。正ちゃんをいじめないでよ。大事な友達なんだから」

「虐めてなんかないよ。なー、優しい上司だろう？」

「…それは…」

弟が口ごもる。俺は苦笑した。そんな質問に答えられるわけがない。

「いや、勘弁してやって下さいよ。こいつ、びびりまくってるんですから」

俺がフォローすると、小金井さんが憤慨した。

「バカヤロー。俺は優しいんだよ」

「どこが？ と、俺は（おそらく弟も）思う。」

「ああ。それで思い出したけど」

小金井さんが話題を変えた。

「そーいえば、河井兄弟の歓迎会やってなかったな」

「え？ 歓迎会？」

俺は驚いた。

「そんなのあるんですか？」

「いや、このところ忙しくてできなかったけど、久しぶりにやるか」

「いや、いいですよ。そんなの。弟はもちろん、俺もあまりそういう集まりは好きじゃないし…」

「前田とか呼びたくないなら、親しい奴だけ呼んでやればいいだろう？ そうだな。俺と、美咲とお前ら二人と言うのはどうだ？」

うーん。あなたも呼びたくないメンバーの一人なんだがなあ…と俺は思う。しかし、あまり遠慮し過ぎるのも失礼に当たると思い。

「そうですか。それなら、是非…」

と、言った。

「いいね」

みーさんが言う。

「会場はどこにしよう？」

「『さくら』がいいんじゃないか？」

小金井さんが答える。

「いいね。あそこなら、安くておいしいし、お薦めだね」

みーさんがはしゃいだ。

こうして、なぜか俺達はみーさんと、小金井さんとともに飲みに行くはめになったのである。

さくらは、工場から歩いて10分程のところにある居酒屋だ。以前、工場に勤めていた頃にも、みーさんや同僚とともにちょいちょい来たもんだ。狭い店だが、安いし、味もまあまあだしで、うちの工場の社員にも地味に人気がある。

俺らが行った金曜の夜も、混んでいた。俺らの他におそらくうち

の工場の社員と思われるおっさんグループや、女性の二人連れ、カップルの姿などがあり、既にもう満席だった。20人も入れば一杯になってしまうくらい小さな店なのだ。店内は比較的明るいため、人の顔がよく見えた。おっさんグループは店主と顔なじみらしく、カウンターで盛り上がっていた。それを横目に座敷席に4人向かい合って座る。俺はみーさんの横、小金井さんの正面、そして弟は小金井さんの横で小さくなっている。緊張した面持ちだ。俺だって緊張している。正直、こんなんでおもしろいかなと思った。

しかし、アルコールが入って来ると、緊張もほぐれて来る。ちなみに、俺自身、普段あまり飲まないようにしているが、実は結構飲める方だ。弟はどうだろう？ おそらく、酒を飲むのはこれが初めてじゃないのだろうか？ 案の定、ビールの苦さにどうも馴染まないように、ひとくち飲んだきり食う方に専念していた。

みーさんは、いける口だ。小金井さんも、全てのおっさんがそうであるようによく飲む。

初めのうちは、みーさんと俺が仲良くなったいきさつやら、俺らがいた部署の噂話なんかをぼつり、ぼつりとする。ぎこちない会話も、小金井さんの酔いがまわるにつけほころんで来る。小金井さんは赤い顔をして自分の若い頃の話始める。なんでも、ああみえて昔はナイーブな文学青年だったらしい。本当は働かずに小説でも書きたかったが、家が貧しくてそんな事も言ってられなかった。それで、高校を卒業してすぐに町工場に、旋盤工として就職したらしい。初めのうちは、現場の仕事等できるのか不安だったが、仕事を覚えれば覚える程おもしろくなっていったそうだ。しかし、ある日仕事中に事故を起し、指を無くしてしまった。（そういえば、小金井さんの右手には親指がない）その上、右手の筋を痛めてしまい、日常生活は辛うじてできるものの、旋盤工としての道はあきらめざるを得なかったそうだ。それで、その頃できたばかりのうちの会社知り合いのついでに入ったらしい。

「鉄に関わっていたかったからな」

と、小金井さんは言った。

小金井さんの前職の旋盤工とは、鋼などの金属を丸く削る仕事らしく、そういう訳で鉄との関わりが深い分、愛着もあるというわけだ。

それから、小金井さんの町工場時代の話になる。「原子力発電や、漁船、宇宙衛生の部品や、遊園地の遊具も創った事があるんだ」と小金井さんは自慢げに語る。そして、その頃出会った様々な人々、職人のエピソードを話してくれる。俺はほろ酔い加減でその話を聞く。夢心地に聞こえてくる職人達の生きざまは、どこことなく芸術家のそれと似ている。いつしか俺は東京の馴染みの店で師匠と話してのような錯覚におちいつてきた。そして、あの頃いつも思っていたように思った『俺の絵を描かなくちゃ』。そう思った途端、俺の頭の中に広大無辺なイメージがあふれ出す。その先には、例のあのマリアがいる。いよいよ酔いがまわって来たようだ。まずい。弟の事を思えば、酔っぱらうわけにもいかない。正気との綱引き。行きつ戻りつはじめた時だ：

突然、弟が立ち上がり、持っていた箸を床に叩き付けた。

何をするかと驚いて見ていると、弟は俺らの横にいた女性二人組に向かって叫んだ。

「てめーら、じろじろと見てんじゃねーよ」

一気に酔いがさめる。

え？ 見てたっけ？

俺らにすればそんな感じである。

程よく酔いがまわって来たからか、それとも小金井さんの話に聞き入っていたからか、周りの客の事など気にもとめていなかった。

しかし、弟はキレている。どなられた女性客二人はおびえている。他の客は啞然としてこちらを見ている。中にはそれこそ半笑いの奴も居り、きまりが悪くなっている。

「おい！！」

俺は弟に呼びかけた。

「座れよ。みんな驚いてるじゃないか」

しかし、弟は俺の言葉など聞きもせず、女性二人をにらみ付けたままだ。あまりの恐ろしい形相に、こやつとうとう気が触れたのかと俺は少々心配になり、そこで、あつと気がつく。そうか、例のメンタルの病がこいつをナーバスにさせているんだ。そうに違いない。それで俺も立ち上がり、弟にだけ聞こえるよう、奴の耳もとで囁いた。

「お前、それ気のせいだよ。薬を飲めば落ち着くよ」

弟は、俺が何を言いたいのかをすぐに察したようだ。俺を見て首をふりながら言った。

「違うよ。『それ』とは関係ない。第一見られていたのは俺じゃない。あいつらが見ていたのは、みーさんだ」

その言葉に心臓を撃ち抜かれたようなショックを受ける。

口にくそ出さなかったが、みーさんと出かけるたびに周囲の好奇に満ちた視線と違和感を俺もずっと感じていた。けれど、気付いていないのか、みーさん自身あっけらかんとしていたし、口にすれば、かえって傷つける事になるとも思ったし、それで、ずっと気付かぬふりをしていた。けれど、弟には：この正義感の強い単純馬鹿には見過ごす事ができなかったらしい。（それが、奴の本質であり、奴を悲劇へと誘った原因でもある）

「お前ら、そんなに人の不幸がおもしろいかよ」

弟は、今にも殴りかからんばかりの剣幕である。女性の方は、あきらかに怯えていた。『これは、まずい』と俺は思った。彼女らがみーさんを笑ったにしろ、笑っていないにしろ、女性を殴るのはまずい。俺は、弟を諫めた。

「おい、よせってば。たまたまこっちの方を見ただけかもしれないだろう？」

「違う。あいつらは、笑っていた」

弟は、頑固に首を振る。だめだ、とても抑えられそうにない。仕方なく、彼女らに言う。

「悪い、もう帰ってくれないか？ このままじゃ、こいつ、何をするか分からない」

「馬鹿アニキ！ あんな奴ら、かばうなよ！」

「お前は黙ってろ！ さ、早く今のうちに帰るんだ」

けれど、女の子達は動こうとせず、その顔には罪悪感ともなんとも言えぬ気まずそうな表情を浮かべていた。その顔を見て俺は思った。：案外弟の言葉は凶星だったのかもしれない…。

みーさんはいえ、決して彼女達を見ようとはせず、まるで、何も見えず、何も聞こえないかのように箸を動かしている。もしかして、これはみーさんにとっては慣れっこのシチュエーションで、何も分からぬふりは、精一杯の防御姿勢なのかもしれない。そんな

みーさんの姿を見て、俺はなんともいえぬやり切れなさを感じた。同時に弟と同じく怒りをおぼえる。お前らは、何の権利があって、人を笑うのか？ たかが皮膚一枚の事で、人が人を嘲笑しても許されるというのか？

と、その時小金井さんが唐突に口を開いた。

「君らは、そんなに体の不自由な人が珍しいのか？」

その問いかけに、女性らはますます気まずそうな顔をした。

「こういう人に、会った事がないんだな？　じゃあ、いいだろう。こっちに來てじっくり話をしてみろよ」

俺らは：俺と弟はびっくりして小金井さんを見た。そして言葉にならぬ声を放つ。

：正気かよ。みーさんを見せ物にする気かよ？

俺らのそんな白い空気など知った事じゃないように、小金井さんは、彼女らを手招きした。

「さあ、一緒に飲もう」

「よせよ！」

弟が怒る。

「あんた、何考えてるんだよ」

「話してみようって言うてるだけだよ」

「馬鹿か！　偽善者。こんな馬鹿女達と話す事無いよ。みーさんだって嫌だろう？」

弟の呼びかけに、みーさんはやっと気付いたように顔を上げた。

「え？　なあに？」

すると、小金井さんが答えた。

「あの子達も一緒に飲もうって誘ってるんだ。いいだろう？」

「あ？ いいよ？ 別に」

みーさんはさらっと答えた。そして笑顔で

「こっちにおいでよ」

と、言った。2人の女性は互いに顔を見合わせ、しばらく戸惑っていたようだが、最後にはおずおずとこちらにやって来た。俺も弟も、啞然としてその様を見守っていた。

まったく、なんて飲み会になったもんだ。

怖い上司と、キレる弟、顔に傷を持つ哀れな女性と、それを興味本位に眺めていた初対面の2人組。こんなメンツでどう楽しめと言うのか。せっかく回りかけた酔いがすっかり醒めてしまった。何とも気まずい雰囲気が漂う。誰か何とかしてくれよ。

この、カチンコチンに固まった空気を最初に壊したのは、小金井さんだった。

「お嬢さん達、障害者に会うのは初めてなの？」

すると、2人のうち、目がねをかけた方の子がうなずいた。

「はい」

「でも、別にその人の事を笑ってたわけじゃありません」

もう一人の気の強そうな方がきっぱりと言った。

「私達は、別な事で笑ってただけです」

すると、…弟は彼女とは決して目を合わせようとはせずに…、独り言のように言った。

「嘘つくんじゃないよ。お前らみたいなのは、平気で人を傷つけるんだよ」

「決めつけないでよ。自意識過剰なんじゃないですか？」

眼鏡の子が怒り出す。

「落ち着けよ」

俺は弟をなだめた。

「彼女達の言う通り、お前も少し、決めつけすぎだ」

「だって、信じられるかよ。こんな奴らの言葉。口先でこんな事言ってたって、裏に回れば何言ってるか分からないんだ」

その言葉を聞いて、気が滅入って来た。奴の女性不信は…いや、人間不信は相当根が深いようだ。そうなるには、それだけの理由もあるのだろうが、それにしても…。

「でも、俺には彼女達が嘘を言ってるようには思えないけどな」

「俺には、嘘ついてるようにしか思えないね」

駄目だ。水掛け論だ。と、その時、みーさんが口を開いた。

「正ちゃん、よしなよ。寂しいよ、そういう考え方」

「え？」

弟が驚いてみーさんを見る。

「本人が、違うって言うなら、違うって信じようよ…。じゃなきゃ、何も信じられないよ」

「でも…」

弟は不服そうだ。まあ、そうだろう。本人はみーさんを庇ったつもりなんだから。

「まあまあ」

と、小金井さんが言う。

「俺もこの子達を信じるよ。もし、本当に心の底から笑っていたなら、俺がここに加わるように進めた時点で逃げてると思うぞ」

「…言われてみれば、そうですね。なんでも悪意にとってちゃ、自分が苦しいだけですよね」

俺もうなずいた。そして、

「ほら。お前も顔を上げて、もう少しにつこりしろよ」

と、弟の頭を叩いた。

「…」

弟は憮然としている。その顔には『俺は絶対に認めない』と書いてある。やれやれ…と、俺はため息をついた。…しかし、まあ、いきなり機嫌よくなれるわけないか…。

「不器用な奴だな」

小金井さんが苦笑した。

「でも、河井弟は、それで、正義感のつもりなんだな」

「それは、分かけど…」

眼鏡の女の子が膨れっ面で言う。

「もし、本当に私達がその女の人の事を笑っていたなら、怒るのは

人として当たり前の事だと思います：でも、私達は笑ってないし：確かな証拠もないのに人を疑うのは間違ってると思う」

「分かった、分かった」

小金井さんが言った。

「信じるよ。河井弟も、信じるだろう？」

けれど、弟は何も答えない。まるでガキだな。

「本当にごめんね」

俺は弟に変わって頭を下げた。

「こいつ、頭の回路が単純すぎるんだ。根は悪い奴じゃないんだけどな」

それから、小金井さんがみーさんの紹介をする。産婆沙メタル工場に、もう、かれこれ20年も勤めている事。隠れた職場のドンである事。などなど…。

それで、おれも続いて話した。入社時に一番良く面倒を見てくれたのがみーさんである事。また、みーさんが一人暮らしをしておりしばしば遊びに行った事。免許も持っていてよくドライブに行ったりしている事。などなど…。

弟は終始仏頂面。意地でも喋るもんかって感じた。そのバリアを崩すために俺はしきりに酒を進めたけれど、奴は頑として飲もうとはしなかった。

女の子達は。俺らの話を聞いて、自分達が抱いていた障害者のイメージと、みーさんがあまりにも違う事に驚いていた。もっと、こう：可哀相な存在と思っていたらしい。それで、俺も酒の勢いにまかせて普段より饒舌になった。

「いや。俺だって、実際のところは知らないけどさ、みーさんを見る限りは健常者より立派だし、日々充実させて生きていると思うよ。つくづく思うけど、幸福に生きるには健常者も障害者も関係無いのかもしれない。要するに、本人次第なんだと思うよ」

すると、女の子達もうなずいた。

「本当にそう思います。とても、勉強になりました」

：けど、それは実際にあまりにも脳天気な意見だった。所詮、人事でしかない、その人の苦しみは、その人にしか分からない。それを知るのももう少し後の話になるのだけれど…。

飲み会が終わり、別れた後も、弟はずっと黙ったきりだった。怒っているのかと心配したが、そうではなくて、考え込んでいるらしかった。奴の心の中では様々な思いが交差していた。そして、その中でも一番の疑問は、なぜ、小金井さんがあの二人を仲間に入れ、みーさんがそれを平然と受け入れたかについてだった。いまだに、奴は彼女達を疑っていた。あの二人は、絶対にみーさんを笑っていた。ところが、奴にとってさらに衝撃だった事に、飲み会が終わる頃には、みーさんは彼女らとすっかり仲良くなり、遊ぶ約束まで決めていた。

「俺にはさっぱり分からない」

と、弟が首を振る。

「なんで、あの人はあんな奴らを許せたんだ？」

「それは、そもそもみーさんが、彼女達の事を疑っていなかったからだろう」

「それは、俺だって最後の方には、あの二人が想像よりはましな人間かなと思ったさ。決めつけるのが悪い事も分かってる。でも、本当のところあいつらがどう思ってるかなんて、アニキにだって分からないだろう？」

「そりゃ、疑い出したらキリがないが…」

「でも、俺は何度も見たんだよ。一見いい奴が平気で裏切ったり、嘘をついたりして、しかも、その後ものうのうと生きているのを…」

「なるほどな」

俺はため息をつく。やはり、こいつの人間不信は、相当根が深いようだ。

「確かに、そういう人間もいると思うよ。俺だって会った事がないわけじゃない。でも、世の中には許さなきゃしょうがない事もあるんじゃないか？ 例えば、誰かが自分を裏切ったからと言って、その事でずっと人を恨み続けてたら、前に進めなくなるだけだろう？」

「それじゃ、人を裏切っても許されるってことか？」

「そうでなくて」
そこで、言葉を切る。どうしたら、こいつの心を溶かす事ができるだろう？

「例えば、裏切るなんていうのは、裏切った本人の問題であって、裏切られた方にとっては単なる出来事に過ぎないということだ。そこに、捕らわれるなど言ってるんだよ」

「意味が分からない」

「人間は弱いから、間違いも起すって事だ。しかし、間違うから、悪人と言う事じゃない。克服するべきは本人であって、他人がそれを無理矢理矯正しようなんて、おこがましいっていったるんだよ」

「兄ちゃんの言う事は、難しすぎる」

「そうかな？ 難しいかな？ じゃあ、どう言えば伝わるのかなあ？」
と、俺はさんざん考えたあげく、こうまとめた。

「つまり、人が何を言おうが、何をしようが、自分が間違った事をしてないなら、堂々としていればいいっていう事だ」

こんどはちゃんと伝わったようだ。

「そんなものかな」

弟はぽつりとつぶやいた。

しかし、それきり、会話は途切れた。

その夜の出来事で、弟が何を感じ、どう考え、どう結論付けたのか、それは当人ではない俺には決して知る由はない。が、少なくとも表面上、目立った変化は見えなかった。ただ一つ、わずかに変わった事と言えば、奴の小金井さんに対する警戒心が若干ではあるが和らいだ事である。

そりゃ、そうだろう。

何しろ、あの、飲み会のおり、いくら頭に血が昇ったとはいえ、上司に向かって『あんた』と呼びつけ『偽善者』とののしったのである。今さら、何をおそれる事があるだろう？　しかし、小金井さんは、その事に腹を立てているようでもなかった。それどころか、むしろ、弟の事を気に入ってくれたようにさえ見えた。それが証拠に、あれ以後、弟にまめに声をかけるようになった。仕事の指導も丁寧にしてくれているようだし、時には、弟が、俺や、みーさんと3人で昼飯をくってる折など、どこからかふらっと現れ、あれこれ世間話をしていくこともあった。：もしかすると、弟の不器用ながらもみーさんを庇おうとした正義感にうたれたのかもしれない。

しかし、正直言って、この、上司の接近について、初めのうちは、弟も：そして俺も、ありがた迷惑に感じていた。理由は怖いからだ。しかし、そのうちに慣れた。そして、怖い上司Aのプレッシャーが無くなった弟は、多少は仕事がスムーズにこなせるようになって来た。といっても、一人前にはまだ3割程足りない。まだまだ、奴にとって世界は恐怖に満ちていたからだ。例えば、こんな風に…。

「河井弟さん、すいませーん」

前田君の声がする。

…なんだろう？…俺は目の前の仕事に集中しつつ、耳をそばだてた。前田君の、例の、あの皮肉っぽい言い方がフロアに響き渡る。

「あのー、このカゴ車、弟さんが運んで来てくれたんですよ」

…カゴ車？ ああ。解体前のテレビが積まれている鉄製のカゴ車を運んで来たんだな。それをライン正面に設置して、俺らは解体作業をする。そして、カゴ車が空になったら、フロア奥のカゴ車置き場から次のカゴ車を運んで来る事になっている。弟は、今あるカゴ車が空になりかけているのに気付いたから、新しいものを運んで来たんだろう。しかし、それが、なんだって言うんだ？

前田君は言った。

「あのー。まだ、前のカゴ車が空になってないんで、新しいのを持って来てもらっても困るんですけど」

俺は、ちらりと振り返った。確かにそこには、解体前のテレビが一杯積まれたカゴ車と、ほぼ空のカゴ車があった。ほぼ空の方には、2台のテレビが置かれている。前田君は、それら指さして言った。

「ほら、まだ、残ってますよね、テレビ」
すると、弟はモゴモゴと答えた。

「でも、カゴ車の中のテレビが、3台になったら、次のカゴ車を運んで来るように言われたから…」

「僕、そんな指示、しましたっけ？」

「前田さんは言ってませんけど…」

「じゃあ、誰が言ったんですか？」

「それは…」

弟の言葉は、妙に歯切れが悪い。どうやら、自分に指導した人物を庇っているらしい。前田君はイライラと言った。

「2台もこんな所に置かれると、邪魔なんですよ。元に戻して来

てくれますか？」

「：でも、それじゃ、また運ばなくちゃいけないじゃないですか？」
弟の言う通りだ。しかし、前田君は撤回しない。

「その通りです。でも、邪魔なので返して来て下さい」

その言葉に、俺は、正直言つてムカついた。他に同じ事をする奴はいくらでもいるのに、何で、弟にだけ厳しく言うのか。頭に来て、ひとこと言つてやろうかと作業の手を止めると、

「おい、前田」

小金井さんの声がした。

「河井弟に、なるべく早くカゴ車を持って来るように指示したのは、俺だ」

「小金井さんの指示ですか？　こんな所にカゴ車が2台もあると邪魔なんですけど」

さすが。前田君は、上司であろうが怯まない。

「でも、その方が作業の切れ目がなくて効率良いだろう？」

「それは、確かにそうですけど」

「それに、こんなところ誰も通らないだろう。2台置いてあつても問題ないぞ」

「そうですかねえ？」

前田君は自説に固執した。正しい、正しくないはさておき、その度胸は感心する。

「そうだよ。だから、このままにしておけ。河井弟は作業に戻れ。時間のロスだ」

「小金井さんが、そこまで言うなら放っておきますけど、何かあつても僕は知りませんよ」

こうして、とりあえずその場は収まり、俺も改めて作業に集中した。それにしても、最近の前田君の態度はなにか変だ。確かに、彼は性格はきついが、それは仕事に熱心なせいで、決して、あんな理不尽な事を言うような人間じゃなかったのに。要するに、それほど、

弟の事が嫌いって事か。弟は、弟なりに頑張っているんだがな。まあ、今までの今までだ。長い目で見るしかないだろう。一度失った信用を取り戻すためには、倍以上の時間がかかるというしな。

「ねえ、今度の日曜日、ヒマ？」

出し抜けにみーさんが言った。

「え？ 俺はちょっと予定があるけど…なんで？」

俺は聞き返した。弟は黙々と握り飯を食っている。昼休み。食堂での出来事だ。

「うん。実は、この間の飲み会で会ったあの子達…覚えてる？ 眼鏡の子と、ロングヘアの…」

「覚えてるよ」

忘れるわけが無い。弟が喧嘩を吹っかけた二人組の女子だ。

「でも、彼女達が何か？」

「うん。実は、また今度遊びに行こうかって話がでているんだけど…」

「マジで？」

…信じられない。あんなに、最悪な出会い方をしたのに。

「本当よ。正ちゃんは、行けない？」

「無理」

弟はあっさりと首をふった。そして「予定がある」と嘘をついた。

「そうなんだ。残念」

みーさんは首をすくめる。

「2人ともがっかりするわ」

「まさか」

俺は笑った。

「だって、俺ら、ほとんど喋らなかったのに」

「そうだった？ でも、あの眼鏡の子…カナちゃんというんだけど」

…が、どうしても、もう一度正ちゃんと会いたいって言ってるのよ…」

それを聞いて、思わず俺は叫んだ。

「嘘でしょう？」

「何で嘘なのよ？」

「だって…」

…だって、絶対に印象悪いはずなのに。俺の記憶では、あの時、あの子、最後まで弟と口をきこうとしなかったぞ。それどころか、目を合わせる事すら拒否していたのに…。まさか、あれが好意の裏返しとか？　ありえない！　じゃあ、なんだ？　なぜ、今さら会いたがる？　…

色々考えてたら、弟がぼそっとつぶやいた。

「タイプじゃない」

「何だと？」

俺は突っ込んだ。

「別に、お前が好きだから、会いたいって言ってるわけじゃないかもしれないだろう？」

「…うるさいな。とにかく、無理なもんは、無理なの！」

「じゃあ、仕方ないけどさ…」

みーさんがため息をつく。

「気が変わったら、いつでも言ってね」

けど、弟は永久に気なんか変わらないって顔で、握り飯を頬張り続けていた。

43

2008年5月14日 (水) 21時32分 [名前] ..
土中喪黒う

リリカさんこんばんは、お久しぶりです。喪黒うです。
結構長い事ごぶさたしていましたが、
僕はなんとか元気に頑張っています。
リリカさんに言われた通り病院に行き、薬をもらったおかげで、
体の震えもおさまり、前より落ち着いて仕事ができるようになった
からです。

これも、リリカさん、そしてマリアさんのおかげです。
お礼を言わせて下さい。

ありがとう

さて、リリカさん。

最近、僕には大きなナゾができました。
僕には障害者の友人がいます。

とても、いい人で、僕にとっては尊敬できる人なのですが、
その人と外を歩いていると、みんなが僕らに注目します。
中には、笑っている人間もいます。

僕にはそれが、腹立たしくなりません。
なのに、その友人は、怒りもしないし、泣きもしません。
どうして、あの人はあんなに強くいられるのでしょうか？

2008年5月14日 (水) 22時43分 [名前] ..
リリカ

もぐちゃん、お久しぶり。

仕事頑張ってるみたいだね（^^）

私なんかでも役に立ててよかった。嬉しいです☆

さて、もぐちゃんの知り合いの話ですが

実は、私にも障害者の友人がいて、

彼女と遊びに行くたびに

知らない人達の視線を感じる事がよくあります。

そして、やはり、彼女も泣きもせず、怒りもせず、

自分の境遇を嘆く事もなく、強く、明るく生きています。

私は、そんな彼女を見ていて、心の底から凄いと思います。

そして、私にとっても、彼女がどうして強くいられるのかはナゾですが

敢えて言うのなら、

人が生まれた時に与えられる物は決まっていて、

それを受け入れて生きるしか仕方がないという事を

彼女が誰よりも分かっているからかもしれません。

2008年5月14日

（水）

23時01分

〔名前〕

..

土中喪黒う

＞人が生まれた時に与えられる物は決まっていて、

＞それを受け入れて生きるしか仕方がないという事を

＞彼女が誰よりも分かっているからかもしれません。

そうなのかもしれませんね。

彼女達は、そう、割り切っているのかもしれませんがね。

でも、僕は思っています。

もし、神様がいて、人間の幸せを願っているのなら
どうして、誰にも同じ物をくれなかったのでしょうか？
皆が同じピースを持っていたなら、

誰もが平等にパズルを完成させる事ができる筈です。
そうすれば、不平等もなく、誰もが不幸を感じず
誰も悲しむ事もなく生きられるだろうにと思います。

2008年5月14日 (水) 09時32分 [名前] ..
リリカ

そうかな？ みんなが同じピースを持って、同じパズル完成させるのが

平等で、幸せな事なのかな？

それじゃあ、違う人間に生まれて来る意味がないんじゃないのかな？

もぐちゃんに言われて、一つ気がついた。

誰もが生まれた時に与えられるピースは、色も、形も、数も違って
きつと完成させられる絵も、それぞれ違うんだろうけど。

きつと、誰もが、それぞれの絵を完成させられるように
神様は平等にピースを与えてくれるんじゃないのかな？

大事なのは、自分に与えられた物の価値に気付く

それを大切にする事じゃないのかな？

「なるほどね」

俺はパソコンの画面に表示された文字を目で追いながらつぶやいた。

「パズルのピースか、なかなかうまい事言うな」

「詩人ね、もぐちゃん。さすが、小説を書くだけあるわ」

「俺は、森崎の書き込みに感動したんだけど。でも、弟の事ほめてやってくれてありがとう。森崎だけだよ」

そう言うと、俺はマックから離れ、テーブルの上に置かれたコーヒーに手を伸ばした。

日曜、俺は森崎の家にいる。

オンライン上での弟の様子を見る、という理由で上がり込んだのだ。

森崎の部屋は全体的に白いトーンで統一されていた。机も、椅子も、パソコンも、壁も何もかも白い。白い壁の中に、トーマス・マックナイトの月が浮かんでいる。異国の港の上に浮かぶ、丸い月だ。

「で、結局弟さん、今日は行かなかったのね」

白いキーボードに手を乗せて森崎が言う。

「あいつが行くわけがないよ」

俺は答えた。

例のみーさん主催のデート（と決めつけていいのかどうか分からないが）の事である。

「まだ、そこまで他人に気を許していないよ」

「そうなんだ」

そう言うと、森崎はマウスをクリックしてパソコンを終了させた。

「もったいないね。おもしろそうだなのに」

「おもしろそうって、例の彼女の事？」

「そうよ。ケンカした相手に会いたがるなんて、おもしろいと思わない？」

「おもしろいっていうより、意図が分からなくて不思議だよ」

「私思うに、人にすごく興味のある子か…それとも…」

「それとも？」

「単にもぐちゃんのルックスが好みだったか…」

「まさか！ あいつ、身なりに少しも気をつかってないのに」

「じゃあ、人に興味がある子なのかな」

「ふうん」

それじゃ、俺とは正反対だな…と思いつつ、コーヒーをひとくち飲む。

「でも、いい感じね。もぐちゃん、仕事頑張ってるみたいだし」

「まだ、スムーズにはいい難いけどな」

「…続きそうなの？ 仕事」

「微妙なところ。でも、この間いった通り、上司が気に入ってくれたみたいだから、この調子でいけばもしかするって感じかな…」

「そっか…」

それを聞いて、森崎はなぜかため息をついた。

「何か残念」

「どうして？」

「…そろそろ、お悩み相談室のお姉さんも廃業だと思うと、すごく残念」

その言葉に、俺は思わず吹き出す。

「何？ それ？」

「サイトの書き込みの事よ。最近、もぐちゃんの書き込みも減ったし…。でも、これって、いい事なのよ。ちゃんと現実を生きているって事」

「そういうもんなの？」

「そう。すごく良い事よ。ちょっと寂しいけど…」

「ふうん…そうなんだ」

あいにく俺は、ネットなどほとんどやらないから、その気持ちは分からない。で、何の感慨もなく壁の時計に目をやると、既に2時15分を回っていた。

「おい。それより、そろそろ出ないとヤバイぞ。映画、間に合わない」

「え？ もうそんな時間？」

森崎が驚いて時計を見上げる。

「確か、上映開始3時だったろ？ 歩いていくなら、もう出ないと」
「本当だ！」

そういうと、森崎はばたばたと立ち上がり、飲みさしのコーヒークップを盆に乗せた。

「先に外に出てて、私はここを片付けてから行くから…」
「わかった」

うなずくと、カバンを持ち階下へ急ぐ。そして、玄関から外に出て、森崎を待った。5分ほどして森崎が出て来る。そして、俺達は歩き出した。

映画館までは、ここから歩いて10分ほどの距離のショッピングモールの中にある。以前、森崎と一緒に似顔絵書きのバイトをしたあの店だ。近所とはいえ、行くのは結構久しぶりだ。店までは、小さな川沿いの道に行く。初夏。沿岸の木々は緑色の若葉を風にそよがせている。一年で一番いい季節だ。その葉の隙間からこぼれる光の中を歩きながら、ふと、森崎が言う。

「ねえ、河井君」

「うん？」

「もしもさ…」

「何？」

「もしも、もぐちゃん…弟さんがこのまま社会復帰できそうなら…」

「…？」

「社会復帰できそうなら…」

「何だよ？」

「河井君はこの先どうするの？ 東京に戻るの？」
「…」

それは、いずれは答えを出さなければいけない思いながらも、ずっと、目をそらしていた問題だった。

弟が無事に社会復帰できたらどうするのか？

それは、俺と森崎との関係においてこの上なく大事な問題であった。なぜなら、それは、俺がかつて森崎に「弟のためだけにこの町にいる」と告げたからである。そして、常に「いずれは東京に戻る」ことを、そこはかとなく仄めかしていた。にもかかわらず、森崎は俺との縁を切ろうともしなかったし、俺もそういう森崎の態度に甘えていた。考えてみれば、卑怯この上ない人間である。そう知りつつも、なぜずるずると付き合いを続けるのか。その弱さがなんなのか。森崎に対する情なのか、それとも、未来に対する不安からなのか。自分でも判然とできぬままに時だけが過ぎていく。

けれど、いずれはきっぱりと答えを出さなくてはならないだろう。逃げ続けたところで問題は追いかけて来るのだから。

しかし、幸いにして（皮肉にも）、世の中そんなに甘くはなかった。

「河井弟さーん」

前田君の声がする。

途端に俺の隣で作業していた宮沢さんが「またかよ」って吹き出した。

前田君が弟を呼ぶのは、奴が何かをやらかしたからであるが、1時間に1度はそれを繰り返すのが、近ごろのこの職場での恒例になっていた。やれやれ、今度は何をやらかしたんだよと、あきれ気味に耳をすませていると、前田君の言葉が聞こえて来る。

「これ、弟さんが分けた部品ですよね」

「え？　そうでしたっけ？」

「そうですよ。弟さんの作業台の番号が書いてある。ほら」

「あ。本当ですね」

「『本当ですねえ』」

前田君が、わざと弟の口まねをする。

「…で、それはいいんですけどね、このネジの箱の中にコイルが混じっちゃんでるんですよ。ほら、1個、2個…」

「あ…本当だ」

「『本当だ!』。で、前にも言いましたけど、困るんですよ、こういうことされると。2度手間になっちゃうんで」

「…すいません。急いでいたから、よく見ていなくて」

「あの、前にも言ったと思うんですけど、慌てなくていいから、ミスのないようにお願いします」

「分かりました」

「『分かりました』か。弟さん、いつもその場では分かってくれてんですけど、その割に直りませんよねえ」

「……」

「何で同じミスを何回も繰り返すんですか?」

「…分かりません」

「自分のことも分からないんですか? 困りますね。原因が分からないと、直せませんよね」

「……慌てているせいかもしれません」

「なんで慌てるんですか?」

「慌てないと、ノルマこなせないし…」

「慌てていても、こなせてませんよね」

「…すいません」

「何度も言いますけど、慌てなくていいからミスのないようにしてもらえませんか?」

「…はい」

「お願いします」

…まったく、聞いていてこちらが恥ずかしくなる。

その日、弟は一人で残業をさせられていた。ここしばらくは、うちのラインの成績も上がって来ていたから、ようやくサービス残業がなくなったというのに、たった一人で残されていたのである。理由は、ノルマがこなせていないからだという。誰も居なくなったフロアで一人居残りさせられている弟の姿に、哀れを覚えた俺は思わず「俺も手伝う」と口に出してしまった。

「いいよ」

弟はうつむいたまま答えた。

「けど、お前、一人じゃ無理だろ？」

「大丈夫だよ」

「だって、後何台あるんだ？」

「6台」

「6台？」

俺は驚いた。

「ノルマに6台足りなかったっていうのか？」

いくらなんでも多すぎる。

「そうだよ」

「なんで？」

「なんでって…ミスをしないようにゆっくりやっていたからさ」

「だからって…時間がかかりすぎだろう？」

「でも、かかったんだから仕方ないじゃないか」

「…やっぱり、手伝うよ。そんなんじゃ、何時までかかるか分からないだろう？」

そう言うと、俺は自分の作業台に戻った。ところが、その時。

「困りますよー、河井さん」

聞きなれた声と共に、前田君が現れた。

「そういうの、弟さんのためになりませんよ。そう思いませんか？」
その、いやみったらしい言い方に、俺はムッとして前田君を見る。

「別に身内だから庇ってる訳じゃないよ。ただ、やり方としておかしくないですか？ 一人だけ居残りさせるなんて」

「仕方ないでしょう？ ノルマをこなせていないの、弟さんだけなんだから。弟さん一人のおかげで、今日の、うちのラインの成績、また最下位なんですよ」

「だったら、全員で残ればいいだろう？」

「そんなことしたら、弟さん、よけいにヒンシュクを買いますよ？ それでもいいんですか？」

言われてみればそうだと、俺は絶句する。その俺に向かい、前田君は畳み掛けるように言った。

「お兄さんとして、弟を庇いたい気持ちは分かります。でも、それでいいんですか？ 世の中は厳しいんですよ。その厳しい世の中で生きていくのを教える事も、家族の役目なんじゃないんですか？

一生そうやって、弟さんを甘やかすつもりですか？ それで、弟さん、生きていけるんですか？ 世の中自己責任ですよ」

「別に、身内だから庇ってるわけじゃないって言っただろう？」

「本気でそう思ってるなら、一度自分の姿を鏡に映してよく見てみた方がいいですね。少なくとも、僕にはそうとしか見えませんよ。客観的な意見って大事だと思います？」

くそ。なんかムカつく。大体、俺は馬鹿の一つ覚えのように『自己責任』としかほげけない人間が大嫌いなのだ。流行り言葉なら無批判に良しとする風潮も気に食わないが、それ以上に、それこそ、自分以外の全てに対する責任を放棄している言葉に他ならない：としか思えないからである。でも、この場合は言い返せない。前田君の言葉にも一理ある。

「分かりました」

俺はしぶしぶうなずくと、言われた通り弟を置いてフロアを出た。

その日、弟が帰宅したのは、夜も9時を過ぎてからだった。なんでも、作業をしている間中、隣に前田君がはりついて逐一ダメ出し

して来たせいで、少しもはかどらなかつたからだそうだ。弟はすっかり、憔悴しきっていた。

「今日は休む」

布団の中から弟が言った。

「どうして？」

たずねると、

「腹が痛い」

と答える。

「風邪か？」

「…分からないけど…最近、残業続きたったから限界が来たんだと思う」

「…なるほどね」

俺はうなずいた。確かに、ここ一週間というものの、弟は毎日一人で居残り残業をさせられていた。精神的にも肉体的にもきつかった事だろう。しかし、正直『またか』と思う。だからといって、本人が体調が悪いと言うのはどうしようもない。

「分かった。前田さんに、休むと伝えておくよ」

「頼むよ」

「じゃあ、俺は行くから」

「うん」

「…」

「…」

「…本当に、ハラが痛いんだよ」

「分かってるよ…ちゃんと病院に行けよ」

「ああ」

6月2日。

早いもので、もう、梅雨の季節だ。

傘をさして会社に向かう。

雨の中、家々の庭に咲く紫陽花が、華やかな彩りをそえてはいるが、俺の気分は天候と同じく甚だしく憂鬱だ。原因はもちろん弟である。：腹が痛いだって？ 本当かよ。こないだ、長い事休んだ時も同じ言い訳だったじゃないか。まさか、また、しばらく閉じこめる気じゃなだろうな。

ってことは、また『振り出しに戻る』か？ まるで、賽の河原の石積みだな。正直言って、もう疲れた。今度同じ事が起こるようなら、今度こそ俺は投げ出してしまいかもしれない：

ため息をつきながら重たい足を引きずり、気がつけば工場に辿り着いていた。そぼ降る雨の中に屹立する灰色の工場を見上げて、ますます憂鬱になる。もつとも、絵にするには最高のモチーフだがな。その時だ。「優ちゃん」と明るいい声がして、意識の中に思わぬ花が咲く。どこ咲く花かと思渡せば、みーさんが1階の事務所の窓から顔を出して、笑いながら手を振っていた。

「おはよー」

「おはようございます」

なんだか、ものすごく救われた気分になり、俺は窓辺に駆け寄った。

「あれ？ 正ちゃんは？」

「休みです」

「風邪？」

「腹が痛いそうです」

「なんだ。話したい事があったのに。まあ、いいや。優ちゃん、こつて頼める？」

「別にいいけど：携帯でメールしたらどうですか？」

「携帯、壊れちゃって」

「そうなんだ。それじゃ、仕方ないですね。で、何です？」

「うん。：今は、時間がないから後で：昼休み、食堂に来れる？」

「行けますよ」

「じゃあ、その時に：」

そう言うと、みーさんは「戻らなきゃ」と窓を閉めて走り去って行った。その後ろ姿を見て、少しだけ気が晴れる。俺は、深呼吸をして自分の職場へと急いだ。

昼休み、約束通りに食堂に行くと、既にみーさんが来て待っていた。

「で、話ってなんですか？」

と尋ねると、なんて事はない。例の眼鏡の彼女：居酒屋で会った子が、どうしても正と話したいと言っているんだそうだ。それで、なんとか説得してくれないかと頼まれる。

「いいですよ」

と、俺は答えた。

「でも、どうしてそんなに会いたがるんでしょうね」

「このまま誤解されているのが嫌なんだって」

「そういう事ですか」

俺は納得した。やっぱり恋愛感情があるとかそういう事ではないらしい。

「分かりました。あいつに伝えてみます。でも、あいつがOKするかどうかは保証できませんけど…」

「なんでだろう？ 会って、話せばいいのにね」

みーさんには、弟の心境がさっぱり理解できないようだ。

「うーん。あいつなりに色々あるんだと思いますよ」

俺はあいまいに答えた。

それから、とりとめの無い話をする。森崎の事、職場の事、そのうちに前田君の事に話しがおよぶ。そして、弟がここしばらくずっと1人で残業をさせられていた事を話すと、途端にみーさんが怒り出した。

「嘘でしょ？ そんなおかしい話ないよ」

「でも、本当なんですよ」

「毎日何時までやっているの？」

「9・00です」

「9・00!？」

「ええ。それがもう10日も続いたもんで、とうとうぶっ倒れたんじゃないかと本人は言ってるんですが…」

「そうか…疲れから風邪をひいたのかもね」

「…ただの風邪ならいいんですけどね」

思わず不安を口にする。しかし、その真意はみーさんには伝わらない。

「そうだね。もっと重病だと怖いよね」

「いや…」

そうじゃなくて、俺の心配しているのは、弟が再び登社拒否になるんじゃないかということなのだが…しかし、まさかそんな事は言えないと思い返し、

「そうです。重病だと怖いです…」

と適当にうなずいておいた。

「それにしても、ひどいね。一人で残業なんて」

「正確には一人ではなくて、その、前田って奴が一緒にについているらしいんですけど、それがかえって負担になって、仕事が遅くなるって言っていました」

「コガちゃんは助けてくれないの？」

「小金井さんは、最近会議が多いらしくて、ほとんどフロアに顔を出しません」

「そうなんだ。じゃあ、結局は、その前田って子のやりたい放題なんだ」

「そうですね。指示は彼が出しますね」

「むかつくね」

「うん。根は悪い人じゃないんだろうとは思うけど。弟の事に関しては、完全に空回りしてますね。というか、むしろ、悪意があるの

かも」

「このままだと、正ちゃん、辞めちゃうんじゃない？」

みーさんの言葉が俺の不安を直撃する。それで俺も

「実は、俺もそれが一番心配で…」

と、つい本音をもらした。

すると…

「辞めたければ、辞めてもらっていいんですよ」

聞きなれた声がした。ぎくりとする。それは、少なくとも、今、この場で、最も聞きたくない声だったからだ。おそろおそろ振り返ると、前田君が立っている。今の会話全部聞かれたのかよと胃が痛くなる。前田君の方は堂々としたもんだ。自分の悪口を聞かされても、平然としているところ、たいした根性の持ち主である。彼は、顔色一つ変えずにこう言った。

「やる気のない人間にいてもらっても、迷惑なだけですから」

そして、何も言い返せずにいる俺らを尻目に、悠然と去って行く。その後ろ姿を見ながらみーさんが言った。

「何、あれ？ 感じが悪い」

それで、俺はみーさんに教えた。

「あれが、前田君です」

昼飯が終わりフロアに戻ると、既に前田君が戻っており、何ごともなかったかのように仕事をしていた。腹いせにさぞかし嫌がらせでもされるかと思ったが、案に相違して何もされなかった。しかし、俺の立場として目をあわせる度胸は持てない。

こうして、なんとも気まずい一日が過ぎて行った。

家に帰るとおふくろと親父が無言で飯を食っていた。テレビもつけずに、何やら陰気くさい。時計は既に7・00を回っていて、秒針だけがカチカチと音を立てている。

「ただいま」

そう言って、俺はカバンを床に放り出しどかっとな椅子に腰を降ろした。

「遅かったのね」

おふくろが言う。

「残業だった」

「まったくあんた達は…どちらかが残業やらされなくちゃ気が済まないわけ？」

「言っとくが、俺はやらされ残業じゃないぞ。正が休んだ穴を全員で埋めただけだ」

これは事実である。しかし、おふくろは聞いているのかいないのか、無言で奥の台所に消えて行った。かわりに親父が言う。

「まったく…あいつは皆さんに迷惑ばかりかけて…」

親父もおふくろも弟が人並みに仕事ができずにいることを知っている。親父にとっては、それが、ふがいなくて仕方ないようだ。

「仕方がないだろう？ 体調がわるいんだから…で、あいつの具合はどうなの？」

「胃腸風邪ですって」

おふくろが、俺の目の前に茶わんを並べながら答えた。

「今朝、病院に行かせたわ」

「病院に行ったんだ」

「ええ」

「で、薬は？」

「飲んでたわ」

「それなら、本当の病気だな」

「…でも、これをきっかけに、また引きこもるつもりじゃあ…」

「そう、疑ってやるなよ。あいつはあいつなりに、ずっと頑張っていたんだ。残業疲れから来た風邪っていうのも案外本当かもしれない」

「ずっと、家にこもって自分を甘やかしていたからだ」

親父が腹立たしげに言う。

「父さんの若い頃は、9時までの残業なんて当たり前だったぞ」

「…今だってそうだよ。いや、むしろ今のが職場環境はシビアだっ
て言われているぞ。それに、自分から進んでやる残業と、無理やり
やらされる残業とじゃ、気分的にまったく違うだろう？」

「無理矢理、残業をやらされなきゃいけないような状況になる事が、
情けないと言っているんだ」

確かに親父の言う通りではあるが、なんだかやり切れないものを
感じる。

「そりゃそうだけど…一番辛いのはあいつだろ？ 家族が分かって
やらなきゃ、誰が分かってやるんだよ…」

そう言うのと、俺はテレビをつけた。

食後、弟の部屋に向かう。みーさんからの伝言を伝えるためだ。
ドアをノックすると「入れよ」という返事が聞こえる。やけにあっ
さりしているかと拍子抜けしながらも扉をあけると、弟は布団の中
で起き上がり、パソコンを眺めていた。枕元には錠剤のカラとコッ
プが置いてある。なんだ、起きれるんじゃないか。

「調子はどうだ？」

と、尋ねると

「見ての通りだ」

との答え。

「起きあがれるって事は、だいぶ良くなったって事だな？」

「葉がよくきいているみたいだね」

弟は振り向きもせずに答える。パソコンには森崎の掲示板が表示されていた。俺も書き込んだ事のある例の掲示板だ。自分の書き込みを思い出し、少し気まづくなるが、しかし、もちろん、何食わぬ顔を決め込み、そしてさり気なく話題をふる。

「明日は行けそうか？」

「分からない。俺は医者じゃないから明日の体調まで予測できない」
「そうかよ」

「本音を言えば、行きたくない。前田の顔を見るのもいやだ」

「…」

「できれば、もう辞めたいぐらいだ」

「じゃあ、休むのか？」

「…」

「進むも、戻るも、お前次第だよ」

「分かってるよ。だから、すこしでも気を強く持てるように掲示板を見ているんだ」

「…掲示板？　今、見ているそれか？」

「そうさ」

弟は、そう言うてうなずくと、はじめてこちらを振り返った。

「俺のネット上の知り合いに、ニートの弟を持った女の人がいるんだ…」

その言葉にドキツとする。そりゃ、俺の嘘の書き込みの事じゃないか？　が、しかし、内心の動揺を気取られぬよう、努めて平静をよそおう。

「そうか。そんな知り合いがいるのか」

「うん。…でも、その人の弟、病気で死んじゃったんだって」

「そうか。それは、気の毒だったな」

やはり、俺の書き込みの事をさしていたようだ。

「その弟が死ぬまぎわに、泣きながら後悔したんだって。『やっぱり働いておけばよかった』って。ねえ、兄ちゃん。もし、俺が今のまま死んだら、やっぱり後悔すると思う？」

「そりゃ、するんじゃないか？」

「本当に、そう思う？」

「思うよ」

「何を根拠に？」

「根拠ってそれは…」

一瞬口ごもり、俺はこう答えた。

「それは…お前、ほら、覚えてるだろ？ 東京での師匠の話。自殺まで考えたあの人が、生死の境目で思った事」

「…ああ…！」

その言葉に弟が瞳を輝かせた。

「そうか。あの人も同じ事を言っていたな」

「ああ。『生きていれば幸せになれたかもしれないのに』って。日頃『死にたい、死にたい』と言っていたって、いざその瞬間になれば生きたいと思うんじゃないのか？」

「そんなもんかな？」

「…少なくとも、俺は溺れた時に死ぬもんかと思ったぞ」

「そりゃ、兄ちゃんが、心から死にたいと思った事がないから…」

でも、そうか。やっぱりそういうものなのか…」

そう言うと、弟は再びパソコンに目を戻した。

「正直、そこまで言われてもよく分からないけど…でも、頑張るしかないな。この画面の向こうで、僕を励ましてくれた人のためにも…」

最後はまるで、独り言のようだった。

その言葉を聞き、俺は少しだけ胸が温かくなるのを感じた。森崎や俺の言葉がちゃんとこいつに通じていた事が分かったからだ。

しかし、弟や俺の心の中にどれだけドラマティックな変化が起きようとも、日常に大きな変化があるわけでもなく（実際、心の変化がもたらす効果などというものは、決して速効性のある薬のごときものではないようだ）、次の日なんとか出勤できたものの、弟は相変わらず前田君に叱られてばかりだし、フロアに失笑は漏れ続けるしで、俺はうつうつと作業を続けていた。

しかも、弟は、完全回復しているわけじゃない。まだ、時々、たまに、腹が痛むんだという。それでも出勤したのは、寝ている程の痛みでないという事と、せっかくのやる気を削がなかったためなのだろうだ。その姿勢は、立派だと思う。もともと、世の中には熱が出て、点滴を打ってまでも出勤してくる人もいるぐらいだから、弟の行動は、社会人として当たり前といえば、当たり前である。それが、正しいかどうかは甚だ疑問だが、そういう真面目さと勤勉さが世界的に認知された日本人の国民性であり、戦後の荒廃から経済大国に発展させた理由でもある。と、いわれている。それならば、ありがたがるべき個性ともいえるが、その割に我々世代の心の荒廃っぷりはなんだ？ 自殺者年間数万人てのはなんだ？ もしかして、俺らのじいちゃん、ばあちゃん達は、あまりにも上昇する事に夢中になりすぎて、多くの大事なものを置き忘れてしまったんじゃないか？ おかげで『最高に恵まれた子供時代を送った』俺らが、そのカルマを刈るべき運命になったのじゃないのか？ だとすれば、迷惑千万な話だ。しかし、産まれ落ちた時代に文句をいってもどうにもならない…。

そんなことより、やはり弟は今日も居残りをさせられていた。時おり腹を抑えながらも、一人黙々と作業をするその姿に心の中でエールを送りながら、帰ることにする。

建物から出るとみーさんが待っていた。そして、いつもの明るい

声で「おつかれさま」という。

「おつかれさま。どうしたんですか？ そんなところで、珍しい…」

「うん。正ちゃんに用事があった。…正ちゃんは？」

「今日も居残りです」

「え？ 病み上がりなの？」

「そんなの関係ねーですよ」

「…かわいそう」

「うーん。まあ、本人は仕方ないと思っているみたいだけど」

「そう。がんばり屋さんね。…ところで、昨日の話伝えてくれた？」

「ああ。例の眼鏡の彼女の事？」

「そう」

「伝えましたよ。でも、やっぱり無理って…」

それを聞くと、みーさんは残念そうな顔をした。

「…そうなんだ。なんでだろうね？」

「分かりません」

「まあ、仕方ないか。とりあえず、私、正ちゃんの様子見て来る。

応援してあげなくちゃ」

「…ははは。ありがとう。喜びますよ」

そういうと、俺らは手を振り、別れた。

その日、弟は10…00過ぎに帰ってきた。「えらく遅かったじゃないか。また、どんだけノルマこなせなかったんだ？」と尋ねたところ、弟は珍しく興奮気味に語りだした。

「いや、今日は、大変だったんだ。アニキにも見せてやりたかったよ」

「何を？」

「何をつて…前田とみーさんが大喧嘩したんだ」

「へ？」

「驚いた？」

「そりゃ…それで、こんなに遅くなったのか。でも、なんで、喧嘩

なんて…」

「やり方がおかしいって、みーさんが前田さんに言ったんだ」

「やり方が？」

「つまり、俺、一人だけに残業をさせる事さ」

「ああ。あの人、その件ではキレていたからね。でも、まさか直接喧嘩するなんて…それで、前田さんは、何って？」

「ノルマがこなせていないから、仕方がないって…」

「ああ。前に俺に言ったのと同じセリフだな」

「そしたら、みーさん、あなたの指導が悪いからじゃないかって。そこから2人で大喧嘩になって…」

「で、お前は、その間何をしていたんだ？」

「見てた」

「止めろよ」

「入る隙がなかった。2人とも機関銃みたいに喋るんだもん。仕方ないから作業に集中してた。おかげで、すぐはかどったよ」

「すぐはかどった割には、遅かったじゃないか」

「しまいに、みーさんが泣いたから、なだめるのに30分かかった。仕事が終わった後も、しばらく2人で話をしていたし…」

「何を？」

「前田の事。みーさん、絶対におかしいって言い張ってた」

「お前は、何か言ったの？」

「うん…まあ…色々溜まっていた事を吐き出した」

「なるほど…愚痴ったってわけだ。少しは気が晴れたか？」

「まあね。で、今度、飲みに行く約束をしたんだ。アニキも行く？」

「俺はいいよ」

「何で？ 来いよ」

「2人で行けばいいだろう？」

「2人で行ってもつまらないって、みーさんが言うんだよ」
「分かったよ」

俺はしぶしぶうなずいた。

やれやれ…と思う。が、しかし、昨日までとうって変わって元気
そうな弟の様子に、少しだけほっとした。

しかし、騒ぎはこれだけでは収まらなかった。しかも、意外な方
向に状況は展開して行った。

48 (前書き)

すいません。先ほど間違って最新話を削除してしまったのでもう一度あげ直します。ご迷惑をおかけします；

生きていると思ってもよらない方向に事態が進む事がある。それは、思わぬ幸福をもたらしたり、不幸をもたらしたり、あるいは新しい道筋へと人を導いたりもする。

その時、弟の身の上に起きた事といえば、少しの不幸のちラッキー。そして、前田君にとっては100%の大きな不幸であった。徴候はあったのだ。ただし、それは、その後に起きる事とは一見まったく無関係のように思われた。しかし、もし、この世界で起きる出来事の全てが干渉しあい、絡み合っているのだとしたら、やはりその出来事はその後の彼の運命を予告していたといえよう。

とりあえず、前田君は糸をひいた。それは、弟に対する、理不尽な態度というネガティブな形で。

公平に見れば、どちらにも非はある。しかし、この際そんな事は問題ではない。この際問題なのは、どちらがより多くの味方を持っているかということだ。本来であれば、弟に勝ち目は無かったかもしれない。なにしろ、あの性格だ。ただ、この場合前田君にとって不幸だったのは、弟とみーさんの仲がとてつもなくよかったという事だ。みーさんは冗談抜きで、この会社の隠れた主である。

彼の非道な振る舞いは、弟の口からみーさんに伝わり、みーさんの口から全女子社員に伝わり、やがて会社の主だった人間全部に知られる事になった。そして、なにより前田君が不幸だったのは、全ての出来事が弟側の視点で語られた事である。同情はすべて弟に集まった。

そして、前田君は一部の女子従業員からは口もきいてもらえなくなったらしい。理由は『厳しすぎる』『思いやりが無い』ということとだった。しかし、前田君の凄いところは、女子従業員に陰口を叩かれようが、無視されようが、平気な顔をして仕事をし続けていられたところである。この辺りが、やはり弟とは根性が違う。これな

らば、プチいじめも直に収まるだろうと眺めていた矢先、こんどは、もっと大事件が起こった。ネガティブに引かれた糸が、ネガティブな雪崩になって、糸を引いた本人に襲いかかったのである。

「近いうちに、大幅な組織変更があるらしい」

隣の原口さんからそんな話を聞いたのは、7月半ばのことだった。

「Aグループの連中がごっそり抜けるって」

「Aグループって事は、となりのラインじゃないですか？ また、どうして？」

「なんか、会社側と揉めたらしいよ。ノルマが厳しすぎるとかなんとかいって」

「全員が？」

「ああ。全員が。自分達が抜ければ会社が困るという腹いせのつもりだろう」

「でも、生活は、大丈夫なんですか？」

「元々、ずっとここにいる気もなさそうな連中だし、こんな仕事ならどこにでもあるしって事じゃ無いか？」

「それって、考えが甘く無いのかな？」

「知らないよ。当人達の問題だし。それより、抜けられれば、ここから人員削られるからな。大変になるぞ」

「…キツイっすね」

そんな話をして、一週間もしないうちにAグループ全員辞めてしまった。これには、フロアの人間全員が困惑した。そのしわ寄せはすべて俺らにくるのだ。この先の残業の日々を思うと、気が重くなる。しかし、その中でただ一人ラッキーだった奴がいた。それは、他でも無い弟だ。何がラッキーって、これで奴の首が繋がったからだ。忘れもしない。一度首になりかけた弟の、とりあえずの契約期間は3ヵ月だった。3ヵ月たっても使い物にならなければ、今度こそ首になる筈だった。そして、その期限は7月25日の筈だった。しかし、こう一挙に人に辞められては、たとえば弟とはいえ貴重な人

材だ。こうして、奴の首は、とりあえず、もうしばらく繋がる事になった。もし、この事件が無ければどうなっていたか分からない。

しかし、胸をなでおろしているひまは無かった。早速グループ変更が発表され、各グループからAグループの穴を埋めるために2名ずつ移動する事になった。その中に、なんと俺の名前も含まれていた。何で俺が？　とも思ったが、ラッキーな事に一緒に引き抜かれたのが超ベテランの川岸さんという人だったので、少しホッとした。弟はといえば、引き抜かれた俺の事をしきりと羨ましがっていた。理由は簡単だ。前田君と離れられたから。（まあ、俺にとってはたいてい意味のない出来事ではあるが）。しかし、前田君にとってもそれは同じ事だろう。引き抜かれた人員の中に、一番ベテランの川岸さんがいた上に、残った人員の中に一番役立たずの弟がいたのだから。

しかも、人が減ったというのに、1日あたりのノルマ自体はほとんど変わらず、達成できない分は、以前やったように残業でまかなわれる事となった。ただし、今回は、ちゃんと残業した分は払うという事だ。

しかし、さっきも書いたとおり、俺の配属された先にはベテランの人ばかり集められたので、俺自身はさほどの残業をせずにすんだ。一方、前田君と弟のチームは、連日9時までの残業をしていた。グループが変わってもフロアは同じなので、その様子がはっきり見てとれる。帰り際、いつも弟達が残されているのを見るたび、なんとも申し訳ない気分になってきた。

「いつまで、こんな事が続くんだ？」

ある、休日弟が言った。

「熱いし、足は痛いし、前田はウザイし、いつも帰ると9時過ぎてるし、最悪だよ。ねえ。なんで、あそこ、冷房入れないの？」

「入れてるけど、広すぎて効きが悪いだけだろ？　かわりに扇風機置いてるじゃないか」

「扇風機なんてきくかよ。ねえ、いつになったら人入れるの？」

「入ったじゃないか、3人」

「3人って……。少なすぎるし、しかも、全員学生の短期バイトだろう？ あいつら、台車運ぶぐらいしかしないじゃないか」

「そのうち解体も教えるだろうけど、今は教えてるヒマがないんじゃないか？」

「そんな事いつてるうちに辞めちゃうんじゃないのか？ あいつら、あくまで短期だし。ちゃんと、長期勤められる社会人を入れろよ。バイトでも派遣でもいいからさ」

「募集かけても来ないんじゃないのか？ 同じラインの仕事をするなら、みんなソニアに行くんじゃないか？ あっちのが待遇良いし」

ソニアとはうちの会社の近くにある、世界的に有名な電化製品の会社である。

「そうかよ。あー！ 嫌になる！」

弟は、そういうとばたつと床に寝転がった。

「いいじゃないか。とりあえず、残業代はついてるんだから」

「でも、いいかげん限界だよ。体力的にも、精神的にも」

「ぶつぶついうな。働ける場所があるだけでも、幸せなんだから」
そういうと、俺は弟の足を軽くけった。

それにしても、おかしい話である。

会社側の『この度のグループ変更は暫定的な措置です。すぐに、人員を増やします』という言葉の割に、少しも人が入って来る気配がない。タウンワークなどのバイト情報誌を見ても、募集をかけている気配がない。もしかすると、業績不振のおり、人件費削減で乗り切ろうとしているのかもしれない。だとすれば、この生活がいつまでも続くという事になる。そんな不吉な予感が誰の胸にもよぎり、次第に皆の表情にも、疲労といら立ちの色が見えはじめてきた。特に弟のグループで、それは顕著になり、前田君の怒号も日を追うごとに増えて行った。思うにまかせない現実に苛立っているん

だろうが、その声を聞かされる方も、陰鬱になって来る。

「たまらないよ。アイツ」

連日のように弟はぼやいていた。

「仕事が思うように行かないからって、俺に当り散らして」

どうやら、相変わらず怒りの主な鉾先は弟らしい。

それでも、感心な事に弟は、歯を食いしばって頑張っていた。それというのも、みーさんの励ましがあったからである。心底、みーさんには感謝している。誰か一人分かってくれる人間がいるだけで、人はこんなに強くなれるものなのだという事を知った。

そんなある日の事だった。ついに事件がぼっ発した。

「なんだ？ その上から目線は！」

原口さんの罵声がフロア中に響き渡った。

皆、驚いて作業の手を止める。そして、Bグループに注目する。

そこでは、原口さんと前田君が睨み合っていた。前田君はともかく、普段は温厚な原口さんが切れるなんて余程の事だ。一体何ごとかと見てみると、原口さんが口を開いた。

「一体、何様なんだよ？ お前は」

その剣幕に、さすがの前田君も青ざめていた。無理もない、普段は温厚とはいえ、原口さんは前田君よりはるかにガタイがいい。白髪まじりのゴマジオ頭だが、角刈りで迫力がある。一方、前田君の見かけは、性格に似合わぬ好青年。二人が並ぶと、虎とプレーリードッグぐらいの違いがある。けど、前田君は憶病者じゃない。怯んだのは一瞬。すぐに言い返した。

「俺はこのまとめ役だよ！ ちゃんと従えよ！」

「なんだと？」

「カゴ車を戻して来いって言ってるんだよ」

どうやら、前田君は、カゴ車にテレビがまだ残っているにも関わらず、原口さんが次のカゴ車を持ってきた事にキレているらしい。前にも弟が同じ事で怒られていたっけ。しかし、そんな事ぐらいで喧嘩になるなんて、よっぽどみんな疲れているよな……。そういえば、ここしばらく笑顔ってもんが見られない。つくづく嫌になる。うんざりしながら、作業に戻る俺の耳に2人のやり取りはまだ聞こえて来る。

「うるせえな。もうすぐ空になるから持ってきただけだろ？」

「こんな所に2台もあると、危ないんだよ！ テレビ、崩れてきたらどうするんだよ？」

「崩れて来るかよ、こんなの」

「いいから戻して来い！」

「やだね」

「戻してこいよ！」

「お前は偉そうなんだよ！」

：いい加減に、してくれないかなあ。そんな事はどっちでもいいだろう……。そう思いつつ、外したネジを鉄素材専用ボックスに放り込む。その時、隣からこんなぼやきが聞こえてきた。

「なんで、前田は、ああやっていちいち噛みつくかな……」

「え？」と思って隣を見ると、川岸さんがあからさまに嫌な顔をして2人を見ていた。

「イライラするんだよな。アイツの声聞きたび」

それだけ言うと、川岸さんは俺の答えを待たずに自分の作業に戻った。

：あーあ。前田君、ここでも反感もたれているよ……

ため息をつき、俺も作業に戻る。

結局その場は、騒ぎを聞いて駆け付けた小金井さんの取りなしでなんとか収まったが、原口さんと前田君の間には深い溝ができてしまった。元々あった物が表面化したただけかもしれない。それは、二人だけの問題でなく、グループ全体にも広まった。つまり、前田君vsグループ人員という構図が出来上がってしまったのである。

このころから、前田君の顔つきに変化が見られてきた。やけに元気が無くなり、無表情になったのだ。元々朗らかなタイプではないが、しかし、全身にみなぎるパワーみたいのがあった。仕事に対

する責任感からきたものと思われる。しかし、最近ではそれもなく
なった。陰鬱な表情で、時おりこめかみを抑えている。何か考え込
んでいるかのようにも思える。後で聞いたところによれば、このこ
ろ、人員不足による作業超過を補うために、彼は休日出勤を続けて
いたらしい。しかし、そんな彼の見えない努力も、決して報われる
事はなかった。

ある日の夕食後、風呂へ行こうと階下に降りると、突然弟に呼び
止められた。「なんだよ」って奴を見たら、奴はだらしくソファ
に腰かけてこう言った。

「明日、俺、仕事休むから」

それは、まるで、明日、遊園地にでも出かけるみたいな軽い口調
だった。

「え？ 具合でも悪いのか？」

尋ねると首を振る。

「じゃあ、急用でもできたのか？」

すると、弟は再び首を振る。

「だったら、なんで休むんだよ？」

「うん、実はな……」

そう言ったとき、奴は口を閉じ、意味ありげな笑みを浮かべた。
その態度にちよつとイラツと来る。

「なんだよ？ さっさと言えよ。俺は、風呂に行きたいんだよ」

「実は、前田へのリベンジ」

「はあ？」

「Bグループ全員で、仕事をボイコットする」

「なんだって？」

あまりの驚きに、持っていたタオルを落としてしまう

「本気かよ？」

「本気だよ。Bグループのメンバー全員、前田には、キレまくって

るんだ」

「だからって、ボイコットなんて……」

「会社への意思表示だよ。あいつとは、仕事できないっていう……」

「辞めさせられるのが、オチだぞ」

「大丈夫さ。これ以上、人、減らせないだろう？ それに、万一辞めさせられたって、こんな仕事ならいくらでもあるし」

「バカヤロウ！」

思わず怒鳴り付ける。

「お前、自分が、どの程度の人間だと思ってるんだ？ 他所でつとまる程、進歩できたかっていうのかよ？」

その言葉に、弟は口ごもった。自分が半人前の自覚があるからだろう。

「お前、そんなくだらない事に加わるなよ」

「アニキは前田の味方なのか？」

「どっちの味方でもないよ。前田君は、確かに厳しすぎると思うし。でも、お前が仕事できるようになったのは前田君の指導のおかげだろう？」

「あんなの指導じゃねえよ。イジメだよ。精神的におかしくなりそうだよ」

「向こうだって、お前のせいで、迷惑かけられてるんだ。おあいこだろう？」

「……やっぱりアニキなんかと話すんじゃないかった」

「いいから、明日はちゃんと出勤しろよ」

「やだよ」

「出ろよ」

「うるさいな。俺の勝手だろ？ 大体、俺一人だけ出勤したら、裏切り者になっちゃうじゃないか、アニキは俺を卑怯者にしたいのか？」

そう言われると、返す言葉もない。確かに、明日仲間を差し置いて出勤したりしたら、弟は仲間から、下手すれば会社中から総スカ

ン食らわされるだろう。

「分かったら、さっさと風呂行け！」

「…」

「行けよ」

「…分かったよ。勝手にしろよ。ただし、どうなっても、俺の知った事じゃないぞ」

そう、言い捨てると、俺はタオルを拾い上げ、風呂場に向かった。風呂から出てリビングを抜けると、弟がまだそこにいて、食い入るようにテレビを見ていた。その横顔は完全に俺を拒否している。ため息をつき、2階に戻った。ベッドに入るが、明日の事を思うと眠るに眠れない。まんじりともせぬまま、夜が深けていく…。

翌日、宣言通り、弟は会社を休んだ。

両親は、弟の「体調が悪い」という言葉にコロっと騙され、俺も敢えて本当の事は語らず（弟もいい大人なのだから、両親にチクリを入れてまで行動を強制する必要もあるまい）不安を抱えつつ、同時にこの状況の成りゆきを楽しむ悪趣味な野次馬根性も抱きつつ工場に向かった。

フロアにたどり着くと、弟の言った通りBグループは前田君を除いて誰もいなかった。さぞかしみんな騒いでいるだろうと思いきや、誰も：前田君ですら：顔色一つ変えずに自分の持ち場にいた。それで俺も、何くわぬ顔で自分の作業台に向かった。そして、他の者と同じく無言で：時おり不可思議な視線をBグループの方へ向けながら：始業時間を待った。

しかし、水面のおだやかさはどうであれ、困った状況である事には変わらない。Bグループの仕事を全て止めるわけにもいかないのだ、俺や、川岸さんなどの元Bグループのメンツと、他、3名ほどの人員がBグループに割かれる事になった。人数が足りないのだから、当然、その分の残業はすることになる。定時を過ぎ、7時を回っても帰れぬ状況に、フロア内のいちら立ちは募り、8時を過ぎた辺りでついにほころびが大きく割けた。

「ったく。他部所に迷惑かけるなよ！ Bグループ！」

前田君に向けてどこからか罵声がとんだ。フロア内に緊張が走る。

「管理者の責任じゃないのか？ これは？」

もう一度、そんな声が聞こえて来る。誰の声かは分からなかった

が、おそらく、アンチ前田派の人間の嫌がらせだろう。今では、この騒ぎはフロア中、いや、工場中を巻き込む程に広まっているのだ。前田君の真後ろで仕事していた俺は、気が気でなかった。前田君が怒り出すのではないのか、もしくは、泣き出すのではないかと。しかし、前田君は、顔色一つ変えず、なすべき仕事を淡々とこなしていた。淡々というより、むしろ、投げやりに思えた。痩せた背中が今にもポキンと折れそうで心配になる。だからといって、何一つ慰めの言葉をかけられるでもなかった。自分の弟がこのくだらない企みに参加している以上、どんな慰めの言葉をかけたところで、しらじらしくしか感じられないと思ったからだ。

家に帰ると、居間でテレビを見ていた弟が、待ってましたとばかりに俺を質問攻めにした。

「みんな、約束通り休んだのか？」「フロアの様子はどうだった？」
「小金井さんはなんて言っていた？」「前田は落ち込んでいたか？」
などなど…。

その質問一つ一つに真面目に答えるのも馬鹿馬鹿しいので、

「安心しろ、みんな休んでいたが、前田君はいつも通り、普通に仕事をしていたよ」

とだけ答えて、カバンを投げ付けてやった。

そして、とっとと飯をかきこむと、風呂にも入らずベッドにもぐり込む。今日は疲れた。そりゃそうだ。もう12時過ぎているのだもの。そういえば、会社を出たのが10時過ぎだったもんな。最悪だよ。でも、俺らが帰る時も、前田君はまだ仕事をしていたっけ。彼、明日出て来れるんだろうか？ 心配だな。そんな事を考えているうちに眠りに落ちていく。

その夜、見た夢は最悪だった。

前田君の痩せた背中がさらにどんどん痩せ細り、最後は針金みたいになってポキンと折れてしまうんだ。

それを見て弟が笑っていた。俺も一緒に笑っていた。それで良いのかと思いつつ、笑うしかねーなど、ゲラゲラ笑っていた。

次の日は、弟を含めたBグループのメンバー全員は普通に出勤していた。前田君も、前の日にあんなに遅くまでいたにも関わらず、普通に出勤していた。そして、いつもと変わりのない午前中が過ぎ、昼飯は食堂でみーさんと一緒に食う。

弟は得意げに昨日の一件をみーさんに話した。身ぶり手ぶりつきで、熱のこもった話し方だ。みーさんは、時おりあいづちを打ちながら弟の話を聞いていた。そして、「それくらいやってやりや、前田もきつと分かるよ」と言った。俺はそんな二人の会話を黙って聞いていた。

正直言って、複雑な気分だった。弟の馬鹿はともかく、みーさんの態度がさ。本音を言うのと、少し失望していた。俺はみーさんに止めて欲しかったんだ。弟の愚行を止めて欲しかったんだ。いや、きつと、みーさんにしてみれば、これも優しいさのつもりなんだろう。彼女は、弟に心から同情しているのだから。そうだ、彼女は、弟の事を思いやってくれているだけなんだ。彼女にとっては、これも思いやりのつもりなんだ。

その時、俺は、突然、弟がホームページに書き綴った詩を思い出した。「内戦」て名付けられた、あの詩の中の一節だ。

強いやつは、弱いやつを責める。

責める理由は、どれだけだってつくりだせる。

弱い奴は永久に責め続けられる。

そして、いつか醜悪な化け物に仕立て上げられる。

気付かぬうちに悪者にされるんだ。

それもしかたのない事だ。

誰だって自分は正しいと信じたいから

大義名分は必要だもんな

そのフレーズを思い出して、俺は笑い出しそうになった。

：確かにその通りだよ、弟よ。

でも、分かっているのかな？　今、お前がやっている事が、まさにあの詩のそのままじゃないか。

まったく、人間なんて勝手なもんさ。人の欠点はやたらと目につく癖に、自分のこととなると、とたんに目が曇る。しかし、まあ、世の中そんなもんだよ。そんなもんさ。俺だってきつと、そうなんだから。

それにしても、2人の会話にはついていけなかった。人の悪口なんか聞いていて楽しいもんでもないし。俺にとって、前田君はそこまでの存在でもないし。それで、「俺、事務所に用事があるから」とかなんとか理由をつけて立ち上がる。

そして、後ろを向いて俺はぎよつとした。なぜなら、すぐそこに、前田君がいたからだ。彼は、俺らのちょうど後ろに、背中を向けて座っていた。本来、死角だが、立ち上がった俺の位置からは彼の顔がはっきり見えた。しかし、俺の横に座っている弟は、当然ながら気がつかない。みーさんも話に夢中になっているため、気付かない。しかし、この至近距離だ二人の会話は全て前田君につづぬけているんだろう。前田君はいつになく青ざめた顔をしていた。こんな表情はかつて見せた事がない。よほどショックだったんだろう。

ぼやっと立っている俺に、違和感を覚えたのか、前田君が顔をあげる。目があった瞬間、思わず、俺は「大丈夫ですか？」と口を開きかけた。しかし、そんな俺に気が付くと、彼はさも軽蔑したような視線をこちらに向け、立ち上がって行ってしまった。

後には間抜け面の俺だけが残される。その背後で弟が得意げに喋

り続けている。その後頭部を、思いきり殴りつけてやりたくなった。

けれど前田君が偉かったのは、1日たりとも仕事を休まなかった事だ。無視されようが、聞こえよがしに嫌みを言われようが、嫌がらせをされようが、毎日必ず始業時間には現れ、黙々と業務をこなしていた。さすがは、この若さでグループの管理をまかされるだけあって、低レベルの争いには目もくれないのかと感心していたが、実はそうでもなくしつかりダメージは受けていたらしい。仕事はきっちりこなすものの、以前のように口やかましく注意する事は無くなり、したがって口数も減り、日に日に元気が無くなって行った。それと、対照的にうちの馬鹿弟は日に日に元気に…いや、日に日に増長していく。それは、決して仕事ができるようになったからではない、味方が増えたからでもない。単にアンチ前田君が多かったからだ。奴は依然として足手まといであり、内心苛ついている人もいたと思う。しかし、とりあえずの共通の敵が前田君だから見逃してもらえているというだけのことだ。

「でも、何とか仕事をする事には慣れてきたってことよね、正君も」
全てを聞き終わると、森崎は言った。

「まあね。以前よりは気が楽になってきたみたいだよ」

俺はレンガ色の建物の向こうにそびえる鉄塔を見上げながら答える。銀色の鉄塔は7月の日ざしを受け、ギラギラと光っていた。

「どうりで、最近サイトに書き込みしてこないと思った」

「サイトって、森崎の？」

そういうと、俺は鉄塔から森崎へと視線を移す。森崎は白いワンピースに、白い帽子をかぶり、白いベンチに座っていた。

「うん。でも、書き込みがないって事はいいことよ。リアル生活が充実しているって事だから」

「ふーん…そういうもんなの？」

俺は書き込みとかしないから（そもそも、インターネットをする環境もないから）よく分からない。

と、その時、広場中央の時計が10時を告げる鐘を鳴らした。それを機に、俺達はベンチから立ち上がった。

7月終わりの日曜日、つまり、今日。

俺は森崎からの電話で朝早く起こされた。

なんでも「市の美術館でモネ展があり、今日で最後だから付き合っ
てほしい」という。「仕事で徹夜開けでしんどいけど、どうしても見たいから」と。

モネは嫌いじゃないから「いいよ」と答えた。「じゃあ、美術館で待ってる」と森崎は言った。徹夜明けで美術館に直行してしまっ
たために、その時既に会場前の広場について、話し相手もなく手持ち
無沙汰にしてるんだそうだ。それで、俺も急いで美術館に向かった。
しかし、あまりに早く着いてしまったために、まだ会場は閉まってい
た。それでベンチに座って開場時間を待っているうちに弟の話にな
ったというわけだ。

まあ、そんな事情はどうでもいいだろう。とりあえず、俺達はレ
ンガ色の美術館の中に入っていた。

会場の中に入ると、白い展示場にモネの代表作である睡蓮の絵が
飾ってあった。

壁の端から端まで届く程の横長のキャンバスのあちこちに、うす
桃色の睡蓮の花が浮かんでいる。水面には柳の影が映りこみ、その
ため本来青色のはずの水面の大部分が深緑に染められていた。次の
部屋にも大小さまざまな睡蓮の絵が飾られていた。それらは、歩を
すすめる程に水面と睡蓮の輪郭があいまいになり、水面の青色に花
も柳の影も溶け込んでいき、いつしか夢の中を漂っているような幻
想的な気分になってくる。

大昔は、正直いってこの画家の価値が分からなくて「睡蓮ばかり描いて何が楽しいのか」と生意気な事をほざいていた。けれど、今はそのすごさも何となく分かるようになってきた。人間的に成長したのかもしれない。さらに先に進むと、モネの比較的初期から中期の作品ばかりが飾られた部屋にたどり着いた。

「綺麗な人だったんだね」

森崎が言う。

彼女の目の前には赤い着物を着た金髪の女性の絵が飾られていた。

「これって、モネの最初の奥さんなんでしょ？」

「うん。カミーユ・モネだ」

俺はうなずいた。

「彼は奥さんや家族をよく絵の中に登場させてるらしい。ほら、これもカミーユだ」

と、俺は横に飾られている絵を指さした。そこには、白いドレスを着た女性が日傘をさして立っていた。彼女は丘の上で強い風を受け、髪をなびかせている。

「よっぽど彼女を愛してたのね」

「その割に再婚するけどね」

その言葉に、森崎がちよっと笑った。それで、俺は森崎が今日はいじめて笑った事に気付く。

「でも、家庭的だったのは確かだ。庭いじりが好きだったみたいだし」

「庭いじり？」

「そうだよ。モネの睡蓮の連作は、彼の庭の池に咲いていたものなんだよ。モネは抽象画の先駆けともいわれるらしいけど、それ以上にガーデニングの先駆けでもあるって世界の常識」

「何それ」

森崎が、また笑った。

「河井君はモネに詳しいね」

「割と好きだからね」

「そうなんだ。ちょっと意外」

「意外かな？」

まあ、そうかもしれないな。俺の神経質で暗い画風と、モネの世界とはあまりにも違うしな。そういえば、モネの絵と師匠：菊池大成の絵はどこか似ている。一見無造作のようでもあり、的確にも思われるような筆の置きかたも、描かれている世界の明るさも。もちろん、二人とも明るい世界ばかりを描いていたわけじゃない。その次に俺の目に入ってきたのは『死の床のカミーユ』と題された作品だった。タイトルの通り、死の床にいた彼女を描いた作品だ。ほの暗い死の帳の向こうに、わずかに顔を歪ませたカミーユの姿がある。この絵を見るたびに思う。なぜ、モネはこんな絵を残したんだろう？

「そういえば、私のサイトにもモネ好きの人が来た事がある」

突然、森崎が言った。

「え？」

俺は隣の森崎を見た。彼女も『死の床のカミーユ』を食い入るように見つめている。

「確か、その人、マリアさんて名乗ってた」

その名にドキッとする。なぜなら、そのマリアと名乗る人物の正体が他でもない自分だからだ。

「でも、一度きりで来なくなっちゃった」

「へえ：よく覚えてたね、一度しか来なかった奴の事なんて」

「うん。何で覚えているかっていうと、その人がもぐちゃん：正君のことをとても心配してたから。本当に不思議なぐらい心配してた」

「ふーん。なんでだろうね？」

「たしか：同じようなひきこもりの弟さんがいるからって言ってた：」

「：なるほどね」

その弟が死んだという（俺の創った）設定は…忘れているのか…
森崎は口にしなかった。

「マリアさんも喜ぶかな」

「何を？」

「もぐちゃんが、頑張ってるって聞いたら」

「さあ…どうだろうね。どっちかっていうと、複雑な気分になるかもね」

あいまいに答えると、俺は再び『死の床のカミュー』に見入った。
その時…森崎の言った『マリア』という言葉に触発されてか、いつしか俺は無意識に師匠の『つぎはぎのマリア』をその横に並べていた。似たようできて徹底的に異なる二人の世界がその先に広がる。何が違うんだろう？ 俺はマリアに向かい合って考える。いつか、カミューの姿は消え、マリアの姿だけが俺の前に横たわっていた。彼女の上には陰惨な死の影は降りていない。そこにあるのは、ただ、ただ、敬虔な光だけだ。これは二人の死に対する認識の差なのかもしれない。モネは『死』を『死』として捉え、画家として忠実に描いた。しかし、師匠にとって彼女の『死』は自らのこの世での再生のための胎動でもあった。別に、どっちが正しいということでもない。ましてや、世界に名立たる巨匠にケチをつける訳じゃない。けど、その発見に俺の心が昂揚していた。俺ならどう描くだろう？ そう、俺ならどう描く？ そうだ、描かなくちゃ、俺の絵を描かなくちゃ…。しかし、そこまで考えた時、その想念の渦を断ち切るがごとくに、再び森崎の声が聞こえてきた。

「それで、河井君どうするの？ これから」

目の前に塔がそびえている。あれは鉄塔だ。太陽の光を受け、鈍く銀色に光っている。しかし、奇妙な塔だ。屋上に街が広がっている。それは、緑があふれる平和そうな街だ。

街のあちこちには銀色の建物が点在していて、街の中央には美術館がある。そして、その建物を背に俺が、俺に向かい合うようにして森崎が立っている。

森崎は言った。

「今日は、ありがとう。おかげでモネの絵が見られてよかった」

「礼なんていいよ。…それより、これからどうする？」

「そうね…」

森崎はちよつと首をかしげ、考えるような顔をしたが、すぐにこう答えた。

「会社に戻るわ」

「今から？」

「うん。この近くだし、まだやらなくちゃいけない仕事があるし」

「徹夜あけで？」

「大丈夫。仕事場で、少し眠るから」

「でも、今日は休みだろう？」

「今、すごく忙しくて…」

「そうなんだ」

「うん。だから、しばらくは連絡できないかも」

「…そう」

「じゃあ、今日は本当にありがとう」

「だから。礼なんていいよ。それより、仕事頑張れよ。倒れるなよ」

「ありがとう。大丈夫だよ。じゃあ…」

そういうと、森崎は手を振ってかげろうみたいに消えていった。残された俺の胸にうら寂しい風が吹き抜けていく。

「おい！ アニキ」

ふいに肩をゆさぶられ、俺は我にかえる。目の前に弟の訝しげな顔があった。

今は仕事場で作業中だ。目の前に緑の基板を乗せた、塔みたいな偏向ヨーク（ブラウン管テレビ内の部品）が立っている。いかんいかん、現実逃避していたらしい。しっかり仕事をしなければと、ドライバーを手に取る。すると、

「おい、何やってるんだよ。もう、昼休みだぞ」

弟が言った。

「え？ マジで？」

時計を見ると、確かに12時過ぎていた。

「大丈夫かよ、アニキ。こないだの日曜から、なんか変だぞ。例のなんとかって彼女となんかあったのか？」

「いや？ 何もないよ。気のせいだろう？」

言うのと、俺はカバンを持って立ち上がった。そして、弟をおいてさっさと歩き出す。

「おい、待てよ」

弟の声が追いかけて来る。

「あのさ、アニキ。俺、今日はグループの人達と一緒に食べるんだけどさ、アニキも来る？」

「え？」

俺は振り返って弟を見た。

「グループの人達と一緒に？ 随分仲良くなったもんだな」

「いや…」

弟は少しはにかんだ。

「そうじゃなくて、みーさんがみんなに何か話があるって言うから」「ふーん」

みーさんの話っていえば、大方前田君の悪口か何かだろう。しかし、正直言って昼飯時に、そんな話は聞きたくない。それで、俺は

弟に言った。

「：いや。俺はパンでも買って外で食うよ」

「外で？ 何で？」

「うん。実は、外でスケッチをしようと思って：ほらスケッチブックも持ってきてるんだ」

そう言うと、俺はカバンの中からスケッチブックを取り出した。

「スケッチ？ 仕事にお絵書きかよ」

「休み時間だろ？ この間から、構想が浮かんで、浮かんで仕方がないんだ。消えないうちに書き留めたくて」

「ふーん。相変らずの変わりもんだな。まあ、いや、勝手にしろよ。俺は、食堂に行くから」

そう言うと、弟はさっさと行ってしまった。

スケッチをしたい：それは本当だ。

しかし、構想が浮かんで、浮かんで仕方がないというのは、嘘だ。確かに、ぼんやりとしたイメージは見えているが、一つきりだし、いまだに紙の上に描き出せないでいる。ともあれ、俺は出荷倉庫裏の狭い空き地に腰を降ろした。

ここは、以前、よく一人でスケッチをしていた場所だ。そして、森崎と再会した場所でもある。フェンス越しに小川が流れ、その先に緑の田んぼが広がっている。のどかな風景だ。

俺は、フェンスのそばに寄り、流れる川を見降ろした。水面に、小さな水草が生えている。小さな草だが、その円い形が少し睡蓮に似ていると思う。睡蓮の連想からモネの絵を思い出し、さらにそれが飾られた美術館の一室を思い起こさせ、やがて思考の糸は森崎へと繋がる。

「それで、河井君はこれからどうするの？」

と、あの日、彼女はたずねてきた。とても真剣な目をしてたずねてきた。けれど、俺は何も答えられなかった。答えられずに立ち尽

くしていると、彼女の目にみるみるうちに失望の色が浮かんで来た。そして、彼女はひとりで先に歩き始めた。歩きながら言った。まるで、ひとりごとのように…。

「東京に、帰った方がいいのかもね」

「え？」

「だって、河井君は何も見えていない。何も聞いていない。私のことも見ていない。ただ、そこに居るだけ」

水草が、川の流れのままに揺れている。

確かに、森崎の言葉の通りだ。今の俺は何も見えていない、何も考えていない。流れにまかせて漂っているだけの、根無し草みたいなもんだ。

スケッチブックを開いてフェンス越しに水面を描く。モネがそうしたように、光を写しとろうと試みる。しかし、川の流れは案外早く、紙の上にはうまく留められない。俺は、絵を描く手を止めて思った。

…このままじゃ、時間が過ぎていくだけだ。そうだ、そろそろ決着をつけないといけない。

そして、再び手を動かしはじめる。川の流れの上に、なぜか俺は弟の顔を描いていた。絵の中で、弟は笑っている。その絵を見て俺は決意した。

…そうだ。もう戻ろう。ここから、出ていこう。

そう決めた途端に、雲間からにわかには青空が見えたような心地になる。それは、つかのまの晴れ模様かもしれないが。

それでも：たとえ錯覚とはいえ：工場を辞めると決めた途端に俺の心は驚く程軽くなっていた。まるで、今まで自分の上に覆いかぶさっていた大きなおもりが取れたような心地だ。それほど、ここでの暮しが俺にとって苦痛だったということだろう。

：しかし、辞めると決めたはいいが、いつ上司にきりだそうか。

ドライバを片手に思案する。

なにしろこの人手不足のおり、相変わらず毎日皆が残業をやらざるを得ない状況下だ。軽々しく「辞めさせてください」とはさすがの俺も言いにくい。第一、あっさり辞めさせてもらえるかどうかも分からない。さりとていつまでも、心にもない場所でするずる働き続けられる程のお人好しでもなし、どちらにしろ、一刻も速く切り出さなくてはならない。俺の人生なのだから。

作業台に置かれた卓上カレンダーを見て日にちを数える。辞めるにも最低1ヵ月にかかる。今日は8月4日だから、今日辞めさせて欲しいといってすんなり受け入れてもらえたとして……辞めるのは9月3日か。9月：盆休み後2週間強。どうだろう？ まだ忙しいだろうか？ 少しはヒマになってるんじゃないだろうか……そんな風に思案した時だ。突然、背後から誰かの怒鳴り声が聞こえてきた。やれやれ、また喧嘩かよ……と思いつつ、野次馬根性でそちらをみてぎよっとする。

いや、喧嘩自体には、もう慣れっこだ。なにしろ、この職場ときたら3日に1度は誰かが誰かをのしっている。じゃあ、何に驚いたかって、今回の喧嘩のメインキャストの意外さだ。

その一人は、前田君。今さら言うまでもない、Bグループの口うるさい責任者だ。

そして、もう一人は、弟だ。よくある取り合わせといえはいえる。(もつとも最近はめったに見ない取り合わせになっていたが)

その何に驚いたかつて？ それは、怒鳴っているのが、前田君でなく弟だった事だ。そうだよ。あの弟だよ。つい、この間まで前田君に怒鳴られては小さくなっていた、あの、役立たずの弟だ。

弟は、言った。

「お前は、いちいちうるさいんだよ。人の事見てんなよ」

どうやら、前田君に何かを注意されて、逆切れしているようだ。

前田君、このところ沈黙を守っていたはずなのに：よほど弟が間抜けなドジをふんだんだろう。その当の前田君は、弟の反撃に少々面喰らった顔をしていたが、しかし、穏やかに言い返した。

「落ち着いてくださいよ。ボクは、ただ、素材の分別はちゃんとしてくれないと困るって言っただけです。ほた。黙っていたら、3回めでしょ？ 同じミス」

口調は丁寧である。気をつかってるな、前田君。まあ、口調が丁寧な分、皮肉がきいてかえって慇懃無礼って気がしないでもないけど。

「だから、何回とかイチイチ数えるなって言ってるの。細かいんだよ。人間ならたまに間違える事ぐらいあるっていうの」

：おいおい。何だ？ そのへ理屈は。どう見ても、悪者になってるぞ、お前…。

心の中で弟に語りかける。

その、弟に対する前田君の答えが、また傑作だった。

「いや。仕事場では、フツーないです。少なくとも、僕の知る限りではないです」

「なんだと？」

この言葉に弟が逆上した。さすがに、馬鹿にされたと分かったんだろう。

「お前、偉そうなんだよ。そんなんだから、みんなに嫌われるんだよ。知ってるか？ みんながお前の事をなんて言ってるか」

『みんな』ってのは、みーさん並びにグループの仲間の事か…。

「知りませんねえ」

前田君が首をかしげる。なんか余裕の態度だ。

「どう言ってるんですか？」

「傲慢で、感じの悪い奴だよ」

「へー。そうですか」

前田君はくすつと笑った。

「別に、全然構いませんね、僕は。『できない奴』って言われるよりマシですから」

「できない奴？」

弟が顔を引きつらせて言う。

「…それ、誰のことだよ」

お前のことだよ…と、俺は心の中で突っ込んだが、前田君は「さあねえ…」と明確には答えず、かわりにこう言った。

「ところで、河井弟さん、満足ですか？」

「何がだよ？」

「女性に守られて、さぞかしい気分でしょうね」

「なんだと？」

弟が色をなした。

俺は耳を塞ぎたくなる。弟よ、お前に勝ち目はない。おとなしく、引っ込んでいろ。

ところが、その時、弟に加勢する声が上がった。

「おい、前田、言い過ぎだぞ」

「思い上がり過ぎなんだよ、お前は」

原口さんと佐々木さん（Bグループの一員）の声だ。すると、それまで冷静だった前田君がついに爆発した。

「誰が思い上がりてるんだよ」

ものすごい怒声だった。あまりの大声にフロア中がシンとなる。

「お前らがそうやって甘やかすから、こいつがいい気になるんだろう。ここは仕事場だぞ。まずは、ちゃんと仕事をしろよ」

その剣幕に弟も真っ青になる。

「河井、弟。お前もだよ。仕事できてから、そういう事は言えよ。」

お前のだらしなさで次工程から山のように苦情きてるんだよ。誰が始末つけてやってると思ってるんだ？」

「…」

「大体、お前、昨日の解体台数何台だ？」

「……」

「忘れたなら教えたやるけど27台。残業2時間やって30台！他のメンバー定時内に一日平均34台のところ、お前だけ30台。俺に叱られる前に、自分で自分を恥ずかしいと思えよ」

「…」

「俺は、別にあなた方に何を言われようが全然構わないんで、仕事だけはちゃんとやってください。以上です。それじゃ、作業台に戻ってください」

そう言うと、前田君はくると向こうを向いた。

しかし、弟はいつまでもその場から動こうとしない。訝しく思ったのか、前田君はもう一度奴を見て

「早く、作業台に戻れよ」

と、言った。しかし、それでも弟は動こうとしない。そして、動かかわりに言った。

「あんたなんかに、何が分かるよ」

「…はい？」

「あんたみたいに、なんでも器用にこなせる奴に、俺の何が分かるかって言ってるんだよ」

「僕が、器用ですって？」

「そ…そうだよ。俺は、俺なりに…これでも、必死なんだよ」

「…だったら、もっと必死になって下さい。さ、作業に戻って」

前田君はにべもなく弟を追い払おうとする。しかし、弟は動こうとしなかった。

「だから、俺なりに必死だって言ってるんだよ。分かって欲しいんだ。ただ、それだけだよ」

しつこく食い下がる弟の態度に、とうとう前田君は切れたようだ。目の前にあるカゴ車を蹴りつけた。ちなみに、カゴ車は前田君のさんさんの注意にも関わらず、2台並べられていた。前田君もあきらめたのか、もう何も言わない。前田君は、テレビが高く積み上げられたカゴ車の底を思いきり蹴りつけると、弟の顔を見てこう言った。

「甘えるなよ。誰だって必死で頑張ってるんだよ。やり方が分からなきゃ、自分で考える努力をしろ！」

その時だった。

カゴ車がガタンと音をたてて傾くのが目に入った。

それは、スローモーションみたいにゆっくりとした動きだった。

その勢いで、積み上げられたブラウン管テレビ達も傾ぎ、黒い津波みたいに前田君に襲いかかっていった。

人間危機に瀕した時は一秒が何分にも感じられるというが、その時、俺の目に映った光景がちょうどそんな具合だった。そう、まるで映画のコマ送りのように思えたんだ。

まずは弟が「危ない」と叫んだ。

その声が終わらぬうちに、崩れかけていたブラウン管テレビが前田君めがけて落ちていく。

弟が、手を伸ばし、前田君の腕をつかむ。

そして、前田君を思いきり引っ張る。

TVが前田君の頭に当る。

前田君が白目を向き弟に倒れかかる。

その勢いで、弟の腰がくだける。

そして二人同時に倒れる。

その後は、ドンドンドン…と響きをたてながら数台のテレビが落ちてきて、そして…。

「おい！ 大丈夫か！？」

原口さんが叫んだ。

それで、ぼう然とこの光景を眺めていたフロア全員が我にかえった。

目の前には、蹴散らされた積み木のようにテレビが転がっている。床の上には割れたガラスの破片が光っており、そのまん中あたりに、折り重なるようにして倒れている弟と前田君の姿があった。二人とも辛うじてテレビの下敷きにはなっていないものの、ピクリとも動かない。その、あまりの動かなさに不安になる。…まさか、

打ちどころでも悪かったのか？

「正…！」

俺は、仕事場である事も忘れて弟の名を呼んだ。すると、弟は上半身をむくりと起こす。そして、服についたガラスの破片を手で払うと「大丈夫。ちょっと驚いただけだ」と言った。それで、ほっと胸をなでおろす。

「ケガはしてないか？」

原口さんの言葉に、弟は体のあちこちをさすりながら

「…今のところ、どこも痛くないから大丈夫だと思う」

と答えた。すると、再び原口さんが尋ねた。

「前田は？」

「…前田？」

弟はつぶやくと、己の膝の上にのっかっている前田君を見下ろした。前田君はうつ伏せに倒れたままぴくりとも動かない。眉をひそめながら、弟は前田君の頭を軽くつつき、つついたと思ったたら手を引っ込め、悲鳴を上げた。

「…し…死んでる！ 死んでる！」

「何だって？」

原口さんが青ざめる。

「血が…血が…こんなに…！」

そういつて、ひろげた弟の手にべっとりと血がついていた。

「そんなに落ち込む事ないよ」

皿にのってる揚げ物を取りわけながらみーさんが言う。

「正ちゃんだけの責任じゃないし」

ここは『さくら』。以前、小金井さんに連れてきてもらった居酒屋だ。

「確かに」

俺は、ビール片手にうなずいた。

「必ずしも、お前だけの責任じゃない。カゴ車が倒れたのは、ケリを入れた前田君のせいだし」

その言葉に、弟がちらりとこちらを見た。

「ただし」

…と俺は付け加える。

「あのカゴ車をあそこに置いたのは、お前だけだな」

「じゃあ、やっぱり俺のせいって事じゃないか」

「だから、お前のせい『だけ』とは言っていないだろう？　けど、もしも前田君が事件の当事者でなければきつとこう言うだろう。『だから、カゴ車を2台並べるなって言ったでしよう？』」

軽く前田君の口まねをすると、みーさんが吹き出した。しかし、弟は露骨に嫌な顔をする。

「落ち込んでる人間に向かって、よくそこまで言えるな。それでも、アニキかよ」

「血の繋がった人間だからこそ言える、厳しい意見ってのもある」

「鬼かよ…」

「でも…！」

と、みーさんが割って入って来る。

「みんなが騒いだほど、たいしたケガじゃなかったってコガちゃんも言ってたじゃない。正ちゃんがそこまで落ち込む事ないよ」

そう。弟は、死んでるのなんの大騒ぎしたが、前田君のケガは奇跡的に軽症だった。とはいえ、確かに出血はひどかった。それは、ガラスで頭を切ったからで、頭つてのは大袈裟に血が出るもんらしい。それに、脳しんとうをおこして救急車で運ばれたものの、搬入先の病院ですぐに意識を取り戻したそうだ。他には体のあちこちに、軽い打ち身とねんど。頭を針で縫い、念のために一日入院す

るらしい。ちなみに弟はといえば、まったくの無傷だった。

しかし、体は無傷でも、精神的になダメージが相当ひどいらしく、午後はろくに仕事にならなかったようだし、仕事が終わっても自縛霊のごとく作業台の前にうずくまって、いつまでたっても動こうとしないので、心配になった俺がみーさんの力を借りて、ようやくこの『さくら』まで連れて来ってわけだ。

「…それに」

と、みーさんが言葉を続ける。

「確かに、前田は、ケガをして大変だし、かわいそうだけど、ある意味自業自得だと思うよ」

「自業自得って、どういう意味？」

俺はみーさんに尋ねる。

「正ちゃんを虐めた天罰よ」

「それは…」

違うでしょう？　と言いかける言葉を、弟が遮った。

「そうかな」

「そうよ」

「でもさ、俺、妙にひっかかるんだよ」

「なにがひっかかるの？」

「…あいつに言われた事だよ」

「前田が正ちゃんになんか言ったの？」

「うん。『俺だって、できないなりに頑張ってるんだ』って言ったら『誰だって必死で頑張ってるんだ。やり方が分からなきゃ、自分で考える努力をしろ』ってさ。俺なりに頑張ってるっていつてるのに…」

「そりゃ、頑張る方向が間違ってるって事じゃないのか？」

俺は口を挟む。

「もしくは、もっとやるべき事があるのに、見えてないって事か」
「でも、俺、精一杯やってるつもりなんだ。でも、ダメなんだから仕方ないだろう？」

「：前田君は、自分で自分をダメと決めつけるなって言ってるんじゃないかな？」

「そうなのかな？」

弟はそう言っていると、黙りこくってしまふ。すると、みーさんが、また慰めにはいる。

「どっちにしても、あの子もたいしたケガじゃないし、3日もすれば戻って来れるってコガちゃんも言ったじゃない。だから、そんなに気に病む事ないよ」

「うん。みーさんの言う通りだ。終わった事をくよくよしても仕方がない。肝心なのは、これからどうするかさ」

「これから？」

「そうだよ。もし、お前が前田君に対して責任を感じるなら、この先彼が納得してくれるまで頑張るしかないよ」

「どうやって？ 俺は精一杯やってるつもりだって言ってるのに」

「だから：彼の言った事にヒントがあると思うよ、俺は」

そう言っていると、俺は目の前のグラスを一気に飲み干した。

この時：前田君には気の毒だが：俺は弟のために少し喜んでいた。なぜなら、こうして自分を振り返るきっかけを彼は弟に与えてくれたからだ。もし、弟が彼の言った事を心か理解して、そして前田君と和解できれば、弟はワンステップ前に進める事になる。その一歩が、奴に生きるための真の自信を与えてくれるだろう。そう、期待したからだ。

けれど、その夢が叶う事はなかった。

なぜなら、それきり前田君が会社に来なくなったからだ…。

「前田君は、今日も休むそうだ」

朝礼の時、小金井さんが言った。

「まだ、ちよつと、具合がよくないそうだ」

えーって感じでざわめきが走る。あの事件から数えて既にもう10日目だ。見かけ程重傷ではないから、すぐに復帰できるんじゃないのか？

「何が、どう悪いんですかね？」

作業をしながら隣の川岸さんに言う。

「さあ、何か後遺症でもあるんじゃないのか？」

「でも、見かけ程重傷じゃないし、後遺症はないって医者も太鼓判押したそうじゃないですか。なのになんで、出て来ないんですかね？」

「俺に聞かれても……」

川岸さんはそっけなく答えると、俺の言葉を拒否するように、自分の作業に没頭しはじめた。

「まったく……」

うだるような暑さの中、独りごちる。

「早く戻ってきてくれないと困る……」

前田君の抜けた穴は、思いのほか大きかった。それは、彼が常日頃から人の3倍以上も仕事をこなしていたからである。連日の残業時間はさらに増えた。けれど、俺が困っているのは何も忙しくなったからじゃない。忙しいのは苦にならない。それより、何より、当惑しているのは、これではいつまでたっても『辞める』と言い出せない事だ。この状況下で『辞めさせてください』と言い出せる程、俺は鬼でも蛇でもない。

「盆明けには戻って来るんじゃないか」

川岸さんがボソリと言った。

「そうか」

言われて気付く。

「そういえば、もうすぐ盆休みか」

「そうだよ。ついでに、長期休暇とってやろうって魂胆じゃないか？」

「ありえますね」

…だとすれば、あと10日程の辛抱だな、と無理矢理自分を納得させ、俺も自分の作業に没頭しはじめた。

しかし、期待も空しく、盆があけても前田君は戻って来なかった。かわりにこんな噂が流れはじめた。『どうやら、前田は精神的な事が原因で、会社に来られないらしい』

「…つまり、それって、登社拒否って事ですか？」

俺は、みーさんに尋ねた。すると、みーさんがパンをかじりながら答えた。

「心の病気で、会社に来られなくなっただって事よ」

「心の病気って…鬱病とか？」

「詳しい事は、分からないけど…」

「…信じられないな。あの気の強い前田君が…」

「でも、そうなんだって」

みーさんの横で、弟が黙々と定食を食っている。食堂で3人揃って昼飯を食うのは久しぶりなのに、その日の弟は終始無言だった。

「前田、クビになるのかな？」

その日の帰り道、弟がボソリと言った。

「いや、…社員だから簡単にはクビにしないだろう」

「社員なら無事なのか？」

「…みたいだよ。それに、彼、優秀だったし」

「ふーん」

「けど、本当に信じられないな。あの前田君が心の病なんて」

「そうだな。人を追い詰めても、自分は追いつめられない奴だと思
ってたのに」

「人は見かけによらないって事かな。かえって、ああいう、弱味を
見せたがらない人程、限界を越えると弱いのかも」

「前田、限界を越えたのか？」

「じゃないかなあ？ 俺が思うに、色々重なって参ってた心が、あ
の事故をきっかけにポキンと折れたんじゃないかな？」

「それって、俺のせいって事？」

「さあ：俺にはなんとも：」

「：自業自得だろ」

「そんなもんかねえ：？」

それきり、俺達の会話は途切れた。

それ以後、俺のいるフロア内では、前田君の話題はタブーになっ
た。確固とした理由があるわけでなく、なんとなくそうなった。多
分、大半の人間に自分達が彼を追い詰めたという自覚があったから
だろう。自分の罪を自覚し、反省する事はいい事だ。しかし、この
場合、困った事に自責の念が負のエネルギーを産み出した。そして、
その銚先は弟に向かっていった。というのも、全ての原因は弟の無
能さにあったからだ。前田君というスケープゴートを失った今、弟
は再び自分の無能さと向き合わなければいけなくなった。それで、
以前は頻繁に聞こえていた弟を罵る前田君の声が、今度はBグルー
プの誰某に変わった。

「おい、河井。また、部品入れ間違えてる」

「お前、何、モタモタしてるんだよ！」

こうして、話は振り出しに戻り、俺の東京への道は再び遠くなっ

た。

「おい、正、起きろよ！」

9月の第一日目の朝、俺は弟の部屋のドアを叩いた。

「休むのか？ おい、正」

返事がない。

「おい、開けるぞ」

やはり、返事がない。それで、ドアを開けて突入してやると、パソコンの前にうずくまっている弟の姿があった。

「おい、何、ネットなんかやってるんだよ？ もう、会社に行く時間だぞ」

すると、弟は、背中を向けたまま「休む」と答えた。

「どこか、悪いのか？」

「別に」

「じゃあ、なんで？」

「…」

「おい、なんでだって聞いてるだろ」

「…」

「おい、なんとか言えよ」

そう言うのと、俺は奴に近付き、弟が見ている画面を覗き込んだ。

そして、ドキッとする。弟が見ているのが、リリカの…森崎の掲示板だったからだ。瞬間、あの日の、白いブラウスの森崎の姿が目に浮かぶ。が、それを払いのけ、俺はさらにパソコンに近付き、そこに書かれている文字を目で追った。

そこには、こう書かれていた。

「モグちゃんが、そのMさんにやった事は、モグちゃんが、学生時代に因幡って子にやられた事と同じだよ」

…ああ、言われちゃったか…

俺は同情と、哀れみの目をもって、弟を見下ろした。

…これに、ショックを受けたんだろうな。

「おい、正」

俺は、弟の肩を叩いた。

「しっかりしろよ、本当に休むのか？」

すると、弟は無言のまま、頭をたてに振った。

「分かったよ」

ため息をつき、立ち上がる。

「好きなだけ、考えろよ」

そう言うと、俺は奴の部屋から出ていった。

しかし、考えてみれば俺も甘いよな。

本来、そんな事で仕事をさぼっちゃいけないんだ。いくら、リリカ：森崎の言葉がショックだったとはいえ…。

この甘さが、弟をダメにしたのかと思いつながら家路につく頃には、すでに10時を回っていた。ただでさえ人手が足りないところに、弟が休んだ事でますます忙しくなり、この時間まで働くハメになったってわけだ。

疲れた体を引きずり家に辿り着き、玄関前で2階を見上げれば、弟の部屋の明かりはまだついている。何をやってるのかと部屋を覗けば、朝見たままの同じ姿勢でパソコンを見ている。石像みたいに固まった後ろ姿に「おい」と声をかけるが返事がない。それで、「おい」って言って部屋の中に入り、背中をつつく。すると、弟はギョッと音をたててこっちを向いた。いや、本当に音をたてたわけじゃないが、まさに音でも鳴りそうな感じだったんだ。

「おい、飯は食ったのか？」

と、尋ねると、

「食った。一応」

とのこと。

「あ、そう。じゃあ、いいや。さっさと寝ろよ」

と、部屋を出ようとする、

「アニキ…」

死にそうな声が追いかけて来る。

「なんだ？」

振り返ると、弟は極めて驚くべき事を言った。

「俺、会社を辞めようと思うんだ」

「はあ？」

二の句が継げない。

「俺、今日一日考え抜いて気付いたんだ。俺は、あそこにいてはいけない人間だという事に…」

何をどう考えたらそういう結論になるのか？ 悪い冗談なのか？
しかし、弟の表情はいたって真面目だ。こりゃ本気で言ってるわ。
それで、俺は慌てて奴の隣に正座して、軽く説教モードに入る。

「まあ、落ち着け。なぜ、どうして、そんな考えに至った？ 兄ちゃんに説明してみろ」

「うん。話せば長くなるけど…」

と、弟は語り出した。

「実は、昨日インターネットの知り合いに言われたんだ。俺が前田にやった事は、俺が高校時代にIって奴にやられた事と同じだって」

「ああ…」

その書き込みなら、俺も見た。けど、見てないふりしてこう言う。

「Iって、お前の小説に出てきた因幡って奴か？ あの裏切り者」

「そうだよ。俺の人生を8年間も無駄にさせた張本人さ。そいつと、俺が同じって」

「なる程、それで落ち込んでたってわけね」

「そりゃ、落ち込むさ。あんな奴と一緒に言われたら。俺は別に裏切ったわけでもないし、前田がこんな事になったのは、あいつが俺に不当な当たり方をしたからであって、いわば自業自得だろう？

アニキはどう思う？」

「うーん」

俺は首をかしげた。弟が食い入るように俺を見てる。

「正直な事を言っているかい？」

「…いいよ」

「お前、ホームページに『内戦』って詩を書いているよな」

「…書いてるよ」

「俺、あれは、お前が書いたにしちゃ良いできだと思ってるんだけどな」

「…だけど…なんだよ」

「今のお前はあの詩の作者とは思えない」

「…」

「むしろ、あの中でお前が批判した人間になってると思う」

「…」

「悪いな。こう言い方、卑怯かもしれないけど」

「いいよ。その事にはずっと前から気付いていた」

「気付いていた？」

「そりゃ、気付くさ。書いた本人だもん。でも、あれは、まごう事
ない俺の本心だよ。学生時代に芯から思った事さ。でも、学生時代、
もう一つ学んだ事がある」

「なんだよ」

「正しい事を言ってるだけじゃ、生きていけないって事さ」

「そうか？」

「そうだよ。今回の事だって、もし、俺が前田に同情して、前田を
庇ったりしたら、俺の方がひどい目にあってたさ」

「そういうもんかね。…でもさ、今回の件についてはイジメがどう
こう以前の問題じゃないかと俺は思うけど」

「どういうことさ？」

「まず、お前にやるべき事があったってことさ。つまり、仕事をち
ゃんとやる事だよ。それができていれば、そもそもこんなもめ事に
はならなかった」

「…それも分かってるよ。みんな俺が悪いんだ。俺が、あそこにい
る事が悪いんだ。だから、俺はあそこにいちゃいけない人間なんだ
って言ってるんだ」

「ちよっと、待てよ…」

俺は慌てる。どうやら、引き止めるどころか、背中を押してしま
ったようだ。

「そう、慌てて結論を出すなよ。俺は、そうは思わないぞ」

「同情はいいよ。自分で分かっているんだ。現に前田がいなくなった
今、俺がいる事でみんな苛立ってる」

「そんな事…」

ないとは言いい切れないが…。

「兄ちゃんには分からないよ。まるで、針のムシロなんだ。この辛さが分かるか？ 相手も苛立つ、俺も辛い。お互いに何もいい事がない」

「そうかもしれないけど…！」

俺は声を荒げた。

「それを克服しない限り、お前はどこに行っただって同じだぞ」

「…」

「俺は思う。お前には2つの道しかない。針のムシロの辛さに耐えるか、それともこれを克服するか」

「辞めるって選択もある」

「いいや違う。そんなのは逃げだ。選択じゃない。とにかく、自分から辞めるな。会社が辞めろと言うまで粘れ」

「はあ」

弟がため息をついた。

「もういいよ。兄ちゃんには俺の気持ちなんか分からないんだ。俺の決心は変わらないよ」

そう言って背中を向けると、それきり弟は、何を呼びかけてもうんともすんとも答えなかった。

そうは言っても、この人手不足のおり、さすがの弟もそう簡単に「辞めさせてくれ」とは言い出せないようで、何だかんだいってそれから一週間程過ぎてしまった。

そして、9月の第二土曜日。両親揃って親類の家に泊まりに行ってしまったため、珍しく兄弟揃って近所のスーパーに買い物に行く事になった。店はそう遠い場所にある訳でもないのに、2人でだらだらと緩い坂道を上がっていくと、坂の上から黄色いオレンジが転がって来る。「あれ？」と思い、オレンジを拾って見上げると、緩やかな坂のてっぺんでうずくまってる人影がある。その横には自転

車が倒れていて、カゴに入ったビニール袋の中から野菜や果物がこぼれだしていた。

「大丈夫ですか？」

声を上げ、坂を登る。人影は、どうやら女性のようだ。足を抑えて痛そうに眉をしかめている。その顔を見て俺は「おや？」と首をかしげた。すると、向こうも顔を上げ、俺の顔を見て「あれ？」と言う。

「もしかして、河井さんの…お兄さんの方ですか？」

それが分かったと言う事は間違いない。

「君、前に飲み屋で会った」

「そうです。尾崎かなえっていいいます」

そういうと彼女は眼鏡越しにっこり笑った。

ちようどそこに弟が追いついて来る。やつは、その手に、拾い集めたらしき野菜を抱えていた。そして「おい、大丈夫かよ…」と言いかけて、口を閉じる。奴にも彼女が誰か分かったらしい。そして、なんとも気まずそうな顔をした。

…そういえば、みーさんが彼女と弟をしきりに会わせたがっていた事を思い出す。弟は一切拒否していたが、まさかこんな所で再会とは…なにやら運命的なものを感じないでもなかった。

しかし、弟はそっぽを向いていた。無愛想な奴だ。というか、むしろ、感じ悪い。しかし、一方の彼女の方も気まずいに違いないらしく、なんとも居心地の悪いムードが漂ってきた。いや、そんな事言ってる場合じゃない。

「大丈夫？ 自転車倒したんだろ？」

「あ、…ええ。自転車ごと倒れちゃって。でも、大丈夫です」

そう言うのと、彼女は立ち上がり、自転車を起して、弟から野菜を受け取ると「ありがとう」と言っぴよこひよこと歩き始めた。どうやら、足をくじいているらしい。

「おい、待ってよ」

俺は叫んだ。

「そんな足で一人じゃ無理だよ。どこまで行くの？ 送っていくよ」

「いいえ。大丈夫ですから」

「大丈夫じゃないって」

そういうと、俺は彼女から強引に自転車を奪い取り、彼女を後ろの荷台に乗せた。

「さあ、どこまで？」

尋ねると、彼女は「ふれあいの家」と答える。

「ふれあいの家？」

それどこだっけ？ 聞いたような聞かないような…。首をかしげていると、弟が無愛想に言った。

「坂上町の福祉施設だよ」

「福祉施設？」

「ああ。障害者対象の入所施設」

「お前、よく知ってるな」

「みーさんから聞いた」

「へえ、そこで間違いないの？」

尋ねると彼女はうなずいて言った。

「ええ。私、先月からそこで働いてるんです」

「なる程ね。で、正、お前、道知ってるのか？」

俺の問いかけに弟が仏頂面で答える。

「一応…」

「そうか、じゃあ案内してくれ。行くぞ」

号令をかけると、俺らは坂の上の道をゆるゆると歩き始めた。

それから、坂の上をしばらく歩き道を左に曲がる。なだらかに下るその先は並木道になっていて、こんもりと木々の繁る施設へと繋がっている。その、涼しげな敷地のあちこちに、建物が点在しているのが見えた。

「あれが、『ふれあいの家』です」

自転車の荷台から、かなえが指をさす。

「へえー」

俺は思わず声を上げた。

「こんな住宅街に、あんな施設がねえ…」

足を一步踏み入れれば、そこはまったくオアシスだった。9月とはいえ、ここ数年来続く異常気象により真夏のごとく世の中を支配する猛暑などとはまるで無縁のような、ひんやりとした清浄な空気に満たされている。繁る木々が直射日光を遮ってくれるおかげかもしれない。点在する建物も、一目見て機能重視と思えるような灰色の鉄筋ではなく、昭和の昔を彷彿とさせるような懐かしい暖色系の物ばかりだった。

「なんか、癒されるな…」

思わず口にするが、返事はない。代わりに

「あの建物まで送ってくれますか？ 事務棟なんです」

かなえが言う。見ると、なるほど100メートルほど先に円形の建物が建っている。

「あ、分かった。あれね」

うなずくと、ひたすら自転車をひいていく。その真ん前を弟は目の前を黙々と歩いている。かなえも黙ったきりだ。この上なく気まずい。しかし、このきまづさを打ち破れる程の話題もなく、ひたすら敷地内中央の事務棟を目ざしていった。

と、その時、どこからかボールが転がってきた。それはサッカーボールを模したビーチボールだった。どこから来たのかと辺りを見回すと、少し離れた高台の上から小学4年ぐらいの男の子が手を振っている。

「すいませーん、そのボール取ってもらえませんか？」

それを見て、荷台からかなえが叫んだ。

「大地君！」

すると、少年もかなえに気付いたらしく。

「あ、かなえさん。今日、仕事なんだ」

と、無邪気な笑顔を見せた。

「大地君、1人なの？」

「ううん。翼がいるよ」

「翼君がいるって…大人はいないの？」

「事務員のおじさんが、その辺にいるはずだよ」

「だったら、いいけど…」

「それより、ボールを取ってもらえませんか？」

「自分で取りにこりゃいいじゃないか…」

弟が小さくつぶやく。すると、かなえが言った。

「彼、足が悪いんです。あの階段を降りるのは無理です」

言われてみれば、なるほど、大地少年は銀色の機具みたいなものをつけている。そして、高台からここに来るには、たいして段数は無いとはいえ急な階段を下らなくてはいけないようになってる。

とはいえ、俺の手は塞がっているし、かなえは足を怪我しているし…。

「おい」

俺は目の前にヌボ一と立っている弟に向かいボールを蹴り上げ「持って行ってやれよ」

と命令する。弟は、はじめて気付いたようにボールを受け取ると、めんどくさそうに階段を昇っていった。そして、直に少年の横に辿り着くと「ほい」とボールを渡した。

「ありがとう」

大地が笑顔で受け取る。

「ねえ、大地君……！」

かなえが叫んだ。

「何？」

大地がこっちを見下ろす。

「大地君、翼君と2人で、どうやってここまで来たの？」

「俺が、翼の車椅子を押して来たに決まってるじゃん」

「大地君の車椅子は？」

「ちゃんと部屋に置いてあるよ」

「どうして乗って来なかったの？」

「どうしてって……俺が車椅子に乗っていたら翼を連れて来れないじゃないか」

「……でも、大地君だって、足が悪いのに。なんで、そんな無茶な事するの？」

「それは……翼がどうしてもサッカーやりたいって言うから……。俺は、翼と違って歩こうと思えば歩けるし」

「それならそれで、誰か大人を呼べばよかったのに」

「だって、土曜だし……呼ぼうと思ってても誰も居なかったし」

「誰か一人ぐらいいはいるはずだよ。お願いだから無茶しないでよ！」

「別に無茶じゃないよ」

「無茶だよ。ねえ、もう部屋に戻ろうよ」

「何で？ まだ全然遊んでないのに」

「どっちみち翼君と二人でサッカーなんて無理だよ。戻ろうよ……！」
「なんだか、かなえはもの凄く必死だ。しかし、さっぱり話が見えない。たまりかねて口を挟む。」

「ねえ。カナエさん。全然話が見えないんだけど……。翼って誰？」

「どこにいるの？」

すると、弟が上から叫んだ。

「ここに居るよ。そんなところで言い争ってないで、上がって来いよ」

「上がって来いと言われても…」

俺はかなえを振り返った。すると、かなえは言った。

「弟さんの言う通りです。降ろして下さい。これぐらいの距離歩けますから」

「でも…」

俺は彼女の足を見る。しかし、

「本当に大丈夫ですから。ちょっとくじいただけだし」

と言って、彼女は強引に降りて行ってしまった。

「おい…待てよ！ …もう！」

仕方なく、俺は自転車をそこに停め、かなえの後を追いかけて階段を昇って行った。そして、昇り切った時、全てに納得する。そこに、『翼』が居たからだ。彼は、車椅子に乗っていた。鼻にはチューブをさしている。俺らを見ると「あー」と声を上げた。一度で重度の障害児と分かる。

「事務員さんはどこにいるの？」

かなえが詰問するように言う。

「え…と。さっきまで居たんだけど…」

大地が言葉を濁す。あきらかに嘘をついている。かなえもそれに気付いたらしい。

「帰ろう！」

と少し厳しめの口調で言った。

「その方がいいな」

俺もうなずく。かなえが俺を見る。

「河井お兄さん…」

「優でいいよ」

「じゃあ、優さん。この子を自転車に乗せてあげて下さい。私は、歩けますから」

すると、俺の応えも待たずに「大丈夫だよ」と大地が叫んだ。

「僕だって、歩けるから」

「無理よ！」

「無理じゃないよ。さっきだって翼を連れてここまで来れたもん。ゆっくりだけど、歩けるよ!」

「無理だってば!」

「無理じゃない」

「無理よ! お願いだから言う事聞いて!」

「なんだか、また二人だけでヒートアップしている。そこへ、弟が口を挟んだ。」

「大地の言う通りにさせてやれよ」

「え?」

「詳しい事分らないけど、一方的にダメって決めつけられるの気分よくないと思う。仮に自分されたら、嫌じゃないか?」

その言葉にかなえは黙り込んだ。

俺は：俺にも詳しい事情は分からないけれど：弟の言う事にも一理あるような気がしたので

「じゃあ、とりあえずみんなと一緒に行こう。どうしても無理なら、その時自転車に乗ればいいよな」

と、折衷案を出した。

「でも：この子達の寮は、第2棟なんですけど」

「いいよ。どこでも送ってくよ。第2棟ってどこ?」

「あそこです」

そういつて、かなえが指差す方を見ると、今いる広場からまっすぐ南に100メートル程先の木々の向こうに、4階建てのレンガ色の建物が見える。

「自転車、下に置いてあるじゃないですか。ここから、下に降りていったらすぐく大回りになるから、とても大地君には歩けません。やっぱり、無理です」

「ああ。そんなの、自転車を運んでくりゃいいだけの話だろ? 簡単だよ」

「：わかりました。それならいいです」

ようやく、かなえは納得したようだ。それで、俺は弟に言った。

「じゃあ、俺自転車運んで来るわ。お前は翼を連れて行ってやってくれ」

「へいへい」

弟は答えると、のそのそと翼の方に行く。

こうして俺達は当初の目的を変更して、事務棟ではなく、第2棟に向かう事になった。

57 (後書き)

サッカー好きの翼君が出てきますが、某マンガとは何の関係もありません。たまたまの偶然です。よろしくご了承ください。

とはいうものの、その道のりは思った程楽ではなかった。なにしろ、この大地という奴は予想を超えて歩くのが遅い。まず、歩き方が普通でなく、足を開いて腰を振りながら前進して行くのだ。

装具をつけた足からして、また、こういう場所にいることからしても、何らかの病気を持っているのだろうと頭では分かっているのだが、それにしても間が持たない。まるで、砂漠をあてどなくさまようキャラバンのような気分になって来る。軽々しく大地を歩かせる事に賛成した自分に後悔しかけた時、とうとう、大地が転んでしまった。

「大地君！」

かなえが足をひきずりながら大地の元に駆け寄り、手を取って立たせた。

「大丈夫？　ねえ、やっぱり自転車に乗ろうよ」

そう言って、かなえがこちらを振り返る。（俺達は、かなえの希望で大地の後ろを歩いていた）

「乗るか？」

俺も声をかける。気を遣ったというよりは、その方が助かると思ういからだった。しかし、大地は首を振った。

「いい。歩けるから」

ヤレヤレ。こりゃ、随分頑張りやさんだ。感心するというか、あきれるといふか…。

「大地君。頑張るのは立派だと思うけど…」
かなえが言う。

「頑張り過ぎて体によくないし、ダメならダメって認めるのも勇氣だと思ふよ」

「そんなの勇氣じゃないよ！」

大地が言い返す。

「それに、僕、知ってるんだから。僕の病気はダメって認めたら、本当にダメになっちゃう病気なんだって。少しでも歩かないと、いつか本当に歩けなくなるんだって」

大地の言葉にかなえは黙り込んでしまう。そして、しばらくうつむいて考え込んだ後「分かった」とうなずいた。

「じゃあ、歩こう。そのかわり、手をつないでね」

しかし、少年はその申し出も拒否した。

「大丈夫だよ。一人で歩けるから」

そして、また、ぎこちなく歩き出す。かなえはその場にぽつんと取り残された。俺らはかなえに追いつくと、

「ねえ、今のどういう意味なの？ あの子、一体何の病気なの？」
と、たずねた。

すると、かなえは答えた。

「大地君は、筋ジストロフィーという病気です」

「筋ジストロフィー？ 何だ？ それ」

「筋肉が壊れて、だんだん動けなくなっていく病気です」

「動けなくなる？」

「そうです。今は、無理してでもあおして歩けるけど、いつか、全然歩けなくなってベッドに寝たきりの生活になるんです。足だけじゃなくて、体中の筋肉が壊れていくから、話す事もできなくなって、最後は心不全になって亡くなる事が多いそうです」

「心臓の筋肉も壊れるって事かよ？」

弟が後ろから口を挟む。

「そういうことになりますよね」
かなえはうなずいた。

「あの子が…？ 嘘だろう？」

がく然として、俺は少年の後ろ姿を見る。かなえは、黙って首を振った。

「あの子は…知ってるの？ 歩けなくなる事…」

「いいえ。まだ、そこまでは。ただ、足が悪いだけだっと思ってるみたいです。でも、動かないと、病気の進行が速まるっていうのは本当の事なんです」

「それで、ああやって無理してるのか」

弟が言う。

「そうだと思います。それは、分かってるんだけど、どうしても、見ていられなくて…」

かなえの言葉が終わるか終わらないかのうちに、大地がまた転んだ。かなえが足を引きずり、大地の元に駆け寄っていく。そして、大地を抱き起こし、強引にその手をとると、2人でゆっくり歩き出した。その後ろ姿を見て弟がつぶやいた。

「あの体で、この車椅子を押して、あのグラウンドまで行くなんて…」

さすがの奴もショックを隠しきれないようだ。

車椅子の上では、俺らの話が分かっているのか、分かっていないのか、翼がぼんやりと座っていた。

それからしばらくカタツムリのごとき行進を続け、やっと目的地の建物に辿り着いた時、頭上からいきなり元気のいい声が聞こえて来た。

「あれー？　かなちゃん、今日出勤なの？」

驚いて顔を上げると、目の前のレンガ色の建物の2階の洗濯物干場とおぼしき所から、髪の高い女の人はこちらを見下ろしている。

「あ、ゆきえさん」

かなえが叫んだ。

「ゆきえさんも出勤ですか？」

「見ての通り！」

ゆきえと呼ばれた女性が答える。

「っていうか、どうしてそこに大地君と翼君がいるの？」

「抜け出してたんですよ」

「抜け出してたー？」

ゆきえは、よほど驚いたのか声を上げると、

「ちよつと、待ってて降りていくから！」

と、いったん姿を消した。そして、やがて、建物の正面玄関から飛び出して来て、大地の元に駆け寄り、

「こらー」

と叫ぶ。

「どういうことよ。無断で抜け出すなんて」

「だって、翼がサッカーしたがるから」

「だからといって、2人きりで行っちゃ危ないだろう！」

「だって…俺、歩けるし」

「大地が大丈夫でも、翼が大丈夫じゃないでしょう？ 何かあったらどうするの？」

そういうと、ゆきえは大地の頭を軽く叩いた。すると、大地が謝った。

「ごめんなさい」

なんだ、素直じゃないか…。

「で、ところで…」

ゆきえはかなえを見る。

「その人達は誰？」

「ああ…この人達は…」

かなえがちらつとこちらを見て言う。

「みーちゃんの知り合いで、河井さんといって、御兄弟です」

その言葉にゆきえは目を丸くした。

「みーの？」

「はい」

「じゃあ、もしかして、ボランティア志望とか？」

「あ、違います。私、足をくじいちゃって…それで困ってたなら、偶然この人達が通るかかって、それで、ここまで送ってくれたんです」
「足をくじいた？」

「はい…。自転車ごと転んで…」

「大変じゃない！ 早く医務室に行って湿布を貼ってきな！」

「あ…はい…でも」

かなえが俺達を見る。

「ああ。みーの友達なら遠慮しないでお茶でも飲んでいってよ」

「そんな、いいですよ！」

俺らは首を振ったが、ゆきえの押しの強さに負けて、ついに図々しくも上がりこむはめになってしまった…。

それから俺らは、レクリエーションルームというところに通された。子供が利用するにふさわしく、色紙で作った動物や花が窓にも壁にもごてごてと貼られた、なんだか落ち着かない空間だ。

俺と弟はそこでしばらく待たされたが、やがてゆきえが麦茶を持って入って来た。

「ごめんね、待たせちゃって。やっとあいつら部屋に戻らせたから…」

あいつらっていうのは大地と翼の事だろう。

「ありがとうね。かなえを助けてくれて」

「いいえ、たいした事じゃないですから」

この間、弟は一切会話に加わらず、ひたすら部屋の中をうろうろしている。

「…えーっと。それで、2人はご兄弟って事だけど…どっちがお兄ちゃん、どっちが弟さん？」

「あ…俺が兄で、優。あのうろうろしてるのが、弟で正です」

「そっくりね」

「そうですかあ？」

「うん。そっくり。で、みーとはどういう知り合い？」

「あ…彼女の勤める工場の同僚です」

「ああ。産婆沙メタル工場の？」

「ええ。みーさんには、色々とお世話になってます」

「あいつ…うるさいでしょう？」

「え…まあ、工場の隠れた主ですし」

「だと、思った」

ゆきえは大笑いする。

「で…あの…ゆきえさん…でしたっけ？」

「ああ…自己紹介忘れてた。ゴメン。田辺由紀恵です。自由の由に

糸偏に己の紀に恵むの由紀恵。よろしく」

「よろしく」

俺と由紀恵は互いに頭を下げあった。弟は相変わらず知らんふりだ。あきれた奴だが、このさい放っておく。

「で、田辺さんは、みーさんとはどういう知り合いですか？」

「由紀恵でいいよ。幼馴染み」

「じゃ、みーさんの子供の頃も知ってるんですか？」

「ああ。知ってるよ。大親友」

「どんな子だったんです？ みーさん」

「うーん。あのまんまだよ。あ、そーだ。写真持ってるよ。見る？」

「え？ ここに？」

「うん。あるよ。あいつ、小6の頃からずっとここで暮らしてたし。その前は家から通ってたし……。だから、写真も結構たくさんあるはずだよ」

すると、今まで無関心だった弟がこちらに寄って来て言った。

「見る！」

「じゃあ、こっちにおいでよ」

そう言うと、由紀恵はホワイトボードの裏にある扉を開けて手招きをした。言われるままに入っていくと、そこは事務所だった。

「土曜だから、誰も居ないし、適当なところに座って」

言われた通り適当な場所に座る。俺の座った席は雑然としており、イベントのチラシが数種類束になって置かれていた。何気なく手に取ると、

「あー、それ、よかったら参加してね。常時ボランティア募集中だから」

言いながら、由紀恵がこちらに来る。その手に数冊のアルバムを持っていた。そして、彼女はいまだに戸口でぼやっとしている弟を、
「ほら、おいでよ」

と、手招きして呼んだ。弟はその言葉に促されるように、だらだらとこちらに来て、俺の横に座った。それを見届け、由紀恵がアル

バムをめくる。

：みーさん、一体、どんな子だったんだろう？

わくわくしながら、由紀恵の手元を覗き込む。

アルバムを開くと、まず、最初に目に入っただのは、入所式らしき写真だった。

「ほら、これはまだ通所の頃」

由紀恵が指をさす。

そこには、おかつぱ頭の…なるほど、みーさんの面影を残す少女がいた。それから、由紀恵はページをめくり、

「これは、…多分バザーの写真。これが、交流会」

と、説明してくれる。

どこでも、みーさんは楽しそうに笑っていた。が、しかし…。

「どう？ 意外に可愛いでしょ？」

由紀恵が言っていると、弟がぼそっとつぶやいた。

「…キズが、ない」

そう…そうなのだ。この、おそらく小学1年から6年までと思われるみーさんの写真には、あの頬のキズも、ケロイドみたいなものもなかった。答えを求めて由紀恵を見ると、由紀恵は少々気まずそうな顔をした。

「ああ…知らないんだ。あのキズは、もっと、後にできたものだから…」

それは、知らなかった。だって、聞くに聞けないし…。

「いつできたの？」

弟が遠慮なく尋ねる。

「中学1年の時だよ。その時、みーの家、火事になってね、助け出された時にはあのキズができてた」

「火事？ じゃあ、あのケロイドみたいなのですか？」

「うん。その時できたんだよ、お兄ちゃん」

「そうだったんだ…」

俺は全てに納得する。

「その時、お母さんが亡くなったの。可哀相だったんだよ、みー。泣けない程ショック受けちゃって。あの、お喋りが、それから半年ぐらいはほとんど喋らなくなって。ほら、これがみーのお母さん」
そこには、どこことなくみーさんの面影を残した女の人が写っていた。

「綺麗な人ですね」

「うん。それに、優しい人だったよ。ずっと、一人でみー達の面倒を見てたんだけど、あんな事になっちゃって」

「親父は写ってないの？」

弟が聞くと。由紀恵は「うん」と頷いた。

「お父さんは、商売やってとても忙しい人だから、ここには写ってないと思うよ」

「自営業ですか？」

「そう。それで、どうしても子供達の面倒を見ているヒマがないって。それで、洋君と一緒にみーもここに預かられたんだよ」

え？ 『洋君』？ 突然、飛び出した名前に戸惑っていると、俺の気持ちを弟が代弁してくれた。

「洋君で誰だよ？」

「え？ 知らないの？ みーの兄貴の事」

由紀恵が驚く。

「いや。みーさんに兄貴が居たのは知ってるし、死んだって事も知ってるけど…でも、なあ…」

そう言っつて弟が俺を見る。俺は頷いた。

「名前まで聞いてないし、それに、お兄さんもここに入ってたてことは…」

そうだ。ここに居たって事は…。

「そっか」

由紀恵はため息をついた。

「『それ』は聞いてないんだ…」

そして、彼女は。今更隠しても仕方がないとばかりにアルバムの

ページをめくった。

「ほら、この子だよ。みーのお兄さん」

由紀恵が指さした先に、車椅子の男の子が写っていた。ちょうど、さっきまで一緒にいた翼みたいに、鼻にチューブをさしている。それを見て、俺は少なからずショックを受けた。弟も同じだったようだ。しばらく、重い沈黙が流れた。それから、弟が言った。ちょっと、怒っているようだった。

「…っーか、無責任な親だよな。子供をこんなところに放り込んで知らん顔なんてさ…」

「確かに…」

珍しく俺も弟に同意する。障害のある我が子を見捨てるなんて、あまりにも薄情に過ぎないか？

「人の親になる資格ないよな」

ちよつと厳しめに弾劾すると、「責めないであげて欲しい」と由紀恵が言った。「え？」って顔する俺らに向かい、由紀恵は淡々と語りだす。

「…確かに、昔は、あたしも同じように思ってた。でも、障害児を持ったご両親は本当に大変なんだってこの仕事して分かった」

「どんなに大変でも、それが親に与えられた義務じゃないのか？」

弟が口を挟む。

「弟君の気持ちは、もつともだよ。でもさ、考えてみてよ。生まれて来たわが子が障害持ってたって分かった時の親御さんのショック」言われてみれば、障害者自身を気の毒に思った事はあっても、その親の気持ちというのは考えた事はない。

「でも、親なら、どんな子供でも愛するはずだろう？」

弟が食い下がる。確かにそうだ。そんなものだ、俺も思っていた。

「誤解しないでね。親御さんが愛情を持ってないわけじゃないのよ。でも、人が人を介護するって、精神的にも、肉体的にも本当に大変なの。介護疲れでお母さんの方が病気になるケースも少なくないの

よ。私達は、親御さんの負担を少しでも減らすお手伝いをしているだけで…」

「でもさ…」

弟は、まだ納得いかないようだが、俺は『そういうもののなか』とも思う。どちらにしろ、俺らには介護の経験がないから分からない。考えてみれば、気ままな身分だ。

と、その時だ。

「…由紀恵さん」

小さな声がした。見ると、車椅子に乗った大地がいる。

「どうしたの？」

驚いて由紀恵がたずねると、大地が小さな声で言った。

「どうしても、サッカーしちゃダメ？」

その無邪気さに、思わず笑顔がこぼれた。

「何？ そんなにサッカーやりたいの？」

由紀恵さんはあきれ顔だ。

「俺じゃなくて、翼がどうしてもやりたいって…」

まったく子供は無邪気でいいなど、思わず大地の髪をくしゃくしゃしたくなる。

「でもさ」

弟が無表情に言った。

「なんで、翼がサッカーしたいって分かるの？ あいつ、喋れないんじゃないの？」

子供にも情け容赦のない突っ込みようだ。

「確かに、翼は喋れないけど…」

そう言うとき大地は自分の片目を指さし、

「そのかわりに目で合図するんだよ。こうして」
パチンと、片目を閉じる。

「右目を閉じたら、何かして欲しい証拠。左目は、もういいって事」
「へー。色々やり方があるもんだな…」

弟は心から感動したように仕切りと首を振る。そして、由紀恵を見ると意外な事を言った。

「ねえ、センセイ。ここまで言うんだから、やらせてやったら？ サッカー」

おお…！ まるで、人間みたいな温かいセリフじゃないか！ 俺は感動と驚愕の思いを込めて弟を見る。が、しかし、由紀恵は渋い顔をした。

「そりゃ…やらせてあげたいのは山々だけど…でも、二人だけじゃ何かあった時困るじゃない」

「じゃあ、俺らがついていくよ。男手があればいいだろう？」

「確かに、男の人がいれば助かるけど、それだけじゃ…」

「いいじゃないか、センセイ。この天気がいいのに、部屋の中にもってたんじゃこいつらだって退屈でしかたないだろう？」

「そうだよ。僕、退屈」

大地が弟の尻馬に乗って叫ぶ。2対1の勝負に勝ち目がないと悟ってか、ついに由紀恵も観念したらしい。しぶしぶ「分かった」とうなずいた。

「やった！　ありがとう、お兄ちゃん！　由紀恵さん！」

大地が万歳する。

「ただし！」

由紀恵が口を挟んだ。

「私も行くからね！」

「そんなの、別に構わないよ。ねえお兄ちゃん」

「ああ。とにかく、これで、決まったな」

そういうと、弟は、大地の車椅子を押して歩き出した。

「でも、ちょっと待って」

「何だよ、センセイ。まだ何か文句あるのかよ」

「うん。実はあたし…今、洗濯途中だったのよね。誰かにやってもらわないと…ケガしてるかなえ一人じゃ可哀相だし」

と、再び由紀恵は考え込み、やがて俺の顔を見た。

「そーだ、お兄ちゃん！」

「え？　俺？」

「そ、お兄ちゃん。悪いけどかなえの手伝いをしてくれる？」

「…」

断れるはずもなかった。

青空の下、白いシートが揺れている。空気は停滞しているように思えるが、多少の風は吹いているらしい。

「ごめんなさい。送ってもらった上に仕事の手伝いまでやらせるはめになっちゃって…」

かなえがシーツを広げながら言った。

「別に、気にしなくていいよ。これぐらい」

そう答え、俺もシーツを広げる。そして、思いきりはたいて皺を伸ばすと、竿にかけた。

「それにしても、結構な量だね」

「ええ。何しろ、入寮者全員分だから」

「何人いるの？」

「この棟には15人かな」

「ふーん。そんなに居るんだ。そのわりに静かだね」

「今日は土曜で、みんな家に帰ってるんです：ああ。大地君と、翼君を除いて」

「ふーん。あいつら居残り組か。可愛いそうだな」

その『あいつら』の姿が、この2階の物干台からはよく見える。先きほどまで俺らが居たグラウンドで、ちょうど今大地がボールを蹴っているところだ。その向こうに車椅子の翼が居て、その車椅子を正が押している。

「ほら、こっちこっち！」

弟の叫び声をする。あいつのあんな声を聞くのは、何年ぶりだろう？ 子供の頃は、あいつもああやって外でよく遊んでいたが：。ぼんやり見ていると、いつの間にか隣に来ていたかなえが言った。

「弟さん、子供の事は好きなんですネ」

「：みたいだね。俺も初めて知った」

「面倒見もいいみたいだし」

「：みたいだね。俺も、今日初めて知ったよ」

「本当は、優しいんですよね？」

「いや、それは、知らないけど」

「優しいんですよ。大地君がサッカーできるように由紀恵さんを説得するなんて」

「そうかな：？」

「私ならできません。どうしても、何かある事考えちゃうし」

「もしかして、弟のやった事迷惑だった？」

「いいえ。違います。全然逆です。だって、よく考えてみると弟さんが正しいって思うもん。大地君は時間も限られてるんだし、動けるうちに、できる事をさせてあげなきゃって…」

「…限られた時間か…」

確かに、大地に許された時間は、俺らとは比較にならない程少ない。しかし、天と地の間には光があふれ、鮮やかな青と緑に彩られている。その中を笑いながら大地が走っている。いつか確実に訪れる悲劇の萌芽など微塵も感じさせない、時の流れとは無縁のような穏やかな風景…。

「…でも、いいですね。子供はなんだかんでも無邪気で」

ふいに、かなえが口を開く。

「え？ ああ。本当だね」

俺はあいづちをうつ。

「本当ですよ。私も子供の明るさに救われる事が多くて。そんなじゃダメなんだけど」

そう言うと、足を引きずりながら、再びかなえはシーツを干しに戻った。

と、その時。

「コラー。大地！」

由紀恵の怒鳴り声が響いて来る。何ごとかと思ってグラウンドを見ると、由紀恵が大地に向かって何やら説教している姿が目に入ってきた。どうやら、大地の奴が何かやらかしたらしい。

「…あの人…田辺さん？ パワフルな人だね」

「ああ。由紀恵さん？ いい人ですよ。明るいし、おもしろいし。でも、仕事には結構厳しくて頼りになるし。…私なんか、叱られてばかりだけど」

「ははは。最初は誰でもそんなもんだよ」

「ですかねー」

そう言うのと、かなえはバシッと音を立ててシーツを広げた。

シーツを全て干し終わると、「私は仕事があるから」と、かなえは事務棟に戻った。一人残された俺は、この暑さの中を弟達のいるグラウンドに行く気力もなく、かといって、他にやる事もなく、手持ち無沙汰のまま建物の中を最上階から歩き回った。

最上階といっても3階だ。細長く見えた外観とは裏腹にゆったりとした広いフロアで、3つあるエレベーターホール脇の大きな窓から、緑の森が見えるようになっていた。中央には大きな白い柱があり、子供が描いた絵が飾られている。それを囲むように、いくつものドアが並んでいる。どうやらここは、個室ばかりのようだ。2階も同じように個室と、それから浴場にリハビリテーション室。そして学習室があった。ナースステーションのようなものも有る。施設の性質上、病院に似た雰囲気も漂う。その雰囲気、少し物悲しさを感じる。…このどこかにみーさんも居たんだよな？　どんな子供だったんだろう？　きつと、今のまま気の強い女の子だったんだろうな。兄貴の事虐める奴がいたら、絶対にやり返したりしたんだろうな。彼女の事だ、どんな環境だって楽しいものに変えたに違いない。…それにしても…。

と、俺は、先ほどの由紀恵から告げられた、みーさんの過去についてに思いを馳せる。

あの傷は、火事が原因でできたものだったのか。なる程、それであのケロイドのような跡には納得がいった。けれど、あの頬の傷はなんだろう？　刃物で切ったようなあの傷の跡は？　大体、出火原因はなんだったんだろう？　一瞬、いやな想像をしてすぐに首を振る。いや、そんなわけがない。まさか、そんなわけが…。

しばらく、フロア内をうろついていたが、3度目に例の物干台に

辿り着いた辺りでいい加減飽きが来る。それで、昇って来た時とはルートを変えて、エレベーターを使わずに階段で下に降りていった。降りた先はちょうど一階のロビーになっている。レクリエーションルームに戻るには、受付を過ぎて、医務室の横を通りさらに先まで進まなくてはいけない。ところが、受付を過ぎて数歩と行かないうちに、俺は身動きが取れなくなってしまった。なぜなら、そこに一枚の絵を見つけたからである。

それは、荒々しいタッチで描かれた巨大な木だった。おそらく3階まで貫かれているのであろう、あの大きな白い柱のまん中で、わずか●四方の紙を突き破るがごとくに、その幹はうねりながら空へと向かっている。幹の先からは二つに別れた枝が、まるで幹にかわり空をつかもうとするがごとくに広く、高く伸びている。そして、そのてっぺんには、太陽のような赤い花を咲かせており、その花からは異様な生命力がほとばしっていた。その、生命力に目を奪われたのかもしれない。

しばらく、その絵の前に立ち尽くしていると、後ろから唐突に話しかけられる。

「その絵、気にいったんですか？」

驚いて振り向くと、かなえが立っていた。

「あれ？ もう仕事終わったの？」

「ううん。どうせだから、こっちでやろうと思って戻って来たんです。：デスクワークだし」

そう言って、かなえは手にしたファイルをこちらに見せた。

「それより、それ、いい絵でしょ？ 私も好きなんです」

「君も？」

「うん。なんか迫力あるじゃないですか？」

「そうだね。誰が描いたんだろう？」

「この、通所の人が描いたんですよ」

「え？」

「びっくりでしょう？ でも本当ですよ。長谷川さんっていつて、個展もやってて、けっこうファンも多いらしいですよ」

「長谷川？…男？ 女？」

「男の人です。30後半ぐらいの。でも、その人両手が無いんです」
「両手が？」

「はい。それで、こんな絵を描いちゃうんだから、本当に凄いでしょ
う？」

「ああ」

俺は戦慄しながら、その絵に眺め入った。

5時ごろ、遊び疲れた大地と翼を連れて弟達が戻って来た。そのタイミングで、俺らも家に帰ろうとした。が、しかし、

「ついでに、かなえを送ってやって」

という由紀恵の言葉に従い、俺らはしばらく事務所の中で待つことになる。

手持ち無沙汰でうろうろしていると、机の上に一枚の絵ハガキが置いてあるのに気付いた。そこには、見覚えのある野太いタッチで、一人の男の正面図が描かれていた。

「これは？」

思わず手に取り尋ねる、かなえが答えた。

「あ、やっぱり反応した。それも長谷川さんの絵ですよ」

「やっぱり！」

俺は感動して、しげしげとその絵に眺め入った。

「え？ お兄さん、ハセちゃんを知ってるの？」

由紀恵が、驚いて俺を見る。

「いや。さっき、受付のところに飾ってあるのを見て知ったところです」

「ああ、あの木の絵ね」

彼女はうなずいた。

「そうです。あの、柱の所に飾ってある…」

「：確かにあれはちよつと良い絵だよね」

「『ちよつと』どころか、『ものすごく』良い絵だと思います」

「ふーん。よっぽど気に入ったんだね」

「ええ。とても」

「じゃあ、そのハガキ持って行きなよ」

「え？」

その言葉に面喰らう。

「でも、これ、売り物っぽいですけど…」

俺は包装用ビニールに貼ってある100と印刷されたシールを指して言った。

「ああ。本当は売り物だけど、サービス、サービス。手伝い賃」

「いいんですか？　たいして手伝いしたわけでもないのに」

すると、窓際からかなえが満面の笑顔でフォローしてくれた。

「そんな事無いですよ。すぐく助かりましたよ」

「ほーら。かなえもこう言ってるし、持っていてきな」

女性2人に進められ、俺はありがたくそれを受け取る事にした。

そして、受け取ったが最後、女性二人の話など上の空で、じっとそれに見入ってしまう。ぼーっと、それを見つめていると、

「お兄さん、お兄さんてば！」

いきなり、耳もとで呼びかけられて、飛び上がる程驚いた。

「え？　あ？　何でしたっけ？」

「何でしたっけ？　って…聞いてなかったの？　私達の話」

「あーっと、何だっけなあ？」

全然聞いてなかった。

「はあー」

由紀恵があきれ顔で首を振る。

「本当に、その絵が好きなんだね…。確かに、ハセ君にはファンが多いけど。にしても、ここまでハマる人も珍しいよ…」

すると、俺の記憶する限り、今までずっと無言だった弟が重い口を開いた。

「兄貴は、画家志望なんだ。だから、絵に対する執念がちょっと異常なんだ。はっきり言ってヤバいんだよ」

どういう言いぐさだ。それじゃ、まるで俺がおかしい奴みたいじゃないか…。俺はおおいに批難を込めて弟を見た。が、しかし、弟の言葉に由紀恵は納得したようだ。

「ああ。なるほどね」

と、軽くうなずくと、

「だったらさ、文化祭の時おいでよ」

と言う。

「文化祭？」

俺は首をかしげた。なんで、そこで、文化祭が出て来るのか？

まったく脈絡が無い。…という俺の気持ちを代弁するように、弟がストリートに尋ねた。

「なんで、そこで、いきなり文化祭が出て来るんだよ？ 全然話が見えないよ」

「ああ。悪い悪い。話す順序を間違えた。あのね、その絵の作者の長谷川誠が文化祭に顔を出す約束になってるんだよ。だから、おいでって言ってるの」

それで、俺らも納得する。

「そういうことなら、ぜひ来させてもらおうかな？ でも、いつやるんです？」

「10月の連休あるでしょう？ その時」

「10月の連休ですか…。何日だっけ？」

「ちょっと待って、チラシがあるはず…」

そう言うのと、由紀恵は自分の机の引き出しを開け、B4のチラシを出した。

「これこれ。これがチラシ」

見ると、なるほど『ふれあいの家、文化祭』とでかでかと書かれている。

「ああ、12、13日ですか」

「そう、ぜひ来てね。そのチラシ持っていっていいから」

「ありがとうございます」

俺はありがたくチラシを受け取り、2つに折った。すると、由紀恵がこう付け加えた。

「ついでに、ボランティアも募集してるから、よかったら参加してよね。特に、弟君。君、向いてるから、よかったら来てよ」

「え？」

いきなり声をかけられて、弟が戸惑った顔をする。

「待ってるからね」

由紀恵はそう言うと、ニコツと笑った。

それから、20分程待ち、俺らはかなえとともに施設を出た。由紀恵は、まだ仕事があるからと、そこに残る。

既に日の暮れかかった坂道を、自転車をひいて歩く。坂を昇り切ったあたりで、かなえがぼつりと口を開いた。

「凄いですね、あの由紀恵さんにほめてもらえるなんて…」

「え？ 誰が？」

俺は振り返って荷台の上のかなえを見た。彼女は行く時と同じく、帰日も自転車の荷台に乗っていた。

「誰って、河井…弟さん」

「…弟が？ ほめられたっけ？」

「…ほめられたじゃないですか。『向いてる』って」

「ああ…そういうえば、そんな事も言われてたっけ？」

そういうと、俺は弟に視線を向けた。しかし、弟はたいして嬉しそうでもなく

「お世辞だろ？ あんなもん」

…あくまで、かわいくない。

「いいえ。あの人、お世辞なんかいいません」

かなえが、ムキになって言う。

「あの人、気さくそうに見えるけど、本当は物凄く厳しいんです。

特に仕事に関しては」

と、弟の直球。

「とても厳しいようには、見えないな」

「厳しいように見えなくても、厳しいんです。私なんか、叱られてばかりで…。この間なんか『かなえのやってる事は自己満足に近いよ』って言われちゃったし…」

「そりゃ、確かに厳しいな」

ちよつと同情する。

「：でしょ？ 私向いてないんです、この仕事」

「そこまで、悲観しなくても：」

俺はかなえをなぐさめた。そこへ、弟が、また口を挟んで来る。

「つーかさ、なんで、あんたこの仕事しようと思ったわけ？」

「なんでって：」

「だってさ、あんた元々、フツ一のOLだろ？ 何で、会社辞めてこんな畑違いの仕事してるの？」

「それは：」

かなえが口ごもる。

「別に、深いわけがあったわけじゃないけど：この仕事ならやりがいを持てる気がしたから：」

「OLは、やりがいなかったのかよ？」

「：あんまり、仕事がない上に、私、お局みたいな人に睨まれてて：ある日、言われたんです『あんたの代わりなんて、いくらでもあるんだ』って。そう言われた途端に会社に行くのがどうしても嫌になって、：それで、職安通ってた時に、みーちゃんにこの仕事紹介されたんだけど：」

「なるほどね」

弟は、うなづく。そして、ぼそりとつぶやいた。

「どんな仕事も楽じゃないんだな：」

どうやら、今の自分のシャレにならない境遇と重ね合わせているらしい。

それからしばらく、俺らは無言で歩き、やがてかなえの家についた。

「ありがとうございました」

かなえは、ぴよこんと頭を下げた。

「本当に助かりました」

「礼なんかいいよ」

俺は答える。そして、行こうとすると、背中からかなえの声が追いかけて来た。

「文化祭、絶対に来て下さい」

俺は、後ろを振り向き、うなずいた。

「絶対ですよ。大地君も、翼君も、すごく喜んでたんです。また、一緒にサッカーやりたいって…」

その言葉に、俺は舌打ちした。

…ってことは、何だよ。来て欲しいのは、正かよ…

しかし、分かっているのか、分かっているのか、弟は振り返りもしなかった。

その休日の出来事は、俺達の心に思わぬ風を吹き込んで来たものの、長い人生航路の途中に、ほんの一瞬我が道に交叉した別世界に過ぎず、翌々日からは再び退屈な日常へと埋没していった。相変わらず仕事はくそ忙しかったし、弟は怒鳴られてばかりいるし、世間では世界的な株の暴落など、何やらウソ寒い様相を呈して来て、俺の東京行きの切符はますます遠ざかっていく気がする。そろそろ観念し時かなと思っていたある日、仕事中にとりの川岸さんがこんな話をふってきた。

「おい、知っているか？　もうすぐ大量に人を入れるらしいぞ」
「へえー？」

俺は驚いて顔を上げた。

「このラインにですか？」

「ああ。このフロアに」

「何人？」

「5人ぐらい入れるって。ホラ、前田がいつまでたっても復帰の見込みないだろう？　それで、毎日この忙しさでみんな参っちゃってるし、どうにかしてくれないなら全員辞めるって原口さんが人事に怒鳴り込んだらしい」

「怒鳴り込んだ？」

その言葉に、俺は驚く。

「無茶するなあ、原口さんも。返り打ちでリストラされたらって考えないのかな？」

「原口さんは大丈夫だろう。なにしろ、勤務期間も長いし、上の人間に味方も多い。大丈夫って見込んだ上での行動だろう」

「そんなもんですかね？　…それにしても5人は凄いな。前田君の存在が、それだけ大きかったって事ですかね？」

「それもあるし、夏に雇った学生バイトが何人か辞めるせいもある

し、それだけじゃなくて…」

そこで、川岸さんは言葉をとめた。その態度になんとか違和感を感じ、

「…？　それだけじゃなくて、何ですか？」

と、訝しげに尋ねると、川岸さんは声をひそめ、なんだかとても気兼ねするように言った。

「何人か辞めさせられるかもしれないって」

「え？」

瞬間、頭の中に弟の顔が浮かんできた。おそらく川岸さんも同じだったのだろう。ますます気を使うようにこう言った。

「いや。噂だよ、噂。本当かどうか分からないよ」

「どっちでもいいですよ、そんなの」

俺は、敢えて気にしてないふりをした。

昼休み、弟と二人で食堂に行く。定食を取り、無言で飯を食う。弟は疲れ切った顔をしていた。無理もない。さっきまでグループの連中に怒鳴られていたのだ。詳しく話せば、こういう事だ。弟の所属するBグループの分別用の箱が一つ無くなっており、証拠があるわけでもないに弟が無くしたと決めつけられたのである。明らかに理不尽であるにも関わらず、誰も、弟を庇わなかった。弟自身すら弁明しなかった。おそらく、もしかして自分がうっかり無くしたかもしれないという思いが心の片隅にあったんだろう。普段の行いの悪さの報いとも言える。

弟はこのことについて話そうとしなかった。俺も話題にしようと思わなかった。ただ無言で飯を食う。弟も黙って飯を食う。周りのにぎやかさが、やけに耳について来る。と、その時、ふいに弟が口を開いた。

「ところで、聞いたか？」

「…何を？」

「近いうちに人員補給があるって話」

「ああ…」

その話かよ…と、俺はますます鬱になる。

「5人も入れるらしいよな。随分もうかってるんだな、この会社」

「みたいだな」

「でさ…」

と、弟は一息入れた。

「同時に人員削減もするらしい」

「みたいだな」

俺はあっさりうなずいた。

しかし、それ以上のコメントは控えておく。おもしろくない方向に話が進みそうだからだ。すると、弟が自嘲気味に笑い、それから、やけにサバサバとした口調で言った。

「まあ、俺は別にどっちでも良いんだけどね」

「そうかよ」

と、俺は手短に答える。本音を言えば、一刻も早くこの話を終わらせたかった。そんな俺の願いが通じたのだろうか？

「おつかれ」

と、明るい声がして、みーさんがやって来た。

俺は救い主を見つけたがごとく、みーさんを見る。すると彼女は、いつもの屈託のない笑顔で

「お久しぶり」

と言った。

「お久しぶりです」

頭を下げると、

「ご一緒していいかしら？」

と、ちよっとおどけた調子で言う。

「どうぞ、どうぞ」

そう言って、俺は自分の隣のスペースを開けた。みーさんは遠慮なくそこに座る。それが、左側だったので、彼女の頬の傷が真横に見える事になり、ドキッとする。『ふれあいの家』で田辺由紀恵に

聞いた、この傷のできたいきさつについての諸々の話を思い出したからだ。

一方のみーさんと言えば、俺のそんな心の内など知る由もなく無邪気に話しはじめた。

「そういえば、優ちゃん達のラインに、新人が入るらしいね」

それで、俺はがっかりする。なんだ、結局その話題かよ。

「みーさんも知ってるんですね」

「うん。もう会社中の人知ってるよ」

「そうですか」

「そうよ。でも、よかったね。これで、少しは仕事が楽になるんじゃないの？」

「まあ、そうですけどね」

「辞めさせられる奴もいるらしいけどね」

弟が陰気くさく言った。その言葉にみーさんが驚く。

「え？ そうなの？」

「そうなの？ って：そうなんだよ。小金井さんあたりに聞いてみるよ」

「そのコガちゃんから、新人を入れるって聞いたのよ。でも、辞めさせる話はしてなかったけどな」

「本当ですか？」

俺はみーさんの顔を見た。すると、みーさんは俺の目をまっすぐ見て答えた。

「本当よ。嘘ついてどうするのよ？」

どうやら、みーさんは本当の事を言っているようだ。弟もそれを確信したのか、心なし表情をゆるめた。もっとも、油断はできないが。単に小金井さんが話さなかったただけかもしれないし。

「あ、それよりさ」

みーさんが話題を変えた。

「お二人さん『ふれあいの家』に行ったらしいね」

「え？」

俺は驚いた。

「何で知ってるんです？」

「由紀恵に聞いたから」

あ、そうか。田辺由紀恵とみーさんは親友なんだから、俺らの話題が出ていてもなんら不思議な事はない。

「由紀恵、喜んでたよ。2人ともすごくよく手伝ってくれたって」

「いや：それほどでもないですよ」

「謙遜しなくてもいいよ。本当にみんな喜んでたよ。特に大地君が喜んで、『お兄ちゃんにまた会いたいって』言ってるそうだよ」

「大地？　：ああ、じゃあ、それ、俺じゃなくて、弟だ」

「そうなの？」

「：」（弟は無言だ）

「でさ」

みーさんは俺を見た。

「由紀恵に聞いたんだけど、二人とも文化祭に行くんだって？」

その言葉に、俺と弟は顔を見合わせた。そういえば、そんな約束をした気もする。けど、正直言って社交辞令のつもりだった。

「まあ、一応そのつもりですけど：」

俺はあいまいに答える。

「その時にならないと分からないですね：」

「そうなの？」

みーさんがきよんとする。

「まあ、よかったら来てよ。私も参加するからさ！」

それきり、その話は終わった。正直、それほど興味のある話でも無かったし、そんな事よりも、俺らの関心は新たに入る新人と、その時に行われるかもしれない人員削減についてだった。

62 (後書き)

展開に無理を感じたので、一部削除しました。ご了承ください。

「おーい！ 河井弟！」

宮崎さんの声がする。

宮崎さんは、弟の属するBグループの一員で、40過ぎのオヤジである。

「お前、また素材の選別間違えてるだろう」

「あ…ごめんなさい」

弟の無感情な声が聞こえた。

「ごめんなさい、じゃねーだろ？ 何度間違えればすむんだよ。お前、人の話聞いているのか？」

「……」

「返事は？」

「…聞いてますけど…」

「聞いているなら、何で同じミスばかりするんだよ？」

「…気をつけてるつもりなんですけど…」

「つもりじゃ困るんだよ。つもりじゃ」

「まあ、それくらいにしておけよ。宮崎」

原口さんが助け舟を出したようだ。

「だって、いいかげん、迷惑だろ？ グループ全員うんざりしてるよ」

宮崎さんが言い返す。すると、原口さんが言った。

「どうせ、あと少しだから、我慢しろよ」

その言葉に心臓がバクバクしてくる。

…あと少しって、どういう事だよ？ それじゃ、まるで、あの人員削減の噂が本当みたいじゃないか？

それにしても、前田君が居なくなつて以来、あれ程優しかった原口さんや、宮崎さんの態度ががらりと変わった。まるで前田君が乗り移ったかのごとく、毎日のように弟を怒鳴り散らしている。

「お前の弟も、気の毒だな…」

川岸さんが言った。

「いえ。弟が悪いんですから」

答えると、

「そのとおりだな」

と、意外な返事が返つて来た。

心なし、最近俺に対するみんなの態度まで冷たくなつて来たような気がする。もしかして、弟のふがいなさの責任を兄貴として問われているのかもしれない。しかし、それでも構わなかった。弟のクビがつながりさえすれば…。

数日後の朝。久しぶりに小金井さんが朝礼に現れ、そして1枚の紙を片手に話し始めた。

「えー、一部の人間には既に伝えているとおり、一週間後にグループ替えをします」

その言葉に、フロア中がざわめく。

「と、いうのも、皆さん聞いているとおり、来週から新人が5人入るからです」

再び、フロア内がざわめく。新人が入るのは聞いていたが、来週からとは初耳だ。随分早いじゃないか。

「それにともない、このフロア内でも人員整理をする事になりました。そのためのグループ替えです」

人員整理という言葉に、またもや俺の心臓がバクついた。俺は必死で自分に言い聞かす。…大丈夫だ。大丈夫だよ。みーさんが、人員削減なんか無いと言っていたじゃないか。もっとも、原口さんは、ありげな事を言っていたが…

と、その原口さんが口を開いた。

「グループ替えの事は知ってるが、どう移動させるかは決まったのか？」

「それは、今、考え中です。近いうちに新しいグループ編成をしたものをプリントアウトして、皆さんに配ります」

小金井さんはそう言うのと、他の社員に朝礼を引き継いだ。

3日後、小金井さんの言葉通り、新しいグループ編成の紙が配られた。

手を震わせながらそれを見る。

自分がどのグループかなんて事は、この際どうでも良かった。肝心なのは弟の事だ。奴の名が、ここに載っていればセーフ。載っていなければアウト。白いA4の紙に規則正しく印字された文字を目で追っていく。

Aグループ 6名

青木亮介

斉藤清隆

丸井角男

林直彦

吉田規夫

小島悟

：無い。

Bグループ 6名

井出文雄

大葉ケンタ

椎名平吉

森本元盛

藍植男

川岸豊

：無い。

Cグループ 6名

宮崎猛

小向井雄介

林田源蔵

河井優

渡辺秀樹

大和田尊

：俺の名前を見つける。しかし、弟の名は無い。

Dグループ 6名

服部新八

宮本たけし

藤田長道

門倉卓郎

内田寛之

松下由紀夫

：やはり無い。

次でいよいよ最後のEグループだ。

おそろおそろ、そこに並んだ名前を目で追っていく。

Eグループ 7名

原口良男

柿本太郎

白井隆司

和田真一

佐竹信雄

稲本誠二

：

：

……河井正

…おお！ あった。しかも、わざとらしくもドンケツに…！
まるで、いやいや付け足したみたいに。つか、なんでEグループだ
け7人なんだよ。

まあ、そんな事どうでもいいや。とにかく、弟の首が繋がったん
だから。うれしさのあまり、叫びだしそうな衝動を抑えながら、弟
の方を見る。さぞかしホッとしているだろうと思いきや、弟は意外
にも無表情だ。いや。無表情じゃない。あれは、呆然としているっ
て顔だ。そうだ。その表現の方がしっくり来る。しかし、なにに呆
然としてるんだ？ 7人グループのドンケツに書かれた事か？ な

にか含みでも有るように感じたんだろうか？ 確かにちょっと不自然な並び方だよな。もしかすると、本当のところ首になるはずだったのかもしれない。それをお情けで続けさせてくれるだけなのかもしれない。しかし、とりあえず、今は繋がったんだ。すぐに奴もその事に感謝するようになるさ。

その日の帰り道、俺は弟に「辞めさせられなくて良かったな」と言った。しかし、弟はブスツとしたまま何も答えない。

「どうしたんだよ？ 嬉しく無いのかよ？」

尋ねると、弟はボソリとつぶやいた。

「本当に良かったのかどうか？」

「は？ どうして？」

「別に……」

「別について……気になるじゃんか」

「いいよ。気のせいかもしれないから」

「気のせい？ 何それ？」

しかし、その後、弟は一切口を開かなかった。まあ、大方、首が繋がったところで、うまく勤められるかどうか自信が無いってところだろうと、俺は勝手に独り合点し、早々にこの会話を切り上げる事にした。

しかし、問題はそんなに単純ではなかった。

次の週の朝、妙にしるる弟を引きずって出勤し、フロアに一歩足を踏み入れた瞬間、弟の顔が明らかに硬直した。そして「やっぱり」とつぶやく。

「どうしたんだ？」

尋ねると、

「あいつだ」

と答えた。その目は、一点を凝視している。

「あいつって、誰だよ？」

俺は弟の見ている辺りに視線を送った。そこには、新入りと思われる5人が固まっている。

「新人に気になる奴でもいるのか？」

「稲本だよ」

「稲本？ 誰だっけ？」

「稲本：いや違う。因幡だ」

「因幡あ？」

誰だっけ？ どこかで聞いた覚えがあるが…。

しばらく考え込み、やがて俺は「あっ」と思い出した。

続、続 青春☆ひきこもらー（前回までのあらすじ）

できのいい兄貴を持った山田亜矢松…もとい、河井正は、いじめられていた親友をかばってしまった罪で、自分がいじめられるという罰を受けることになった。さらに、好きだった女子に「きもい」と言われたショックで、自らに自室監禁の刑を課したのある。そして、8年の時が過ぎ、やっと自分の罪を赦し、社会復帰する決心をしたのであった。

兄とともに工場で働き出す正。しかし、長年の監禁生活ですっかり精神を参らせ、全ての事を僻目にしか見られなくなった奴にとって、1日、1日は、過酷な贖罪の日々のごときものであった。それでも、前へ進もうとする正の前に、神はさらなる試練を与えたのである。

「まったくありえないよな」

暗闇の中で、俺はつぶやいた。

「でも、それ本当なのかよ？」

「本当だよ」

弟がほの白く浮かび上がるディスプレイの前でうなずく。

「こんな嘘、ついてどうなるんだ？ つきたいとも思わない」

「嘘とはいわないけど、見間違いつてこともある」

「確かに、雰囲気は変わってたけど、俺があいつを見間違ってもんか。それ以前に同姓同名だし、間違う方が難しいだろ」

「そっか。そうだよな」

「きつとさ」

弟は画面にのめり込むようにしてつぶやいた。

「前田をあんな目に合わせた罰だよ」

「罰ねえ…」

俺は首をかしげた。

「因果応報って奴か？」

「そうさ。応報の報さ」

投げやりにそう言うと、弟は乱暴にマウスをクリックした。一瞬画面が閉じ、次にリリカ（森崎）のサイトが映し出される。まだ、付き合いがあったのかと一瞬どきりとする。しかし、そんな俺の気持ちを知ろうはずも無く、弟は言った。

「とにかく、これは作り話でもなんでも無い、現実なんだ。だから…少し一人で考えたいから、悪いけど出ていってくれないか？」

「分かったよ」

俺はうなずき、弟の部屋の扉を閉じ、そして、自室に戻ると、机

の奥底にしまい込んでいたA4の紙を取り出した。それは、弟が自サイトに掲載していた、自伝的三文小説をプリントアウトしたものである。

主要人物は友人に裏切られ、クラス中からいじめられるはめになった山田亜矢松（＝弟）と裏切り者の稲葉君（もちろん仮名だ）と、そして弟を自宅監禁の刑に追い込んだ麗しのヒロインと、その他クラスの愉快な仲間達。

タイトルは『青春☆ひきこもらー』。お世辞にもセンスの有るネーミングとはいえないが、とりあえず、久方ぶりにざっと目を通す。文章的に難は有るが、胸に迫る内容である。きつと、これが、まるきりの作り話じゃ無いからだろう。

：けど、まさか、彼にリアルで出会う事になるとはね。

用紙を片手に天井を見上げ、ため息をつく。そして、昼間会ったばかりの小柄な青年の顔を思い浮かべる。青年というより、まだ学生みtainな雰囲気だった。その面影に向かい、俺は呼び掛ける。

：ありえない邂逅だな。因幡君、因幡の白ウサギよ。

物語は、まだ、終わらない。

その男の名は、稲本誠二といった。

想像にたがわず、ひよろつとして背の低い、想像と違ったのは、髪を染め、ピアスを開けた今風の奴だったということだ。そう。それが、稲本君。弟の小説内では因幡と呼ばれる、弟の元親友にして裏切り者の青年だ。

あろうことか、その彼が、この度の我が社の大量雇用の中の一人

に入っており、しかも、あろうことか、その彼が、弟と同じグループに配属されたのだ。これをひねくれ者の神の采配といわずして、なんと言おう？ 弟が悩むのもむべなるかなといったところである。

とはいえ、入社したばかりの稲本君は、緊張があつたのかとりあえずおとなしいように思えた。おとなしいというか、ムシロ愛想が良く、俺も何度か話かけられ、その時は普通に受け答えておいた。ただ、愛想はいいのだが、やたらと落ち着きがなく、まるで何かを警戒しているかのように、やたらと辺りをきよろきよろするのが気になったが、それ以外はいたって普通の奴だった。

弟に対しても、ごく普通に話しかけて来るそうだ。その意図が分からないと、弟は不快感をあらわにする。あれだけの事をしておいで、何もなかったように話してこれる神経が理解できないと。そこで、弟は『もちろん』完全無視した。「しかし、それは、ちよつと大人げないんじゃないか？」と注意したところ、「兄貴に俺の気持ち分かるかよ」と、一蹴された。

「いや、気持ちは分からないでもないどさ…」

と、俺は、説教モードに入る。

「『ここ』は、一応仕事場だし、個人的な感情をロコツに出し過ぎるのはどうかと思うぞ」

「そうかもしれないけど…」

弟は苦々しい顔をする。

「そう簡単に割り切れないから悩んでいるんだよ」

「うーん」

俺は、言葉を探した。で、「思うけどさ」と言う。

「なんだよ？」

弟がじろりとこちらを見た。

「向こうは、本当に何も覚えてないかもよ。ほら、いじめた奴って、案外自分がやってた事の自覚ないっていうじゃないか。…ていうか、お前がお前だって事にすら気付いてないのかも。ほら、お前、高校

の時に比べると、痩せて、雰囲気が変わってるし。それに、卒業して何年もたつと、名前も思い出せない奴も出てくるし」

「そんなわけないだろう！」

弟が吐き捨てるように言った。

「俺と、あいつは、一応親友だったんだ。忘れるわけないだろう」

「どうかなあ？ 向こうはそれ程深い付き合いのつもりじゃなかったとか…」

「そんなわけあるか。それに、あいつ、はじめに俺の顔を見た時、あきらかにぎょっとしてた」

「うーん…気のせいじゃないのか？」

「違うよ」

「何で断言できるんだよ？ 思い込みじゃないのか？」

「気のせいも、思い込みでもない。あいつは絶対に覚えてる」

弟が声を荒げた。その声の大きさに驚いたのか、皆がこちらを見る。その中に稲本の視線も含まれていた。

「おい、大声出すなよ。ここは、社員食堂だぞ」

たしなめると、

「…分かってるよ」

と言って、弟は決まり悪そうに顔をそむけた。背後の稲本の視線を感じていたのかどうかは分からない。

さて、憎む方と、憎まれる方では、どちらの苦しみがより大きいものなのだろうか？ そんな青くさい疑問を抱きながら、俺らは淡々と日々を積み重ねていく。感心なのは、こんなことがありながらも、弟が決して会社を休まなかった事だ。しかし情けないのは、そこだけは毅然としてながらも、他の部分では……つまり仕事に関しては……さっぱりできない事だった。あいかわらず素材の選別を間違えるし、ノルマもまったくこなせてない。原口さんにどならればなしのいいとこなしである。

しかし、仕事以上に問題になったのは、弟の稲本に対する態度であった。弟は、心情的にどうしても稲本と仲良くする事ができず、仕事の事で質問されてもろくに返事を与えられないのである。その態度が、傍目には新人いじめと映ったらしい。ある日とうとうキレた原口さんに言われた。

「お前さ。少しばかり長いからって先輩風吹かすなよ。とっくに稲本のが使えるようになってるんだからな」

確かに新人が入社して2週間め。すでに弟は色んな意味で彼らに追いこされていた。（というか、そもそもこんな単調作業をいつまでもこなせない弟の方がおかしいのだ）が、しかし仕事の事はさておき、稲本の事に関しては、事情を知っているだけに俺も悔しくなる。それで、つい、立ち上がって口出ししてしまった。

「原口さん、それは言い過ぎじゃないですか？」

「ああ？」

原口さんは日頃平和主義な俺からの、思いも寄らぬ反撃に驚いたようだ。

「どこが言い過ぎだよ？ どこからどう見たって、こいつのやっている事はおかしいだろう？」

「……確かに、そうですけど……」

「じゃあ、黙ってるよ」

「でも、弟には、弟の事情が……」

と、そこまで言った時、それまで言われっぱなしだった弟が口を開いた。

「アニキ、よせよ」

「でも……」

「いいんだよ。悪いのは俺なんだから」

「そんな事ないだろう？」

「いいから、余計な口を挟むなよ」

「……分かったよ」

俺は、手にしていたドライバーを作業台に投げ付けると、どかっ
と腰を降ろした。隣から宮崎さんが心配げに声をかけてくる。

「おい、大丈夫か？ 何があった？」

「別に、何もありませんよ」

仏頂面で答えるが、内心はらわたが煮えくり返っている。弟はど
うしているかとEグループの方を見ると、弟はまだ原口さんに説教
されており、そして、2人の向こう側から稲本がこちらを見ていた。
……なんだよ。その挑戦的な目は……。と、胸くそ悪く感じつつド
ライバーを手にとり再び作業に戻る。

その帰り道、俺は弟に言った。

「みんなに、事情を話したらどうだ？」

「事情って、何の事情？」

「稲本と学生時代にあった一件さ」

「やだね」

「なんで？ ああ見えて原口さんは話の分かる人だよ。事情を話せば
班変えなりなんなりしてくれるかも」

「……どうやって話せていうんだよ？ 『ボクを虐めてた稲本君
が嫌いなので班を変えて下さい』ってか？ やだね。みっともない」

「見栄はってる場合かよ。このままじゃ一方的に悪者扱いされるだけだぞ」

「それなら、それでいいよ。最悪辞めればいいし」

「辞めればいいって……」

「だって、元々、そこまでしてしがみつきたい程の仕事でも職場でもないもん」

「そんないいかげんな考え方あるかよ」

「いい加減でも、実際そう思うから我慢できてるんだよな、これが……ああ、なるほど。いわゆるふところ刀みたいなの？……と、納得している場合じゃない。心を鬼にして説教アニキモードになる。」

「そんな風に投げやりで、この先どうするんだよ。この先だって色んなトラブルはあるぞ。そのたびに逃げてたら、とても生きていけないぞ。トラブルが起きたらちゃんと対処する事も覚えないと」

すると、弟はますます投げやりになった。

「生きるって面倒臭いな……」

と、その時だ。

「すいません」

ふいに背後から呼びかけられ俺らは同時に振り返った。そこには、なんと噂の張本人稲本が立っている。……何の用だよ？ と訝しげに見下ろすと、稲本が言った。

「あの、少しお話しがたいんですけど……いいですか？」

「おい、どうする」

俺は、弟の脇腹をつつ突いた。しかし、弟はそっぽを向いている。

「あの……そんなに長くかからないので、聞いて欲しいんですけど……大事な話だし」

「だってさ。どうする？」

再び弟に聞くと、弟はぶっきらぼうに「いいよ」とうなずいた。こうして俺らは、近場にあった喫茶店に入った。

席につくと、稲本はさっそく口を開いた。

「あの……河井さんて、ご兄弟なんですよね」

「そうだよ」

俺は答える。すると、稲本は大げさにうなずいて言った。

「やっぱり。そっくりだし」

なんだか、セールスみたいな話かただ。

「で、えーと、優さんの方がお兄さんですか？」

「ああ。見てのとおり」

そっけなく答える。言外に『そんな事聞きたいんじゃないだろ？』と匂わせながら。と、稲本はしばらくひどく考え込むようなそぶりをしてこう言った。

「それで、……あのお、もしかして、弟さんは正君ですか？」

「その通りだよ。稲本君もよく知ってる河井正だよ」

弟にかわって答えると、稲本は再び大袈裟に驚いてみせた。

「ああ、やっぱりそうなんだ。何か似てるなあとは思ったけど、まさか本人とは思いませんでした」

「じゃあ、今までは、弟だとは気付いてなかったって言いたいわけ？」

「はい。全然。でも、心配はしてたんですよ。高2の時から引きこもっちゃったって聞いてたし。でも、あんなところで会うなんて奇遇ですよねえ」

その言葉で、ついに弟の堪忍袋の緒が切れたらしい。

「ふざけるなよ！」

と、いきなり机を叩いて立ち上がった。そして稲本の胸ぐらをつかんで言った。

「何が『気付かなかった』だよ。一目で気付いたくせに。俺を忘れるわけが無いよな」

その剣幕に俺は驚いた。こんなキレ方は、あの飲み屋以来だ。

「ちょっと、放してくださいよ。放してください！ ……放せつてば！」

稲本が苦しげにわめいた。しかし、弟は手を放さない。

「俺を忘れるわけないよな。お前がいじめられてるときに、かばってやった河井正だよ。にもかかわらず、お前が裏切った河井正だよ」

その言葉に、あきらかに稲本の顔に動揺が走った。が、すぐに素に戻ると、

「なんですか？ それ。ボク知りませんよ。ただの被害妄想じゃないですか？」

大声で叫ぶ。

「被害妄想だと？ ふざけるなよ」

弟はそういうと、稲本の体を思いきりソファに叩き付けた。その時点で既に俺らは店中の注目の的になっていて、騒ぎを聞き付けた店員が駆け寄って来た。

「お客さん、どうしました？」

「あ、なんでもありません」

俺は必死でごまかし、そして、弟の背中を叩いて、

「落ち着けよ。まずは、彼の話を聞こう」
となだめた。

それからしばらく、弟と稲本の睨みあいが続いた。2人の間に目に見えない火花が散っているように思える。

しばらくして、2人が落ち着いたところを見計らい、俺は穏やかに稲本に話かけた。

「稲本君。弟の乱暴はよくないと思うけど、君の言い方も良くないと思うよ」

「え？」

稲本がきよんとする。

「僕の言い方の、どの辺がおかしいんですか？」

「君には悪いけど、君と弟の高校時代の一件は聞いてるんだ。……それで、俺なりに思った事だけど、弟が真剣に君をかばった気持ちに嘘偽りはないし、君をかばった事が原因で8年も引きこもった事は事実なんだ。それを被害妄想のひとことで片付けるのは、あまりにも思いやりがないし、事の重大さを理解していないと思う」

すると、稲本はふて腐れたように言った。

「それじゃあ、まるで全部俺のせいみたいじゃないですか」

「はあ？」

今度は俺がきよんとする番だ。『みたい』じゃなくて、『お前が悪い』んだろ。しかし、上辺は平静を保ち、穏やかに言う。

「あのさ。どうしてそういう発想になるのか理解できないけど、『誰のせい』とかそういう事を言ってるんじゃないの。自分のやった事の重大さは、きちんと知って受け止めるべきだと言ってるんだよ」

「『べき』とか、そういう言い方は間違ってるますよ、お兄さん」
稲本が笑いながら言う。その作り笑いにカチンと来る。

「あのね、そういう言葉上の枝葉末節はどうでもいいの。君には自分のやった事の自覚がないのかな？ こっちだって、今さら君のや

った事を断罪する気ないよ。だから、弟も、再スタート切って頑張ろうとしてるわけだろ？ 8年ものブランクのお陰で、こいつがどれだけ苦勞してると思ってるんだ？ それでも頑張ってるんだよ。これが、他人に責任転化する奴にできる事だと思うか？……」

「つていうか、俺が言いたいのは……」

稲本は俺の言葉を遮った。

「逆恨みで、おかしい態度とらないで欲しいって事です」

あくまでも自分には非がないと言いたいようだ。

「もう、いいわ」

弟が投げやりに言った。

「確かに俺の態度も悪いし、改めるわ」

「分かってくれればいいんです」

稲本が、再び笑顔を見せた。

「それじゃ、過去の事は水に流して、仲良くやりましょうよ」

しらじらしいセリフだ。

「つていうかさ」

弟が言った。

「お前って、そんな奴だったんだ。高校の頃、苛めっ子を見下して偉そうにぐだぐだ言ってた事は全部嘘だったんだな」

おお、ナイス切り替えし。思わず心の中で喝采を送る。が、稲本は顔色一つ変えずにこう言った。

「ま、人は変わるもんですからね」

「変わったんじゃないかって、それが本性だったんだよ。残念だったね」

「じゃあ、河井君が使えない奴なのも、誰の『せい』でもなく本性だって事だね……」

こいつは、よっぽど『せい』というフレーズが好きらしい。弟は黙ってしまう。その反応に満足したのか、

「……じゃ、僕はこれで」

そう言うと、稲本は小銭を置いて立ち上がりさっさと一人で店を出て行った。

「なんだ？ あいつ」

俺は出ていく稲本の後ろ姿を目で追いながら吐き捨てるように言った。

「ムカツク奴だな」

しかし、弟はウンともスンとも言わず、陰気な顔でコーヒーをすすっている。その肩が震えているように見えた。シヨックを受けているようだ。しかし、俺は弟の気持ちを斟酌する余裕もないほどに、自分の怒りにとらわれていた。

「何が『俺のせいみたい』だよ。人に怪我をさせりゃ、責任の一つも感じるのが人間でもんだろ。それを、ウダウダと理屈にもならない理屈でごまかそうってのか？」

「もういいよ」

弟がぼつりと言う。

「お前がよくても、俺の気が済まないよ。俺は、ああいう、言葉覚えたてのガキみたいなのが大好きなんだよ。どうせ、何かの受け売りを喋ってるだけで、自分の言ってる言葉の意味もまともに分かってないぞ、あれは」

「つーか、もう、どうでも良いよ。それより、帰ろう。疲れた……」
そう言うと、弟は芯から疲れたように顔を伏せた。

それから数日は、いつもと変わらない日が過ぎて行った。

ところが、ある日を境に、周囲の人間の俺ら兄弟に対する態度がいきなり変わり始めた。

まず、挨拶をしてもまともに返事がない。そして、声をかけても無視をされる事が増えて来た。

が、しかし、俺自身はあまり気にならなかった。元々他人に多くを求めない性分なのもあるが、何があったか知らないが、俺には後ろ暗い所はない事だし、誤解が解ければ元に戻るだろうとタカを括っていた。しかし、弟はこの状況が気になって仕方がないらしい。日に日に生気を失っていく。それでも、歯を食いしばって仕事は続

けていた。

そんなある日の事だった。便所で手を洗っていると、同じグルー
プの新人で渡辺という男に声をかけられた。

「ああ、河井さん。お疲れ様です」

「あ、おつかれさま」

適当に返事しておく。

「今日は、忙しいですねえ」

「ああ、まあな。でも本当に忙しい時は、こんなもんじゃないよ」
「そうですか」

と、渡辺は笑顔を浮かべる。どういう風の吹き回しか、そろそろ
皆さんのご機嫌も直ったのかと思っていると、渡辺は探るように「
ところで」と言った。

「河井さんの弟さんって、引きこもりだったって本当ですか？」

「はあ？」

俺はびっくりして、このぬぼーとした男を見た。

あまりにも唐突な質問だった。まずは『何で知ってるんだよ?』
と、思った。なぜなら、弟が引きこもっていた事は、小金井さん以
外の誰にも話した事がないからだ。別にその過去を恥じてるわけじ
ゃない。ただ、その事を言うも言わぬも弟が決める事である。奴が、
その過去と折り合いがつけられるようになり、人に対する信頼を取
り戻す事ができれば、自然と打ち明ける事もあるだろう。少なくと
も、当事者でない俺がぶちまける事じゃない。小金井さんもそれを
察してか他人に話すような事はしなかった。現に今まで誰も知らな
かった。少なくとも、こんな風にぶしつけな聞き方をする人間は居
なかった。そうだよ。無礼なんだよ、こいつは。というか、無礼以
上に悪意を感じる。

それで、俺は渡辺の目をまっすぐに見て尋ねた。

「今、ここで、そんな質問をする意図がわからないんだけど?」

すると、渡辺は妙に機嫌を取るような態度で、

「あ、ごめんなさい。不愉快になりました?」

と、言う。

「別に不愉快じゃないよ。(実はムカムカきていたが)けど、いや
に含みのある言い方だよね?」

「含みなんかありませんってば。被害妄想ですよ」

「へへ。被害妄想なんて難しい言葉知ってるんだ。偉いね。でも、
その言葉の意味分かってるの?」

「は? 分かってますよ。何ですか? その上から目線は?」

「へ? この程度で上から目線で感じるんだ。君はよっぽど低い世
界で生きてるんだね!」

「……」

「……」

俺はすっかりマジ切れしている。向こうは余裕を見せようと笑顔を浮かべてはいるが、眉の辺りがひくついている。そのまま、睨み合っているところに宮崎さんが入って来た。

「おい、お前ら、何さぼってるんだよ。さっさと戻れよ」

その言葉に救われたように、俺らは元の作業場に戻った。

それ以後はムカムカしてまともに仕事にならなかった。ようやく頭が冷えてくると、誰がこの噂の主かが見えて来る。稲本だ。それ以外にない。あいつ、この間の喫茶店でのやり取りを根に持って、こんな噂を流したに違いない。それで、ここしばらく周りが冷たかった理由が分かった。稲本が、俺らの事を悪し様に言いふらしたにちがいない。あいつにとっても、あのやり取りは余程のダメージだったんだろう。

しかし、さて、どうする？　ドライバ片手に考える。

奴を問いつめるのは良いが、ケンカをするのは得策じゃない。何か誤解があるなら、解いた方がいい。そうだ。もう一度奴をつかまえて話し合う事にしよう。

そこまで考えた時だった。

ガシャーンという音が後方から聞こえて来た。方角的には弟のいるEグループの方向である。

嫌な予感がしてふり向くと、案の定また弟だった。弟が崩れた素材BOXのまん中で呆然と立っている。どうやら、棚に積み上げられていたBOXを落としてしまったらしい。

また、何かやらかしたのかとうんざりしながら見ていると、原口さんが飛び出し「おい、何をしてるんだ？」と叫ぶ。

すると、弟が情けない顔で答えた。

「……棚が壊れちゃって……」

「棚が？」

「はい。今日、僕、棚を運ぶ係になっていたから、この棚を動かそうとしたら2段目の板が外れて……」

「……なんで、こんなところが外れるんだよ」

「ネジが、とれてたみたいです」

「なんだ。元々壊れていたのかよ。分かった。とりあえず、この辺、片付けてくれ」

「……はい」

弟はうなずくと、しゃがみ込み、俺の視界の中から消えた。しかし、あれを片付けるにはさぞかし時間がかかるだろう」

誰かが聞こえよがしに言う。

「今日も、残業決定か。叶わないな」
すると、他の奴が答えた。

「大丈夫だろう。戦力外の奴が使えないだけだから」
何を言われても、弟は黙って黙々とその場を片付けていた。

「おい。大丈夫かよ」

帰り道、俺は弟に言った。既に外は真っ暗だ。

「……大丈夫だよ」

と、弟の返事。

「しかし、ついてないな。棚が壊れるなんて。怪我が無かったのが、不幸中の幸いかな」

「……ああ」

それきり弟は黙ってしまふ。そして、そのまましばらく歩き続けた。

「おい、本当に大丈夫か？」

尋ねるが、返事が無い。それで、そのまま無言で歩き続ける。

しばらく行くと、ようやく弟が口を開いた。

「……仕方ないよな。これも前田をあんな目に合わせた報いだ」

「あんまり、そこにこだわるなよ。関係ないよ」

「関係あるさ。大ありだよだってさ……」

「『だって』、なんだよ？」

「……いや、言おうかどうか迷ったんだけど」

「……？」

「実は、あの時、稲本が俺の足を引っかけたんだ」

「は？」

「あいつが足をひっかけた勢いで、棚にぶつかって……それであんな事になったんだ」

「……おい。それ、どういう事だよ？　アイツがわざとお前が失敗するように仕向けたってことか？」

「……やっぱり、言わない方がよかったな」

「いや。……ていうか、そんな大事な事を、なんでその場でみんなに言わなかったんだ？」

「だって、証拠がないし。それに、俺の言う事なんて誰も信じないだろう？」

「誰も信じないなんて……なんで、そんな風に思うんだよ？」

「だって、俺、足手まといだし……」

「気持ちで負けてどうするよ。仕事ができない自覚が有るなら、仕事で見返してやれよ」

「もういいよ」

弟は言った。そして、天に向かって吠たえる。

「あーあ。なんでこんなに一生懸命にやってるのに、邪魔ばかり入るかな？　神は俺を働かせたくないのか？」

茶化すように言っているが、その顔は笑っていない。最後にぽつりと

「もう、辞めようかな……」

とつぶやいた。

しかし、それでも弟は出勤し続けた。かなりの無理をしているのか、見る見るうちにげっすりしてくる。そういえば、このところ、食欲がないのか、ロクに物も食っていないようだ。

「大丈夫か？」と尋ねても「大丈夫だ」としか答えない。しかしどう見たって大丈夫には思えない。

もちろん俺的にはこのまま何としてでも弟には仕事を続けて欲しかった。アニキとして、弟の将来を心配しているというのもあるが、それ以上に奴の社会復帰に自分の東京行きがかかっているからだ。しかしここまで弱ってふらふらになった弟をさらにむち打てる程、鬼でもなければ、蛇にもなれない。それで、ある日ついに口にしてしまった。

「おい、無理するなよ。どうしても無理そうなら、辞めたっていいんだぞ？」と。

しかし、弟は実に心外そうな顔をして言った。

「何でそんな事進めるんだ？」

「何でって、それは……」

「アニキ言ったじゃないか？ 向こうから引導を渡されるまでは絶対にやめるなって。自分からは投げ出すなって」

「そりゃ、言っただけど……」

「じゃあ、放っておいてくれ」

「けど、病気になったらどうするんだよ？」

「大丈夫だよ。倒れる前にクビになるから」

「何言ってるんだよ。真面目に考えろよ」

「俺はものすごく真面目だよ。とにかく、頑張らせてくれよ」
そこまできっぱりと言われちゃ、もう何も言えない。

しかし、弟の努力にも関わらず、職場の雰囲気はあいかわらず冷

たかった。

誰にもまともに相手にされず、独り黙々と働く弟のひよろつこい背中を見て思う。

はたして、このままここで働き続ける事が、本当に奴にとっていい事なんだろうか？ この努力が報われる事があるのだろうか？ それ以前に奴の繊細な神経が参ってしまい、また、元のあの穴蔵生活に戻ってしまうんじゃないか……いた、もっと最悪な事に心をやられてしまうのでは？ もし、そんな事になったら……とたまらない気持ちになる。

俺は久方ぶりに兄貴の使命感に燃えた。

アイツの仕事のダメさ加減はどうする事もできないとして、この職場内の異常な雰囲気の悪さだけでも何とかしないと……。

それで、昼時、俺らは川岸さんをつかまえて俺らについて何かウサがたっていないかを聞いてみた。職場内で一番気を許せる相手だからだ。

しかし、川岸さんは何も聞いていないと言う。

まあ、そんな質問されて本当の事をべらべら喋る奴もめったにいないだろうが。やはり、稲本本人に聞くのがいいか？ 正直言って気が進まないが……。

そう思いつつ食堂に行くと、弟が一人で握り飯を食っていた。

「それだけかよ？」

近付くと、

「ああ。兄貴か」

と、弟が力無く笑う。

前方では、稲本を中心に数名の輪ができている。それを見ながら、さて、どうアイツと話をつけようかと考えていると、視線に気付いてか、稲本がこちらをちらりと見る。しかし、互いにすぐに視線を外し、俺は弟に言った。

「それっぽっちじゃ、体力もたないぞ」

「仕方ないだろう？ 食えないんだから」

と答える弟は、握り飯一つを食い終わるのも難儀そうだ。本当に倒れるんじゃないか？ こいつ？ と思っていると、例の稲本を含めた一団が大声でこんな話をし始めた。

「俺の知り合いの息子に引きこもっている奴がいてさ」

その言葉に弟がびくつと反応する。

声の主は無神経に語り続ける。

「親は困ってるらしい。これからどうすればいいのかってすると、別の声が答えた。

「そりゃ、大変だな。原因はいじめか何かか？」

「よく知らないが、いじめもあったらしい。一日中部屋に閉じこもって、何をしてるかも分からないんだと。もう3年もそうしているらしい」

「しかし、そんなのは、無理に部屋から引きずり出してでも働かせればいいんじゃないか？」

「ああいうのは、無理に働かせてもダメらしいぞ。どこにいても勤まらないんだと。間に合わないらしい」

俺は、気遣うように弟を見た。弟は黙ってうつむいていた。……頭に来る。いくら何でも、あんな話を、あんな大声でする事はないだろう。と、また、別な声が聞こえて来た。

「しかし、今の若いのは大変だな。いじめでへたをすれば、人生を台なしにされるみたいじゃないか？ 俺らの頃もいじめはあったけど、これ以上越えちゃいけないというラインは守ったぞ。相手が死ぬまでとことん追い詰めたりしなかっただろう」

年寄りのおっさんの声だ。まあまあマトモな意見である。と、おっさんをさえぎり、聞き馴れた声が、こんな言葉を吐いた。

「……けど、あんなのは、いじめられる方も悪いんですよ。嫌ですね。そういうのが恨みをため込んで、世の中のせいにして、凶悪犯になったりするの。被害妄想するなって思いますね」

その言葉に、俺は思わず顔を上げた。そして、こちらを見ている稲本と、もろに目が合う。しかし、先ほどと同じく、いや、先ほどよりは遥かに卑屈なそぶりで視線を逸らす。それで分かった。今はあきらかにわざとだ。俺らに聞かせようとしてわざと大声で話したんだ。それに気付いたとたん、先ほどまでであった和解の気持ちが見るみるうちに消えていくのが分かった。そして、いけないと思うつつ俺は立ち上がっていた。

「言いたい事があるなら、はっきり言えよ！」

俺の剣幕に、食堂内の全員が、キョトンとしてこちらを見る。稲本だけが俺を見ない。

「おい。こっちを見ろよ」

しかし、稲本は頑としてこちらを見ようとはしなかった。

「お前だよ、稲本。何でこっち見ないんだ？　俺らを見られない理由でもあるのかよ？」

名指ししてやると、

「おい、どうした？　河井？」

原口さんが向こうの方から声を上げた。俺はその声を無視して稲本に言う。

「言いたい事があるなら、はっきり弟に言えよ。卑怯だろう？　コソコソつるんで」

その時、稲本がやっとこちらを見た。顔がひどく青ざめている。怯えているらしく、何も答えられないようだ。……なんだ、こいつ、口ほどにもないヘタレかよ？　……一瞬侮った俺の隙をつくかのごとく、渡辺が口を出す。

「落ち着いてくださいよ、河井さん。何をキレているんですか？」

「……しらばっくれる気か？」

「しらばっくれるも何も、話が全然見えません」

そのあまりのしらじらしさに、めまいを覚える程の怒りを感じる。『よく言うよな、お前ら。弟がひきこもっていたのを知っていて、わざと聞こえるように今の話をしたんだろう？』

と、言いたいのが、口に出せない。衆人環視の中でそんな事を言えば、ますます弟を傷つける事は分かっているからだ。沈黙した俺に向かって渡辺が冷笑を浴びせた。

「思うんですけど、河井さんてちょっと過保護なんじゃないですか？ そんなんだから、弟さん、いつまでたってもダメなんですよ」

ガタリ：

背後で音がした。

振り返ると、弟が立ち上がっていた。何か発言するのかと思いきや、黙って食堂から出て行こうとする。俺は慌てて弟を追いかけた。そして、腕をつかみ、

「……どこに行くんだよ？」

たずねると、弟はその場にへなへなとうずくまり、わなわなと肩を震わせた。

「おい。大丈夫か？」

顔を覗くと、弟は震えながら言った。

「大丈夫だよ。それより、兄ちゃん、ごめんな……」

『悪夢の話』

作／土中喪黒う

夕べ、夢を見た。

昔良く見た夢の続きで、僕はトンネルの中に立っておびえていた。あたりは薄蒼い闇に閉ざされている。

それは、ぬるっとした闇で、ひどく重たい。

僕は思った。

『おかしいな？　なんで、僕は、またここにいるんだろう？　こんな所にいるわけないのに』

それから、ぬるぬるした闇をかき分けていくと、いつしかいつも働いている工場の中にいた。

それで、僕は少し安心して、目の前のテレビを壊そうと必死に頑張る。ところが全然壊れない。

ノミや鎚で叩いても、ノコギリでひいてもびくともしない。

何で壊れないかと必死になっていると、いきなりテレビがついて午後のニュースが始まった。

ニュースの中でアナウンサーは言った。

「それだから、お前はダメなんだよ」

僕はびっくりした。

「僕がダメなのは分かっているけど、テレビで放送するのはやめてくれ」

すると、アナウンサーは答えた。

「いや、これは、今日一番のスcoopだから無理だ。ついでにお前の兄貴の事もスcoopしてやった」

それを聞いて僕は不安になった。

兄貴が一体、何をしたんだろう？

強盗か？

放火か？

もしかし

て麻薬でもやっていたとか。

僕は哀願した。

「僕の事は何を言ってもいいけど、兄貴の犯した罪については内緒にしてくれ」

すると、アナウンサーは言った。

「じゃあ、さっさとテレビを壊せよ。天井まで届いたらアウトだぞ」
そう言って、アナウンサーは消えた。

見ると、天井からテレビがどんどん落ちてくる。落ちてくるテレビと、下のテレビのくぼんだところをうまく組み合わせれば、テレビは解体して壊れる仕組みになっているらしい。

『まるで、テトリスみたいだな』

と思っていると、大黒様みたいな男が現れてゲラゲラ笑いながら言った。

「そうだよ。テトリスだよ」

それで、僕もおかしくもないのにゲラゲラ笑って、

「なんでテトリスだよ、なんでテトリスだよ」

と、芸人みたいな突っ込みを入れた。

そう言っている間にも、オレンジやピンクのやたら派手なテレビがどんどん落ちてくる。

それで、僕は手元のコントローラーのボタンを押した。

しかし、まったくテレビは消えてくれない。

おかしいな、僕は、テトリスなら得意なはずなのに。

理由はすぐに分かった。くぼみが合わさってもテレビは消えてくれないんだ。

「こんなの、インチキじゃないか！」

振り返った僕に、大黒男が言う。

「インチキじゃないさ。お前がへたくそなだけだ」

言われると、そんな気がして来て

僕は必死でボタンを押す。

すると、大黒男がハイテンションで歌い出した。

「ありがとうございます、ありがとうございます

今日もご贔屓ありがとうございます 商売繁盛ありがとうございます

ホンマおおきにありがとうございます」

それは、妙に陽気な節回しだし、歌の意味も分からなかったが僕は必死でボタンを押し続けた。

すると、窓の外からも歌声が聞こえて来た。妙に陽気で騒がしくて大人数で歌っているのが分かる。

『百鬼夜行だな』

と、僕は思った。

窓の外は見なかったが、窓の外を、赤鬼や、青鬼や、ろくろ首や、から傘や、七福神のお化けみたいな妖怪達が、行列つくって踊り狂ってる様が見えるような気がしたからだ。

その歌と、笑い声が最高潮に達したところで、僕は目を開けた。

そこは、自分の部屋で、僕は布団の中にいた。

まだ夜中で、あたりは夜のとばりに包まれていた。

『なんだ、夢か』

とホッとしていると、あちこちから、ぴしっとかぱしっとかいう木の割れるような音が聞こえて来た。

『ヤバイ!』

僕は思った。それがラップ音である事に気付いたからだ。しかし、気付いたのが悪かった。その瞬間にぞくっとして、息が止まり、金縛りになっていたからだ。同時に世界の色が変わった。深い深海の闇の色が、鮮やかな藍色になった。別世界に來たんだと僕は直感した。その時、僕の目の前に真っ白い人影が出現した。顔のない、形だけの白い影だ。そいつが、僕にのしかかり首を締めた。恐ろしく

なって声をあげると、影は消え、息が通り、体も動くようになった。あまりの恐ろしさに、しばらく布団の中でじっとしていると、

「恐いなら、穴をほるといい」
声がする。

おそろおそろ、布団から顔を出すと、そこに先ほどの大黒がいて、にやにやと笑っていた。

大黒は僕にスコップを差出した。

「これで、ほるといい」

「いらないよ」

僕は首を振った。

「僕は、もぐらはやめたんだ」

「うそつけよ」

大黒が笑う。

「痛がりのくせに」

「もう痛がりじゃないさ」

僕はもう一度首を振った。

「今は体中針に刺されても痛くないよ。それより、穴の中の方が、空気が薄くて好きじゃない」

「けど、お前が地上に居ると、お前の兄貴の悪事が世界中に知れ渡るぜ。兄貴だけじゃない。お前の両親の悪事も知れ渡るんだ。お前の家族全員が世界中から責められるぞ」

その言われると、僕は辛くなってくる。

「どうしよう？ また穴をほった方が家族や世界のためなのかな？

けど、穴の中は嫌だな。暗いし、せまいし、退屈だし」

その時だ、窓の外から、またあの陽気な歌声が聞こえて来た。

僕は布団から出ると、窓を開けて下を見た。

すると、思った通り、鬼や、妖怪達が陽気に踊り狂っていた。その行列の後には稲本もいて、さらにその後ろには、昔のクラスメート達がいいた。

奴らもげらげら笑っている。

消えろ！　消えろ！　へボいは消えろ！
もぐれ！　もぐれ！　うもれて消えろ！

その歌声で、僕はへボいと呼ばれていた昔の事を色々思い出し、恐
くなってくる。

それで、手にしたスコップで床をほりはじめた。
ほってほって地中にもぐる。

目の前にうす蒼くてぬめつとした闇がせまってくる。
闇は折り重なりながら、どんどん下へと続いていく。
その闇をかき分け、僕もどんどん下に降りて行った……。

「おい、正」

扉を開け、弟の名を呼ぶ。

「起きろ。遅刻するぞ、おい」

部屋に入り、布団をはがすと、

「わっ」

と叫んで弟が飛び起きた。そして、起き上がったきり呆然として
いる。よく見れば汗だくで、真っ青な顔をしていた。

「おい、どうした？」

心配になってたずねると、ようやく正氣に戻って

「……こわい夢を見た」

とつぶやく。

「……夢？」

「うん。すごく恐かった。金縛りにもあって……」

「金縛り!？」

「殺されるかと思った……」

なんだ、馬鹿馬鹿しい。少し呆れる。しかし、弟は真剣そのもの
顔をしていた。よほど、恐ろしい夢だったのか。けど、今はそん
な事にとりあってるヒマはない。

「いいから、さっさと起きろよ。遅刻するぞ」

しかし、階下に降りて飯を食いつつ待てど暮らせど、弟は起きて
来ない。

「何してるのかしら？」

と、おふくろが不安げに上を見る。

「体調でも悪いのかしら？」

「いや。体調が悪いようには見えなかったよ。夢見が悪かったみた
いけど」

「じゃあ、何してるのかしら？」

「さあね」

「もう一度、呼んで来てくれない？」

「俺が？」

「母さん、今、手が離せないのよ……」

仕方がないので再び弟の部屋に行くと、呆れた事に、奴は、まだ布団の中にもぐり込んでいた。

「おい！　こら！」

俺は部屋の中にどこかどか入り込んで、布団の上から奴の背中とおぼしきあたりを足でつつく。

「さっさと起きろよ！　遅刻するぞ！」

すると、弟が布団の中から半分だけ顔を出してこう言った。

「起きれない」

「起きれない？　体調が悪いのか？」

「……体調が悪いっていうか……立ち上がると、ひどいめまいが起きて歩けない」

「めまい？　熱は？」

「分からないけど、とりあえず今日は休む」

そう言ってもぐりこんだきり、弟は、次の日も、また次の日も、布団から出られなくなってしまった。

3日目ともなると、おふくろが心配し始めた。

「大丈夫なの？　会社クビになったりしないの？」

「大丈夫だよ」

俺は答えた。

「3日休んだぐらいで、クビにならないと思うよ。前にも、同じような事あったけど大丈夫だったじゃないか」

もつとも、それは俺が小金井さんに頭を下げたからだが……。

「でも、お母さん心配なのよ。このまま、また引きこもってしまうんじゃないかと思って……」

「そんな事を言っただって仕方がないだろう？ 本人がめまいがするって言ってるんだから」

「でも、お医者さんはどこも悪くないって言うのよ」

「そうなの？」

「……そうよ？ 言わなかった？」

「聞いてない」

最近、残業続きで帰りが遅かったからな。

それにしても、『どこも悪くない』という医者という言葉が、俺の心に重くのしかかる。それって、精神的なものじゃないのか？

……とすると、やはり、登校拒否ならぬ登社拒否か……。無理もない。もしかして、今度こそダメなのかもしれない。しかし、そうなったところでしょうがない。今回ばかりは、アイツに同情している。アイツの頑張りには、この目で見ただけからな。もう、精神的に一杯一杯だったんだらう。これ以上無理させて、心が壊れてしまう前に、潔く辞めた方が良いのかもしれない。

会社に着くと、正門の前にみーさんがいた。どうやら、俺を待っていたらしく、こちらを見て「おはよう」と手を振る。

「おはようございます」

会釈を返すと、みーさんが走り寄って来た。それで、二人並んで歩き始めた。

「なんか久しぶりですね」

「そう？ そんなに話してなかったっけ？」

「ええ。随分話していない気がします。何しろ、ここしばらく色々あったから……」

「ああ。聞いたよ。なんか正ちゃん大変らしいね」

「やだな。みーさんまで知ってるんですか？」

「どうやら、弟に関するウワサ（その内容は正確には知らないが）は、会社中に広まっているらしい。少々うんざりしていると、みーさ

んが言った。

「うん。正ちゃん、毎日メールくれるし」

「え？ メール？」

「そうよ？」

「って事は、本人から聞いたって事ですか？」

「うん。なんで？」

「いいえ、別に」

言いつつ、内心胸をなでおろす。どうやら、弟のウワサは社内中に広まっているわけでもないらしい。

「で、あいつ、何て言っていました？」

「会社に行きたくないって言った」

「行きたくない……ですか」

「うん。なんか、学生時代のいじめっ子が入って来たから嫌だって」

「……そこまで話しましたか」

「うん。何か色々されたみたいだよ。やり返せばいいのになって言っただけど、無理って」

「無理ってですか……確かに、今のあいつには無理かもなあ」

「なんで無理なのかな？ あたしも子供の頃はよくいじめられたけど、家まで追いかけてってやり返してやったよ」

「えー？ みーさん、けっこう恐いなあ」

「恐いって、何よ。失礼なー」

「いや、すいません。つい本音が……でも、あいつには無理ですよ。子供の頃はケンカもしてたけど……学生時代にいじめにあっってから、すっかり弱虫になっちゃって……」

「強かった人が弱くなる事なんてあるの？」

「……少なくとも、弟はなりましたね。よっぽど学生時代のいじめがショックだったんじゃないかと思います」

その、いじめが原因で、弟が引きこもった話はしないでおいだ。それを話しても、みーさんには分からないと思ったからだ。

「ふーん。でも、正ちゃん、それでずっと休んでるんでしょう？」

もう、会社には来ないの？」

「分かりません。そりゃ、来た方がいいとは思うけど、あいつにも自由意志ってのがあるから」

「でもさ、ずっと家にいたら、カビが生えちゃわない？」

「カビって……」

思わず吹き出す。

「いやだな、想像しちゃったじゃないですか」

「受けた？」

「ちよっと」

「じゃあ、よかった……ああ、それでね」

みーさんが話題を変える。

「大事な話があるの。聞いてくれる？」

「大事な話？　なんですか？」

「うん。由紀恵からの伝言」

「由紀恵？」

……誰だっけ？　聞き覚えがあるような気がするが……

「『ふれあいの家』の田辺由紀恵。忘れちゃった？」

「ああ！」

俺は、あの髪の長い大柄な女性を思い浮かべた。

「懐かしいな。あの人が何か？」

「うん。ほら、来週文化祭があるって言ってたの覚えてる？」

「ああ」

……そんな話してたこともあったな……あんまりにも昔なので忘れかけていた。

「その、文化祭のボランティアが、思った程集まらなかったんだって。それで、すごく困っていて、優ちゃんと正ちゃんに手伝ってもらいたいんだけど、ダメかなって」

「俺らに？」

なんだか、突拍子もない話だが……

「そりゃ、他でもないみーさんの友達の頼みだし、どうしてもって

いうなら俺はいいけど、弟はどう言うかな？」

正直、無理だと思う。

「正ちゃんには、昨日メールしたんだけど返事がなくてさ」

「そうなんだ……」

それは嫌だという意思表示じゃないかな？ 心の中で思うが、口には出さない。

「で、正ちゃんにも聞いておいて欲しいの。由紀恵、本当に困ってるんだって。一応、私もヘルプに行くんだけどさ」

「分かりました。帰ったら聞いてみます」

「ありがとう。お願いね。あ、もうこんな時間だ。急がなきゃ」
そう言うと、みーさんは自分の仕事場へと走って行った。

家に帰ると、さっそく弟の部屋に向かった。

朝のみーさんの言葉を伝えるためだ。

しかし、どうせダメだろうとあきらめていた。

会社に行きたくなって体調を崩すような半ひきこもりの男に、太陽の下でボランティアをやるなどというだいそれた事ができるわけがない。

もちろん、兄としては、弟に『行く』と言って欲しかった。少なくとも、このまま部屋に閉じこもっているよりはマシだと思ったからだ。しかし、兄弟とはいえ独立した人間だ。無理強いする事はない。

2階に上がると、弟の部屋の扉は半開きになっていて、そこから光が漏れていた。どうやら起きているようだ。

隙間から中をのぞくと、PCに向かっていて弟の後ろ姿が見える。それで、ドアを開け、どこかか中に入って行った。にもかかわらず、弟はこちらを見ようともしせず、一心にキーボードを叩いている。この足音に気付かないとは、よほど集中しているのか。

背中越しに声をかける。

「おい」

しかし、弟は気付かない。それで、もう一度、今度は少し大きめな声で呼びかける。

「おい！ 調子はもう良いのか？」

すると、弟が飛び上がってこちらを見た。そして相手が俺だと分かると、安心したような表情を浮かべ

「なんだ、兄貴か」

と言った。

「そうだよ。何をやっているんだ？」

「見ての通り、入力さ」

言いつつ、弟は隠すようにブラウザを閉じた。それで、奴が何を
見ていたのか、何を入力していたのか、結局分からなかった。

「隠さなくてもいいだろう？」

「別に隠してないよ。某掲示板で、例の、大阪の放火魔のズレを見
てただけだよ」

「大阪の放火魔？」

……ああ、そんな事件もあったな。確か大阪の40越えたおっさ
んが『生きて行くのが嫌になった』とか言って、ビデオ屋に放火し
て15人もの無関係な人間を焼死させたとか、させないとか。なん
ともやりきれない事件である。しかし、今、この時点での俺的には
弟の言葉に大いにあきれ返った。

「って、お前、会社休んで、そんな下らない事やってるのかよ！」

「だって、あの放火魔イタすぎだし、笑えるし」

「どこが、笑えるよ。無関係の人が何人亡くなったと思ってるんだ
？ お前、言っている事と悪い事があるぞ……」

「こんな犯罪起すようになってっちゃん奴が一番悪いの！」

「今がどういう世の中か、お前も分かってるだろう？ 人ごとじゃ
ないんだぞ。俺らだって、いつこうなるか分からないのに……」

「にしたってさ……犯罪犯すにしても、俺ならもっと、派手な事や
らかすけどね。国会議事堂乗っ取るとか」

「下らない妄想してる元気があったら、会社に来いよ！」

「あ、それは無理。俺、部品を見ると目が回るんだよ。目がぐるぐ
るって渦巻きになっちゃうんだよ。昔のマンガみたいだね」

その不真面目な態度にだんだんイラついてくる。

「おい、茶化すなよ。俺は、真面目に話してるんだぞ」

「別に、ふざけてないんですけど……」

言いつつ、薄ら笑いを浮かべている。

「はああー」

俺はため息を着いた。どこからどう見ても、ふざけてるじゃない

か。

「まあ、仕方ないけどな。あんだけイビられりゃ、会社にも行きたくなくなるわな」

すると、弟はやつと薄ら笑いを収め、そっぽを向いた。

「別にイビられてるなんて、思ってないよ」

「いいよ、無理しなくても。お前は十分頑張ったよ。それは、俺も認めてるから」

「今度はほめ殺しですか？」

「いいから、真面目に聞けよ。俺は、お前の頑張りはちゃんと見てたし、その上でお前はあそこには行かなくても良いと判断した」

「……」

「本音を言えば、あそこで物の役に立つまで待つ方が良いような気もするが、稲本の事を考えればここまでだろう。というか、かえってお前の為にならない気がする。もう、辞めて良いと思うぞ」

「……」

「まだまだ、一人前には程遠いが、あれだけの苦労は無駄じゃないと思う。新しいところについても、きっと前よりはマシな感じで頑張れるよ」

「……そうかな」

弟がつぶやく。その表情からは、先ほどまでのふざけたような雰囲気は消えていた。

「ああ……きつと」

俺はうなずいた。それは、俺の願いでもある。

「お前の好きな、因果応報の法則に照らし合わせるなら、努力は人を裏切らない」

「……ふふ」

弟が笑う。しかし、それは、さっきまでの小馬鹿にしたような笑いではなかった。

「そうだったらいいな」

「きつと、そうだよ」

「けど、兄貴。俺、別にあそこにいるのが辛いわけじゃないんだ。俺自身の事で言えば平気なんだ。不思議なぐらい……」

「強がるなよ」

俺は弟をいたわった。

「頭では大丈夫と思っていても、心はダメージを受けているんだ。体調が正直に物語ってる」

「……けど、本当にこのまま逃げていいのかな？」

「まあ、最終的には、お前がきめる事だけだな」

「そう、俺次第なんだよな」

「……もしかして、続けたいのか？」

「分からない。今、迷ってるんだ」

「そうか。分かった」

俺は、弟の言葉の中に真実を認めた。それで、立ち上がると、奴にこう告げた。

「じっくり考えろ。お前の人生だもんな。どちらを選ぶにしろ、俺は全力でサポートするから」

「いいよ。そこまでしてくれなくても」

弟が言う。

「兄ちゃんは、過保護すぎるよ」

それから、弟の部屋を出て、飯を食い、風呂に入り……弟に肝心な事を伝え忘れたのに気付いたのは、翌日、食堂でみーさんを見かけた時だった。

しかし、心配する事はなかった。

その日、帰宅した俺に、弟の方からこう言って来たからだ。

「実は、みーさんに兄貴と二人でボランティアに来てくれないかと頼まれているんだけど、兄貴も一緒に来てくれないか？」

弟は弟なりに、出口を探しているのかもしれない。

「はーい。じゃあ、次は何を書いて欲しいかなー？」

まん丸顔の丸山さんが笑顔で言う

すると、子供達が次々に声をあげた。

「ひこうきー」

「うさぎー」

「ピカチュウー！」

大きな子も、小さな子も、車イスの子も、補聴器の子も、みんなキラキラ目を輝かせている。中には話すのがゆっくりな子もいるから、リクエストはじっくりと待ってあげる。

ひとつとおり子供達の声がおさまると、

「はーい、他に描いて欲しいもののある子はいないかなー？」

と丸山さんがみんなを見回す。

「もういいー」

「言ったー」

子供達は、また口々に叫んだ。

「それじゃ、お兄さんは何を描いてくれますか？」

丸山さんが、そう言ってこっちを向いた。

俺は「ちょっと待って」と答えた。どの子のリクエストに答えようか迷ったわけじゃない。実は、さっきから気になって仕方ない事があったからだ。それで、俺は、みんなの輪から離れると、窓際にいる一人の車椅子の男の子のところに近付いていった。その子は、朝の、開会式の時間からずっとそこにいたにもかかわらず、この『

お絵書き教室』が始まって、手を上げようとしなければ、口を開こうともしないで、ただ、だまってニコニコみんなのやっている事を見ているだけの子だった。もしかして、何かの事情で、リクエストしたくてもできない子なのかもしれない。だったら、こっちから歩み寄らなければいけないと思ったのだ。

俺は腰をかがめて彼に目線を合わせて聞いてみた。

「君は、何を描いて欲しいのかな？」

彼はちよつと驚いたようにこちらを見て、すぐに恥ずかしそうに目を伏せてしまう。

「恥ずかしがらなくていいよ。君は何を描いて欲しいの？」

たずねると、丸山さんが助けてくれた。

「ケイ君。恥ずかしがらずに答えてごらん。ほら、ケイ君は、お兄さんに何を描いてもらいたいかな？」

その声に安心したのか、ケイ君は、はにかんだまま、でも嬉しそうにこう答えた。

「マ・ル・ヤ・マ・セ・ン・セ・イ」

「えー？ 私？」

丸山さんがびっくりする。

俺は笑いながら答えた。

「先生人気者だね。じゃあ、丸山先生を描こう」

そして、元の場所に戻ると、画用紙にさらさらと絵を描く。画用紙の中の丸山さんもニコニコと笑っている。

「はい！ できました」

そう言って、子供達に見せると、子供達は口々に

「すごい！」

「そっくり！」

とほめてくれた。

ケイ君と呼ばれた少年も嬉しそうに笑っている。俺は再び彼のそ

ばにより、画用紙をくるくると丸めて膝の上に置いてあげる。すると、ケイ君は俺を見てにっこりと笑った。そこで、丸山さんがパンパン手を叩いた。

「それじゃあ、これでお兄さんのお絵描き教室はおしまいです。みなさん、拍手してあげて下さいね」

こうして、1日目、午前中のイベントが終わった。

「疲れたでしょう？」

椅子の上でぼーっと休んでいると、丸山さんが話しかけてくる。

「2時間も絵を描きっぱなしなんて、大変よね」

「いえ。大丈夫です。けっこう面白いし。でも、まさかボランティアで絵を描く事になるとは思わなかった」

ちなみに、ここは『ふれあいの家』児童館の工作室だ。そして、今日は文化祭一日目である。

「由紀恵ちゃんかね、絵の描ける人がいるからって、わざわざこの『お絵書き教室』をプログラムに入れたのよ」

「え？ それ、いつ？」

「一カ月ぐらい前かしら？」

一カ月ぐらい前と言うと、俺達が初めてここに来た頃じゃないか。て、ことは始めから俺らの参加を計算に入れてたって事か？ 案外抜け目ないなど、おれは今朝方再開したばかりの、あの大柄な女性の姿を思い浮かべた。

「あ、それより……」

丸山さんが時計を見る。

「食事に行つてよ。もう、12時だし」

「え？ もうそんな時間ですか？」

時計を見ると確かに12時を回っている。それで、俺は昼飯を食う為に、弟がいるはずのグラウンドに向かった。

建物の外はけっこうな人でにぎわっている。口コミで広まった地

域の人達や、交流のある他の施設からも見に来てる人がいるんだそう。うだ。人ごみをぬい、グラウンドの東に並ぶ露店へと向かおうとした時、大きな声に呼び止められた。誰かと思えば、俺らをここへ招いた張本人、田辺由紀恵だ。

「もしかして、お昼ごはん食べに行くところ？」

手を振りながら由紀恵が言う。

「はい。もしかして、由紀恵さんも？」

「うん。どこで食べるの？」

「弟の焼そば屋に行こうと思って」

そう。弟はなんと、焼そば屋をやっているのだ。なんでも、どこからか（この場合、みーさん以外ありえないが）弟が焼そばづくり名人だとかいうウワサが広まっていたらしい。そんな話は初耳だ。弟ももちろん否定した。が、しかし、既に決まっているものは仕方がない。しぶしぶ、ひきうけたは良いが……。

「ちゃんとできているかどうか心配で」

「大丈夫でしょう。みーも、かなも一緒だし」

田辺由紀恵は樂觀的だ。しかし、俺的には、安心できない。

「確かに、あの二人が一緒なら心強くはありますけどねえ……」

それから、俺と田辺由紀恵はなんとなく一緒に歩き始めた。そして、弟達が働いているはずの露店の辺りに辿り着く。しかし、人が多すぎて、どこに弟の店があるのやら分からない。しばらくうろうろした後、

「あ、分かった。あそこ、あそこ！」

由紀恵が、パンフの会場案内図を見ながら指さした。

「ほら、あの、長い行列のところ」

見ると、たくさんの店の中、ひととき長い行列を作っている露店がある。

「え？ あそこ？」

俺は我が目を疑った。

「一番人気じゃないの!」

「嘘だろう?」

しかし、近付いてみると、確かに焼そば屋と書かれた幟がたつていて、ソースのこげるあの香ばしい匂いが漂っている。

「きっと、すごくおいしいのよ」

「まさか……」

言いつつ、俺と由紀恵は列の最後尾に並んだ。

遠目にテントの中を窺うと、弟とかなえの姿が見える。が、みーさんの姿はない。

「みーが居ないね。休憩中かな?」

由紀恵が首をかしげる。

「みーさん無しで、よく回るもんだ」

俺はつぶやいたが、果たせるかな、しばらく並んでいるうちに、この行列の本当の理由が分かって来る。弟もかなえもひどくもたついている。それが、混雑の原因だった。

「おい! おつり間違ってる」

とか、

「3つ頼んだのに、2つしかもらってない」

とか、

客の怒鳴る声が何度も何度も聞こえてくる。

一方、テントの中ではかなえが一人でバタバタしていて、

「河合さん! 早くパックを出して下さい!」

悲鳴に近い声を上げる。
すると、弟がのたつと答えた。

「もう、ないよ」

「じゃあ、新しいのを探して下さい」

「どこにあるんだよ？」

「そんなの、自分で探して下さいよ！」

「探せって言われても……無いもんは無いし……」
弟はうろうろするばかりだ。

「もう、いいです！ 会計をやって下さい」
かなえは完全にキレている。どうやら、弟がかなえの足をひっぱ
ているようだ。

「はあー」

俺は頭を抱え込んだ。

……ここでもお前は役立たずかよ……

申し訳なさのあまり、由紀恵の顔を見られなくなる。

10分ほど並び、やっと俺らの番が回って来た。

「ぼやーっとしてゐる弟の目の前に立ち「焼そばひとつ」と言うところ、やっと、兄貴たる俺に気付いたのか、奴はこの上なく気まぐずい顔をした。」

「何、足を引っ張ってるんだよ、お前」

「そっちこそ、何しにきたんだよ」

「焼そばを買いに来たんだよ」

「嘘つけよ。帰れよ」

「帰れとはなんだ。それが、仮にも客に向かって言う言葉か」

「いいから、帰れよ。仕事の邪魔だよ」

「何が仕事の邪魔だよ。お前、少しも働いてないじゃないか」

「つまりぬ兄弟喧嘩をしてると、みーさんが帰って来た。テントの中に入り際に俺に気付く、

「あら、優ちゃん来てくれたの」

と、声をかけてくれる。

「あ、はい。昼休憩にここの焼そば食べようかと思って」

「ユキも、昼休憩？」

「そうよ。みーは、今まで休憩？」

「うん。昼時は混むから避けたつもりだったんだけど……もう、けっこう混んでるね」

「そう言うと、みーさんはテントの中に入り、かなえと弟に言った。

「おまたせー。どっちか休憩入って」

すると、間髪入れずになえが答えた。

「河井さんが行ってください。今、忙しいですから！」

それから、俺らは、グラウンド中央に設置された舞台前のベンチに座って、買ったばかりの焼そばを食った。

かなえが作った焼そばは、少々辛いような気がした。

「あんまりうまくないな。これ……」

弟がつぶやく。

「お前が言うなよ」

俺は弟の頭をどやしつける。

「ってーな。殴る事ないだろ」

「うるさいよ。少しも働いてなかったくせに」

「……だって、アイツ、一人で全部やろうとするから、俺の入る隙が無いんだもん」

「お前がぼやーっとしてるから、彼女一人で頑張らなきゃって思うんだろう？」

「そうだね。確かに弟君、少し指示待ち過ぎるね」

めずらしく、由紀恵が厳しい事を言った。

「やる事は、自分で探さなきゃ」

「田辺さんの言う通りだ」

俺がうなずくと、弟はふて腐れた。

「へいへい、俺には発言権ないですよ」

そして、この世でもっとも嫌われる言い方をした。

「俺はどうせ、役立たずですから！」

で、頭に來た俺的には、

「その通りだな！」

と答えておいた。見兼ねたのか由紀恵がフォローしてくれる。

「まあまあ、慣れれば、どう動けばいいか分かるようになるでしょう」

その時だ。

「お兄さん達、来てくれたんだ」

聞き覚えのある声がした。

振り返ると、車椅子の少年が居る。

告白すれば、一瞬誰だか分からなかった。しかし、すぐに思い出した。隣で弟が「大地」とつぶやいたからだ。

そうだ、確かこの子の名前は大地君。以前、この『ふれあいの家』に來た時に出会った子だ。10才のこの少年は、その小さな体で、筋ジストロフィーという難病を抱え、過酷な運命と闘っている。俺の脳裏に、あの日、装具を付けた足で、必死に坂を登っていく大地の姿が甦った。一步、一步、ゆっくりと、汗を流しながら歩いてたっけ。

「よお！ 大地君。久しぶり！」

俺は、気さくな感じで手を上げた。

「こんにちは」

大地君が、ゆっくりと頭を下げる。弟は仏頂面のまんまだ。その弟の目の前に回り込み、大地君が言う。

「この間は、ありがとう」

それで、さすがの弟も仏頂面も続けられなくなったらしい。「よお久しぶり」と、無愛想に答え、そして尋ねた。

「今日は、お前車椅子なのか？」

「うん。本当は、歩きたいけど、歩いてると、今日中に全部見きれないかなと思って」

「見れなかった分は、明日見ればいいじゃないか」

「明日は、僕、ダンスにでるから、見てるヒマないんだ」

「ダンス？」

俺と弟は、ほぼ同時に叫んだ。

「うん。ちょうど、ここのステージでやるんだよ」

大地が誇らしげに言う。

「へえ……」

俺は、まじまじと彼を見た。あの、歩くのもやっとだったこの子がダンスとはね……。

「大地君、頑張って練習したんだよね」

由紀恵が言う。

「うん。大変だったけど、おもしろかったよ。……そうだ、よかったら、お兄ちゃん達も見に来てよ。3時からなんだけど、無理？」

「3時か……」

俺は首を傾げた」

「うん。3時からなら、ちょうどこっちのイベントも一区切りするところだから、大丈夫だと思うよ。正、お前は大丈夫そうか？」

弟にふると、弟は難しい顔をする。

「微妙だな……俺の仕事には区切りとかないし」

「3時から中休憩入れてもらえろ？」

由紀恵が言う。ボランティアスタッフは、昼休憩と、中休憩の2回の休憩がもらえる事になっているのだ。

「……そうか。そうだな。みーさんに頼んでみるか」

弟がうなずくと、

「じゃあ、きつとだよ！」

大地は嬉しそうに笑い、手を振って両親の待つ児童館の方へと去って行った。

その頃には、3人ともすっかり焼そばを食い終わっていた。しかし、まだ時間が余っていたので、少し会場内を回ってみようかという話になる。それで、さて、どこを見るかという話になった時、

「長谷川さん来てるよ」

と、由紀恵が言った。その言葉にドキッとなる。それは、以前、ここに来た時に、一目で虜になった絵の作者の名前だったからだ。あの後、稲本の事やら、弟の事やら、あまりにも色々あり過ぎたせいで、忘れていたが……名前を聞いた途端に甦ってくる。あの、見事な巨木と、その頂上に太陽のごとく咲き誇る赤い花と……。

「今なら、2棟で、実演やってると思うよ。行く？」

断わる理由があるはずもなかった。

こうして、俺は弟と田辺由紀恵をともない、第2棟の作業所へと向かった。

案外すぐに辿り着いたその場所には、山のような人だかりができていて、長谷川という男の知名度と人気を感じさせられる。

人ごみをかきわけて作業所の中に入ると、部屋のど真ん中に40過ぎのがたいの良い男が、でっかい紙を前にあぐらをかいている。どうやら、あれが長谷川らしい。ぎょろりとした目のいかつい顔だ。しかし、風貌より何より俺をぎょっとさせたのは、彼の両腕が肩のあたりでちょん切られたように、見当たらない事だった。手の無い彼は、口に筆をくわえて絵を描いていた。鬼気せまるというか……さしもの皮肉屋の弟も、その迫力に圧倒され、ただ、呆然と見つめるばかりだ。

ちなみに、長谷川が描いているのは達磨だ。ぎょろりとした目の、いかつい鼻をした……どこことなく描き手にそっくりの達磨だ。

俺は、とりつかれたように長谷川の口元を見つめた。生き物のように動く筆の先から、血しおのごとく朱色がほとぼしり、達磨の体に肉付けをして行く。いつしか、周囲のざわめきも、光も、何もかも消え、虚空の中に俺と、長谷川と、達磨だけがいるような錯覚に陥る。その夢幻の空間で、ごろりと達磨が起き上がり、俺を睨め付けこう言った。

「おい、お前。描きたいものは見つかったのか？」

俺は答えた。

「いいや。まだ、見つからない」

「それなのに、こんなところでボーツとしていいのか？」

「分らない」

首を振ると、

「早く答えを見つけないと、手後れになるぞ」

と、達磨が言う。

「手後れってなんだ？」

「手後れは、手後れさ」

「意味が分からないな」

「そんなはずは無い。お前の分からない事を、俺が話すわけないだろう」

「それは、そうだ。俺だって、苦しいんだ。だからといって、せかされても動きようがないから仕方がない」

「じゃあ、いつまでもそこで見ていればいい。気付いた時には全て終わってるさ」

「動くための答えが知りたいから、あの人に会いに来たんだ」

そう言おうとした時、

「おい、兄貴」

弟に肩を叩かれる。

「え？ あれ？」

突然、現実に戻されてうろたえる俺をいぶかしげに眺めながら弟が言った。

「もう、時間だぞ。持ち場に戻ろう」

時計を見ると、1時20分を過ぎていた。

……格が違う……

画用紙にクレヨンを走らせながら思う。

……やっぱり、俺には才能なんてないのかなあ……

ため息をついたその時、

「お兄ちゃん、それ違うよ」

あどけない声で、我に返る。

「それ、ドラえもんじゃなくて、ダルマさんだよ」

「え？」

俺は、慌てて画用紙を見た。すると、確かにそこには、青色のダルマが描いてある。

「ごめん、ごめん。今、描き直すからね」

俺はスケッチブックを破くと、新しい紙にドラえもんを描き始めた。

しかし、まったく……こんな間違いを犯すなんて……よほど、さつき見た達磨にとらわれているらしい。我ながら、情けなくなる。

ようやく自分を取り戻したのは、午後のお絵書き教室が終わり、一息ついた時だった。

すでに、4時を回り、人の姿もまばらになった工作室の一角に座り、夕日で赤く染まる室内やら、いまだに出入りする人達の姿なんかを見ながら、ふ……と、俺は『そのこと』に気付いたのだ。

俺は丸山さんに声をかけた。

「ねえ、丸山さん。あの子……ケイ君って言ったっけ？ さつき丸山さんの絵を描いてあげたあの車椅子の子、まだ、あそこに……あの窓際にいますよ」

すると、丸山さんが振り返って答えた。

「ああ、ケイ君なら、朝からずっとあそこにいたわよ」

「ですよ、やっぱり」

「よほど、ここが好きなのよ」

「好きなのはいいけど……親ごさんはどうしているんですか？ こんなところに丸一日あんな子を放っておくなんて、少し変じゃないですか？」

そう言って、俺は口をきくのもやっとだった車椅子の少年を見つめる。

丸山さんが言った。

「ケイ君のお父さんとお母さんは、来ないのよ」

「え？」

「忙しくて、文化祭には来られないって。だから、ケイ君、今日も明日もお泊まりよ」

「忙しいっていったって……文化祭でしょう？」

「私も、一日ぐらいは来て下さいと言ったんだけど、無理って」

「そんな……」

「仕方ないわよ。色々事情もあるだろうし……」

「事情あったって……おかしいですよ」

その時、俺は、前にここに来た時の田辺由紀恵の言葉を思い出した。

『考えてみてよ。生まれて来たわが子が障害持ってたって分かった時の親御さんのショック……誤解しないでね。親御さんが愛情を持つてないわけじゃないのよ。でもね……』

そうなのかもしれない。俺らには分からない葛藤があるのかもしれない。というか『そういう事』ではないのかもしれない。それとはまったく関係なく、本当に用事があるから来られないだけなのかもしれない。それに、あの時は由紀恵の言葉に、むしろ、納得していたじゃないか。今さらなにを思う事がある？

しかし、現にああして一人きりでいるケイ君を目の当たりにすると、なんとも腹立たしい気持ちになってくる。

それで、俺は、慥然として彼に近付き、彼に話しかけてみた。

「ねえ。君、ずっと、そんな所に居て、疲れない？」

分かっているのか、分かっているのか……ケイ君はこちらを見上げてにこっとした。

「ずっと一人で退屈だったろう？　ためしに何か描いてみたら？」
そう言っていると、俺は手にしていた画用紙とクレパスを彼に差し出した。しかし、彼は、ただニコニコと笑うばかりだ。分かってないのかと思う、もう一度スケッチブックを、今度は彼の手に押し付けるように渡す。

「ねえ、何か描いてみなよ」

すると、彼にかわって丸山さんが答えた。

「ありがとう。河井君。でも、ケイ君は、手がうまく動かせないの」

「え？」

「でも、絵は大好きなんですって。だから、ここに居させてあげて」
「……」

俺は無言でその場から離れると、さっきまで座っていた椅子に戻ってスケッチブックを開いた。その時にはもう、長谷川の事も達磨の事もすっかり頭から消えていて、かわりになんとも言えないやり切れなさで胸が一杯になっていた。苦い気持ちを紛らわすように、鉛筆を取る。そして、戯れに、窓際の少年の絵を描いてみる。あいかわらず、ただ、正確に模写しただけの、面白くも何ともない絵だ。モデルの少年の悲しみも何も伝わって来ない。それで、ためしに少年の背中に翼をつけてみた。多少はマシになった。自由に憧れる、少年の気持ち表現できたような気がする。と、その時、

「面白い絵だな」

と、頭の上から声がした。

「でも、ケイはそんな事は望んでないかもよ」

随分ぶしつけな奴だ。先ほどのイライラも相まって、不快さをあらわに上を向く。そして、俺は驚いた。

そこにいたのが、あの長谷川大輔だったからだ。

「そいつを外から見たイメージと、そいつが心の中に持つてる世界って、案外違うもんなんだよ」

長谷川は言った。

「僕も、手が無い事で、色んな人に同情されるけど、生まれてから一度も自分を可哀相だと思った事はないしな」

言ってしまったから、長谷川は考え込むような顔をした。

「でも、外側から見て可哀相に思えるなら、それもひとつの世界なのかな？ どう思う？」

「どう思う？ と、いきなりふられても、にわかには答えられない。そんな質問は難しすぎるし、何より憧れの人を目の前にして、少々舞い上がっていたせいもある。何も答えられない俺を置き去りにして、長谷川は言う。

「ひとつだけ確かなのは、これが僕の中の世界ですと自信を持って言えるのは、僕の絵の中にだけある」

「だとしたら、あなたは、強靱な意志の持ち主だ」

俺は、やっと、それだけ言葉にできた。

「強靱？ そうかな？」

「ええ。とても。……失礼ですけど、長谷川大輔さんですよ」

「……僕の事、知ってるの？」

「ええ。さっき、2棟での実演を見せてもらいましたから」

「そうなんだ。ありがとう。……ところで、君は、この職員かなにか？」

「いいえ、ボランティアスタッフです」

「ああ、ボランティアか。それなら、由紀恵さんと呼んでくれるかい？」

「由紀恵さんて、田辺さんのことですか？」

「ああ。そうだよ。帰るまでに一度ここに立ち寄ってくれて言わ

れて来たんだ」

「ここに？ この教室内にはいませんけど？ この時間に約束したんですか？」

「いや、特に時間の指定はなくて、ただ、一度ここに立ち寄って欲しいって……だから、何か用事でもあるのかと思ったんだけど」

「そうですか。でも、田辺さんはここに居ないし、ここに来る予定もないですよ」

「おかしいな？ 必ず寄ってくれと言ってたのに？」

「なんででしょうね？」

俺は首を傾げた。随分おかしい約束だ。とりあえず呼んでみようかという事になり、由紀恵のいそうな事務所に電話する。幸い由紀恵は捕まったものの「今、手の離せない仕事をしてるので、しばらくそこで待ってもらって」との返事。それで、長谷川にはここでしばらく待ってもらおう事にする。長谷川も、ちょうど子供達の絵を見たいとの事で快く納得してくれた。

長谷川が行ってしまうと、俺は再び腰をおろしてスケッチブックを開いた。そして、さらさらと鉛筆を走らせる。しばらくすると、人の気配がする。誰かと思うと、長谷川だった。長谷川は言った。

「君は、美大生さんかい？」

「いいえ。ただのフリーターです。一応プロ目指してたけど……」

「あきらめたのかい？」

「……実は、まだ迷ってるんです。プロにはなりたいけど、でも、自分に才能があるのかも分からないし……」

「今、何を描いてるの？」

「……見ますか？」

言うのと、俺は長谷川に向けてスケッチブックを大きく開いた。それを見て、長谷川がぎょっとする。

「これは……」

「あなたの描いた達磨をまねしてみたんです」

「上手いもんだ」

「そうでしょうか？」

「ああ、びっくりしたよ。……これ、一度見ただけだろう？」

「ええ。何度も見に行く時間なかったし」

「それで、よくここまでそっくりに描けるもんだ」

「ずっと、頭の中で描いてましたから」

「器用な特技だね」

「でも、ダメなんです。いくら、そっくりに描けても、同じ絵にはなりません」

「君は贋作作家にでもなりたいたいのかい？」

「まさか。ただ、あなたの絵から伝わってくるような……気迫みないなのが少しも伝わって来ないというか……どう言えいいのかわからないけど……とにかく僕の絵は生きないんです」

「生きてない？」

「例えば、あなたの描いた達磨を見ると、いまにも起き上がって語りかけてくるような、そういう何かを感じるんです。俺の尊敬するある画家の描く女性は閉じている瞳を開け、今にも立ち上がりそうなほどの臨場感を持ってました。でも、俺の描くものはダメ。そんな生命の息吹を感じた事が一度も無い」

「なるほど。君の言わんとする事は分かったよ。君の絵は生きて来ないってね。そりゃ、あたりまえさ。その達磨はどこにも存在する物じゃないもの」

「どこにも存在しない？　ですか」

「そうだよ。どこにも存在しないものを描いたって、絵は命を持ちはしないさ」

「それじゃ、あなたの描いた達磨は存在するっていうんですか？」

「もちろん。しっかりと在るよ」

「待って下さい。僕の記憶が正しければ、あなたは何も見ずに達磨を描いていたように思えますけど……」

「外には無いさ。でも、僕の中の世界にはあるよ」

「面白い事をおっしゃいますね。つまり、僕の描いたものが模倣で、

達磨が僕の中の世界に存在しないからこの絵には命が吹き込まれないという事ですか？ それじゃあ、僕の中に在るものを描けば、命のこもった絵が描けるという事ですか？」

「普通はそうだろう？」

「でも、僕は自分の絵を描いたところで、生命感のかけらも感じた事が無い。そのせいで、ここ数年、何一つ描く事ができなくなってしまうんです。それで、あなたや、尊敬する画家の絵を模倣して、なんとかあの生命感の秘密を探ろうとしているんです」

「この場合、自分の絵を描く事と、自分の中に『在る』ものを描く事とは少し違うよ」

「どういうことですか？」

「君の中に存在するものを描かないとダメだと言ってるんだ」

「僕の中に、存在するものとは何ですか？」

「君の中の世界に命を持って存在するものだよ」

俺の中に命を持って存在するもの？……俺は自分の心の中を探してみた。しかし、どう探してもそんなものは無いように思える。というか、それがどういうものなのか、見当がつかないというのが本当のところだ。

「すいません。僕には難しくてよく分からないみたいです」

「難しいかな？」

「はい。抽象的すぎるのかもしれない」

「抽象的か。……じゃあ、そうだなあ。君には、今、どうしても描きたいものがある？」

「どうしても、描きたいもの？」

「うん。例えば、この部屋の中にでもいいからある？」

俺は、部屋の中を見回した。しかし、古びた時計や、錆びた窓枠なんかに多少触手が動いたが、どうしても描きたいかどうかとなると、答えは否だ。

「無いみたいです」

「そうかい。心の底から描きたいものが無きゃ、自分を満足させる

ほどの絵は描けないかもな」

「そういうものですか？」

「そうさ。だって、見るものに興味をもてなきゃ、自分の世界に入
って来ないし、それに、どう描いてやろうかって遊び心も湧いて来
ないだろう」

「そういうものですかねえ？」

長谷川の言う事は大味すぎて、いまいちよく分からない。

「じゃあ、あなたは、この部屋の中にどうしても描きたいようなも
のがあるんですか？」

「あるよ。この部屋に限らず、世界中にあるよ。目に映ったほとん
どのが、僕の中で命を持つよ」

「つまり、それは……あなたが、一瞬一瞬を感動を持って生きてる
って事ですか？」

「そういう意味でもないんだけど……とにかくそうなんだ。僕は世
界の全てが欲しいのかもしれない」

そう言うと、長谷川は愉快そうに笑った。

しばらくすると、ホタルの光が流れて来た。そして、文化祭一日
目終了を告げるアナウンスが流れる。しかし、田辺由紀恵は現れな
い。それでもしばらく長谷川は待っていたが、やがて「新幹線に間
に合わないから」と言って、去って行った。

あきの ゆうひに
てるやま もみじ

白いブラウスに、黒のタイトスカートをはいたおばちゃん達が歌っている。

何とも絵にならない光景だなど、俺は思う。

隣では弟が退屈そうにあくびをかみ殺している。同じく退屈そうな家族連れ、走り回る子供。……長谷川ならこんな光景でも、何がしかの感銘を与えるような名画にできるんだろうか？ いや、いけない、いけない。まだ、昨日のやりとりに関われているようだ……。

今日は『ふれあいの家』文化祭、2日目。今は3時20分。目の前で催されているのは、プログラムNo. 22。シルバー合唱団『もみじ』の童謡メドレーだ。

しかし、俺らがここに居る目的は、もちろんおばちゃん達の合唱などではなく、大地が参加する『ふれあいキッズ』のダンスである。3時30分から開始とのことなので、もうそろそろだろう。

おばちゃん達の合唱は『赤とんぼ』で締めくくられた。しばらくの暗転の後、女性職員のアナウンスとともに、ぼらぼらと、15名ほどの子供達が舞台上に登場する。メンバーは福祉施設の通所者で、足の不自由そうな子が数名いた。大地はどこかと探すと、一番後ろの列の左端に立っていた。

やがて、『崖の上のポニョ』が流れ出し、子供達が元気に踊り出す。とはいえ、様々な不自由を抱えた子供の集団だ。それなりに振り付けも配慮されている。足の動く子が前方でたくさん体を動かすパートをやり、大地のような足の不自由な子供は、比較的緩やかな動作を受け持っていた。

多少のぎこちなさはあるものの、まあまあ上手い。何より、その一生懸命さがいい。しかし、弟にはそうは映らなかったらしい。

「この職員は少しおかしいよ」

と、批判する。

「何が？」

と尋ねると、

「なんで、歩くのもやっとの大地に、ダンスなんかやらすかな」
との答え。

「まあ、本人が楽しそうだからいいんじゃないの？」

「確かに、楽しそうは、楽しそうだけど……」

本当に大地は楽しそうだった。体の不自由さなど感じさせないぐらい、生き生きしてる。

……あれなら、絵になるかもしれない……と、俺は思う。

が、しかし『なるかもしれない』と思うのと『心の底から絵にしたい』と思うのでは、全然違うよな。じゃあ、俺の世界の中に命を持って存在させれば良いんだろうか？ でも、いくら頑張ったって、意図的にそんな事もできるわけがない。大体、その言葉の意味だつて、ろくに分かつちやいないんだ。考えれば、考えるほど袋小路にぶち当り、ついには絶望的なゴールが見えてくる。もしかして、『分からない』というその事自体が答えなんじゃないのか？ それが、俺と、長谷川や師匠とを隔てている、越えがたい何かのではないかと。しかし、何度も沸き上る不吉な思いを、おれは無理矢理ねじ伏せる。いいや、まだ、あきらめるのは早い。いつか、分かるさ。いつか辿り着けるはず……。

白日夢のような世界に漂いながら、虚ろな目で大地の動きを追う。彼は、こちらの内心の葛藤とはまるで無縁の世界で、楽しげに踊っている。その無邪気さに、わずかながらの羨望をおぼえる。……もし、誰かがいうように幸せが心の状態で決まるというなら、今の俺と大地とどっちが幸せなんだろう？……そんな風に思った時、いき

なり、大地の表情が変わった。それで、魂ごとこの場に戻る。

どうした？　　と思って見ていると、大地は体のバランスを崩し、足元から倒れて行った。会場が、わずかにざわめく。

前、2列の子供達は、何も気がつかずに踊りつづけている。最後列の子供だけが異変に気付き、呆然と倒れている大地を見ている。どうしていいのか、分からないのだろう。みんな、おろおろしている。

大地は、いつまでたっても立ち上がらなかった。ざわめきが広がり、ついに前列の子供達も異変に気付きはじめる。そこに、田辺由紀恵が飛び込んで来た。彼女は子供達に「踊って」と身ぶりで示すと、大地を抱きかかえて舞台ソデに消えて行った。

大地が居なくなると、子供達は何もなかったように踊りを再開した。

俺と弟は、顔を見合わせる。そしてどちらからともなく「行こう」と言って舞台裏へと走って行った。

舞台裏に着くと、車椅子の上で泣いている大地の姿が真っ先に目に入った。その脇で、田辺由紀恵が必死でなぐさめている。

「泣かなくてもいいよ。大地、途中まですごく良かったじゃん」

しかし、大地は返事もせず泣いている。俺らが近付いても気付きもしない。しばらくなす術もなくそこにいると、後ろから小さな子供を連れた女性が飛び込んで来て言った。

「大地！」

その声で、大地がやっと顔を上げる。

「ママ」

「ママ？」

その言葉に驚き、俺と弟はまじまじと女性を見た。30半ばの小柄な人だ。どこことなく大地に似ている。彼女は、車椅子の大地の正面にしゃがみ込むと、

「大丈夫？」

と聞いた。その途端、また、大地が泣き出す。母親は大地の顔を抱き締め、

「上手だったよ、上手だったよ」

と、なぐさめた。

「本当に上手だったよ、大地君」

由紀恵も言った。そして、「ねえ」と俺らに同意を求める。それで、俺もわざと明るく答えた。

「ああ。上手だったよ。本当。最後まで見られなくて残念だったよ」
弟はいつものごとく黙りこくっている。

「嘘ばかり」

大地が言った。

「本当は、そんな事思っていないくせに」

その言葉に、俺と由紀恵は顔を見合わせる。

「どうしたの？ 大地。誰も嘘なんか言っていないでしょう？」

母親が言うと、大地は首を振った。

「嘘だよ。僕ちゃんと全部知ってるんだから」

その言葉に、母親も……由紀恵も困惑の表情を浮かべた。

「大地君。本当に誰も嘘なんて言っていないよ。……ねえ」

田辺由紀恵が俺に同意を求める。

「ああ。そうだよ。大地君。俺、本当に良かったと思うてるよ。

……なあ」

弟に同意を求める。しかし、弟は何も答えなかった。

「なあ」

再び同意を求めるが、何も答えない。この馬鹿。少しは周りに合わせるということを覚えろよと、少しイラッと来た時、大地が言った。

「いいよ。分かってるんだ。僕が悪いんだよ。無理言っただんすに出してくれなんて言ったからさ」

その言葉に、弟が反応する。

「お前、自分からダンスに出たいって言ったの？」

「そうだよ。でも、やっぱり無理だった。みんなに迷惑かけちゃったよ」

「誰も迷惑なんて思っていないよ。それに、本当に上手だったと思ってるよ。嘘なんてついてないよ」

「いいってば。無理しなくて。それに、嘘ってその事じゃないし……」

「じゃあ、何のことだい？」

尋ねても、大地は黙ってる。

しばらくして、俺は「あっ」と気付いた。

……もしかして、彼の言ってるのは自分の病気の事じゃないのか？
……

彼の患っている『筋ジストロフィー』という病は、現代の医学で

は治せない難病だ。今は歩行困難なだけだが、いずれは全身動けなくなる。それが、大地を待つ運命であり、未来である。いずれは、本人に告げなくてはいけない日も来るだろうが、少なくとも今じゃないだろう。わずか10才の子供に知らせるには、あまりにも過酷で残酷な真実だもの。

だが、いくら周りの大人が隠したところで、これだけ情報のあふれた世の中だ。何かのはずみで知ってしまう可能性は、十分過ぎるほどにある。もしかして、大地は知ってしまったんじゃないか……？

大地の母親も、同じ事を思ったのだろう。こころなし、青ざめて見える。そんな大人達の様子を探るように大地は見ていた。

「あのさ……大地君」

田辺由紀恵が何か言おうとするのを、弟が遮る。

「でも、俺は大地はえらいと思うから、自信持っていよ」

大地は疑り深げな視線を、弟を見た。

「いいよ。なぐさめてくれなくても」

「別に、なぐさめてない」

「うそばかり。お兄ちゃんだって、本当は僕が可哀相な子だと思ってるだけでしょ？」

「違うね。俺、そんなにいい人じゃないもん。だから、気を使った慰めなんて口が腐つても言えないね。でも、お前の事は心からうらやましく思うよ」

「僕のどこがうらやましいの？ まともに歩けもしないのに。お兄ちゃんは変だよ」

「心の自由さだよ」

「心の自由さ？」

「そうだよ。世の中にはまともに歩けたって、近所のコンビニにすら行く事のできない奴がいっぱいいるのさ。そういう奴にくらべれば、お前は100倍も自由で、強いよ」

俺は驚いて弟を見た。こいつ、自分の事言ってるやがると。

「だから、お前は『俺はスゲー奴』って威張ってもいいぞ。モグラみたいな奴に比べれば十分立派だって」

「モグラみたいな奴って誰？」

大地はまっすぐな瞳を弟に向けて言った。弟は、無言で自分を指さす。

「お兄ちゃんが、モグラ？」

「そうだよ。俺はモグラ」

「お兄ちゃんは人間だろ？」

「モグラみたいに穴の中に隠れてるって事だよ」

「でも、ここにいないじゃん」

「やっつと、ここまで出られたんだ。普段は穴の中にいるよ」

しかし、大地はきょとんとしている。無理もない。子供には少し難しいだろう。

「お兄ちゃんは、穴の中が好きなの？」

「いいや、好きじゃない」

「じゃあ、どうして穴の中にいるの？」

「怖いからだよ」

「何が恐いの？」

「人間さ」

子供相手に思わぬ告白である。

「人間？ 友達とか？」

「まあ、そんなところかな」

「だったら、僕だってそうだよ」

「え？」

弟は意外な顔つきをした。

「僕、こんな体になってから、学校でも、町でも色んな人に見られたり、笑われたりして恐かったよ。それだけじゃないよ。夜も恐いんだ。いつか、このまま動けなくなるんじゃないかって。昼でも、ひとりぼっちでいると恐くなる時があるよ」

その言葉を聞いて大地の母親が泣き出した。そして、大地を抱き締めひたすら謝る。「ごめんね、ごめんね」と。大地は、悲しそうな目でそれを見ている。やはり、何もかも知ってるんじゃないだろうか？ この子は？ と、思う。

「でも、僕、負けたくないんだ」

大地は言う。そして、母親をなぐさめた。「お母さん泣かなくてもいいよ」って。

しばらくして、弟が口を開いた。

「それなら、お前は俺の1000倍も偉いな。逃げ出さずにいる」

「……お兄ちゃんも逃げなければいいだけだよ」

「簡単に言うなよ。俺にはいろいろハードルが高すぎるの」

「ハードル？」

大地がまた首をかしげた。やっぱり子供には難しいんだろう。と、さっきから黙って2人のやりとりを見ていた田辺由紀恵が口を開いた。

「……あのさあ、弟君」

「なんだよ、センセイ」

「最初から、全部やろうとしなくていいんだよ。やれるだけの事をやれば十分なんだよ」

「なるほどね。でも、それじゃ、周りが納得しないのが現実だろ？」
「人がどう思うがいいんだよ。自分に恥ずかしくなければ」

その言葉に、一瞬弟が打たれたような顔をする。が、すぐに元の
仏頂面に戻り、

「ありがと、センセイ」

とだけ、言った。

「だからね」

由紀恵が続ける。

「今日の大地君も、できるだけのをやったんだから、それで十分
なんだよ」

「……そっか」

「納得した？」

「……うん。ちよつとは」

「よし。じゃあ、もう、今日は帰って休みな。疲れたでしょう？」

そう言うのと、大地は母親と共に去って行った。

その後ろ姿を複雑な思いで俺らは見送る。どんな慰めの言葉でも
変えられない、彼の未来に思いを馳せつつ……。

こうして文化祭は終わり、最終日の閉会后、ささやかな打ち上げをした。

出された菓子や料理を食いながら、丸山さんと話していると、田辺由紀恵がやって来てビールを注いでくれる。

「おつかれ」

「おつかれさまです」

「今日は、ありがとうね。助かった」

「こっちこそ。貴重な体験ができて楽しかったです」

「長谷川君とは会えた？」

「ええ。おかげさまで」

とかなんとか話していると、弟とかなえが焼そばのパックを持って現れた。

「焼そばいコースか？」

「売れ残った分ですけど」

俺は、昨日食ったあの味を思い出し、丁重にお断りする。すると、かなえが心外そうに言った。

「食べて下さいよ。これ、弟さんが作っただんですよ」

「え？」

俺は驚いた。

「弟が？」

「そうです」

「うそだろ？」

「本当です。なんで疑うんですか？」

「だって……昨日の昼は君が作ってたよね。いつの間に弟が調理担当になったんだ？」

「今日の休憩時間過ぎからだよ」

弟がふて腐れたように答える。

休憩後？ 休憩後といえば大地のダンスを見た後か。

「……どういう心境の変化だよ？」

あれだけやる気なさげだったくせに……。

まさか、大地の頑張りに感化されたとか？ 信じられないが、ありえない話じゃない。でもそれぐらいのこと？ まさか。

色々考えてると、田辺由紀恵が手をのばした。

「一個ちようだい！」

「毎度！」

かなえが元気良くパックを渡す。

「ほら、お兄さんも」

そう言って、かなえが強引にパックを差し出してくる。それで、やむを終えず俺も一つもらうことにした。味には期待してなかったのだが、食ってみると意外にうまい。

「これ、本当にお前が作ったの？」

大げさに驚くと、かなえがうなずいた。

「ハイ。おいしいでしょう？ こんなことなら、はじめから河井さんに頼めばよかったって、みーちゃんと言ってたくらいです」

「うん。確かにうまい。けど、本当に意外すぎる。お前、どこでこんなアビリティ身につけたの？」

からかうと、田辺由紀恵に叱られた。

「黙って食べてあげなよ。お兄ちゃん、ちよつとくどいよ」

「くどいかな？ そうかな？」

言われて少し反省する。そこに、みーさんが割り込んで来た。

「ユキ！ お疲れ！ 何？ 逆ハーレム状態？」

みーさんは、顔が真っ赤だ。ひどく酔ってるらしい。

「そんなんじゃないよ」

弟が眉をしかめる。しかし、みーさんは聞いちゃいない。

「だめよ。2人とも。こう見えてもユキは怖い女なのよ」

「だから。そんなんじゃないですってば」

今度は俺が否定する。

聞こえてるのか、聞こえてないのか、みーさんは脈絡もなく話題を変えた。

「ところで、正ちゃん。会社、どうするの？」

「え？」

いきなり話をふられて弟が面喰らった。

「まだ、迷ってるとこだけど」

「ちゃんと、出てきなよ。悔しいじゃん。あんなイジメっ子のために辞めるなんてさ」

「イジメっ子？」

由紀恵が訝しげな顔をする。

「そうなのよ。聞いてよ。ユキ。正ちゃんはかわいそうなのよ。学生時代にいじめられてる友達かばったら、今度はかわりに自分がいじめられるハメになっちゃったんだって」

「みーさん。声でかいよ!」

弟が迷惑そうな顔をする。確かにこんなとこでぶっちゃける話じゃないだろう。しかし、酔ってるみーさんはお構いなし。

「みんなに言ってるやりのいいのよ。悪いのは、こいつ。はじめに裏切ったのもこいつって」

「よせっていうのに、もう」

弟は困り果てている。

見兼ねたかなえが、みーさんを抱え上げて言った。

「みーちゃん。飲み過ぎよ。少し、外に行こう」

そうして、かなえがみーさんを連れて行ってしまおうと、由紀恵がため息をついた。

「まったく……弱いくせに飲みたがるから……ごめんね。弟君」

「いいです。慣れてるから」

「どうやら、弟は何度かみーさんと飲みに行ってるらしい。しかも、かなり深い事情まで打ち明けてるとみえる。」

「なんか、弟君、会社で大変みたいね」

「まあね。でも、何とかしますよ。自分の問題だし」

「そう」

「ていうかさ……」

弟は一瞬ためらった後に言った。

「センセイ。こうなったら、もう打ち明けちゃうけどさ。実は俺、今、当社拒否中でさ」

「え？」

「っていうか、もっとぶっちゃけると、俺、ずっと引きこもりだったんだ」

今度は俺が驚く番だ。会社の連中にもひた隠しにしていた事を、まさかこんなにあっさり打ち明けるなんて……。

「原因はさっきみーさんの言ってたイジメでさ。8年も引きこもってたんだ。で、やっと、今年になって働きだしたんだけど、その仕事先にイジメのきっかけ作った張本人が来ちゃってさ。それで、また引きこもりに逆戻りってわけ」

「なるほどね。そういう事か……」

由紀恵がうなづく。

「で、会社辞めようか、続けようか迷ってるわけね？」

「そうだよ」

「弟君は辞めたいわけだ」

「今日の午後まではそうだった。でもさ……」

「何？」

「大地を見てたら、本当にそれでいいのかなって思えて来て……」

「大地君を？」

「そう。あいつは、あんな体でも、必死で頑張ってるのに、俺、今まで恥も外聞も捨ててなんか頑張った事あったかなって。あいつの

苦しみに比べれば、俺の悩みなんて、ちっぽけで、くだらないんじゃないかって」

「弟君が、大地の生き様見て良い様に感化されたなら、それで良いと思うけどさ。でも、悩みに重大もくだらないもないよ。それに、障害者だから苦しんでて、健常者だから苦しまないって事もないよ」「けど、どう考えたって、俺らのが恵まれてるだろう？」

「関係ないよ。障害者の人は目に見える部分が不自由なだけ。目に見えない部分では健常者だってなにかしら欠けたとこ持ってるもの」「例えば？」

「弟君、自分で言ってたじゃない。例えば、心の自由さとか」「ああ」

「それに、優しさとか、見栄えとか、才能とか、家族の幸福とか、恋人の有無とか、お金持ちかどうかとか……」

「何となく言いたい事は分かったよ」

「人間て何かが満たされれば、何かに飢えてくるし、何かに突出してれば、何かを欠いている。いつでも、何かを求めている。いつも何かが欠落してて、満足する事がない。そして苦しんでる。完璧な人はいないってだれかが言ってたけど、本当にその通りで……」

「そういう意味じゃ、みんな不良品みたいなもんですよね」

思わず口を挟む。何だか、産婆沙メタル工場でプレスされる廃棄物の山を思い出したからだ。

「そうかもね」

由紀恵が同意する。

「みーんな神様の作った不良品」

「不良品かよ。ひでえなそれ」

弟がつぶやくと、由紀恵が言った。

「ひどくもなんともないわよ。だからこそ、自分の優れた部分で、他人の欠落したところを補うんじゃない。神様はそのために、一人一人に別々の才能を与えられたのよ」

「才能を？　そのためにですか？」

「そうよ。お兄ちゃん」

「有名になるためでも、人より優位に立つためでもなくて？」

「そう。地位と名声は、後からついてくるものよ」

「そういうもんですかねえ？」

「そうよ。だから、私はここ『ふれあいの家』に集まる人には、完璧は求めないけど、精一杯は求めるの。自分のできる事で、相手のできない事を補えばいい。そうして、手をつないでいければいいと思う」

「素晴らしい理想だな」

弟が言う。

「けど今の俺には役に立たないや」

「どうして？」

「それ以前に、前に進むか、後に下がるかも決めかねてる」

「進めばいいじゃん」

「そう、簡単に言うなよ。それが、できないから悩んでるのに」

「だよなあ。あんなに総スカン喰らってちゃん」

俺も同意する。

「でも、弟君は何一つ悪くないんでしょう？」

「確かにそうだけど」

「じゃあ、まずは、自分は悪くないって事をみんなに伝えていけば？」

由紀恵の言葉に、俺らは顔を見合わせた。

ひいたが最後、そいつは残り39人のおもちゃにされる。
学校というステージで、いじられ、いびられ、人格破壊され、存
在そのものを否定される。

そして、どうやら僕は、その40分の1にあたっただけらしい。

でも、深刻に悩む事はない。

いざとなったら、誰かにババを回してしまえばいい。

よく探せば、受け取ってくれそうな奴はすぐに見つかるはずだ。

さあ、よく目を開け。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

久しぶりに出勤した弟に、周囲の目は冷たかった。

当然だ。ただでさえ仕事ができない上に、何日も休み、迷惑をかけまくったのだから。中には、あからさまに聞こえるように言う奴らもいた。

「あいつ。まだ居座るつもりかよ」

「もう。いいだろう。いなくても」

けど、弟は黙って耐えている。周りの視線の厳しさは覚悟の上の出勤だったのだろう。

「大丈夫か？」

復帰一日目の帰り道。俺は弟に尋ねた。

「大丈夫さ。思ったより」

弟がうなずく。しかし、その顔は疲れきっていた。

「無理しなくてもいいんだぞ」

俺は弟を思いやった。

「別の場所で1からやり直すのも一つの道だと思うし」

「大丈夫だって」

弟が答える。

「ここで逃げても、どのみち同じ事繰り返しただけだけと思うし」

「そうかな？」

「なんとなく、そんな気がする。それにさ。俺、色々考えたんだ…」

…稲本の事について」

「稲本の？　なんで、あんな奴の事なんか？」

「そりゃ、一応昔はトモダチだったし」

「一応だろう？」

「一応でもさ…俺、一時期は本当にあいつの事親友と思ってたし、尊敬すらしていた事もあった。あいつだって、俺の事信頼してくれ

てたと思うよ。何でも話してくれてたしさ」

「でも、裏切った」

「そうだけど」

「それで、十分だよ」

「でも、何で裏切ったんだらう？」

「いじめっ子が怖かったからだらう」

「いや。あいつの言動からして、イジメを怖がるような奴じゃなかったんだよ」

「あのなあ」

ため息をつく。

「どんな理由があろうと、裏切った奴は裏切った奴なの。必要以上にこちらから歩みよる事ないの。それより、俺としてはこれ以上おまえが理不尽ないびられ方をして、本当に人を信じられなくなる事の方が心配だね」

「会社の事なら大丈夫さ。田辺センセイも言ってたじゃないか。分ってもらえないなら、分ってもらうように努力すればいいって」

「あの人のいう事はもつともだよ。でも、しょせんは理想さ。世の中はもつと厳しいんだ」

「そうだらうか？」

「そうさ。……そりゃ、俺だって、あの人の言うような世の中であればいいと思うけど……」

「……」

弟はしばらく考え込んだ。そして、やがて決意したかのように口を開いた。

「兄貴の気持ちは分ったよ。けど、もう少しだけ頑張らせてくれ。俺、この先に何かがあるのかを見極めたいんだ。見極めた上で、どうしても無理と思うのなら辞める」

「そうかよ。そこまで言うなら好きにしろよ」

「ああ。好きにするさ」

「けど、道は一つじゃないからな。それだけは忘れないようにな」

「ああ……」

弟の決意は見上げたものだと思う。ついこの間までふてくされて引きこもっていた事を考えればなおさらだ。しかし、どれほど弟の決意が崇高なものであろうと、世の中理想通りにはいかない。次の朝出勤すると、弟の作業スペースが消えていた。正確に言えば弟の作業スペースの上に物が置かれ、作業ができないようにされていたのである。

「あの……これ何ですか？」

問いかける弟に対して、誰も返事を与えなかった。それでいて、ニヤニヤと笑っている。その態度からして、明らかに嫌がらせであることに間違いない。

誰も答えてくれるものが無いと分かると、弟はスペースの上の箱やら金具やらを別の場所に移しはじめた。すると、誰かが怒鳴る声がした。

「おい、河井。勝手にどけるなよ」

声の主は、和田という30代前半をおぼしき男だ。あまり付き合いは無いが、普段はめったに怒る事などないのに……。

「え？」

弟はおどろいて和田さんを見た。

「そこが、置き場所になってるんだよ」

「でも、これじゃ仕事ができない……」

「じゃあ、他の場所でやってくれよ」

なんて奴だ。あきらかに嫌がらせじゃないか？ にも関わらず、誰一人止める人間がない。それどころか、みんな笑っている。あまりに腹がたち、ひとこと言ってやろうかと進み出た時、弟が稲本に向かい、はっきりと言った。

「稲本。これって、お前が考えた嫌がらせだろう？」

突然名指しされて、稲本は驚いているようだ。いや。稲本だけじゃない。周りの人間全てが驚いている、俺も驚いていた。いきなり何を言い出すんだ、アイツはと。しかし、そんな周りの空気などお構いなしに弟は再び口を開いた。

「答えろよ。稲本。これは、お前の考えたいやがらせだろう？」

稲本は視線を泳がせる。その態度からして凶星なのかもしれない。しかし、このやり方はまずい。何の証拠もない相手をいきなり犯人扱いするなんて、戦法としちゃ下の下である。案の定、周りの人間から罵声が飛んだ。

「おい。河井。稲本がかわいそうだろう？」

「証拠もないのに、犯人よばわりか？」

「証拠？ 証拠は確かにないけど……」

弟は口ごもる。ほーら、見た事じゃない。だがしかし、兄貴としてはこれ以上黙って見ていられない。それでとうとう口を開いた。

「なんでだよ、正。どうして証拠もないのに稲本クンを疑うんだよ？ 理由があるなら言ってみろよ」

弟がふいをつかれたようにこちらを見る。俺は視線で促した。『言いたい事あるなら、言えよ』と。こうなったら、ヤケクソだ。好きにすればいい。何が起きたって一連託生だ。俺の気持ちを通じて

か、弟は軽くうなずきこう言った。

「理由は、これが、高2の頃に稲本が毎日受けていた嫌がらせと、そっくり同じやり方だからだ」

かなり離れた位置にいる俺のために、弟は声を張り上げなくてはいけなかった。そのせいで、奴の声はまだ、作業がはじまる前の構内に高らかに響き渡った。

「こいつは、高校のころ、机の上に荷物を置かれたり、椅子を隠されたりっていう嫌がらせを毎日のように受けていたんだよ。俺、今朝、ここに置いてあった荷物を見て、昨日の事みたいに思い出した」

弟の言葉に、フロア内がざわっとなる。渡辺が『え?』って顔で稲本を見た。こいつは、いつも稲本と仲良くしているが、きっと何一つ知らなかったんだろう。俺も弟の言葉に驚いていた。同時に、弟がこんな無謀な手段を用いてもやりたかった事が何かを理解した。

あいつは、みんなに真実を知って欲しいんだ。なぜ、自分がひきこもったのか。そして、どうして、稲本とぎくしゃくしていたのかを。きっと、それは『自分が悪くないって事を伝えていけ』という田辺由紀恵の言葉に従ったことだろう。

やり方としては決して上等とは言えない。しかし、弟がわずかも前に進もうとするのなら、兄としては後押ししてやりたいと思う。それで、俺は声を励ましてこう言った。

「なるほどな。それで、お前はその時、どうしていたんだ? 黙って見てたのか?」

すると、弟は答えた。

「はじめは怖くて黙っていた。けど、最後にとうとう我慢できなくなって、俺が稲本をかばった」

「そうか。それで、その後一体お前の身に何が起きたんだ？」

「それは……」

弟はそこで、言葉を止めて稲本を真直ぐに見て、

「それは、稲本くんが一番よく知っているはずだ」

と言った。

しばしの沈黙が流れる。弟は稲本の答えを待つかのように、元親友の顔を見つめ続けた。

一体どんな言葉を待っていたのか？

謝罪か？ それとも告白か。

しかし、弟に与えられたのはそのどちらでもなかった。

「おい、河井」

それまで、沈黙を守り、ひたすらこのやり取りを見守っていたグループ長の原口さんが、おもむろに口を開き、

「稲本にあたるのはよせ。そこに荷物を置いたのは、稲本と決まったわけじゃないし」

弟が心外そうに原口さんを見る。

「じゃあ。誰なんですか？」

「誰ってわけじゃないよ。あんまりお前が長い事休むから、もう来ないと思って、みんなが自然と物置きにしまじめただけだよ」

「そんなの、嘘だ」

「嘘じゃないよ」

「だって、昨日は、ちゃんと出勤したけど、何も置いていなかった。なのに、何で今日に限って置いてあるんですか？」

その疑問には原口さんではない別のグループ員が答えた。

「昨日は、たまたま置いてなかっただけだ。それに、昨日河井が来たからといって、今日も来るとは限らないじゃないか」

その言葉に反応し、誰かがクスクス笑う。それで、弟がカッとなった。

「絶対に嘘だ！ あきらかに嫌がらせ目的だ」

すると、また、誰かの野次が飛ぶ。

「いい加減にしろよ河井。仲間を悪く言う前に、自分がいままでどれだけみんなに迷惑かけたか自覚しろよ。社会人としてありえないぞ」

「……」

それを言われると、弟は黙るしかない。そんな弟を哀れに思っただけ、原口さんは弟の肩を軽く叩いてこう言った。

「とりあえず、あの荷物、となりの備品室に片付けて来い」

「二人でですか？」

「一人で十分だろ？」

「俺が置いたんじゃないのに？」

「仕方ないだろ。こんな事に人数割いてたら、作業が滞っちゃう。そのかわり、二度とお前の作業台に物は置かせないから」

「……分かりました」

しぶしぶ、弟はうなずいた。原口さんの言葉なら信用できると思っただろう。それで、作業台の上の段ボールやらカゴに手を伸ばしたその時だ。その時になって、いきなり稲本が叫んだ。

「知らない……僕は何も知らないからな！」

フロア内の全ての人間があぜんとして稲本を見る。稲本は青ざめた顔をしてワナワナと体を震わせていた。弟の顔に、哀れみとも失望とも言えぬ表情が浮かぶ。

おまけに、朝、グループの一員が無駄な後片付けなんぞやっていたせいで、弟のグループは1日のノルマを達成する事ができず、2時間の残業をさせられるハメになし、冷ややかな視線が弟に注がれた。

「まあ、そう落ち込むなよ」
帰る道すがら、弟に言う。

「よく、あれだけの事が言えたなって感心してるよ」
すると、弟はぼそりとつぶやいた。

「田辺センサーが、自分は悪くないって事をみんなに知ってもらえと言うから、やったまでのことだ」

「ああ、やっぱりな。そんな事だろうと思った」

「でも、やっぱりあの人の言う事は理想なんだな」

「だから、そう言っただろう」

「ああ。そうだな」

「で、どうする？ これでもまだ続ける気か？」

「……そうだな。もう少しだけ頑張ってみるよ。まだ、試したい事があるんだ」

「試したい事？」

「ああ」

「試したい事ってなんだよ？」

尋ねてみたが、弟は何も答えない。それで、その質問はそこで切り上げ、それきり黙りこくって家路を急いだ。

次の日。

昨日のひとことがきいてか、さすがに弟のスペース上には何も置かれていなかったようだ。

しかし、相変わらず周りの視線は冷たかった。

「おい、今日は早く帰れそうか？」

「無理に決まってるだろう？」

などと、聞こえるように言うものもある。弟はそれらのノイズを黙殺してB4のマニユアルをばさりと開いた。何をする気かと見ていると、それを横に置いて熱心に読みふけている。

「何、今さらマニユアル見てんだよ？」

という罵声がどこから飛ぶ。しかし、弟はそれらも右から左に聞き流し、マニユアルを見ながら作業に取りかかりはじめた。作業に没頭する事でこの場を乗り切ろうと言う事か？ 俺はそんな弟を遠目に見ながら俺は心の中でエールをた。「頑張れよ」と。

こんな具合に、状況は何も良くならないまま日々が過ぎていく。

ずっとこのままエンドレスで不毛な戦いが続くのかとうんざりしはじめた頃、やっと一つの変化が起きた。それは、まず、弟の仕事っぷりに現れてきた。ずっと、1日の解体数が最下位だった弟の成績がいきなり上位10位に食い込むようになったのだ。

これには、誰もが驚いた。兄貴である自分がもつとも驚いていたかもしれない。

「おい。どうしちゃったんだよ？ 急に仕事できるようになっちゃって」

と、弟に尋ねると、

「別に」

と、弟はそっけない。

「別について事はないだろう？ 何か秘けつがあるんだろう？ 参考

のために教えろよ」

「別にたいした事やったわけじゃないよ。単にマニュアルを読み込んだだけさ」

「マニュアルを？　それだけ？」

「そうだよ」

「嘘だろう？」

「嘘じゃないよ。田辺センセイにやれる事からやれって言われたから、まずできそうな事をしたまてだよ」

「それが、マニュアルを読む事だったのか？」

「そうだよ」

「っていうか、今まで読んだ事なかったのか？」

「馬鹿馬鹿しいと思ってたからまともには読んでないよ。その後も、今さら感があって読む気にならなかったしさ。でも、読んでみたら今まで分からなかったところが分つただけじゃなくて、それ以外にも効率の良い方法を見つけて……」

「それで作業が早くなったってわけか？」

「みたいだな」

「はあ……」

俺は感心して首をひねった。

「やっぱり基礎は大事だなあ」

稲本に真実を言わせる作戦は失敗したが、どうやら仕事のレベルをあげる事には成功したようだ。しかし、弟を敵視する連中にしてみれば、それはそれで気に入らないらしい。ある朝の朝礼で、先週の解体成績優秀者発表で、3位に弟の名前が上がった時、

「そんなに頑張らなくてもいいんだよ！」

と聞こえるようにつぶやく声が聞こえてきた。できなければできないで文句を言い、できればできればでケチをつける。坊主憎けりや袈裟まで憎いってところだろう。

しかし、この頃には、既に弟は外野のノイズには関知しないよう

になっていた。なんでも、『言わせたい人間には、好きなように言わせておけばいい』といった田辺由紀恵の言葉に励まされているらしい。ところが、この、超然とした弟の態度が、また周りのカンに触るらしく、またまたイヤミを言われる。

「河井さん、そんなに一人で頑張らないでくれませんか？ 俺らのハードルまで上がっちゃうし」

ちなみに、このセリフを言ったのは稲本だ。それを聞いた原口さんが大声でたしなめる。

「おい。稲本。ムダ口きかずに作業しろ」

先日の不公平なジャッジにキレていただけに、この時は原口さんを見直した。そして、嬉しくなった。世の中たまには良い事があるんじゃないかと。

弟が勇気をもって踏み出した一歩が、着実に道を造っていく。1つ1つ石を積み上げるように、1日1日を慎重に積み重ねていく。こうして人生は築き上げられていく。これを完遂した時を一生というのだろう。これなら、完璧に弟も更生し、今度こそ本当に東京に戻れるかもしれない……。いつしか俺もそんな期待を抱きはじめた。しかし、やっぱり世の中そんなに甘くない。

ある日突然、稲本とそのゆかいな仲間達がつるんで仕事を休みはじめたのだ。表向きは『体調が悪い』とのことだが、その実弟と原口さんへの当てつけであることは明らかだった。

— —
— —
— —
— —
— —
— —

リアルババ抜き 2

ところが、僕が不運だったのは、高校受験に失敗した事だ。
学力がなかったわけじゃない。

受験の前日に、裸でトイレに隠れていなくてはいけなかったせいで、風邪をひき、調子が出なかったただけだ。

それで、県下一の進学校に行くはずが、2流の公立高にいくはめになった。

自分の不幸を呪った僕だったが、そこで思いもよらない人生の転機を迎えることになった。

それは、アイツとの出会いだ。

— —
— —
— —
— —
— —
— —

少しばかりの光が見えた矢先に、この稲本達のボイコットはかなり痛かった。なにしろ、3人もの人員が何日も休み続けたのだ。またもや残業の日々を過ごさなくてはならなくなる。

見兼ねた原口さんが稲本に電話をすると、

「どうしても体調不良で出勤できない」

との事。

「無理でも出てもらわないと困る」

原口さんが言うのと、

「河井さんがいれば、僕らの穴ぐらい埋められるでしょう」

と答えたらしい。やっぱり完璧に嫌がらせだ。

「前に、俺達が前田にやったのと同じ事だよ」

自嘲気味に弟が言う。

「やっぱり、やった事が返ってきた」

確かに、恐ろしいほど正確にカルマの法則が働いていると思う。

しかし、俺的にはそんな抹香臭い法則よりも、

『やっぱり、何もかも無駄なんだ』

と、いつ弟が仕事を投げ出すかの方が怖くて仕方がない。

期待しては裏切られの繰り返しには、そろそろ俺もうんざりしているところだ。残業疲れて体力も落ち、精神的ストレスのために飯も咽を通らなくなる。そんなこんなで、胃も極限まで縮んだんじゃないかというある日、突然原口さんから「定時後会議室に来るように」との呼び出しをくらった。

どうせ、稲本の事だろうと思いつつ、終業後の陰気くさい廊下を

歩いていく。会議室の扉を開けると、案の定弟がいて、原口さんに向かい合いに座っていて、2人の間には凄まじいばかりの重苦しいムードが漂っている。俺は、痛む胃を抑えながら弟の隣に座った。

「実は、稲本の事で話があるんだが」

開口一番、原口さんが言う。ほくら来たぞと思いつつ

「稲本君の事ですか？」

と、俺は小さな声で問い返す。

「ああ。実は、今日、稲本から申し入れがあったんだ」

「稲本君から？ 一体何ってですか？」

「うーん……」

唸ったきり、原口さんは黙り込んでしまった。相当言いづらい事のようにだ。

「気をつかわなくて良いですよ。一体、稲本君が何って言ってるんですか？」

「うん。ショックを受けずに聞いて欲しいんだが……河井兄弟を辞めさせてくれと」

「はあ？」

驚いて二の句が告げない。そりゃ、こっちだって、万が一にも良い事は言われまいとは思っていたが、まさか辞めさせてくれとまで言ってくるとは思わなかった。というか、原口さんの神経も疑う。

普通、こんな事はもっとオブラードに包んで言うもんじゃないのか？

「でも、どうしてですか？ どうして俺と弟が稲本君にそこまで嫌われなくちゃいけないんですか？」

「ああ。どうも、稲本は、この間お前らがあいつの過去をぶちまけた件で怒っているらしい」

「え？ ああ。高校時代に彼がいじめられていた話をした事ですか？」

「そうだよ。あいつにとっては、知られたくない事だったんじゃないかな？」

「それは、そうかもしれないけど……」

そういうと、俺は弟を見た。弟は終始沈黙を守っている。

「あれは、弟がみんなに真実を知ってもらいたくてやった事なんです。それも、元はといえば稲本君が弟の辛い過去をみんなにバラしたからです。その件で弟だってひどく傷付きました。つまりお互い様ってことで……」

「別に辛くないし、傷付いてもねーよ」
始めて弟が口を開いた。

「そういう理由で、やった事じゃねーよ。ずっと前に、俺が稲本を避けていた事があって、それでみんなに変な風に思われちゃっただろ？ その誤解を解きたかっただけだよ！」

「なるほど。気持ちには分った」

原口さんがうなずいた。

「しかし、あの時、お前ら中途半端で話をやめただろう？ そのせいで、フロア内に色んな憶測が飛び交ったらしいんだよ」

中途半端に話をやめたのは、原口さん、あんたが話に割り込んできたからだろ……と、のど元まで出かかった言葉を飲み込み、俺は尋ねた。

「どんな憶測です？」

「お前らの耳には入ってないのか？」

「知りません。正、お前は知ってるか？」

「いや。俺、今はほとんどフロアの連中とは付き合いが切れてるし」
「そうか……」

原口さんはため息をつく。

「実はな、その憶測の中で、稲本は自分が『悪者にされている』って言うんだ」

「悪者にされているですって？」

俺は、驚きのあまり声を上げる。

「と、本人は言っているが？ 違うのか？」

原口さんが訝しげな顔をする。それで、俺ははっきり言ってやった。

「俺らにとっては、ぶっちゃけ悪者なんですけど……」

「は？」

「俺と弟にとっては、正真正銘の悪者だと言っているんです」

俺の言葉に、原口さんは鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔をした。

「そうなのか？」

「そうだよ。なあ、正」

俺は弟に同意を求めた。しかし、弟はそれには答えず、

「そんな事より、原口さんはどう思うの？ 俺と兄貴を辞めさそう
と思ってるの？」

と、原口さんに尋ねた。すると、原口さんは大きくかぶりを振った。

「いいや。まさか。そのつもりなら、わざわざこんなところに呼び
出したりしないよ。俺がお前達をここに呼び出したのは、あの話の
続きを聞きたいからだ」

「あの話？」

「お前と稲本の学生時代の話だよ」

「聞いてどうすんだよ？」

「こんどこそ、公平にジャッジしたい」

「いいだろう」

弟はうなずいた。

「全部話すよ」

そいつの名前は河井正といった。
出会ったのは、学校の図書館だ。

その頃の僕は、毎日図書館に通っていた。教室にいてもイジメられるだけだが、本に囲まれていればつまらない事の全てを忘れられる。図書館は僕にとつては唯一のアオシスだった。そのオアシスに、僕と同じくしょっちゅう現れる奴がいた。それが河井正だった。

始め、アイツの存在に気付いた時は、僕のように教室から逃げてきているのかなと思っていた。しかし、よく観察しているとどうも違う。奴は、ある女生徒が『貸し出し係』を勤める時に限ってやって来る。つまり、女目当てということだ。それが分かると、馬鹿しくなり、河井への興味はすぐに失せてしまった。

それが、なぜ、仲良くなったかっといえ、向こうから話しかけてきたからだ。河井は、俺がしょっちゅうここにいる理由を『単に本が好きなインテリな奴だからだ』と無邪気に信じていた。というのも、T大に行った自分のアニキと同じような本ばかり読んでいるかららしい。それで、僕に興味を持ったようだ。

はじめのうちは、本の話ばかりしてたような気がする。もっぱら話すのは僕で、河井はひたすら聞き役だった。アイツは自分には知識を持つ僕に対し、尊敬の念すら持っているようだった。おかげで、僕のプライドは少しだけ満足させられた。

ところが、ある日、僕はいじめられている現場をアイツに見られてしまった。恥ずかしくて仕方がなかった。『偉そうに語ってたけど、ただのいじめられっこじゃなか』って、見捨てられるんじゃないかと思った。

しかし、その時は、アイツは僕を見捨てたりしなかった。なんのこだわりもなく同じように接してくれた。それで、僕らの友情はますます深まっていった。僕はアイツに気を許し、自分の気持ちを隠す事なく話すようになっていった。

いろいろ都合が良かったんだ。クラスが違ったから、奴もこの件に関しては部外者だし、何の損得関係もないし。だから、僕は大きに語ってやった。日頃、自分が教室内でどんな不平等な扱いを受けているか。それに対し、僕がどれだけ内面の強さを発揮しているかなどなど。

河井は今どき珍しく正義感の強い奴で、イジメの話を聞くとびに怒っていた。そこには好感が持てたが、一つだけ許せない事があった。それは、ボクがいじめられていることに対して、上から目線の哀れみや同情を見せる事だ。折にふれ、僕はイジメなんか平気だと言っているのに、奴は俺を哀れむ事をやめなかった。

高2になった時、僕と河井は同じクラスになった。同じく、俺をいじめてた松浦という男も同じクラスになった。そして、河井の正義感が嘘なのは、クラス替え一日目にすぐ分かった。

こいつは、八方美人で、誰にでも調子良く良い顔をする。松浦にもすぐに気に入られたが、僕には近付きもしなかった。まあ、それは仕方ないことだ。あいつだって松浦は怖いだろうからな。逆の立場なら僕だって同じようにするだろう。世の中はそんなもんだ。

そんな具合に、1学期中僕は松浦とその仲間達にいじめられ続けた。別に平気だった。馴れていたし。それに、僕は松浦という男をよく知っていたし。

ところがだ。

2学期が始まりしばらくした時だった。

何をトチ狂ったのか、例の河井が突然こう叫んだんだ。

「おい！ いい加減にしろよ。いい年こいてイジメやってんじゃねえよ！」

その瞬間、ババのカードは僕の中から離れて行った。

[illegible]

「なる程ね」

全てを聞き終えると、原口さんは感極まったようにうなずいた。「つまり……いじめられていた稲本をかばったのが原因で、河井弟はいじめられるようになり、それがきっかけで8年もひきこもったということか」

「そういうことになるかな」

と、弟がうなずく。

「でもさ」

と、俺は首を傾げた。

「あいつ。なんでそんな見えすいた嘘を言ったのかな？ 少し調べれば誰が嘘ついてるかぐらい、すぐに分かる事なのに」

すると、原口さんが答えた。

「よっぽど自分のやった事を認めるのが嫌なのか、もしくは、本気で自分は悪くないと思っているのか……だろうな」

「あれで、自分は少しも悪くないと正気で思えるなら、たいした根性の持ち主ですよ」

「そりゃ、お前らの立場から見ればそうだろう。しかし、あいつにだって『そういう行動』に出た自分なりの正当な理由はあるだろうさ」

「どんな理由があるにしろ、一人の人間の人生を台なしにしたり、死ぬまで追い込む権利は誰にもないでしょう」

「確かに、相手を死ぬまで追い詰めた時点で、自分の間違いに気付かなきゃいけないさ。それで、自分の考えを改めるのが本筋だろう。しかし、自分の行動の招いた結果が恐ろしい程、人は自分の行動の正当さをやっきになって作り上げようとするんじゃないかな？ たとえ、何一つ『正当な理由が無い』というのが真実であっても、『正当な理由が有る』と信じ込むんだ。始めは嘘と分かっていても、いつしか本当の事と思えてくる。そうやって、自分の心を守るんじゃないのかな」

「でも、嘘を真実と言いくるめたところで『本当の事』からは逃げられませんよね」

「じゃあ、お前は这个世界で、どれだけ『本当の事』がまかり通ってると思うんだ？」

「それは……分からないけど……」

そこで、俺がくちごもると「つまりは……」と弟が言った。

「誰にでも大義名分は必要って事だ。良心の呵責で頭がおかしくならないためにね」

その言葉で、俺は弟の書いた『内戦』という詩を思い出す。

強いやつは、弱いやつを責める。

責める理由は、どれだけだってつくりだせる。

弱い奴は永久に責め続けられる。

そして、いつか醜悪な化け物に仕立て上げられる。

気付かぬうちに悪者にされるんだ。

それもしかたのない事だ。

誰だって自分は正しいと信じたいから

大義名分は必要だもんな

そして思う。

あのフリーズは、そうした思いから産み出されたものなのか。と。

「しかし、そこまで聞くと、これは稲本よりも、むしろ河井弟の問題だな」

原口さんが言った。

それで、俺は再び反論モードに入った。

「弟の？ 弟の何が問題なんですか？」

「つまり、稲本と一緒にいる事が苦痛なのは、むしろ河井弟の方じゃないかっていう事だ」

「ああ。そういう事ですか。じゃあ、もし弟が苦痛だと言ったら稲本を辞めさせるんですか？」

「ことによっては」

「そうですね……」

俺は弟を見た。そして、どうする？ と目で問いかける。すると、

弟はあっさりと返事した。

「俺なら、平気ですよ」

「え？」と俺。

「そうか」と原口さん。

「実は、俺も、こんなことで誰かを辞めさせるのには忍びなかったんだよ。ただでさえ、派遣切りのなんの厳しいご時世に、職場の仲間の一人たりとも無意味に切り捨てたりしたくないんだ」

しかし、俺は全然納得できない。

「けど、稲本……君が『うん』と言いますかね？」

「できる限り説得してみるよ。いざとなったらグループを移動させるって手もあるし」

「グループ移動をさせたって、顔をあわせずにはいられないでしょう」

「だから、端と端のグループに移動させるんだよ。なるべく顔をあわせずに済むように」

「そうですか」

そうまで言うなら仕方がない。

「分かりました。弟も納得しているようですし。後は原口さんにおまかせします」

そういうと、俺はしぶしぶ頭を下げた。

こうして、ババはあいつの手に渡った。

あいつとは河井だ。何をとち狂ってか僕の事をかばったお人好しの馬鹿だ。

僕をかばった事で、イジメのターゲットは奴にうつり、いままで僕をいじめていた連中がいきなり僕の友達に変わった。その中には松浦もいた。驚きだよ。松浦が僕に優しくするなんて。

しばらくすると、河井は学校に来なくなった。どうやら、今流行りの不登校になったらしい。

それを聞いても、その時の僕には同情も罪悪感もなかった。

ただ、家に帰り布団の中で凱歌をあげた。

ざまーみろ、河井。ざまーみろ、松浦。

僕は、勝った。勝ったんだ！

と。

しかし、原口さんの説得にも関わらず稲本は会社に来なかった。それでも、万が一稲本が来る事を考えて1週間後予定通りにグループレポートが行われた。

俺と弟はフロアの一番禺のEグループになり、稲本はAグループの所属となった。端と端だ。なるほど、これなら稲本が来ても顔を合わせずに済むだろう。

471

そして俺の中にも変化が起きた。

しばらくどうやっても描く事ができなかった絵を、心から描きたいと思うようになったのだ。今ならば何かが描けると思ったわけじゃない。ただ、やみくもに描きたくなったのだ。こういう感覚は久しぶりだった。

それで、ある夜、スケッチブックを開き筆をとってみた。そして筆を走らせる。モチーフは、ここ数日間に起きた弟の変化だった。どう描こうか迷う必要はなかった。イメージは非常に自然に俺の心の中に生まれ、筆先を通じて紙の上にはとぼしり出てきた。

始めに一年前の貧乏神のごとき弟の姿が現れる。その中に、働き始めの頃の弟の姿が現れる。そして、前田と揉めていた頃の弟、大地とであった頃の弟、こうしてマトリョーシカ状に幾重にも重なった弟のまん中で、幼い頃の弟がニコニコと笑っていた。

それから数日後の朝礼で、稲本が辞めたという話を聞いた。表向きは病気のせいということになっていたが、もちろん真実は違う。

ああ、やっぱり無理だったか……

と俺は思った。

複雑な気分だ。弟の事を考えればホッとした気もするが、一人の人間を踏み台にしたようで後味が悪い。それは、弟にとっても同様だったようで、兄弟揃ってその日一日冴えない顔をしていた。

「正直いって、辞めて欲しくなかった気もする」

帰り道で弟がぽつりともらした。

「きちんと、全面对決したかった」

「それ、本心かよ？」

俺は言い返した。すると、弟はうつすらとした笑みを浮かべて首

を振った。

「分からない。あいつが辞めたと知ったから、言える言葉かもしれない。究極の本音は、ホッとしてる」

「だったら、それでいいじゃないか」

「でも、なんか色々と責任を感じちゃって」

「お前が気にしたって仕方ないだろう」

「でも、どう考えたって俺が原因で辞めたと思うし」

「そりゃ、まったく関係ない事はないと思うけど、原口さんはあいつに選択肢を与えただろう？ その選択肢は2つだ。かつての罪と向かい合って償うか、それとも罪の重さに負けて逃げるかだ。そして、あいつは逃げる事を選んだ。選んだのはアイツだ。お前が選ばせたわけじゃない。良心の呵責を感じる事はないよ」

「そうは言ってもさ」

「……とにかく、今のお前が考えるべき事は、この先自分がどう生きていくかだけだよ」

「そう割り切れるかな」

「割り切るしかないよ。自分の事もままならないのに、他人の事なんかどうこうできないだろう？」

「なるほどね……」

俺の言葉に、弟はしばらく考え込む風をしていたが、やがてこう言った。

「しかし、人生って分からないもんだな。俺と稲本のことがこんな風に決着するなんてさ」

「そうさ。人生、一瞬先には何が待っているか分からない。もしかしたら、とんでもない幸福が待ってるかもしれない」

「稲本にも希望はあるのかな？」

「あいつの事はもう考えるなよ。お前は勝ったんだから」

「……勝ち負けの問題なのかな？」

[illegible]

リアルババ抜き 5

そうだ。僕は勝った。

僕をいじめ続けた松浦にも、同情するふりして僕を見下していた河井にも。そして、いまわしいババのカードにも、何もかもに勝った。

とはいえ、河井がクラスから消えれば、またババは僕の手に戻ってくるはずだった。以前の僕なら、それを受け止められたかもしれない。しかし、その時の僕は、既に以前より賢くなっていた。1度ババを持たない幸福を味わった今、2度と昔のようなみじめな生活には戻りたくないと思うようになっていた。

昔の僕はババを恐れなかった。

しかし、今の僕はババが恐ろしくて仕方がない。

だから、僕は生き方を180度変える事に決めた。それまで軽蔑していた奴らに徹底的に同調し、奴らの世渡りを徹底的に学んだ。あんなに嫌がっていた弱い者イジメにも積極的に参加した。そして、強い奴にこびを売り、ついていけない者は切り捨てた。松浦は、そんな僕に興味を失ってか、新しいターゲットを見つけ、いたぶる事に熱中していた。

「実は、俺先月からボランティアしてるんだ」
唐突に告げられたのは、2009年の1月、まだ正月気分もぬけ
切らぬ、ある日曜のことだった。

絵筆片手にきょとんとして弟を見上げる。そしてかろうじてこう
言う。

「そうか。……それはいい事じゃないのかな？」

「なんだ？ その興味のなさは？」

「いや。キョーミないわけじゃないけど……今、絵に集中してるし」

すると、弟は描きかけの絵を覗き込み

「なんだ、そのよっぱらったピカソみたいな絵は」

とケチをつける。

「酔っぱらったピカソとはなんだ？ 芸術じゃないか。もっとも、
これは、ほんのウォーミングアップだけだな」

「じゃあ、ウォーミングアップを中断して聞いてくれ」

「聞ってるじゃないか。ボランティアしてるんだろう？」

「そのボランティアで、兄貴の手を借りたいんだ」

「はあ？」

なんだか突拍子もない話の流れである。

「俺にもボランティアをやってことか？」

「そうさ」

「いや、確かに、ボランティアは立派な活動だと思うよ。でも、俺
にも予定というもんが……」

「ずっとやれって言うてるんじゃないよ。来週の土曜だけ手を貸して欲しいんだ」

「来週の土曜？ 1日だけ？」

「ああ。無理か？」

「いや。それなら大丈夫だけど。土曜に何かあるのか？」

「うん、来週の土曜日にサプライズパーティーをやるんだ」

「サプライズパーティーって、誰かの誕生日かなんか？」

「そうだよ。ほら、覚えてない？ ふれあいの家で翼って子にあった事あるだろう？ 全身麻痺の」

「翼？」

俺は記憶の糸をたぐってみた。確かに聞いた事がある名前だ。

「ああ、思い出した。確か、大地君と一緒にいた……」

「そう。その翼の誕生日」

「なるほどね。てことは、お前、ふれあいの家でボランティアしてるってことか」

「そうだよ」

弟はうなずいた。そして、詳しく語るにはこういう事だ。

何でも、去年の12月から『ふれあいの家』で土曜開所というのを始めたらし。土曜開所というのは、元々休日だった土曜日にも施設を解放し、障害者の人達のレクリエーションやサークル活動などに活用してもらおうという試みだ。

弟はそこで、子供達の遊び相手のボランティアをしていて、そこに、翼や大地や他にもたくさんの子供達が来ているらしい。その、子供達の間で今度の土曜、翼のためのサプライズパーティーをやるうという話になった。本人に気付かれないようにごちそうを作り、プレゼントを用意して驚かそうってわけだ。

ところが、買って来たものを運ぶだけの男手が足りないらしい。

「それで、俺の御指名ってわけか」

「そうだよ。ついでに、これは田辺センセイのリクエストだけど、お絵書き教室で場も和ませてくれって事だ」

「ああ。なるほどね。けど、買い物なんて、車をつかえばいいだけの話じゃないのか？」

「もちろん車はつかうけれど、運ぶのは荷物だけじゃないんだよ。一緒に来る障害者の子達の子椅子も押さなくちゃいけない。自分は多分その役目になるから、荷物は兄貴に持って欲しいんだ」

との弟の答え。

だったら、健常者の職員だけ行けばいいじゃないかとも思うが、多少の手間をかけても障害者の子供達に色々な経験をさせてあげたいという大人達の配慮なのだろう。そう思えば無下に拒否もできなかった。それで、俺も別に忙しいわけでもないし「いいよ」と答える。それにしても、だ。

「それにしても、お前、よくボランティアなんかやる気になったな。みーさんにでも頼まれたか？」

「いや」

弟は首を振った。

「自分でやりたいと言ったんだ」

「自分で？」

俺は驚いて弟を見た。

「しかし、またなんで？」

「うん……実は」

そう言うのと、弟は少しだけちゅうちょして、その後照れくさそうにこう言う。

「実は、俺、介護福祉士目指そうと思ってさ」

「介護福祉士？」

「うん。今の、工場の仕事はパートだし、一生できるわけでもないだろう？」

「確かに……」

一応、社員登用制度もあるらしいが、誰でも希望を聞いてくれるわけでないし、第一弟に一生ラインが勤まるかという問題もある。

「そうか。それで、介護福祉士か。いいと思うよ。介護の仕事なら、就職先にも困らなさそうだし」

「うん。給料はあんまり良くないみたいだけど、やりがいがありそうだ」

「けど、そんなに簡単になれるもんなの？ 資格とかいるんじゃないのか？」

「あるけど、実務経験が3年あればとれるらしいよ。中卒でもOKって」

「実務の中にボランティアも入るのか？」

「いや。ボランティアは自分に適性があるか見るためにやってるだけだ」

「適性？ ありそうか？」

「分からないけど……。少なくともテレビをバラしているよりはマシみたいだ」

「そっか……」

「もう少し様子を見て、本当にできそうだと思ったら、本格的に仕事を探してみようと思う」

「……そっか、そっか……」

俺は何度もうなずいた。

嬉しいのかなんなのか、言葉にはとてもしがたいが、心の奥底からあたたかいものがあふれてくるのが分かる。

2年前、東京から戻った日に。

何度叩いても決して開く事のないドアの前で、肩を落とした日々。

自殺未遂を謀った弟を助けようとして死にかけたあの時に。

まさか、今日という日が来るとは思わなかった。

まったく人生、一寸先は何が起きるか分からない。だから生きて行こうと思えるのだらう。たとえば、今がどれほどの闇に閉ざされているとしても。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

リアルババ抜き 6

こうして、僕は高校を卒業した。

長年続いている不況のせいでロクな就職先がなかったが、辛うじてインチキ臭い健康食品会社に入り、営業の仕事をすることになる。営業なんて正直いってやりたくなかったが、人との駆け引きを覚えるためにはいい勉強になったかもしれない。

松浦達との付き合いは卒業後も続いていた。付き合いたくなくても、家が近いので逃げようがなかった。

そう。実は僕と松浦とは同じ町内に住んでいる。幼稚園も同じだった。つまり、僕は、子供の頃から高2になるまで、ずっと松浦にいじめられ続けていたという事になる。普通に言えば幼馴染み。しかし僕にとっては、ただの悪縁・因縁でしかない。

松浦は、高校を卒業をしても仕事もせずにブラブラしていた。金も稼がないくせに遊び方だけは派手だった。一体どれほどの金を使っているのか知らないが、その一部を僕が負担させられていたのは確かだった。奴はしょっちゅう僕に金を借りに来た。もちろん、貸した金が一度も返ってきたためしはない。

ある日、ついに決心して家を出る事にした。家を出てしまえば、松浦との付き合いも切れるだろうと思ったからだ。

家を出るにあたり、両親にはくれぐれも誰にも言わないようにと念をおしておいた。にもかかわらず、松浦は僕の居所を突き止めて

来た。どうやら、僕の勤めている会社に問い合わせたらしい。そこ
までして、僕を追いかける執念が理解できない。僕は一生奴につき
まとわれるんだろうか？ そう考えると絶望的な気分になってくる。
そんな矢先、勤めていた会社がつぶれた。ボーナスも無くなつた頃
から、やばいとは思っていたが、まさか潰れるとは思わなかった。
当座の生活には困ったが、感傷は無かった。元々、それほど愛着の
有る会社でも、仕事でも無かったからだ。それよりも、それを機に
アパートを引っ越す事にした。今度こそ松浦に捕まらないところに
逃げようと思ったのだ。

新しい引っ越し先は、実家から二駅行った先のボロアパートだっ
た。何でそこにしたかといえば、高校の頃に何度か来た事があって、
よく知った場所だったからだ。まったく知らない場所よりは心強く
思えた。

引っ越しした後の問題は、次にどんな仕事につくかという事だっ
た。

正直、営業はもう嫌だった。しかし、僕に選り好みできる程の力
は無い。2流高校卒業で、ロクなスキルも無い。そんな人間を簡単
に雇ってくれる程世の中は甘く無い。職安に通う日々の中で、何度
か『弁護士』と『教師』という言葉が頭の中をよぎるが、今の僕に
は夢の夢でしかなかった。

しかし、とりあえずは生きて行かなければいけない。貯金にだっ
て限りがある。それで、まともな仕事が見つかるまでのつなぎとし
て、近所のリサイクル工場でパート勤務をすることに決めた。

そして、そこで、僕はアイツと再会する事になった。

アイツ。

河井正。

僕からババのカードを引き受けて、潰れてしまった男。

8年も引きこもっていたにもかかわらず、河井の見た目はそれほど変わっていなかった。ただ、一つ大きく違っていたのは、あの頃の調子の良さ（脳天気さ？）が無くなっていた事だ。すっかり、陰気で疲れ果てているように思える。そして、常に人を警戒している。あんな事になるまでは、松浦相手でも平気で冗談をとばせるような奴だったのに。河井がイジメを受けていたのは2学期から3学期半ばの約4ヵ月でしかない。たった4ヵ月で、人はここまで変わってしまうのだろうか？

最初は『ざまあみろ』と思っていた。全部報いだよと。

その次に、罪悪感が押し寄せて来た。俺のせいでこいつの人生狂わせてしまったんじゃないかと。

最後には開き直ってやった。俺のせいじゃねーよ。自己責任だよ、自己責任。

色んな思いがあったが、とりあえず上辺だけでも上手くやるのが社会人というものだ。その点では自信があった。本音を隠して上手くやる事にはすっかり馴れている。

一方の河井の奴ときたら、全然なっちゃいなかった。俺に対して露骨に嫌な顔を見せるわ、仕事はできないわ……。それでかえって安心したぐらいだ。『こんな奴、敵にもならない』と。

しかし、このままでは仕事やりにくくて仕方がない。一応、かつての友人としてひとこと忠告してやろうかと思いつく。社会人の先輩としてアドバイスしてやる事はアイツの為にもなるだろう。

ところが、これが余計な事だった。せっかく『過去の事は水に流して、仲良くやった方が良い』と忠告してやっている僕に向かって、

生意気にもアイツはこう言いやがったんだ。

「お前って、そんな奴だったんだ。高校の頃、いじめっこを見下してグダグダ言ってた事は全部嘘だったんだ」

……なんだと？

僕の中で何かが切れるのが分った。

確かにあんな事があるまで、僕はいじめをやるような奴を軽蔑していたさ。そういう自分を誇りにも思っていたね。でも、それが今更なんだって言うんだ？

僕は河井に言い返した。

「ま、人は変わるもんですからね」

すると、河井はこう言った。

「変わったんじゃないくて、それが本性だったんだよ。残念だったね」

その言葉で、僕の怒りは頂点に達した。

……本性だと？ 俺が松浦なんかと同じって言うのかよ。冗談じやねえよ。この引きこもりが。

けど、表面上は平気なふりをして、奴に対しありったけの侮蔑の言葉を投げ返す。

「じゃあ、河井君が仕事でまったく使えない奴なのも、誰かの『せい』じゃなくて、本性だったってことだね」

僕の言葉に河井は黙りこくってしまふ。

ざまあみろと、僕は思う。そして、そのタイミングで席を立った。これ以上そこにいれば、感情が爆発してしまいそうだったからだ。

しかし、アパートに帰っても、河井の言葉が耳について離れなかった。アイツの言葉は、意外な程ダメージになったらしい。僕は、無理矢理布団に潜り眠る事にした。しかし、夢の中にまで河井が登場し、こう言う。

「そうだよ。お前は生まれながらの卑怯者だよ。いじめていた奴を軽蔑していたのは、はじめな自分を認めたくなかったからだ。軽蔑してたんじゃない、軽蔑するふりをしていただけだよ。でも、分つただろう？ お前も他の奴と変わりない、卑怯で汚い人間なんだよ。そんなお前が弁護士だ？ 教師だ？ 笑わせんな」

「違う……」

叫びながら目がさめる。

夢だと気付き、呆然とする。

無意識のうちに涙が流れ出す。

僕は思う。

なんで、こんなところで河井と会わなくちゃいけないんだ？ せっかく松浦と手を切れたのに……。僕は一生ババのカードに取り付かれて生きていかなきゃいけないのか？

ひとしきり泣き終えると、僕は決心した。

もういやだ。この苦しみから逃れるために、河井を目の前から消してしまおうと。

— — —
— — —
— — —

リアルババ抜き 7

その翌日から、僕は計画を実行に移しはじめた。
たいして難しい事じゃない。あいつは元々浮いているし、仕事も
できない。少し背中を押しさえすればいい。そうすれば、あつとい
う間に奈落の底に落ちて消えるだろう。

まず、僕がやったのは、悪評をたてる事だった。

河井弟は、僕を無視する。

河井弟は、僕に仕事を教えてくれない。

河井弟は仕事の連絡も回さない。

おまけに兄貴とつるんでいちゃもんをつけてくる……と。

まったくの嘘じゃない。現にあいつは僕を避けていた。

悪評を立てた事で、同僚達の河井への対する態度は、ますます冷
たくなる。今や唯一の味方は兄貴だけだった。その兄貴を見る度に、
僕は弟に対するのとは別の嫌悪感を感じていた。『お前、T大まで
行って、こんな所でなにしてるんだよ』と。

味方が兄貴一人になっても、あいつはしつこく会社に出てきた。
さっさと逃げ出せばいいのに。

次に、僕がやったのは、河井がみんなに『一番知られたくないであろう事』をフロア中にばらす事だった。

それは、あいつが元引きこもりだって事だ。あいつが自分の過去の事を隠しているのはすぐに分った。きつと恥じてるんだろう。気持ちちは分かるよ。僕だって、いじめられていた事なんて知られたくない。知られる事で、自分が汚物みたいに思われるのが嫌なんだ。だからこそ、僕はばらしてやった。

安の定、それからしばらくするとあいつは会社に来なくなった。

『ざまあみろ』と心の中でほくそ笑む。これで、永遠に僕の目の前から消えてくれるだろう。

ところが、僕の考えは甘かった。

2週間程たつと、あいつは再び戻って来た。

『何しに戻って来たんだよ』

と、僕は思った。

『もう、来なくてもいいのに』

それで、今さらお前の居場所なんかないという事を示すために、みんなで示し合わせてわざとあいつの作業スペースに荷物を積み上げておいてやった。

ところが、これが僕の犯した第2のミスだった。それを見た河井が、僕に言ったんだ。

「稲本。これって、お前が考えた嫌がらせだろう？」

内心ぎくりとするが『なに、大丈夫だ』とこの時は思っていた。
僕の味方は多いからだ。

「なにを証拠に？」

安の定、皆が罵倒する。すると、河井正は堂々と答えた。

「なぜなら、これが、高2の頃に稲本が毎日受けていた嫌がらせと、そっくり同じやり方だからだ。こいつは、高校のころ、机の上に荷物を置かれたり、椅子を隠されたりっていう嫌がらせを毎日のように受けていたんだよ。俺、今朝、ここに置いてあった荷物を見て、昨日の事みたいと思い出した」

河井の言葉に、フロア内がざわついた。みんながびくりして僕を見る。何よりも驚いたのは僕だった。まさか、あいつがこんな事を言い出すなんて。心拍数が上がってくるのが分かる。ばれた。僕のみじめな過去が……。しかし、事はそれだけでは終わらなかった。うちひしがれている僕に追い打ちをかけるように河井の兄貴が叫んだんだ。

「なるほどな。それで、正。お前はその時、どうしていたんだ？
黙って見てたのか？」

すると、河井正は答えた。

「はじめは怖くて黙っていた。けど、最後にととう我慢できなくなって、俺が稲本をかばった」

「そうか。それで、その後一体お前の身に何が起きたんだ？」

「それは……」

河井正はそこで、言葉を止めて僕を真直ぐに見た。そして言った

「それは、稲本クンが一番よく知っているはずだ」

その言葉を聞いたとたん、頭から血が引いていくのが分った。その後、フロア内でどんなやりとりがあったかは覚えていない。なぜなら、僕がその場に居ながらにして、その場に居なかったからだ。僕の心は過去へと遡っていた。高2以前のあの辛い日々へと。そして、ババが僕の手から離れたあの日へと。その白日夢の中で、手を離れたはずのババのカードがブルーメランのごとく返って来て僕の心臓を切り裂く。まるで、僕の罪を突き付けるかのようだ。その痛みから逃れたい一心で僕は叫んだ。

「知らない……僕は何も知らないからな！」

それからしばらくは、僕は河井正と同じ職場で頑張りを続けた。

しかし、日に日に耐えられなくなってくる。河井正の存在にだ。

2週間の休みの後、あきらかにあいつは成長していた。攻撃されても前のように動揺しないし、仕事に対する姿勢も以前とはうって変わって真剣味を帯びている。始めは快く思っていなかった仲間達の見る目もしだいに変わって来た。一体、あの2週間の間に奴に何があつたんだろう？

河井を見るたびに、僕はみじめになった。自分の卑怯さ、弱さ、愚かさを目の前につきつけられる気がしたからだ。河井が憎くて仕方がなかった。あれだけの目にあつて、なんでそんな風に変われる

んだ？ そんな風に思っている間にも、河井正はどんどん成長していく。まるで堰を切った川みたいに。そして、ついに仕事でも僕をはるかに追い抜かしはじめた。時を同じくして、僕に対する嫌な噂がたちはじめる。

ついに僕は耐えきれなくなった。それで、仲間としめしあわせ、仕事をボイコットする事にした。くだらない悪あがきだ。でも、どうしても、このまま河井と働く気にはなれない。最後には責任者の原口さんという人に言ってやった。

「河井兄弟と僕のどちらかを選んで下さい」

と。

しかし、「どちらを選べない」と原口さんは言う。「事情をみんな知ってしまったから」と。『事情』とは、おそらく僕の裏切り行為のことだろう。

僕は仕事を辞める事にした。

こうして、再び仕事探しの日が始まった。

ちょうどその頃、世の中では派遣切りのニュースが流れ始めていて、ますます就職の状況は厳しくなっていた。ずっと、時給の安いパートなんかしていたために、貯金も大分切り崩してしまった。次に働くなら、正社員が良いと思って探すが、なかなか思うような仕事が見つかからない。

そんなある日、インターネットの知り合いを通して、素晴らしいチャンスに巡り会った。とある弁護士事務所の人が、アシスタントを探しているが、なかなか良い人材が見つからなくて困っていると

いうのだ。この人は、以前からオンライン上で付き合いの有る人で、僕が密かに法律の勉強をしている事も知っていた。住まいも同県内ということなので、ダメ元で雇ってくれないかと聞いてみたところ、なんと「君なら下手な学生より勉強してるし、案外いけるかもしれないな。一度、試しに面接に来てみるか？」と言ってくれた。そして「もし、適性がありそうなら、うちで働きながら大学へ通う事も考えていい」とまで請け負ってくれた。僕にとっては福音だ。社会人になって以来、始めての明るいニュースだ。

これで、再起できる。松浦も河井もない世界にいける。そこで、僕は、新しい人生をやり直すんだ。

面接は、今週末土曜日の1時からとのこと。

「申し訳ないが、時間は必ず守ってくれ。僕は時間の守れない人間は信用できないんだ」

と、言われる。その点では僕もまったく同じなので、心配はなかった。

そして、土曜日。スーツを着て履歴書を持ち、少し早めに家を出る。

面接会場は電車で30分程行った、県庁所在地の有る町だ。

まだ早いし、ちょうど昼時だし、昼飯を食ってから現地向かう事に決める。

それで、ゆったりと歩いてショッピングモールへと向かった。あそこなら、昼飯を食べる場所がたくさんあるはずだし、駅からも比較的近いからだ。

「今まで全然気にしたことなかったけどさ、車椅子なんかを押しているって、障害者用の設備がどれだけありがたいかがよく分かるよ。例えば駅のエレベーターなんかがそうだ。足の悪い人間が2階改札から1階のホームに降りるのに階段では間に合わない」

大地を乗せた車椅子を押しながら、弟がとめどなく話す。

「気のきいた地下鉄なんかだと、各駅の同じような位置にエレベーターが設置されていたりして、これは本当に助かる。トイレにしてもそうだ。障害者用のトイレは広いし、必ず洋式になっている。特に女性は和式じゃどうしようもないだろう。だから、ああいう施設は絶対に健常者は使っちゃいけないね。ホントそう思うよ」

ここはショッピングモール。土曜とあってけっこう混んで居る。俺の横には車椅子を引いた弟が、前にはみーさんとかなえが歩いている。お洒落をした若いやつが行き交う中、車椅子を引いている俺らの姿はさぞかし目立っている事だろう。

しばらく歩いていくと、目の前におおきなトイザラスの看板が見えてきた。

「着いた、着いた」

と、みーさんが振り返った。

「ほら、大地君トイザラスに着いたよ。さ、プレゼント選ぼうか」
「うん」

大地がうなずく。そして、俺らは店に入ってしまった。

ショッピングモールの東奥のスペース全てを占めているだけあって、店内はとてつもなく広い。オモチャの種類も多く、どこに何が置いてあるのやらさっぱりだ。しかし、大人の俺らにはさっぱり不案内でも、子供はよく知っている。大地が「あっち」という方に向かうと、なる程、小学生の男の子が好みそうなオモチャが一杯見つかる。

「翼君は何が好きかな？」

かなえがアニメのカードやなんかを手にして首をかしげた。

「サッカーボールとさ、それと、プラモデル」

「え？ 翼君ってプラモデル作れるの？」

俺は大地に尋ねた。彼は、確か、全身麻痺で言葉も話せなかったはず。

「作るのは無理だけど、見るのは好きみたいだから、僕と友達で作ってあげるんだ。そして、ベッドの近くに置いてあげようと思って」
「ああ。そういう事ね」

「私はさ、このお人形を上げようと思うんだけど」

と、みーさんが馬のぬいぐるみを持って来る。

「人形なんて女の子みたいじゃないか？」

と、弟が首をかしげると、

「翼君は、馬も好きなんだよ」

と、大地が言う。

「随分たくさん買うんだな」

俺が言うと

「園のみんなからのプレゼントなんです」
とかなえが答えた。

なるほど。しかし、量が多い。しかもけっこうかさばる物が多い。それで、会計を済ませた後はカートに乗せて移動する事にした。もちろん押すのは俺の役目だ。そのまま食料品売り場に移動し、まず、ケーキの材料を探す事にする。

「ケーキなんか、どこかで買えばいいのに」

と、うっかり口にする、

「手作りの方が、おいしいんだよ」

とのみーさんの言葉。

「うん。みーさんの作るケーキは最高なんだよ」

と、大地も加勢する。

こうして全ての買い物物を済ませると、

「まだ、ちょっと時間あるし、ジュースでも飲もうか」

と、みーさんが提案した。

「飲む飲む！」

大地が嬉しそうにうなづく。

それで、フードコートでジュースを買って、モール中央にある噴水のほとりのベンチに移動し、少し休憩する事になった。

「きつと翼、驚くね」

積み上げられたプレゼントや、料理の材料を見てウキウキと大地が言う。

「そうだね。すごく驚くよ」

みーさんが答える。

「あー。驚いてひっくり返るかも」

弟が答える。

「そしたら、みんなで助けてやらないと」

その言葉に大地が笑った。

「そろそろ、みんなも飾りつけが終わった頃かな？」

かなえが時計を見る。

「うん。終わってお昼ごはん食べてる頃だよ。きつと大地が答える。

「じゃあ、後は歌の練習をすれば、ばっちりだね」と、再びかなえ。

「ハッピーバースデー歌うんだよね」

と、大地。

「お前、音外すなよ」

と、弟。

「大丈夫だよ」

頬を膨らませる大地。

そんなやりとりを俺は黙って聞いていた。何となく、見えない連帯感を感じて何となく入りずらかったからだ。

でも、俺は弟のために喜んでいた。こんな風に、自然に、肩の力を抜いていられる場所がようやくこいつにもできたのになって。いよいよ、俺のここでの役目も終わるのになって。

その時、妙な視線に気がつき、俺はふと目を上げた。そして、ぎよつとした。

なぜなら、そこに、稲本がいたからだ。

稲本は、俺らからわずか10メートル先のベンチに腰かけ、食い入るようにこちらを見つめていた。

スーツを着て、髪を切りそろえ、稲本はやけにぱりつとした格好をしている。……仕事の途中なんだろうか？ ……というか、こういう場合、声をかけるべきなのかどうなのか？ 迷っていると弟が立ち上がった。どうやら、奴も稲本に気がついたらしい。そして、なんの躊躇もなく稲本に向かって「よお」と言う。

……よせばいいのに……それがどうやら俺の本音だった。あいつの事はもう決着がついたんだ。向こうだって、今さら関わりあいになりたくないだろう。

ところが、弟が呼びかけると稲本もこちらに近付いて来た。妙な緊張感が漂ったような気がする。

弟は親しげに語りかけた。

「どうしたんだよ？ 背広なんか来て。もしかして、仕事中？」
それには答えず、稲本が言った。

「その3人、お前のお友達か？」

「どうやら、みーさんと、かなえと、大地の事を言っているらしい。

「ああ。そうだよ」

弟がうなずくと、稲本はくすつと笑った。

「何がおかしいんだよ？」

訝しげに弟が尋ねる。すると、稲本は言った。

「いやさ。お前にはピッタリのお友達だな、と思って」

「それ、どういう意味だよ？」

「別に……。言葉通りの意味だよ」

「分からないな。はっきり言えよ」

「元引きこもり君に障害者の仲間達なんてさ。……やっぱり、類は友を呼ぶのかなって」

稲本が言い終わるのを待たずに、弟は殴りかかっていた。8年も引きこもっていた弟のどこにそんな力があつたのか……稲本の体が吹っ飛んで、噴水の中に落ちる。

「何、するんだよ？」

叫ぶ稲本に、弟が飛びかかって行った。恐ろしい程の弟の激しいキレ方に、俺も、みーさんも、かなえも、大地も呆然とする。が、すぐに我に返った俺は、弟を制止しに入った。

「おい！ よせよ！」

しかし、弟はものすごい力で俺を振り払い、稲本の顔を殴り続けた。

「謝れ！ 謝れ！ みーさんに謝れ！ 大地にも謝れ！」

結局、警備員に取り押さえられる事で、騒ぎは一件落着した。そして、稲本と、弟と、2人を止めようとした俺は、警備員室に閉じ込められ事情聴取のような物を受けるはめになった。

「で、何がケンカの原因ですか？」

初老の警備員が言う。

「別に……ただの個人的いざこざです」

髪から水を滴らせて、弟が答える。弟と稲本は、噴水にはまったせいで全身びしょぬれになっているのだ。

「なんで、こんな風に呼び出されなきゃならないんですか？ たかが、個人的なケンカじゃないですか」

俺は文句を言った。すると、警備員が答えた。

「いや。最近、わざと人目につくところでいざこざを起しておいて、店員の注意を引いた隙に商品を盗んで逃げるっていう犯罪があつちこつちで起きているらしくてね」

「俺達もそうだって言うんですか？ 少なくとも俺も弟は、そんな犯罪するような奴とは関わりありません。おそらく、そっちの奴も関わってないと思います」

「そりゃあ、自分で自分が犯罪者と言う人間はいないだろう」

「そこまで疑うんなら、広場近辺の店から何か無くなってるかどうか調べてください。そうすれば、俺や弟の潔白が分かると思います」

「だから、今、それを調べてるところなんだよ」

ああ、なる程ね。と納得して待たされる事30分。その間に、住所、氏名、勤め先、何しにここに来たかまで尋ねられる。その結果、驚いた事に、稲本は今日は面接があり、そのついでに昼飯を食いに来ていたのだという事が分った。

それからさらに拘束される事30分。こつてりしぼられた後、ようやく俺らは解放された。

関係者入り口から外に出ると、みーさん達が心配そうな顔で立っている。

「大丈夫でしたか？」

と、かなえが駆け寄ってくる。

「ごめん。心配かけちゃって」

俺と弟はひたすら頭を下げた。時計を見れば、もう12時半だ。早く帰らないと、パーティーの準備に間に合わない。のんびりと昼飯を食ってるヒマもなさそうだ。俺らは急いで駐車場に向かった。稲本は既にその場から消えていた。1時から面接があるとか言っていたが、あんなにずぶぬれになっちゃって、しかもこの時間から会場に向かっているようで間に合うんだろうか？

色々、トラブルはあったが、翼のサプライズパーティーは何とか無事に終わった。

片づけが終わり、帰ろうとした時、弟の姿が見えない事に気付く。どこにいるのかと探したら、部屋の隅っこでぐったりしているのを見つけた。

「おい、正」

近付いて声をかけるが、返事がない。

「なにしてる？ そろそろ帰るぞ」

もう一度声をかけるが、やはり返事がない。

「おい、どうした？ 具合でも悪いのか？」

すると、弟がけだるそうな目をこちらに向ける。そして、言う。

「ちょっとね」

「え？ 腹でも壊したか？」

パーティー中は元気に見えたのに。

「そうじゃなくて、精神的に……」

「精神的に？」

「うん。俺、ボランティア失格なんじゃないかって思って」

「どうして？」

「いくら、腹が立ったとはいえ、あんな風に喧嘩するなんて」

「ああ」

俺はやっと納得した。どうやら弟は、ショップでの稲本とのケンカの事を深く反省しているようだ。

「うーん。確かに暴力は良くなかったかな……。子供が見てる前で」

「やっぱり兄貴もそう思うか？」

「ああ……でも」

100%お前が悪いとも思わないよ……と言いかけた時、

「そんな事ないと思うよ」

突然、背後からかなえの声がした。びっくりして振り返ると、かなえが心配そうにこっちを見ている。いつの間に来てたんだ？ 全然気付かなかった。

「こんな事、言うべきじゃないかもしれないけど……あの時、河井君が怒ってくれて、私、ちょっとスツとしたよ」

かなえの言葉に、思わず弟が吹き出した。

「スツとしたのかよ！」

「うん。したよ」

「ダメだろ！ 卑しくも福祉に従事する人間が暴力見てスツとしてちゃ」

「だって、本当の事なんだもん」

かなえがぶくつと頬を膨らます。かなえらしからぬその所作に、思わず俺も破顔する。この娘、外見に似合わずナカナカ気が強いらしい。と、思っていると、思わぬ伏兵が乱入して来た。

「僕だって、スツとしたよ！」

何と、大地だ。こちらもいつのまに来ていたのか、全然気がつかなかった。

「お前もかよ」

弟が大地を見てあきれ顔をする。

「そうだよ。あんな、悪者やつつけちゃえばいいんだ！」

「こら！」

これまた、いつの間に来ていたのやら、田辺由紀恵が大地の頭を軽く叩く。

「一方的に、人を悪者って決めつけちゃだーめ！」

「だってえ……」

大地が不満げに由紀恵を見上げた。

「あいつ、僕やみーさんを馬鹿にしたんだよ……って、みんな言ってたよ」

最後の方は小声だ。すると、由紀恵が言った。

「馬鹿にされたって怒るのは、自分が馬鹿にされるような子だって認めた証拠だよ」

「そうなの？」

「そうよ。で、大地は馬鹿にされるような子なの？」

「違う……と思うよ」

「『全然』違うでしょ？」

「うん。全然違う」

「じゃあ、怒らない」

「……分ったよ」

「よし！」

由紀恵は大地の頭を撫でると、次に弟の方を向かってこう言った。
「話は全部聞いたよ。喧嘩した彼、君の元友人だって？」

「情報、早！」

弟があきれ返る。すると由紀恵は「とーぜん」。とうなずき「で、」と続ける。

「で、弟君。君の勇氣はとても素晴らしいけど……」

「素晴らしいけど、なんだよ」

「どうして、彼がそういう言動に出たかも、少し考えてあげるといいかもしれないね」

「どういう意味だよ？」

「彼が本当に幸せなら、とうに縁を切ったはずの君に近付いてまで、皮肉を言う必要はなかったんじゃないかな？　って私は思うんだ」

その言葉に、弟は黙り込む。

田辺由紀恵の言う事はもっともだ。しかし、正直、そこまで奴の事を考えてやる必要があるのかな？　と、というのが俺の本音だった。しばらくすると、由紀恵は弟の背中を叩き、

「まあ、終わった事は、終わった事として。また、来週お願いね」と言った。すると、弟は、何故かはにかんだような笑顔を浮かべて「うん」と答えた。由紀恵の言葉に奴が何を感じたのかは、知る由もない。

とりあえず田辺由紀恵は弟の勇気を評価してくれたが、現実には想像をこえて厳しかった。

数日後の午後、俺と弟は、仕事中小金井さんに呼び出しを受け、唐突にいわれたのだ。

「悪いが、河井弟を、あのフロアに置いておく事はもうできない」と。

「なんでですか？」

俺は思わず椅子から立ち上がり机を叩いて叫んでいた。弟のリストラの危機は何度かあったが、小金井さんが出てくるなんて、よっぽどの事だ。

聞けば、ショップでの一件が会社にまで伝わっていて、

「それで、フロア内の一部の連中が、河井弟とはこれ以上一緒に働けないって言っているからだ」

小金井さんは渋い顔で言う。

「なんで、そんな事みんなが知ってるんですか？」

俺は小金井さんに詰め寄った。すると、小金井さんは淡々と言った。

「どうして、と言われれば、狭い地域内の事だから、こんな話は誰からというわけでもなく伝わってくるという事だ」

「だからって、なんで弟が辞めなきゃいけないんですか？」

「まだ、辞めさせるとは言っていない。ひとまず、会社としては詳しい事情を知りたいだけだ。一体、何があったんだ？ 河井弟、説明してくれ」

すると、弟は立ち上がり、極めて事務的に答えた。

「はい。あの日、僕は、ボランティアで、みさきさんや障害者の子達と買い物をしたんですが、そこで偶然に稲本君と出会い、それで……些細な事から口論になって、僕が稲本君に殴りかかったんです」

「君がボランティアをやっているのか？」

「はい」

「なるほど。で、その、口論というのは、どういう内容だったんだ？」

「稲本君が障害者の子を馬鹿にしたような事を言っただけです」

「具体的には？」

「僕が、みさきさんや、車椅子の子と仲良くしているのを見て『類は友を呼ぶ』って」

「なるほど……」

小金井さんが腕を組む。

「それが、河井弟にとっては『馬鹿にされた』ように感じられたわけだ」

「あの言い方は、明らかに馬鹿にしましたよ」

俺は助け舟を出す。

「まあ、その場にいないと分からないが……」

と、小金井さんは首をひねった。

「とりあえず重大な事は、あのケンカが原因で、稲本が面接に行けなくなったという事だ」

「……！」

その言葉に、さすがの俺もショックを受けた。弟も驚いている。確かに、あいつは、あの日、面接に行く途中だと言っていた。心配はしていたが、やっぱり駄目だったのか。

「それが、どうやらただの面接ではなくて、稲本にとっては人生を変えるか変えないかぐらいの大切な面接だったらしい」

小金井さんの言葉に、俺と弟は顔を見合わせた。

「人生を変えるか変えないかぐらいって……一体、稲本君は、どこ

の会社に勤めるつもりだったんですか？」

「詳しくは知らないが、弁護士事務所らしい」

「ああ」

その言葉に弟が頷く。

「あいつ、昔から弁護士か教師になりたいっていった。なのに、大学にも行かないで、こんなところにいるから、何やってるんだろうとは思っていたんだ」

「大学も出ないで、弁護士なんて」

俺はあきれかえる。

「そんなの、無理に決まってるじゃないか」

「そう。普通は無理だ」

小金井さんが頷く。

「それが、どういう奇跡でか、稲本はチャンスをつかんだんだ。ところが、そのせっかくのチャンスを、河井弟と喧嘩をしたために失ってしまった」

「……」

「それで、解体フロアの人員の9割が稲本に同情している。と、そういうわけだ」

「確かに、いくら事情を知らなかったとはいえ、稲本君には気の毒な事をしたと思います。でも、だからって弟が解雇される原因にはならないんじゃないでしょうか？」

俺は食い下がった。

「そもそも、そんな大事な日に絡んでくる稲本君も悪いんじゃないですか？　せっかくのチャンスをつかんだって自覚が、あまりにもなさ過ぎます」

「まあ、おちつけよ、兄貴」

小金井さんはしかめっつらした。そして言った。

「お前の顔に免じて、こちらとしても忍耐強く弟を雇い続けて来たんだ。こちらとしても事情は分っているから……」

その言葉に弟が「え？」って顔で俺を見た。

「しかし、もう、これ以上こちらがかばいきれないんだよ。みんなが言い出してるんだ。『会社は河井弟をひいきしすぎだ』って。これ以上、河井を置いておくなら自分達は辞めるって10人以上の人間が言い出してるんだ。それだけの人間に一度に辞められると、会社としても困るんだよ」

「……確かに」

俺はうなずいた。

「確かに、弟はいままでも色々問題を起して来ました。でも、本人も自覚して、努力して、仕事の成績もあきらかに上げたじゃないですか」

「それは、会社側も認めているよ」

「なのに、クビですか？」

「だからクビにするとは言っていない。クビにするのはあんまりだと、原口さんも言っている」

「原口さんが？」

俺はちよつと驚いた。

「しかし、このままあのラインに置いておくのは無理だ。それで、原口さんとも話し合った結果、河井弟には部署を移動してもらう事にした。ちようど、今、欠員があるから」

「ああ。部署替えですか」

その言葉に、こころもちホツとする。ここで、クビにならずに済んだという事は、弟の努力も少なからず認められたって事だ。

「で、どこに移動なんですか？」

すると小金井さんは、一瞬の沈黙の後に言った。

「鑄造工房だ」

「え？」

その言葉に俺はふたたびショックを受けた。

「それって……」

遠回しのリストラ勧告じゃないんですか？　という言葉を飲み込む。

それほどに、きつくて危険な部署らしい。生半可なバイトが続けられるところではないと聞いている。が、弟はさらりと答えた。

「僕は、どこでもいいっすよ。置いてもらえるなら」

91 (後書き)

ここまで読んで下さってありがとうございます。

さて、ご連絡です諸々の事情のためしばらくお休みをいただきましたと思います。

次回の更新は6月になると思います。6月に週2回更新して一気に完結まで持っていく予定です。

最後までおつき合いただければ幸いです。

橘 明

「まるで地獄の釜みたいだな」

俺は階下を見つめてつぶやいた。

巨大な溶鉱炉の窓越しに真っ赤な火の海がぐらぐら煮立っているのが見える。

「落ちたら、いっかんの終わりって感じだな」

「大丈夫だよ。誰も落ちないし。窓もついてるし」

安全柵にもたれて、弟が答える。

「……もつとも、30年ぐらい前に爆発起した事あるらしいけどね。この敷地内で」

「爆発？」

「ああ。フンジンバクハツだって」

「フンジン……何？ それ」

「漢字で書くと、粉と塵……つまり、アルミの粉が元でおこった爆発らしい。どういうシステムになってるか知らないけど、金属粉は爆発する事があるらしいよ。それで、この建物の半分吹っ飛んだんだって」

「へえー」

俺は、首を振り、2階建ての建物をぶち抜いて屹立するアルミ溶鋳炉をまじまじと見つめた。

そう。ここはアルミ溶鋳炉のある構内だ。産婆沙メタル工場の心臓部ともいえる。目の前にそびえる炉の部分の迫力もさながら、眼下に広がる風景ときたら、まるでそれ自体で一つの町みたいだ。銀色の四角い建物やら、円柱の建物やらが建っていて、その脇を様々な太さのダクトが走っている。そして、銀色の建物の中で、工場の入り口に一番近いものの天井から滑り台が伸び、そこからがらりと音を立てて大量の空き缶が落ちてくるのが見える。そうして、建物の中に流し込まれたアルミ達は、各部屋の中で異物を完璧に除去され、炉の部屋に到達し、溶かされ、冷やされ、伸ばされ、銀の大きなプレートになる。そのプレートは、トラックに積み上げられ、ドナドナよろしくどこかへと連れられて行く。連れられた先で、新たな缶として生まれ変わるらしい。

今、俺達のいる2階の通路からは、ちょうどアルミを溶かす炉の中が見えていた。それは円形の窓になっていて、中でアルミが燃えているのが分かる。

「それにしても、たまらないな、この熱さ……」

弟がかぶっていたメットを外した。それで、俺は思わずたしなめる。

「おい、いいのかよ。フロア内で外しても」

「いいんだよ。どうせ、休憩中で誰もいないし」

「なんで、お前だけ休憩が無いんだよ」

「あっちの炉の番のために誰かがいなくちゃいけないんだってさ」

そういつて、弟は目の前の薄暗い部屋をアゴで示した。それは、二階の通路脇に貼付くみたいに存在している、狭い鑄造工房だ。

「しかし、普通に考えて、そんなことを新入りに頼むか？ 少なくとも責任者がいなくちゃ駄目だろう？」

「知らないよ。上の人間の考える事なんか」

「つーか、ちゃんと飯、食わせてもらえてるんだよな？ シフトチエンジして」

「さあね……そんな事より、ホント熱い」

そう言うのと、弟は、手をうちわにして顔をあおいだ。

確かに、ここは1月というのにうだるような熱さだ。しかも、体に貼付くような不快な熱さだ。なのに、弟と来たら、頭にはメット、体には厚手の作業着。体には軍手という重装備をさせられている。なんでも、安全のためにそんな格好をさせられているらしい。

「さてと」

弟はメットをかぶると、立ち上がった。

「そろそろ灰汁がたまったかな？」

そして、のそのそと工房の中に入っていく。雑然とした工房のまんなかで、炊飯器みたいな炉がブォー、ブォー音を立てているのが見える。あれもアルミの溶鉱炉だ。しかし、下のとくらべると、はるかに小さい。下のが恐竜なら、さしずめこいつは人類ってところかな。そのちっぽけな人類が、恐竜の食べ残したアルミを拝領し、それを溶かして、型にはめて、工場オリジナルのグッズをつくり出す。それは、例えば招き猫の置き物だったり、幸運を呼ぶ干支の置き物だったり……作業工程の猛々しさの割には、やけに人当たりの良いグッズに生まれ変わる。

「危ないから、絶対にこっちに来るなよ」

と、俺を制止しながら、弟は炉の中を覗き込んだ。そして「うん。まだ、大丈夫みたいだ」と、うなずくと、こちらに戻って来た。どうやら『灰汁取り』の必要はないらしい。

「けど、灰汁をとるなんて」

俺は言う。

「まるで味噌汁みたいだな」

すると、弟は答えた。

「味噌汁より高温だし、時々刺激的すぎるけどな」

「刺激的？ ああ。アルミの灰汁抜きで感電した人がいたって話しか。やっぱ実話だったんだな、あれ」

「もちろん実話さ。まったく、刺激的すぎてまいっちまうね。そりゃ、みんな辞めたがるわけだよ。熱いわ、きついわ、危ないわ」

と、弟は冗談めかして言ったが、とても笑える心境になれない。

「……続けられそうなのか？」

「続けられそうかにもなにも、続けるよ」

「やめた方がいいんじゃないのか？」

「ここで勝負を投げろって言うのか？」

「俺だって、普通の環境なら続けろって言うさ。でも、命の危険があるようなところじゃ話は別だ。そうだ。これを機に転職したらどうだ？」

「転職？」

「ああ。ほら、お前以前言ってたじゃないか。『いつか介護福祉士になるんだ』って。そのいつかが、今って事にはならないのか？」

「確かに、俺は介護福祉士になるつもりさ。でも、今じゃない」

「どうして？」

「今、転職したら、まるで逃げるみたいになっちまう。それだけは、絶対に嫌だ」

「けど、無駄に時間を費やす事はないだろう？ 世の中には『する必要のない苦勞』ってのもあるぞ。今、お前がおかれてる状況がまさにそうだ。お前は、鑄造の技術を極めたいのか？」

「ていうかさ」

そう言うと、弟は俺を見た。そして、やけにまじめくさった顔で言った。

「兄貴、小金井さんに話したんだろう？」

「え？」

その言葉にドキツとなる。

「何を？」

「何をもって……何かは分からないけど……」

本当は、弟の言わんとする事は分っていた。

確かに俺は小金井さんに話した。

弟が8年も引きこもっていた事。それというのも、友人に裏切られ、いじめられたために、深く傷ついたからだという事。そのために、貴重な青春の日々を無為に過ごさなければならなかった事。しかし、今は、必死で社会復帰しようとしている事。だから、どうか、弟をあっさりクビにせず、見守って欲しいと土下座までして頼み込んだ。その約束を長い間、小金井さんは守ってくれていたんだ。

けど、俺はわざと気付かないふりをした。

「何か分からない事を話したかどうか聞かれたって、答えようがないな」

「もう、いいよ」

弟はそっぽを向いた。そしてひどく照れくさそうに言った。

「でも、とりあえず一つだけ分ったんだ。意外に俺は一人じゃなかったらしいって」

それで、俺は答えた。

「人間は誰も一人じゃない……って識者は誰も言っている。あくまでも、希望的観測かもしれないけど」

茶化したわけじゃない。これは、俺の本当の気持ちだ。

すると、弟は首を振りこう言った。

「でも、発見はそれだけじゃない」

「他に何があるんだ？」

「ああ。この世には、まだ信用してもいい人間がいるって事が分かった。もちろん、身内以外で」

「小金井さんの事か？」

それには答えず、弟は言った。

「一人でもそういう人が居る限り、この世には生きる価値がある。」

そう思えば、少々の事は頑張れるさ」

長い事世界から切り離され、地獄を見た弟の中に、再び微かな希望の灯がともりはじめたのが分かる。

人を救うのは、大げさな教義でも、珍奇な哲学でもなく、案外身近な人間の朴訥なまでの優しさや、誠実さだったりするのかもしれない。弟の横顔を見ながら、そう、俺は思った。

寝転がって、ひたすら自分のついてなさを考える。

一体、何が原因で、僕は平日の夕方にボロアパートの一室でテレビなんか見ていなくちゃいけないんだろう？（まともな人間なら、まだ働いている時間帯だ）

テレビではアニメがやっている。ヒロインのハイテンションな話し方がやけに耳につく。

突然、携帯が鳴った。見ると渡辺からメールが届いていて、そこにはこう書かれている。

その一文を読んで、僕は思わず吹き出した。

……鑄造つて、あの鑄造工房かよ。溶解炉の真上の、熱くて、キツくて、誰も続かないっていう、あの鑄造工房かよ。

と、渡辺から追加メールが届く。

『会社側も、やっと分ったって事だよ。近いうちに河井本人も分かるだろ。何もかも失って、やっと自分の間違いを自覚すると思うよ』

間違い？間違いってなんだろう？ 本当に間違ってるのは誰だろう？ いや、そんな事考えるだけ無駄だ。肝心なのは河井が近いうち、あの工場から消えるって事だ。

でも、河井の不幸にとっても喝采あげる気にはならなかった。だって、今の僕は河井以上に何も持っていないのだから。僕の夢も、新しい未来も、何もかもついえてしまった。

さかのぼれば、あの土曜だ。あの、ショップでの出来事だ。何だって、あの時、あんな下らない事をしてしまったんだろう？

ショップで遠目に河井正を見つけた時は、『ああ、いるな』って思っただけだった。近寄る気もなかったし、関わる気もなかった。僕にとってあいつは既に過去の人間なのだから。

にもかかわらず、僕は河井の様子を窺いにいかずにはおられなかった。どうしてなのかは、自分でも分からない。そして、近くでアイツの笑っている顔を見たたん、何故かイライラして来た。それで、思わずいわなくても良い事を言ってしまったんだ。

「元引きこもり君に障害者の仲間達なんてさ。……やっぱり、類は友を呼ぶのかなって」

告白しよう。僕には完全に悪意があった。僕はあいつを傷つけたかったんだ。あいつの幸福を壊したかった。ほとんど衝動的にそう思ったんだ。

でも、一体、僕は何にいらだったんだろう？ 河井の安心しきった顔……仲間に全てを委ねているような笑顔に？ けど、なんでそんなもんにかじつく？ 嫉妬？ 元友人だからという独占欲？ 違うな。独占欲なんかじゃない。

答えが出ないまま、僕は再び畳の上に寝転がった。

窓から射し込む光で、部屋の中がオレンジ色に染まってくる。幼い頃は夕暮れの色が好きだった。けど、今の僕の心には何の感動ももたらさない。夕暮れなんてただ一日が終わる合図に過ぎない。世界は僕を取り残して回っていく。明日になったって、僕は今日と同じようにこのアパートでゴロゴロしてるだけだ。なんてことだ。これじゃ、引きこもってるのと同じじゃないか。河井と同じじゃないか。

『きつと、これも罰なんだろう』と僕は思った。『僕はきつと、一生許される事はないんだ』と。

そうだよ。僕は罪人だもの。河井を裏切り、奴の人生を8年も奪ってしまった。そして、今もまた、奴が職場に居られないようにさせている。罪悪感は何にない。弱肉強食は世の常だもの。罰を受けるなら潔く受けるさ。

けど、正直に言えば、あのチャンスが奇蹟的に巡って来た時、もしかして僕は許されたのかなと思ったんだ。ここから逃げだせるパスポートをもらえたのになって。だって、社会人になってからこっち苦痛の連続だったもの。営業も、ラインも、僕には耐えられるような仕事じゃなかった。向いていないんだ。

弁護士にさえなれば『ここ』から逃げだせるって狂喜乱舞していた。けど、やっぱり、世の中そんなに甘くなかった。しかも、河井とのケンカが原因で全部駄目になるなんてあまりにも出来過ぎじゃないか？ やっぱり因果応報ってあるのかな。でも、神様。一言

だけ愚痴らせてくれ。一度あたえた希望をあっさりと奪い取るなんて、あまりにも残酷すぎる罰じゃないのか？

自分の運命が呪わしくて仕方ない。一体どうして、こんなことになってしまったんだろう？

僕は、起き上がって大学ノートを開いた。そして、自分の過去を書き出してみる事にした。一体どこで、何が原因で、こうなったかを探り出すためだ。

そもそも、あの高校に行った事が間違いだった。

元々の志望校だった三條高校に受かっていれば、河井に会う事もなかっただろう。河井に会いさえしなければ、裏切る事もなかった。そうすれば、僕は堂々と大学に進学していただろう。

けど、落ちたのは僕の実力がなかったせいじゃない。あの前日に、トイレに素っ裸で閉じ込められたのが原因だ。

あれをやったのは松浦だ。

そうだ、よく考えてみれば、いつでも松浦が僕の人生の邪魔をしてきたんだ。

もし、あいつが僕の家に向いに住んでいなければ、僕はあいつに執拗にいじめられる事もなかったはずだ。

けど、松浦は、どうしてあんなに僕をいじめなくちゃいけなかったんだろう？ 昔は……そう、保育園の頃は、結構仲良く遊んでいたような気がするのに。そうだよ。昔は、面倒見のいいアニキみたいな奴だった。体の小さい僕をいつも守ってくれていた。それが、いつからか、手のつけられない乱暴者になっていた。いつから、あんな風になったんだ？

そういえば、小学校に入った頃、一度だけアザだらけになってうちに来た事がある。おふくろが心配して『どうしたの？』と聞いたのに『なんでもない』と答えたっけ。けど、あれは、なんでもない

虐待でもされてるんじゃないかと、おふくろは心配していた。子供の僕に、その言葉の意味は分からなかったけど、僕は知っていた。時々、松浦が公園の隅でぽつんと一人でいる事。家に帰りたいがらない事。体育の時、着替えるのを異様に嫌がっていた事。でも、たいして気にとめる事もなかった。その頃には、あいつとは疎遠になつていたし、なにより、僕はあいつが怖くて仕方なかったから、避けて近寄らないようにしていたんだ。……

ピンポーン、ピンポーン。

僕は、ノートを引き出しに片付けると、立ち上がり玄関に向かった。そして、ドアを開けて凍り付いた。

[illegible]

—
—
—
—
—

93 (後書き)

すいません。間違えて削除しちゃったので再アップします

会社からの帰宅途中、突然、弟が言った。

「俺、今から稲本の家に行こうと思うんだけど」

「え？」

俺は驚いて、背後を歩く弟を振り返る。

「今からか？」

「ああ」

弟はうなずいた。

「ああ……って。もう夜だぞ。っていうか、お前、あいつの家知ってるのか？」

「知ってるさ。この近所だよ」

そう言うのと、弟は川沿いに並ぶ家々の灯を見つめた。2月下旬。多少、日が長くなったとはいえ辺りはすっかり闇に包まれている。

「もう、遅くないか？」

「まだ、6時じゃないか」

「飯の時間だろう」

「そんなに長居しないさ」

「けど、なんでまた急に……」

「なんか、気になるんだよ。あいつ、俺とケンカしたせいで面接落ちたとか言ってたし」

「気持ちには分からないでもないけどさ……」

と、俺は苦々しい顔をした。

「半分以上はあいつの自業自得だぞ。大体、先にケンカを売ってのはあいつじゃないか。仮にもそんな大切な日に挑発する事自体、自覚が足りなさ過ぎる」

「けど、俺が手を出さなければ、こんな事にならなかったのは確かだし……仮にも元親友が、自分のせいでチャンスを奪われたってのにさ、このまま放っておけるか？」

「そりゃ、気持ちは分からないでもないけど……お前が会いに行つたって何も解決しないだろう？　むしろ神経逆なでするだけじゃないのか？」

「かもしれないけど、このままじゃ、自分の気が収まらない。俺自身もも前に進めないよ」

前に進むっていうのは、おそらく介護福祉士の道を目指す事だろう。

「分ったよ」

俺はしぶしぶうなずいた。

「ただし、俺も着いて行くからな」

「ええ？」

弟が嫌そうな顔をする。

「なんでアニキが？」

「万一、お前らがケンカになった時、とめる人間がいないとヤバイだろう」

「ケンカなんかしないよ」

「そんな事断言できないだろう？　お前がケンカする気なくても向こうが売ってくるかもしれないぞ。何しろ、向こうは恨みたつぷりだろうからな。殴りかかれても、お前は我慢できるのか？」

「……分ったよ」

今度は弟がしぶしぶうなずく番だ。

こうして、俺らは2人で歩き始めた。

川沿いの道を右に折れるとゴミゴミとした住宅街に入る。いつ、袋小路になるとも分からないような狭い小道を歩きながら、俺は弟に尋ねた。

「で、稲本の家はどこなの？」

弟は振り向きもせずには答える。

「ラビットハイツって覚えてる？」

「ラビットハイツ？」

俺は首を傾げた。どこかで聞いたような、聞かないような……。
しばらく考え、やがてはっと思ひ出す。

「ああ、あの虹の絵の書いてある……」

それは、この住宅街の中の公園のすぐ側にあるアパートの名前だ。
その側面に描かれているでっかい虹の絵のおかげで、この界限では
一番目立っている。子供の頃、公園に遊びに行くとびにその虹を見
ては『なぜ、ウサギじゃなくて虹なんだ？』首を傾げていたもんだ。
「あそこに住んでいるのか？」

「いや。その横の朝顔荘」

「朝顔荘？」

まったく記憶にない。

「行けば分かるよ」

言うと、弟はすたすたと先を急いだ。

くねくねと曲がる露地をしばらく歩くといきなり視界がひらけ、
小さな公園に辿り着く。真正面に浮かぶ灰色のアパートの上で小さ
な月が輝いている。弟は、アパートから若干ずれた位置を指さし「
あれが、朝顔荘だ」と言った。そこには、隣の大きな建物に寄り掛
かるがごとく、ひっそりと小さな家が建っていた。アパートという
よりはむしろ民家のような。公園を突っ切り、俺達はアパートを目
指す。

さびたボロい階段をカンカンと昇って行く。この、2階が稲本の
部屋らしい。それにしても、不思議だ。よく、弟は稲本なんかの住
処を知っていたもんだ。だって、どう見ても実家じゃないだろう。
と、いうことは弟との関係が切れた後にここに移り住んだってこと
になる。

「お前、なんで稲本の住所なんか知ってたんだ？」

と、たずねたところ、「年末にもらった従業員リストに載ってい
た。うちの近所だし、ラビットハイツ隣なんて書いてあったからす

ぐ分った」とのこと。ああ、そういえばそんなリストもらったよな。すっかり忘れていた。

無駄口たたいているうち、すぐに2階にたどり着いた。表札には、確かに『稲本』と書いてある。弟がノックしようとして手を止めた。そして言った。

「開いている」

「え？」

見ると、確かにドアは半開きになっていた。

「そのまま開けちゃえぼ？」

俺が言うと、弟が「しっ」と指を口元にもって行く。そして、

「声が聞こえる」

と耳をすませた。

「誰か来てるみたいだ」

「なんだ。来客中じゃしかたないな。今日は、帰るか？」

弟はうなずいた。

「……そうだな。その方がいいか」

と、その時だ。

ガシャーン。

と、部屋の中で何かが割れる音がした。

ぎよっとする俺達の耳に、続いて悲鳴が聞こえてくる。

「やめろ！ やめろってば！」

俺と弟は顔を合わせた。

……何ごとだ？

しかし、考えているヒマはなさそうだ。

俺らは、ほぼ同時にうなずき合うと、ドアを開けて部屋に飛び込んで行った。

外見よりは広い部屋で、入ってすぐはフローリングの6畳だった。その向こうに障子を隔ててもうひと部屋あって、物音はそちら側から聞こえてくる。俺らはフローリングを突っ切ると、障子を開けて次の部屋に乱入した。

まっ先に目に飛び込んできたのは、どでかい金髪の男の背中だ。男が稲本の上に馬乗りになって、稲本の顔を何度も殴っている。稲本は哀れにも畳の上に押し付けられて「やめろ、やめろ」と半泣きになっている。机の上に割れたコップがひっくり返っていて、こぼれた液体がちょうど稲本の頭の辺りで水たまりを創っていた。

「おい！ 何をしてる？」

俺は男の背中に飛びかかり、稲本から引き剥がそうとした。しかし、なにしろあまりにも体格差が有りすぎる。巨大な岩のごとくにびくともしない。

「おい！ 手伝えよ！」

俺は、後ろにいるはずの弟に向かって叫んだ。しかし、待てど暮らせど弟からの援助は何も無い。

「おい！ 何してるんだよ」

切れて振り返り、ぎよっとする。なぜなら弟の顔面が蒼白になっているからだ。おまけに奴は震えていた。あきらかに、怯えている。なんつー意気地なしだよ。情けないやら、悲しいやらで、俺は、頭に来てもう一度叫んだ。

「おい！ どうしたんだよ！ びびってる場合かよ！」

と、弟が小さな声でつぶやいた。

「松浦……」

「松浦あ？」

誰の事だよ？

一瞬首をひねるが、とりあえず、今はそれどころじゃ無かった。

リアルババ抜き 8

まるで、悪夢の続きでも見ているような気分だった。

今の今まで考えていた思い出したくもない過去の登場人物……僕の人生を不幸に落としたいい入れた諸悪の根源……が目の前に現れるなんてさ。まるで、僕の想念が引き寄せたみたいじゃないか？ いいや、そんな事、ありえない。

そうだ、これは夢だ。夢に違いない。僕は、そう思い込もうとした。けど、これが夢でない事は「おい」と言っ、奴が僕の頭をこずいた痛みですぐに分った。

「なに、ぼやっとしてるんだよ？ まさか、俺の事忘れたとか言うなよ」

「まさか」

僕は愛想笑いを浮かべて首を振る。

「忘れるわけないだろ。良くんの事」

そう。こいつの名は、松浦良という。名は体を現さない好例だ。

「よかった。じゃあ、ちょっと上げてもらえるか？」

松浦はそう言って親しげに笑った。その笑顔を見たたん、僕の体に何か重いものがのしかかってくるような感覚に襲われる。

「ていうかさ」

僕はひきつった笑顔を浮かべた。

「よく、ここが分ったね」

誰にも隠していたはずなのに……。

すると、松浦は言った。

「お前、この間ショップで河井と派手に喧嘩しただろ？」

「え？ どうして、それ知ってるの？」

「田西って覚えてるか？」

「田西？ もちろん覚えてるに決まってるだろ？ 高校の時つるんでた仲間を忘れるかよ」

ただし、僕はあいつが大嫌いだった。なぜかって、松浦と同じく凶暴な奴だったからだ。高校時代は、仕方なく僕も仲良くしていたが、卒業後は音信不通にしていた

「その、田西があの日あそこにいたんだよ。で、お前らの喧嘩を目撃したんだって。驚いてたぜ、ヒッキー河井が復活したって」

「でも……だからって、なんでここが分ったんだよ？」

「心配だから、お前の後つけたんだって。えらく遠回りさせられたってばやいてたな」

松浦の言葉に、僕はがく然とする。なんてことだ、あの日の喧嘩

は僕の未来を奪っただけでなく、逃げたはずの過去まで呼び寄せてしまったらしい。悔やんでも悔やみきれないが、それ以上に怖くなってくる。松浦は、きつと僕が無断で行方をくらました事を怒っているに違いないからだ。

「いや。君たちにも住所を知らせようとは思ってたんだけどさ……」

僕は必死でいいわけを探した。

「色々いそがしくて、忘れちゃってたんだ……」

しかし、松浦は僕の言葉など無視して、勝手に部屋に上がり込んだ。

「へえ、案外中は綺麗じゃんか。外は崩れかけてるのに」
「ま……まあね。あ、奥に入ったら？ 暖房きいてるし」

本当は嫌でたまらないのに、僕は部屋の奥まで奴を案内する。そして、奴のためにウーロン茶を用意した。

「いいなー。一人暮らし」

たたみの上にあぐらをかいて、松浦が心底羨ましそうに言う。

「良君もすればいいじゃん」

僕は媚びるように言った。

「俺にできるわけねえって」

松浦が笑う。

「どうして？」

「金がないし」

「働けばいいじゃん」

「無理」

「そんな事言っただけ。いつかは働かないと生きていけないぞ。良君ならどこでもやってけるよ」

「雇ってくれる所ねーもん」

「選ぶからだよ。バイトでもなんでもすればいいじゃんか」

「うぜえ」

「うざくてもさ」

「あー、うるせえな」

松浦がきれる。それで、僕は怖くて黙ってしまった。その、僕の反応をおもしろそうに眺めながら松浦が言った。

「それより、セイジ。金貸してくれよ」

ほら、来た……と思う。

「無理だよ」

僕は首を振った。

「なんでだよ？」

「金なんかない」

「貯金は？」

「無い」

（これは、嘘だ。本当は200万ほど持っている）

「嘘だろう？」

「嘘じゃ無いよ。実は、今、僕も無職なんだ」

「無職？」

「ああ。この間まで工場にいたけど、辞めたんだ」

「なんだ。じゃあ、俺と同じじゃん」

「そう。だから、すっからかんの。すぐに働くつもりではいるけどさ」

頼む。これで納得して帰ってくれ。と、僕は思う。そして、2度とここには来ないでくれ……と。

「ふーん。すぐに働くつもりなんだ」

「ああ、明日には職安に行くよ。じゃないと飢え死にしちゃうし」
そう言くと、僕は、また媚びるように笑った。

「そんなに簡単に仕事見つかるの？」

「とりあえず、バイトを見つuckerんだ。バイトをしながら、ちゃん

とした仕事を探すつもりだ」

「ふーん」

「だからさ、良君も頑張って……」

仕事探そうよ。と言いかけた僕の言葉を遮り、松浦は言った。

「じゃあさ、キャッシングしようよ」

「はあ？」

「金を借りようって行ってるんだ。バイト決まったらすぐにさ。で、その金を少しこっちに回してくれよ」

「なに言ってるんだよ。そんなの、無理だよ」

「大丈夫だよ。バイトでも安定収入があれば貸してくれるんだって」

「そういう事じゃないよ。なんで、僕がお前のために金融会社で金を借りなきゃいけないんだ？ 自分が借りればいいだろう」

「だって、俺、安低收入ないし」

「だから仕事探せばいいじゃないか」

「友達だろう？ 友達見捨てるのか？」

最初は冗談めかしていたのが、だんだん脅迫じみてくる。けど、僕は断じて首を振った。ここで負けたら、一生食い物にされる。僕は勇気をふるって叫んだ。

「何が友達だよ。思ってるねーくせに。僕は、お前の奴隷じゃねーよ。自分で働いたらどうだ？ この負け犬」

そのとたん、松浦がキレた。

「なんだと、こら？」

子供の頃から、切れると見境なくなる男だ。松浦は、僕に飛びかかり

「お前、家出までして俺から逃げたつもりだろう」

と言いながら、僕の顔を何度も殴った。

「逃げられると思うなよ。逃げられると思うなよ」

そう言って何度も何度も殴りつける。

「やめろ、やめろ！」

僕は逃げようとしてもがいた。その衝撃でテーブルがひっくり返

る。

「やめろ、やめろってば！」

もう一度、悲鳴を上げた時だ。

ドアが開いて、誰かが上がり込んでくるような音が聞こえた。もしかして、助けかもしれない。そんな考えが一瞬よぎるが、松浦の執拗な攻撃と、激しい痛みのために、意識が朦朧としてくる。

それから、どれぐらいたったろう？

突然、少しだけ体が軽くなる。

目を開けると、誰かが松浦を背中から羽交い締めに使っていた。

……誰だ？

僕は涙でかすむ目で松浦の向こうにいる人物の正体を見極めようとした。

そして、驚いた。

そこに居たのが、なんと河井の兄貴だったからだ。

どうして、河井の兄貴が？　なんで、アイツの兄貴がここに居るんだ？

さらに驚いた事には、河井正本人までもがそこにいたことだ。奴は、勇敢に戦う兄貴の後ろで呆然と立ち尽くしていた。

僕は混乱した。一体、何が起きてるんだ？　みんなグルになって、僕をからかっているのか？　そんな事すら思ったその時、河井兄貴が大声で叫んだ。

「おい！　正！　何、ぼーっと突っ立ってるんだ？　110番しろ！　ケーサツ呼べ！　ケーサツ」

「ケーサツ呼べ！」

俺が叫ぶと、松浦と呼ばれた男は、うなり声をあげて俺を突き飛ばし、脇目もふらずに逃げ出した。追いかけようとするが、稲本が気になって思いとどまる。俺は稲本に駆け寄ると「大丈夫か」と助け起した。よほど執拗に殴られたんだろう。稲本の顔は赤黒く腫上がり、血と涙でぐしょ濡れになっている。俺は救急箱を持ってくるよう弟に言い付けた。

「誰なんだ？ あいつは？」

ガーゼで血を拭き取りながら俺は稲本に尋ねる。しかし、稲本は何も答えない。

「知り合いなんだろう？」

そう言って弟を見ると、弟は小さく頷いた。

「松浦っていつて、俺らの高校時代のクラスメートだよ」

「そして、あんたの弟を引きこもらせた直接の原因になった奴さ」
手元から声がするので見ると、腫れたまぶたの下から稲本がこちらをじっと見上げていた。

「弟を引きこもらせた原因？　つまり、弟をいじめた奴ってことか」

「そうだよ」

稲本が頷く。

「ああ。なるほどね」

それで俺は納得した。どうりで、弟が怯えていたわけだ。

「けど、お前、あいつのターゲット外れたんじゃないのか？」
弟が言う。

「外れたさ」

答えると、稲本は緩慢な動作で起き上がった。

「お前がいなくなった後のマトは、清水って奴だよ」

「ああ。あのアニ研の。けど。ターゲット外れたなら、どうして殴

られてたんだよ？」

「別に。ただのくだらないケンカだよ。それより、お前、何しに来たんだよ？ アニキまでつれて」

「話があって」

「話？」

「……風の噂で聞いたんだけど、俺と喧嘩したせいで大事な就職の面接に行けなかったって本当か？」

「ああ。そのことか。それなら、本当だよ」

稲本の言葉に、弟は言葉を失ったようだ。そんな弟をしれっとした目で見上げて稲本が言う。

「で、本当なら何なんだよ？ 責任でも取るって言うのか？ 賠償金でも払ってくれるのか？」

「おい」

俺は眉をひそめた。

「そういう言い方はないだろう。確かに弟も悪いが、元はといえば、お前がくだらないいちゃもんつけてきたから……」

「冗談ですよ」

稲本が言った。

「何も気にしてませんよ。どうせ、面接行ってたって落ちてたし」
「……なんの……なんの仕事の面接だったんだ？」

弟が言う。

「別に。たいした仕事じゃねえよ。それより、帰ってくれないか？ 少し眠りたいんだ」

「けど、大丈夫なのか？ 怪我」

俺が言うと、

「大丈夫ですから」

と、稲本はそっけなく答えた。

「このぐらい、馴れてますから。それより、弟さん、二度と来させないでくれませんか？ 迷惑ですから」

「……」

正直、辛かった。「迷惑」と言われたのが辛いんじゃない。トゲトゲしい言葉とは裏腹に寂しさみたいなのを感じたからだ。

「そこまで言うなら今日は帰るけど……」

俺はそう言うと、自宅の電話番号をサラサラとメモリ、

「何かあったら、電話してくれ。いつでも助けになるから」

と、稲本に手渡そうとする。しかし、稲本が受け取ろうとしないので、仕方なくその足元に置いた。それから、ひっくり返ったテールと、こぼれたウーロン茶の後始末だけすると、俺と弟はアパートを後にした。

そして、また、平穏な日が戻る。

弟は仕事のかたわらボランティアに励み、俺は少しずつ絵を書きためていった。

ある土曜日の朝。

休みだというのに、めずらしく早く目覚めた。

二度寝しようと思うが、妙な胸騒ぎを感じて眠れない。

仕方なく飯を食いに階下に降りると、驚いた事に、既に弟も起きていて朝食を食べていた。

「なんだよ。休みに早起きなんて。今日は台風か？」

軽口をたたくと、

「休日出勤だよ」

と、弟が渋い顔をする。

「そうなのか？」

「ああ。なんでも溶鉱炉のメンテをやるから現場に来て欲しいって」

「全員か？」

「らしいよ」

「大変だな」

「ま、いいよ。休日の時給割り増しだし」

「なるほどね」

それから、しばらくたって弟は出かけていった。その足音を聞きながら俺はスケッチブックに線を走らせた。

紙の中には一人の作業着を着た男がいた。男は額に汗を流して働いている。その顔には、喜びや、悲しみや、失望や、希望など、色々な思いが刻み込まれている。

昔は、こんな絵は苦手だったんだ。

人間なんて、見れば見るほど嫌なところばかり分ってくる気がして、だから、俺の描く人の顔はひどく汚かった。

しかし、今、目の前の男は、人の持つ汚さを飲み込み、苦しさを穏やかな光に変え、ひたすら汗を流して働いている。何が俺にこんな絵を描かせるのか分からない。弟をモデルにしたら、こんな絵になっただけだ。それでも一つ、思う事がある。人の愚かさや醜さは時として救いようなない苦しみを招くが、苦しみは人を磨き、やがて大きく開花させる。そこまでの長い道のりを、優しさで希望のともしびを携え、人は一人で歩いていくのだろう。

ふと、気付くと、遠くでサイレンが鳴っていた。なんだろう？
けたたましい。どっかで事故でもあったのか？

時計を見ると1時を回っていた。

慌てて昼飯にしようとしたその時、突然携帯が鳴った。

誰かと思えばみーさんだ。

「どうしたんです？ 珍しい」

尋ねる俺にむかい、やけに低い声でみーさんは言った。

『優ちゃん、落ち着いて聞いてよね』

「はい？ なんですか？」

『今、工場内で爆発があってね』

「え？」

『それで、鑄造工場が火事になってね。その中に正ちゃんが取り残されてて……』

その後の言葉は覚えていない。

— — — — —
 — — — — —
 — — — — —
 — — — — —

リアルババ抜き 9

まったく笑い話だよな。

裏切った相手に助けられるなんてさ。

僕なら、自分を裏切ったような奴、絶対に助けないだろう。そう
 だ。僕なら『ざまーみろ、これが裏切り者も末路だ』って捨て台詞
 残して、そのままそこから立ち去ってやるね。ドラマのヒーローの
 ごとくさ。

にもかかわらず、河井兄弟は僕を助けた。あの、凶悪な松浦から、
 僕を助けた。いったい、どういう風の吹き回しだ？ 僕のせいで8
 年も人生を無駄にさせられたっていうのに。

さあ、ここが思案のしどころだぜ、稲本誠二。河井君のうるわし
 い行為に涙を流して改心するか？ それともヒールの哲学を貫くか
 ……究極の2択ですよ、これは。

なんちゃって、答えるまでもなく心は決まってるって。誰が改心
 なんかするか。河井が本心から僕を助けたわけがない。それどころ
 か、みじめな僕の姿を見られて、さぞかし気分がよかっただろうよ。
 しかも正義の味方気分まで味わえちゃってさ。

けどさ、河井。お前が、いくらいい奴ぶったって、僕は全てお見

通しなんだよ。お前は、あの時、こう思ったに違いない。『それみたことかよ、稲本。やっぱりお前は、一生いじめられっ子なんだよ。どこまで行ったらババのカードから逃げられやしないんだよ。その証拠に、いまだに松浦にいじめられてるじゃねーか』って。

それにしても、寒い……。

ネガティブな事考えてたら、ますます寒くなって来た。2月の公園の寒さはハンパじゃねーな。何しろ、吹きっさらしだし。

何か温かいものでも飲みたいけど、今、50円しか持ってないんだよな。これじゃ、ジュースも買えやしない。

銀行も、もう閉まってるだろうし、やっぱりアパートに帰ろうか？ いや、駄目だ。松浦が、あれであきらめるわけがない。絶対にまたやってくる。今度捕まったら、どんな目に合わされるか分ったもんじゃない。

僕は、頭からジャケットをかぶり、ベンチの上でうずくまった。

PM 11…30。遠くから車の音ばかりが聞こえる。

ここは、アパートから5分ばかり東にある『茜公園』だ。あの、松浦の襲撃を受けた日以来、ずっと僕はここで寝泊まりしている。本当なら、実家に帰りたいけど、あそこも松浦に知られている（というか、うちと松浦家は隣同士だから、遭わずにいられないだろう）。引越すにも金はないし。絶望だ。僕は一生アイツにつきまといわれるんだ。

朝。

ベンチの上で目覚める。

なんとか生きてたようだ。

けど、腹が減ってフラフラする。

昨日の昼から何も食べてない。

そろそろ、銀行も開くだろうから金をおろしに行こうかと思う。

しかし、公園のトイレに映った自分の顔を見て思いとどまった。

髪はバサバサ、頬もこけ、どう見ても怪しい奴になっている。

松浦は怖いのが、やっぱり一度アパートに帰ろう。そして、風呂に入って職探した。

よたよたと歩きながらアパートに辿り着いた。しかし、階段を昇ろうとしても足が動かない。そのうち心臓がバクバクして手足が痺れてくる。僕は、身をひるがえして元来た道に戻った。

そして、銀行に行く。

周りの奇異の目にさらされながら、金を降ろしてコンビニで弁当を買い込む。

公園のベンチで、食い物を一気に胃に収めると、吐き気がしてきた。

トイレに入って食い物をもどす。

自分のみじめさに涙が出てくる。

：ドウシテ、ココマデシテ、生キナクチャナラナインダ？

僕はノートを取り出し、今の気分を書き付けた。家を出てからずっと、ヒマをみつけてはノートに色んな事を書いて気を紛らわしている。ノートには、過去の事も今の事もたくさん書いた。しかし、未来の事だけは書けなかった。

夕べから、今までの事を箇条書きで書き付けると、次に、今、心の中にあるドーンとした重苦しい気分について書こうと思っていた。この重苦しさは、今生まれたわけじゃなく、ずっと昔からあった気がする。けど自覚したのは、ここ最近のことだ。何となくもやもや

して、僕をいらつかせる。おかげで、何もやる気がなくなる。一体、この気分はなんだろう？ ……そこまで書いて、僕は手を止めた。次の言葉が浮かばないからだ。かわりに僕は携帯を見る事にした。

家を出て以来、携帯はずっと電源を落としてカバンの中に入れてばなしにしておいた。（充電器が使えないから節約してたんだ）けど、この時ばかりは、ひとりぼっちでない事を確認したくて電源を入れた。すると、メールがいくつも入っていた。

最新のメールはメタル工場の渡辺から来たものだった。必死で文字を追うが、何故か頭に入って来なくて、何度も何度も読み返した。それで、辛うじて、こんな事が書かれているのが分った。

『河井弟が、土曜に一人で休日出勤するらしい』

その後、『河井には全員出勤すると言っておいたけど、実は全員ボイコット組。わざと一人で出勤するようにしむけたらしい』とかなんとか書いてあったような気がする。アイツの飛ばされた鋳造工場内にも僕の味方がいて、河井が早く辞めるように仕向けているらしい。ざまあみろ。しかし、今の僕には、それももうどうでもよかった。そんなことより、ぼーっとした頭でこう思いついた。

……そうだ。河井に会いに行こう。そして、全部終わりにするんだ。

一体、何を終わらせたかったんだろう？ 今となってはもう永遠の謎だけれど。

僕は嬉々として思いついたままをノートに書きなぐると、携帯と一緒にカバンの中に入れた。そして、工場に向かってふらふらと歩き始めた。

工場に着く。

土曜だというのに門が開いている。

守衛の人が居たが顔見知りなので、ロッカーに忘れ物を取りに行くと言ったらあっさりと通してくれた。

そのまま、鑄造工房に向かう。

昔働いていたラインのある建物の横を突っ切り、渡り廊下の脇から伸びる錆びた鉄製の階段を昇っていく。ここから、鑄造工場に入れるはずだ。

ドアを開けて中に入る。

誰かに見つかっても平気な自信があった。鑄造には顔見知りもあるし、忘れ物を取りに来たついでに立ち寄ったといえど誰も怪しまないだろう。

しかし、幸いな事に、構内には誰もいなかった。

メールに書いてあった通り、河井一人に出勤させて後は全員ボーイコットしているためだろう。つまり、河井は、今、一人のはずだ。

僕は奴の姿を探した。

しばらく歩くと、僕は河井を見つける事ができた。

奴は工房奥の出口を出た辺りに一人で座って弁当を食っていた。その背中越しに縞模様の柵が見え、さらにその先に巨大な溶解炉の上部が見える。

僕は、カバンを降ろすと奴に近付いた。そして、背中を軽く叩いて

97 (後書き)

後、3話で終わります。まったく意図していませんでしたが、きちり100話になりそうです。最後までおつきあいお願いします。

— — — — —
 — — — — —
 — — — — —

リアルババ抜き 10

「よお。この間はどうも」

僕は河井に笑いかけた。

そして、奴に近寄ろうとしてふらつく。

「おい、大丈夫か？」

河井が僕に手を差し出した。

「お前、めっちゃくちゃ顔色悪いぞ。熱でもあるんじゃないのか？」

しかし、僕はその手を払いのけると、

「土曜に一人で仕事かよ。情けねえな」

と嘲笑ってやった。

「本当は、他の人も来るはずだったんだ。でも、出勤してみたら俺一人だった」

その言葉に、僕は吹き出す。

「だっせえの。ハブられてんじゃねえよ」

「うるさいな。主任クラスの人は来てるよ。今、下の溶鉱炉のメンテナンスしてる」

「溶鉱炉？」

言われて僕は柵の下を覗き込んだ。確かに、下のフロアには何人かの人が居て、ダクトを開いてなにやら作業をしていた。真下を見

れば銀色の釜が口を開いているのが見える。吸い込まれたくなるような気持ちになる。けど、まだだ。まだ、その時じゃない。

僕は河井に尋ねた。

「で、お前はここで何をしてるんだ？」

「午後からこっちのメンテもやるっていうから、構内の片づけとかしてたんだよ」

「1人で？」

「ああ。1人で」

それを聞いて、僕はもう一度吹き出す。やらされてるんじゃないよ。

「お前こそ、何しにきたんだよ」

「僕か？ 僕は……」

何をしに来たんだろう？

「僕は……そうだ。終わらせに来たんだよ」

「はあ？」

河井が訝しげな顔をした。

「何言ってるの？」

「頭大丈夫か？ って思ってるんだろう？ でも僕は正気だよ。ただ、なにもかもにうんざりしてるだけで」

「そんなん、誰だって少なからずうんざりしてるだろう。俺だって、いいかげんこの仕事にうんざりしてるさ」

「ふふ」

僕は笑った。

「でも、河井君は強いよな。うんざりしてもハブられても仕事してるんだから」

「仕方ないだろう。逃げても無駄な事は、8年も引きこもってよく分ったし」

「そこが凄いよ。引きこもっても復活しようと思えたんだから」

「兄貴のおかげだよ。あと、みーさんと、その他色んな人の」

「つまり、良い人達に出会えたってことだ」

「まあ、そういう事になるのかな」

「まったく、うらやましいね。でも、僕だって……僕だって自分は強いと思ってたんだ。あれだけいじめられても、学校に通い続けた。いじめを克服して明るい奴にもなれた」

「？ だったら、素直に喜んでおけば良いじゃないか。ていうか、本当にお前、何しに來たの？ 家に帰って寝てた方がいんじゃないか？」

「でも、もう、うんざりなんだ」

「何が？」

「松浦」

「松浦？」

「アイツは、逃げても逃げても追いかけてくる。どうしてか、僕に執着するんだ。この間はアパートにまで押し付けてきた。引越し先は黙っていたのに。僕には、もう、逃げ場所がない。もう、うんざりなんだよ。だから、もう、終わらせようと思って」

自分でも、何を言っているのか分からなかった。でも、とりあえず立ち上がった。それから、柵に向かってふらふらと歩き始めた。

「おい。イナっち」

後ろから河井の声がする。それは、高校時代にアイツがいつも僕を呼んでた呼び方だった。久しぶりに聞いた親しい響きに、胸の中が温かくなるのを感じた。それで、思わず僕は頬をゆるめ足を止めて振り返り、それから、やはり昔、僕が河井をそう呼んでいたように呼んで、こう言った。

「裏切ったりして悪かったな、セイちゃん。ずっと謝りたかったんだ。許してくれ」

それは、自分でも思いもかけない言葉だった。信じてくれ、この後に及んで良い奴ぶるつもりなんかなかった。僕は、僕のままで全てを終わらせるつもりだった。なのに、そう言ったとたん、今まで

心の中にあつた固まりが消えていく気がしたんだ。

僕は思わず口に出していた。

「そうか……わかったぞ！　僕は、このひとことが言いたかったんだ。これが言えないばかりに、ずっとずっと苦しんで来たんだ」

僕の言葉に、河井が目を大きく見開く。信じられないって顔つきだ。怒ってるのか？　そうかもしれないな。今さらって感じだもんな。分ってるよ。何を言ったって罪は罪なんだから。

「さよなら」

言うと、僕は走り出した。そして、柵を飛び越えて一気に炉の中に飛び込もうとした。

「イナっち！」

河井が僕の手を握りしめる。

「やめろ……」

「遅いよ」

僕は宙ぶりの姿勢で言った。

「もういいんだ。手を離してくれ」

「やだよ。お前こそ、絶対に手を離すな」

「無理だよ。僕、体力ないの知ってるだろ？」

「何言ってるんだよ！　おい！　誰か！　誰か！」

河井が声を上げた。

その声に気付いてか、下から人の騒ぐ声が聞こえはじめた。

「誰か、早く昇れ！」

無駄だよセイちゃん。
もう、ウデも限界だし……

奇麗だなと僕は思った。

赤く輝きながら天に駆け昇っていく龍みたいだ。

[illegible]

「どうして、うちの息子達には悪い事ばかりおきるんだろう？」

集中治療室のソファに座りおフロがぼそりとつぶやいた。

「せっかく、あの子……正も立ち直って、やりなおそうとしていたところだったのに」

「やめなさい」

オヤジが叱りつける。

「ここで愚痴を言っても仕方がないだろう」

「そうだよ、おフロ」

俺は壁にもたれて言った。

「今はアイツの生命力の強さを願うしかない」

そして、俺はガラスの向こうに横たわる弟の姿を眺めた。弟は、頭に包帯を巻き、酸素マスクをつけてひたすら眠っている。

弟の向こうには稲本が横たわっていた。こちらは全身包帯巻だ。

しばらくすると、稲本の両親がやって来て、俺らを見ると頭を下げた。

なぜ、自分の息子が辞めたはずの工場に休日にしたのか、どうしてこんな事故が起きたのか、何もかも分からずにパニックに陥っているようだ。

「火事の原因は、粉塵爆発だそうですよ」

と、俺は説明した。

宙を舞うアルミニウムの粉が炉に侵入し爆発したという事だ。しかし、なぜ、アルミニウムの粉が炉に入ったかは不明らしい。

その場にいた人のほとんどが重症で運び込まれているが、奇跡的

に軽症だった人の話によれば、爆発直前、2階通路から落ちかけていた稲本を、弟が必死で助けようとしていたという。どうして、そんな事になったのかは、2人にしか分からない。

2012年。

世界が減びるだのなんだの、怪しげな噂のたつその年のある日。
俺は成田空港のロビーにいた。

人込みの中歩いていると、携帯が鳴る。見るとメールが入っていて

『右だよ、右』

と書いてある。

言われるがまま右を見ると、大きなカバンを抱えた弟が立っていた。
俺は弟に駆け寄り、

「元氣そうじゃないか」

という。

「兄貴も元氣みたいだな。ていうか、前より太ってないか？」

「おかげさまで飯がうまいから。で、お前はどこに行くんだっけ？」

「ヨルダンさ」

「ヨルダン？ また、変わった所に行くな。それ中東の国だろう？」

「ああ。なんでも、キリスト教とイスラム教の混在する、幻想的な
国らしいよ」

「へえ。キリスト教とイスラム教ってのは代々仲が悪いんじゃないか
ったっけ？」

「難しい事は知らないよ。俺、無宗教だし。第一これは、俺がいき

たいというよりも、むしろ大地の希望なんだ」

「大地？ 彼、行けるのか？」

「いいや。行きたいけど無理だから、俺がかわりにに行くんだ。向こうの風景を撮って、大地のパソコンに送ってやる約束してるんだ」
「へえ、でもなんでヨルダンなんだろう？」

「大地が小さい頃に、父親が話してくれたんだって。とても綺麗な国だって。だから、絶対大人になったら行こうって、その頃は本気で思っていたんだって」

「そっか……」

まぶたの裏に、生き生きと走り回っていただろう頃の大地の姿が浮かび、すぐに消えた。

「まあ、気をつけて行って来いや。それより、俺に渡したいものってなんだ？」

そう。俺は弟から渡したいものがあるからと言われて、品川くんだりからここまでやって来たのである。

「ああ」

弟はカバンの中からB4の茶封筒を取り出した。

「なんだ？ これは？」

「俺の書いた小説」

「小説？ なんでそんなもんを俺に渡すんだ？」

「アニキに表紙の絵を描いて欲しくて」

「表紙の？ 別にいいけど、金とるぞ。一応、これでもプロの端くれだし」

「ケチくさいな。冗談だよ。もし、飛行機が落ちるとヤバいからアニキに預かっててもらおうと思って」

「そう、簡単に落ちるかよ」

言いつつ、受け取る。

それから、しばらく互いの近況報告をする。俺は、絵の仕事の事など、弟は介護福祉士師として勤めるふれあいの家の事や両親のことなど。あの事故の後は、とりたてて大きな事件もなく、皆、平穏無

事にやっているようだ。

アパートに戻ると、俺は弟から手渡された封筒を開けた。

『青春ひきこもらー』と書かれたA4の紙の束が出てくる。

「ああ。これか」

思いつつ、目を通す。そこには、弟の学生時代から始まり、3年前のあの日の事までが綴られていた。後半は、弟ではなく、稲本誠二の視点で描かれている。タイトルは『リアルババ抜き』になっている、どっかで聞いたようなタイトルだ。

……稲本か……

その名を思い出すと、やりきれない気持ちになる。

あの日、あの爆発に巻き込まれた弟は助かったが、稲本は助からなかった。

昨日の事のように覚えている。

夕日の射し込む病院の一室で、稲本の母親から手渡されたノートを手にして弟は泣いていた。そのノートには、工場を辞めた後の稲本の気持ちやびっしり綴られていたらしい。稲本の母親が、何を思っ
って弟にそれを手渡したのかは分からない。

「最後の最後に、俺に詫びたよ」

稲本の死を知った時、弟はぽつりとつぶやいた。

小説を全て読み終わると、俺は葬式の日に現れた、あの、松浦という男を思い出した。

でかい図体して泣いていたっけ。消えた幼馴染みを探してまで追いかけたって、一体どんな気持ちだったんだろうか？

……あいつの父親はDVだったって聞いた事あるよ。子供の頃、虐待されて育ったとかさ

弟がちらりとそんな事を言っていたっけ。もしかして、松浦という男は、家庭内での辛さや苦しさに耐えきれず、そのストレスを一番身近な稲本にぶつけていたのかもしれない。それが為に稲本は、苦しみ、鉾先は弟に向かい、弟は8年もの時を棒にふらねばならなくなっただけ。

負が負の連鎖を呼び、悲劇が次なる悲劇の幕を開ける。その連鎖を止めるには、どこかで誰かが恨みを飲み込み、断ち切らなくてはいけない。

それから、俺はスケッチブックを開き、戯れに絵を描いてみた。弟の小説に捧げるイメージだ。

画面の左右から2本の手が出ていて中央あたりで今まさに繋ごうとしている。それは、誰かと誰かの信頼の証だ。それだけでは寂しいから、二つの手の向こうに赤色でハートを描いてみる。何だか、ポスターみたいになってしまう。こんなんじゃ、挿し絵にもならないかと苦笑いする。

(完)

100 (後書き)

完結です。長い間お付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9729a/>

神様の不良品

2010年10月8日11時46分発行